

かみゆキャン△ ——  
Camus Canp ——

Towelie

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

廃線跡に出来た緑のトンネルの中を歩く二人の少女。この狂った世界から逃げる為  
に出口に続くであろう道筋を最後の希望と信じて歩き続けていた。その道すがら開け  
た場所に一基のテントが立っていた。謎の声に導かれるように、テントへと近づいてい  
く二人……それは少女達の運命を根底から覆すほどの衝撃的かつ、作品の枠を超えた奇  
妙な邂逅だった……。

青い空のカミュ宣伝小説3作目&少し早い発売1周年記念。

青い空のカミュゆるキャン△

大体1話更新するのに1週間から10日前後かかる超のんびり更新となってます。  
発売一周年である3月の下旬までにはなんとか終わらせたいな〜という希望と  
いうか願望で進めていく方向性となってます。

# 目次

Zombielife	182
match	158
Doublejoker death	130
hungry?	111
Metal offer box	89
Mt. Fuji plus	68
No. 1 & No. 2	46
Bear hairstyle	23
Self-introduction	1
Special guest	

なつびより。(epilogue)	510
on	461
Carry On Wayward	431
florionography	409
Two tickets	368
Another train	332
Glitch	292
Switch machine	255
Beautiful Girls	215
Maison portebleue	

# Special guest

夜雨に包まれた広場の中央を息をひそめたまま、目をじつと凝らしてみた。

遠目ではいまいち判明しづらいが、雨にうたれてる白い何かを確認することが出来た。

それは動いてもいないし重機等とは違い、機械的なフォルムのようにも見えない。

どちらかというところ平べったく柔らかそうにも見える。

そう、例えて言うなら蒲鉾のような……。

ショートヘアの少女はトレッキングを趣味としていたのでその蒲鉾のような白い物体に見覚えがあったことを今、唐突に思い出した。

そう、あれは蒲鉾というより……。

「多分、テントじゃないかな、あれ」

雨の中、広場の中央にさほど大きくないテントが一基立っている。

少女はそう確信した。

だが、それでも危険性がなくなったわけではない。

テントの中に何か居た場合それは普通の人間じゃない場合がある。

というより残念ながら既に人間ではないのだろう、今の二人にはそれが自然な結びつきだった。

通常なら異質な考え方なのかもしれない。

だが、二人の少女がこの夜の世界に閉じ込められてからは一人としてまともな人間を見たことないのだから無理もなかった。

一部例外的な人も居るには居るのだが……あの人はそれ以前の特別な存在だと二人は認識していた。

あの青いドアの家の穏やかな黒髪の人……。

あの“顔のない人間とは違う何か”には通常の人とは異なる特徴があり、不可解な唸り声と独特の鼻につく臭いで判別することが出来た。

少女達は耳を澄まし、周囲の臭いも嗅いでみたが、雨音と木々と葉の青い臭いしか感知することが出来なかった。

つまり今は脅威はないということになるのだが……。

二人の少女達は顔を見合わせて出来る限りの小声で相談し始める。

「燐。どうする、見に行ってみようか？」

「そうだねえ……」

燐と呼ばれたショートヘアの少女はその提案にしばし腕を組んで、答えを出すのを躊躇っていた。

さて、どうしようか？

これより更に前に作業小屋を訪れたときには誰も居なかったのだけれど、後で顔のなにかには遭遇してしまっていた。

廃墟となった保養所で休んでいた際には、あのヒヒと遭遇することに……。

燐の脳裏に嫌な思い出ばかりが隆起されて、無意識に眉根を寄せてしまっていた。

結局のところあまり余計な事はしないほうがいいのかもしれない。

二人でこの世界から出ることでだけが目的なのだから。

「蛍ちゃん、先を急ごう。行っても多分、無駄だと思うよ」

燐の言うことは最もだった。

あのテントの様なものに気にならないわけでもないが、今は特にそれが重要なことではないような気がする。

何よりここで立ち止まっていることこそが無駄な気がしていた。

「それもそうだね。余計な気を遣わせちゃってごめんね」

蛍と呼ばれた少女は少し申し訳なさそうな表情で微笑んだ。

「ううん、大丈夫だよ」

それに燐も微笑み返して螢に手を差し伸べる。

二人は再び手を取り合つてトンネルの先を指すことにした。

その先にあるはずの出口を指して……。

……

……

……

「ううっ——!!」

悲鳴ともとれる叫び声が緑のトンネル内に響き渡つた。

突然の事に螢は驚き、思わず燐の腕にしがみついた。

燐は体を膠着させたまま、周囲を警戒するように辺りをきよろきよろと見回す。

……何の気配もない、あるのはただ、木立の隙間から見えるあのテントだけ。

やつぱりあの白い何かが居るに違いない!

二人は頷き合つてこの場から離れようと足に力を籠める、その時——。

「あううう〜お腹すいたよう〜!!」

二人が出したものは違う言葉がハッキリと認識できた。



あの顔のないナニカでもなく、ラジオからの声でもない、もつと幼い感じの可愛らしい少女の悲痛な？ 叫び声が二人の耳に届く。

「ん……まさかとは思うけど、テントが喋ってるわけじゃないよね？」

テントが意志を持つているなんてことは普通なら荒唐無稽なことなのだが、今のこの世界ではあつてもおかしくはないような気になるから不思議である。

この異常な夜の世界に慣れ過ぎているからこそその燐の発想だった。

「テントがお腹すくなんて……なんか可愛いよね。それに声だつて可愛いかった」

蛭はこんな状況で不謹慎と思いつながらも、空腹のテントを想像してクスツと笑みを零してしまふ。

蛭と燐はこの世界で様々な常識外れを目の当たりにしてきた。

だからこそ、今更在り得ないというものこそがないのかもしれない、この世界では正常なものなど一切なかったのだから。

「リンちゃん……早く戻ってきてよう……！」

テントからまた叫び声がしていた。

だがその名詞には二人共電気が走ったかのように、びくつと体を反応させてしまつていた。

燐と蛭は目を丸くして顔を寄せ合つた。

「今、確かに〃燐ちゃん〃って言ってたよね？」

「うん。わたしにもそう聞こえたよ」

聞き違えないかお互いに確認してみる。

どうやら聞き間違っていない事は分かったのだが……。

「クラスの子が居るのかな？ 燐、誰か心当たりある？」

「あ、うーん、わたしの知り合いにこんなところでキャンプするような子っていたかなあ？」

燐はむむー、と瞼を閉じて再び考え込む。

友達が多い方なのだがキャンプをするようなアウトドアな子は皆目見当がつかなかった。

何より〃ちゃん〃付けで呼んでくる子は、今現在では皆無に等しかった。

（蛭ちゃんは〃蛭ちゃん〃って感じだから良いんだけど……〃燐ちゃん〃かあ……久しく誰にも呼ばれてないなあ）

燐は懐かしくも、くすぐったい思いに遠い意識を向けていた。

「リンちゃんー！ うー、リンちゃんー！」

再びテントから名前を呼びかけられる、その声にはつ、と現実に戻される。

これといって思い当たる節が無いにせよ、さすがにこれを放っておくのは些か無下な

気がしていたたまれなかったのだ。

「燐、行ってみよう！」

「うん！」

頷き合った二人は手を取り合ってテントの方に足を向けた。

雨の中、片手で申し訳程度の傘を作り、ばしやばしやと芝生の上を駆ける。

ずっとトンネルの中に居て気が付かなかったがまだまだ雨足は強く、収まる気配をみせてはくれなかった。

目的のテントに着く頃には二人共すっかり足先までびしょ濡れになっていた。

そのテントはムーンライトというタイプで、正面から見るとちょうど正三角形の形をしているシンプルなテントだった。

雨除けの為かフライシートと呼ばれるテントとお揃いのアイボリーカラーの布地で全体を覆われており、中の様子を外から伺い知ることは難しかった。

「えつと……こ、こんばんは？」

燐は幾分緊張した面持ちで夜用の挨拶をテント越しに掛けてみる。

何日も夜の世界だったとはいえ、今の時間は分からないので合っているのかは不明だった。

一応、スマホで確認することも出来るのだが、今更すぎる事だった。

少し待つてみる……返事は直ぐ返つてこなかった。  
突然静まり返るテント。

ぽつぽつとテントを打つ音がやけに大きく辺りに響いていた。

雨音のせいで聞こえなかったのかと思ひ、もう一度声を掛けようとしたその時――。

「ひいひいひい!!」

中から甲高い、怯え切つた声が返つてきて二人はびくりと体を震わせてしまつていた。

「り、り、り、リンちゃん、なの?」

テント内から焦りの濃い少女のような声で尋ねかけられる。

それを聞いた燐は螢と一度顔を見合わせると、こくりと頷いてその声に応えることとした。

「うん、〃燐〃だよ。中に入つてもいいかな?」

燐は何となく罪悪感を持つてしまつていたが、今更訂正する気にもなれなかつた。

（う、嘘は言つてないよね? わたし〃燐〃だし……それにしてもやっぱり聞き覚えのない声だなあ、一体誰なんだろう?）

「あ、うん? もちろんだよつ! だいじょうぶ? 遅かつたから心配したんだよお

……」

テントの主は少し違和感を覚えた声色を出していたが、特に詮索もせずにごそごそと動いて入り口を開けてくれるようだった。

声を間近で聞いてもやはり誰かは特定出来なかったもので、燐も蛍も誰が出てくるのか興味津々の面持ちで入り口が開かれるのを待っていた。

蛍は燐の背中に抱きついて肩越しにテントを見つめていた。

暫しの間、誰が出てくるのかを予想してみる。

（優香ちゃんかな？ それとも同じ部で仲の良いトモチちゃん？ それとも……？）

蛍も色々考えてはみたのだが、一口に燐の友達といってもかなりの数の生徒が頭に浮かぶほどであった。

それに対して蛍の友達の数は……指折り数えただけで、ため息が漏れそうになるほど多くはなかった。

（わたしは、燐さえずっと友達でいてくれればそれで良いんだもん）

蛍は燐の気持ちと離さないように、ぎゅつと強く背中にしがみついた。

その行為に燐は少し驚いたが、それ以上気にすることもなく目の前のテントに注視していた。

ジィ〜〜〜〜ツ。

聞きなれない規則的な音がする、恐らくテントのファスナーが開けられる音だろう。

燐と蛭は固唾を飲んで中から出てくる者を待ち受けていた。

「リンちゃん早く中に入つて、ずぶ濡れになつちやうよつ」

「あ、うん……」

またテントの中から声がしていた。

てつきり出てきてくれるのかと思つていたので、ちよつと期待外れの結果となつた。

やっぱり入つて確かめてみるしかないよね。

燐は布地をじつと見つめると、思いついたかのように手を這わしてみた。

(確か、こころするんだつたっけ?)

燐はペグで留めてあるフライシートの片側だけを外して、それを持つたままテントの中をこつそりと覗きこんだ。

外から見ると割とこじんまりとしている印象があつたが、中は比較的広めに感じられて外界と剥離した快適な空間がそこにはあつた。

テント内には明かりが灯っており、傍らには人のような姿が確認できる。

声の主なのだろうか？ 少女の姿に見える影がテント内に大きく広がつていた。

「ほら、早く」

その顔を確認しようとした矢先、不意に手を引つ張られたので抵抗する間もなく、燐はテント内に引き込まれてしまった。

蛍は何故か燐の背中を後ろから押してきたのでそのままの勢いで二人してテント内に入り込む形となった。

倒れ込むようにテントに入る蛍と燐。

すると正面から、がばつと何かを抱きついてきて、驚いてしまった。

「も〜心配したんだよっ！ ゾンビに食べられちゃったかと思っちゃったよお!!」

胸に顔を寄せてすりすり頬釣りをしてくる長い髪の少女。

テントの中の小さなランタンの明かりが少女達の抱擁を暖かく照らしている。

「あれこれ？ リンちゃんってこんなに胸があつたっけ？ そっか、ちよつと見ない間に成長してたんだね〜。お母さん、リンちゃんの成長を感じちやうよ〜」

やわやわと感触を確かめるように遠慮なく胸を揉んでくるお母さん、にはとても見えない少女。

ふくよかな胸に顔を埋めて、どこかワザとらしい声を上げて行為を楽しんでいるようにも見える。

「え、えーつと、わたし燐じゃないんだけど……」

蛍は初対面の見知らぬ少女のセクハラ行為に苦笑いするしかなかった。

燐も呆気にとられたのか何となく声を掛けづらく、蛍と同じように苦笑いを浮かべていた。

「え？ え？ リンちゃんじゃないの？ それじゃあ……」

蛍の胸に顔を埋めていた少女がぼつ、と顔を上げて手元にあるランタンを手を取った。

観察するようにランタンを蛍の間近に当てて顔を覗き込む長い髪の少女。

幼さが残る大きな瞳がつぶさに確認できた。

少女は蛍の顔と胸を、うんうんと頷くように前後に見比べて……。

「ふおおおおお——！！ リンちゃんが巨乳の知らない子になつて——！！」

そう叫んでテントの隅っこまで高速で飛びのいていた。

あまりの激しいリアクションに燐も蛍も言葉も失って凍り付いていた。

「あ、えーつと……わたしが、燐だよ？」

燐はあまりのリアクションに反応が遅れてしまっていたが、少し引き気味に自分の事を指差して再度名乗ることにした。

顔は出来るだけ笑顔を保っているが、この展開には何となく嫌な予感がしていた。

それを聞いた少女はえつ、と我に返ったように真顔になっている。

そして今度は燐の顔にランタンの光を当ててまじまじと食い入るように見つめてきていた。

もちろん、当然のように燐の胸にも視線が注がれている。



(うつ、やっぱり見られてる。胸の大きさに何か関係があるのかなあ……?)

少女の真剣な眼差しを受けながら燐は何故自分が品定めをされているのか疑問に感じていた。

「燐、頑張つて！」

蛍が横で謎のエールを送ってくれていた。

(一体何を頑張ればいいのか？ 蛍ちゃん)

恥ずかしさのあまり顔を真っ赤になっていた。

燐は息をすることさえも忘れたように少女の視線にじっと耐えていた。

やがて、じつくりと時間をかけて燐の顔と体を凝視していた少女がゆっくりと燐から離れていく。

そして大きな瞳を閉じたかと思うと、うーん、と口に出して考え込んでしまっていた。

どこまでもマイペースな少女だった。

「……ねえ、蛍ちゃん？」

少女が目の前で自分の世界に入ってしまったので、燐は隣で膝をついて眺めている蛍にそつと耳打ちをする。

燐も蛍も未だに土足のままなので履いている靴だけはテントの外に出していた。

フライシートとテントの隙間のスペースがあるので雨ざらしになることはないのだ

が。

「ん？ なあに、燐」

「これってもしかしてアレじゃない？ 人違いってやつ……なのかな？」

「ああ……そうじゃないかとは思ってたんだ。わたしも見たことない子だしね」

蛍は燐の意見に同意をしめす。

実のところ蛍は燐よりも先に妙な違和感をもっていたのだが、それを燐に指摘はしなかつた。

何より助けを呼ぶ声があったのは事実だったので見て確認したほうが手っ取り早いと思っていたので黙っていたのだ。

「だよね……だったらどうしようか？」

見知らぬ少女と同じようなポーズで考え込む燐。

そのシンク口加減がなんか可笑しくて蛍はつい微笑んでしまう。

「あ、でもちよつと違うよ燐」

「うん？」

「人違いじゃなくて、『燐』違い……じゃない？」

上手い事言ったつもりなのだろうか？ 蛍はくすつと笑顔を向けていた。

悪気のない透明な微笑み、凄く可愛いのだけれど……。

「あはは……蛍ちゃん……」

なんだか急に疲れがきてしまったのは何故だろうか？

燐は未だにぶつぶつと考え込んでいる少女に改めて目を向けてみる。

(よく見るとこの子、わたしたちよりも年下に見えるなあ、中学生かな?)

「ねえ、燐。あの子ジャージを着てるよね」

「あ、うん、そうだね。学校指定のものなのかな? でも、この辺りじゃ見たことないデ

ザインかも」

少女は赤に白のラインが入った長袖のジャージを上下着込んでいた。

燐達と同じく学校帰りに小平口の異変に巻き込まれたのかもしれない。

でも、それにしては……。

テント中には結構な荷物が詰め込まれていて、おおよそ二人分はありそうだった。

着替えが詰まってそうな大きな袋が二つ、そしてシユラフも二人分ありそうだった、

それと調理道具だろうかバーナーや鍋まで置いてある。

服装の割には本格的な装備を持ってきているように見受けられる。

(……所謂キャンパーってやつなのかも? ソロ……じゃないみたいだし。だとしたら

もう一人は何処行っちゃったんだろ?)

燐はテントの大きさから精々二人程度でキャンプに来ていると想定していた。

それにさつきからもう一人の名前しか呼んでないので間違いはないだろう。わたしと同じ“リン”という名前の子は無事でいてくれればいいんだけど……。

——さつきから他に気にしていることもある。

（さつきからあんなに大きな声で何度も叫んでたら“アイツら”にも聞こえちゃう気がするんだけど……）

少女が未だにぶつぶつと何かを考え込んでいるので、燐はシートの際間から外の様子を伺ってみる。

外は相変わらずの土砂降りで、さつきまで居た緑のトンネルの脇道が辛うじて見えるだけだった。

とりあえず、あの顔のない白い人影がテントに向かってきていることはないようだった。

「あ、そっか、分かったよっ!!」

それまで何かを考え込んでいた少女がぼん、と手を叩いた。

この少女は、何かにつけて大きな声を出すのが癖となっているのかもしれない。

その声は何事かと思つて、少女の方を振り向いた燐の手をいきなり握つてきて、こう

結論付けた。

「こつちのリンちゃんは異世界から私を助けるために並行世界からきた」リンちゃんオ  
ルタ」だね。間違いないよっ！」

……

この少女の言っていることは常人の理解の範疇を大幅に突き抜けていた。

突拍子のない中二病妄想に、燐は再び目を丸くして固まってしまっていた。

——だが少女は気にすることもなく自分の世界観をさらに押し付けてきた。

「リンちゃん！ その聖剣でゾンビたちをやっつけて早く元の世界に帰ろうよ、お  
腹空いて倒れちゃいそうだよ！」

聖剣って……この何の変哲もない普通の鉄パイプの事だろうか？

作業小屋から思わず持ってきてしまったもので、そこそこ役には立っているのだが、  
あの何かの足止めをする程度事のことか精一杯で、やっつけるとかとてもじゃないけど  
できる代物ではなかった。

それにあの顔のない白い影の正体は……。

「おお、やっぱり燐は勇者さまだったんだね」

蛍が楽しそうにもう片方の手を握ってくる。

この少女の奇抜なシチュエーションに何故か蛸も乗っかってきていた。

「勇者さま〜!」

「勇者さまつ! この世界を救って〜」

二人の少女に突然両手を取られて勇者扱いにされる。

これは一体、何の罰ゲームなんだろうか?

明けることのない悪夢のような夜の世界で何かに縋りたくなる気持ちは分かる。

わたしだつてそうなんだよ……。

だからつて……これはいくら何でも……現実逃避が過ぎるのではないだろうか。

「だーかーら、勇者でもオルタでも何でもないんだつてば〜!!」

顔を真っ赤にして興奮した燐の絶叫がテント内に木霊した。

顔のない白いナニカを呼んでしまふとか、そんなことはお構いなしに腹の底から叫ぶ

燐。

その声が届いたのかどうかは分からないが、ある少女の鼻が急にむず痒くなった。

——はくしゅん!

(6月も半ばだつていうのに何だか悪寒がする……変な電波受信しちゃったか?)

合羽姿の少女は手にランタンを持って、あの緑のトンネルの中に佇んでいた。

上半身は合羽を身に着けているが、その下とズボンはテントの子と同じく、赤いジャージ姿をしている。

トンネルの中は雨を通すこともなく、薄く光が差し込んでいるかのようにはんやりしたと明るさがトンネル全体を照らしていた。

つい先ほどまで影も形もなかったものに少女は困惑した表情を浮かべている。

(いつの間にこんなもの出来たんだ？ さっきまでこんな線路すらなかったのに……)

このような天然のトンネルがあれば雨を凌ぐ為のテントを改めて張る必要なんてなかった。

無駄な労力を使ってしまった、少女は嘆息する。

だが、緑のトンネルの先まで延びる線路跡は薄暗く何も見通せそうにない。

どちらが入口で出口かさえも分からないほどに深かった。

(せめてコンパスが使えれば……)

手のひらのコンパスを見つめるが、先ほどからぐるぐると回るだけで何処の方角も示してはくれない。

はあ……、何度目かの諦めが混じった溜息をこぼす。

帰る方向どころかテントの位置さえも見失いそうになりそうになり、絶望が少女を包んでいた。

「これ以上進むのはヤバい気がする。とりあえずなでしこの方へ一旦戻ろう」  
少女はそう呟くと元来た道を引き返した。

このトンネルが見つかっただけでも、それなりの収穫だろう。

だが、本当は別のものが欲しかったのだ。

（なでしこ……お腹空かして泣いてないかな？　もう食べるものなんて殆ど残ってないしなあ……）

テントに置いてきた少女の事を思い出して、少し不憫に感じていた。

空腹を訴える少女の為にダメもとで食料を探しに行つたのだが、やはり何も見つからなかった。

小動物どころか虫さえもない、それはそれで夏のキャンプには快適であるのだが。

だからってこんなところで人知れず遭難なんて笑える冗談でもない。

だが有効な解決策は何もなく、ここに来てもう三日が経とうとしていた。

（小平口にキャンプしに来るんじゃないかな……今更だけど）

今更、後悔したって何も始まらない。

とりあえずなでしこと一緒になんとしても小平口から脱出する、余計な事を考えずにそのことだけを考えることにする。

めげそうになる心に鞭を打って、テントの元へと足を進めた。



自分もあまり食を採ってないせい、か足取りが重い、まだ疲れが抜けきってはいなかったようだ。

正直気だつて滅入っている。

けれども帰ることを諦めてはいない、家に帰るまでがキャンプ、そう教えられたのだから。

(そうだよね? お爺ちゃん、私、頑張るよ。……ん? これを言つてたのつて千明だつたつけ? まあどうでもいいこと何だけど……)

無駄にテンションの高いメガネの少女のことを思い出して、なんだかとても懐かしくなつた。

野クルメンバーとキャンプを楽しんでいたのがまるで嘘のように遠い記憶の彼方に感じられる。

遭難だといつてもまだ三日程度しか経っていないはずなのに――。

限界が近いのかもしれない……少女は己の運命を天に少し呪っていた。

……この少女はまだ知らない。

まさか、テントの中で見知らぬ少女達との邂逅が待っているとはこの時は考えも及ぶ

はずもなかった。

——それはとても偶然で素敵で夢の様な出会いクロスオーバーの始まりだった。

……

……

……

## Self-introduction

もつ、もつ。

一言も発することなくあんパンに嘔り付いているのは、先ほどテントに戻ってきたもう一人の少女。

口の中で何度も咀嚼して出来る限りゆっくりとしたペースで。

食べものがあることを感謝しているかののように味わって食べていた。

美味しいものは最後まで取っておくタイプなのかもしれない。

この少女もよほど腹を空かしていたらしく、僅かに残っていたパンを勧めたところ、目の色を変えて食らいつき、結局全て平らげてしまっていた。

それだけ過酷な状況下に晒されていたのだろう、蛍と燐は当事者でないにせよ、少し申し訳なく感じてしまっていた。

ペットボトルの水を一気に飲み干して、少女はようやく安堵のため息をつくことが出来たようだ。

「はあ、ありがとう。ガチで助かったよ……あ、ごめん。貴重な食糧だったのに思わず食べちゃったけど平気だった？」

少し照れたようにはかんでお礼を述べてくる合羽姿の少女。

テントの中の見知らぬ人の正体よりも真つ先にパンの袋に注目して、開口一番まだ残っていないか尋ねてくるほどに切羽詰まった状態だったのだ。

「もく、リンちゃんがつつきすぎだよお。リンちゃんが一生懸命食べてるのを見ると、またお腹が空いてきちゃう」

からかうように少女は無邪気な笑顔を向けていた。

あれ程のパンを胃袋に収めていたのにまだ食べたらないのだろうか？

こっちの少女は、最後に残っていたパン2つだけでも満足気なのに……。

「なでしこもこの人達から食糧を分けてもらったの？」

恥ずかしかったのか少し顔を赤くした少女はもう一人の少女、なでしこに話を振ってきた。

(初対面の人の前で恥ずかしいことを言うなよ……まったく、デリカシーのないやつめ)

まあ、ここまで食べてないことって珍しいことだけだね。

ダイエツトしてたとき以来のことかも、でもダイエツトとか関係なくキツイよこれは。

少女は改めてキャンプでの食事の大切さを身に染みて実感していた。

「あ、えくと、それで……こちらの二人はなでしこの友達のかた、なの？」

栄養を補給できて落ち着くことが出来た少女は、最初から気になっていた見知らぬ少女達の身元を尋ねてきた。

「もう、リンちゃん失礼だよつ！ 命の恩人に対してそんな言い方しちやだめつ。それに並行世界の自分の別人格アルターを忘れちゃったの？」

「……んん？」

これはヤバい、なでしこのやつ極限状態でお腹空きすぎて変なモードに突入してやがる。

まさかの隠れ中二病患者だったのか……まあアニメとかゲーム、好きそうかなと思つたこともあるけど……。

(それにしても、他人の振りをしたいほどに恥ずかしいやつだぞ、これは……)

友達のアまりにも意外な一面を知って、動揺を禁じ得ない小柄な少女。

二人の少女達の間になにやら不穏な空気が漂いはじめていた。

そんな二人の様子を知ってか知らずか螢は淡々と分析していた。

(さつきテントに入ってきたばかりの子が燐と同じ名前の子かな？ そして小動物のように大きな瞳で可愛らしい感じの子がなでしこちゃん？ でも……わたしたちはまだ二人に名乗ってないよね)

「ねえ、燐。お互いに自己紹介したほうがいいんじゃない？ なんか誤解してるっぽい

し」

同じテントの中なのに燐と螢はすっかり蚊帳の外になっていた。

そんな中で螢がそつと耳打ちをしてくる、こんな時でもマイペースなのはある意味長所かもしれない。

「あ、えつと……そう、だよね。わたしもそう思ってるんだけど……どうしよつか？」

4人も居るとなるとテントの中のキャパシティーは減る一方だった、そんな中ではそれぞれの声は丸聞こえで、内緒話さえも意味を為さない狭さだった。

あの二人は喧嘩になっているというわけではないのだが、必死に現実に戻そうとする少女とそれを夢見がちな妄想で解釈してしまう少女との、不毛なやり取りが続いていて見るに堪えないほどであった。

「いつもの部活の感じでやってみたら？　燐の声、良く通るし」

燐はそれに頷いて同意した。

螢からのアドバイスは割と的確なことが多く、燐は結構当てにしていた。

そのアイデアに従っていつもの部活——ホッケー部の集合の挨拶の要領で声を掛けてみる。

ばんばん。

燐はまず軽く手を叩いてこちらに注目を集めた。

その軽い音に二人の少女も、混乱してる会話を止めてこちらに向き直ってくれる。

「はい、ちゅうもくく。今からちゃんど自己紹介するからねー。ちよつとだけこつち見ててねー」

なんだかすごく恥ずかしい事をしてる気はするが、この淀んだ空気を換えるためには仕方がない。

少女二人の関心がこちらに移ってくれたみたいなので、言い出しつぺの燐からキチンと自己紹介をすることにした。

「わたしは込谷 燐。こみたに りん家に帰る途中でうつかり寝過ごしちゃって、気づいたら小平口駅まで乗り過ごしちゃったんだ。そしたらこんな事に偶然巻き込まれちゃったみたいなんだよねえ……で、ここから脱出しようとしてたとこなんだ。あ、こつちの蛍ちゃんとは同じ学校の同級生だよ」

燐が自己紹介をすると少女はびくつと反応してしまう。

合羽は脱いで、長く綺麗な髪を床のシートに垂らしたままに。

（おお、私と同じ名前なのか。これは多分なでしこが勘違いをして呼んでしまったんだろうな。まあ、そのおかげで助かったわけだから勘違いにいちおう感謝だな、うん）

「今、燐からご紹介にあずかりました、三間坂 蛍みまざか ほたるです。わたしはこの小平口町に住んでる。燐とは時間が合えば途中まで一緒に電車に乗って学校から帰ってくるんだけど、

いつも知っている町がまさかこんなことになるなんて、正直ちよつとショックだった。早くいつもの町に戻ってくれるといいんだけどな」

燐と蛭は簡単に自己紹介とそれまでの状況を説明を試みた。

この小平口町の異変についてそれぞれ思う所はあるのだが、この場ではお互いに言及しなかった。

無関係の人にこれ以上余計な心配は掛けたくなかったから……。

二人の自己紹介を受けて、このテントを立てたと思われる少女達も名乗りを上げた。

「ご、ごめん。つい周りが見えなくなっていたみたい、恥ずかしい……私は志摩<sup>しま</sup>リン。山梨から小平口町にキャンプに来ただけど、こんな映画みたいなことになるとは夢にも思わなか——」

「初めまして、かがみはらなでしこですっ!!」

先に名乗った少女——リンが言いきる途中で、もう一人の少女、<sup>かがみはら</sup>各務原 なでしこ

“が唐突に自己紹介をしてきた、何故か自信満々の笑みを称えたままで。

(初めまして、って私より先に会ってたんじゃないのか? それにまだ話途中なんだぞ……)

蛭とは別ベクトルの空気を讀まないタイプであることはテント内での交流で、大体把握はできていたのだが、それでも燐と蛭はビックリしてしまった。



「リンちゃんとは同じ学校ですっ!」

「野クルに所属してますっ!」

「大体何でも食べられますっ!」

各務原なでしこと名乗った少女は情報を小出しにしながら、矢継ぎ早に喋りまくっていった。

狭いテント内でもお構いなしに身振り手振りの大げさなりアクションを付けて喋っている。

(元気になってくれたのはいいんだけど、なんでいちいちポーズを付けるのかなあ?)

燐はこういう感じの子は嫌いではないのだけれど、今の状況ではわりと疲れてしまうタイプだった。

「それからね……」

「おい、もういいだろ」

なでしこがまだ何かを言おうとしていたので、すかさずリンが止めに入った。

ドスの利いた低い声を出そうとしたみたいだが、元の声が可愛らしいのでそこまで迫力のある声色には聞こえなかった。

「も〜リンちゃん〜。ここからが面白い所なんだよ〜」

話の腰を折られたなでしこが不満の声をあげる。

「ここからって、何処まで喋る気だよ……」

「えつと、浜松に住んでたころの話とか、リンちゃんも初めて出会ってキャンプが好きになった話……後、初めてソロキャンした時のこととか……あ、最近みんなで行ったグルキャンも楽しかったねい！」

「いや、その辺の話は今要らないから……それに最後のはただの感想になってるじゃねーか」

なでしこの壮大な振りにリンが冷静にツツコミを入れる。

この二人はいつも大体こんな調子なのだろう、二人の間に険悪さは微塵も感じられなかった。

「浜松って……わたしたちも今、浜松の学校に通ってるんだよ」

「そうそう、蛭ちゃんなんてここから毎日通ってるんだから結構大変だよねー」

蛭と燐は唐突に良く知る地名が出たことに思わず反応していた。

あの時も学校の帰りに浜松駅前のショッピングモールに寄った後、帰りの電車に乗っていただけで小平口町の異変に遭遇していたのだった。

今となつては大分昔のように思えるほどに色々な事が二人の身に起こり過ぎていたのだった。

「おー、すごい偶然だねい！　ってあああ——！」

なでしこが燐と蛍を指差して驚愕の声を上げていた。

それは驚きだけでなく憧れの声も混ざっていた。

「ん、どうかした？」

「わ、私、よく見たら二人が来てる制服って知ってるよお……県内でも有数のお嬢様校で、すつごいお金持ちか、すつごく頭が良くないと入れない、偏差値の高い超進学校の制服なんだよっ!!」

「なでしこじゃ無理そうだね」

興奮して話すなでしこに対し、リンはそれを薄く笑って返す。

「うゝ、私には頭もお金も足りなかったよ。ここの学校の制服、すつごく可愛いから着てみたかったんだけどな」

なでしこは何故か蛍の体をべたべた触りながら報われなかった思いを口にしていった。

そのセクハラ行為に苦笑いする蛍。

割合過剰なスキンシップなのだがもう慣れてしまったのか、好き放題に触らせていた。

「ふふん、蛍ちゃんは大きなお屋敷のお嬢様だし、頭だって良いし、おまけにすつごく可愛いって優しいからねー? もうこれ以上ない完璧なお嬢様ってカンジだよねー!」

燐は蛍の事を自分の事の様に大層目いっぱい褒めたたえてみせた。

だって燐にとつて一番大切な友達だったから。

「もう、燐だってスポーツ推薦で入学できたのに、わざわざ受験して合格してたじゃない？」

燐に褒められて顔を赤くして照れていた蛍が、お返しとばかりに今度は燐の事を褒めていた。

「それに、部活だって入部して即レギュラー入りしてたしね。性格は明るくて話してて楽しいし、よく気が利いて誰にでも優しいしもんね、わたしより燐のほうが完璧だよ。そういうえば燐、来期の生徒会長候補に推薦されてたよね？ 出てみるんでしょ？」

蛍は忌憚なく燐のことを過剰な程に褒め上げた。

だが言っていることに何一つ間違いはない、それだけポテンシャルは高かった。

それに、もう一つ……燐は蛍にとつて確かな光を与えてくれた唯一無二の存在でもあった。

だから、燐の為なら蛍はなんでもしてあげたくなる。

「もう、蛍ちゃん。恥ずかしいから止めてよ」

「うふふ、わたしだって恥ずかしかったんだから、これでおあいこだよ」

燐と蛍はいちやいちやと桃色の会話を楽しんでいた。

お互いの事を気遣いながらも幸せに会話する二人、とても美しい友情だった。

「か、神々の会話だあ……庶民の私たちは話にまったくついていけない〜!」

「ああ、斎藤のやつもかなりの高スペックだと思っていたんだがな……上には上がいるもんだな……」

対して、なでしことリンはテントの端で体育座りをして、庶民的な黒いオーラを放っている。

少し妬ましい友情だった。

(でも、リンちゃんだつて顔は結構可愛いし、頭も良さそうだしで負けてないと思うんだけどなあ?)

そう思うと居てもたつてもいられず、なでしこは静岡の二人に自慢勝負を挑んできた!

「や、山梨のリンちゃんだつて負けてないよっ! 勉強も出来る……はずだし、運動だつてやれば出来る子だし、ソロキャンプで遅しくなってるし、それに原付の免許だつてもつて何処へでも行っちゃうロンリーキャンパーなんだよっ!!」

胸を張って、勢いよくリンの自慢をするなでしこ。

だが肝心のリンは……心底呆れかえって言葉すら出なかった。

(……話だけ聞いてると相当ヤバイやつになるぞこれ。田舎のヤンキーと思われてドン引きされてないか?)

リンはなでしこの言葉通りの自分の姿を試しに想像してみる……あまりにもヤバすぎて悶絶しそうになった。

「へえー、免許持つてるんだ。凄いねー」

燐は素直に免許を取得していることに感心をもってくれていた。

しかし他の事には特に関心を示さないみたいだ……。

「えっ? あ、はい……」

その気になれば誰でも取得できるであろう原付免許取得を褒められたことで、リンは余計に惨めさを実感して思わず敬語で返事をしてしまう。

(なでしこのせいで私のイメージがズタボロになっていくような気がするのは何故なんだろう……)

「くすつ、燐なんでもつとすごい事してるじゃない」

「ええっ! すごい事って何? 蛍ちゃん聞きたい〜!」

蛍が突然意味ありげなことを口走ってきた。

なでしこはまだ燐の自慢話に続きがあるものなのかと内心わくわくしながら、蛍に話の続きを促してきた。

だが燐は何となく嫌な予感がしていた。

（蛍ちゃん、まさかとは思うけど、あの事言わないよね？）

だが、燐の願いも空しく蛍は――。

「あのね、燐はね、これまで一度も運転したことない車を……」

「ちよ、蛍ちゃん！ ストップ!!」

燐は慌てて蛍の口を両手で押さえていた。

突然後ろから抱きすくめられた蛍は目を丸くしてしまっていた。

「……蛍ちゃん、あれは二人だけのないしょ、って決めてたでしょ？」

燐は蛍の耳元で声を潜めて抗議の声をあげる。

その言葉に蛍ははつとして申し訳ない顔を向けてきた。

「あはは、ごめんね燐。つい自慢してみたくなっちゃったよ……」

「んもう、あんなこと自慢できることじゃないよお」

「そんなことないよ、あの時の燐すつごく頑張つてて格好よかった。それにあの時のことだつて無駄じゃなかった気がするんだ……今ならそう思うよ」

「蛍ちゃん……」

あの時のこと――ナイトプールで体を洗い流した後、燐と蛍は止めてあつた軽自動車に乗り込み、無免許で夜の峠道を運転していたのだ、峠の頂上の先にあるであろう県境

を目指して。

だが、それは徒勞と終わっていた。

木々や草が道をふさぐように生い茂って町から出ることを許さなかったのだ。

そして特に実入りもないままに、元来た道を引き返すことになってしまったのだ

……。

……

……

燐が突然大声を出して螢の話を遮ってきたので、なでしこもリンも戸惑っているようにみえた。

その様子に慌てた燐は違う話題を振って、とりあえず誤魔化すこととした。

「ご、ごめんね、大きな声出しちゃって……えっと、二人はどうやって小平口町に来たのかな？ わたしたちと同じく電車で？」

「あ、えっと。私たちは、なでしこのお姉さんの車で小平口町のキャンプ場まで送ってもらったんだ。本当は原付バイクで行って見たかったんだけど、峠越えは規制されてて原付だとダメなんだって」

突然の質問にリンはちよつと驚いたが、気を取り直してここに来た経緯を訥々と語り



始めた。

「峠ってもしかして、山梨との県境にある、あの峠のこと？」

蛭は年中通行止めが続いているあの峠を思い返していた。

それはあの時、燐と一緒に車で行ったあの峠のことだった。

「うん。そうだよ、ずっと通行止めだったんだけど、この時期に実験的に解除になったみたいなんだよね」

リンはネットで前もってそのことを知っていたのだ。

それに山梨から静岡県側に抜けることの出来る山岳林道は、前に早川町に一人で原付で行ったときに確認済みだった。

(じゃあ、やっぱりあの歪みが起こる前は通ることが出来たんだ……)

通行止めが長く続いていることは知っていたが、閉鎖が一時的に解除してあることまでは蛭は知らなかった。

それでも、このまともな人間が居なくなつた夜の世界ならば無理にでも通ることが出来るかと思ひ、燐に提案してみたのだ。

結局、それは叶う事はなく無駄骨で終わったのだが。

「うっ、ひぐっ、お姉ちゃん大丈夫かなあ……やっぱりゾンビに襲われちゃったんじゃ

……」

あれだけ元気だったなでしこが急に涙声になっていた。

自分をいつも心配してくれる姉の姿をあれから見えていない、何かあつたらすぐ駆けつけてくれるほどに優しい姉なのに。

明るく元気な少女が悲しい声をあげるだけでテント内も暗く陰鬱になっていくようだった。

それまで聞こえていたこと忘れていたテントを叩く雨音がやけに大きく聞こえてくる。

少女の悲しみを投影しているかのように。

「大丈夫。桜さんならあの後、すぐ南部町に帰ったはずだよ。だから心配ないよ、ね？」  
リンはなでしこの背中を擦ってなだめすかしていた。

背中を丸めて涙ぐむなでしこは、とてもか弱く小柄な少女となっていた。

「ご、ごめん、余計な事聞いちゃったね……」

燐はいたたまれなくなつて謝罪の弁を述べた。

なでしこを悲しい気持ちにさせる気など毛頭なかったのだ。

「いや気にしなくていいよ、これでも大分落ち着いてるんだなでしこは。当初はすぐ取り乱しだして大変だったんだよ……」

リンは少し遠い目をする。

あの時、なでしこと二人で“放課後キャンプ”しようとして喜び勇んで体操服のまま小平口町にきたまでは良かったのだが、ゾンビの様な化け物は出てくるし、夜は一向に開けないしで、なでしこは半狂乱となっていたのだ。

それでもなんとかここまで生き延びることは出来た、辛い夜の世界でも二人一緒で。

この絶望的な状況になでしこもそしてリンも慣れてきてるといふより、諦めが強くなっていたのかもかもしれない、なでしこも泣き叫ぶだけの気力をなくすほどに疲弊していたのだ。

「……………」

蛍はリンの悲痛な告白に嘆息していた。

震えるなでしこの姿が、図書室であの白いナニカに追われて絶叫した時の自分の在り様と重なって見えていた。

蛍たちはその後、あの“青いドアの家”へ逃げる事が出来たけど、この二人はずっと夜の世界で白い恐怖と戦っていたんだらう、逃げてても逃げてても湧き出てくる彼らからひたすらに。

そう思うと胸が張り裂けそうになって、蛍も涙ぐみそうになっていた。

「ごめん、なでしこちゃん、これ、チョコレート。これあげるから許して！ 食べて元気

出してこつ？ この町から抜け出したらきつと……全部元通りになつてはるはず、だから！」

根拠などは当然無いが、何かしらの方法でなでしこを元氣づけてあげたかった。

お菓子をあげて機嫌を取るなんて、子供じみてるとは思うが、燐が今できることはこれぐらいだったのだ。

「うん……ありがとう燐ちゃん……私、チョコ好きだよ。おいひいね、これ……でも、このチョコ……なんらか焼肉の味がしにやい？」

目を赤く腫らして涙声になりながらもなでしこはチョコレートを受け取ってくれた。もごもごと口いっぱいチョコを頬張っている。

だが、同時に割と衝撃的な事も口にしていた。

燐は思わずなでしこに手渡したチョコレートのラベルを確認してみる。

……ごく普通のチョコのパッケージで“ミルクチョコ味”と大きく記載がしてあった。

——んん？ どういう事なのか燐が尋ねようとしたその時……。

「嘘やでー!!」

ピースサインを決めて舌を出す、なでしこの姿があった。

……呆氣にとられる燐と蛭、だがリン一人だけは冷めた目で成り行きを見つめてい

た。

「どやー? あおいちゃんの物まね、上手かったでしょ?」

やや興奮したなでしこが胸を張ってドヤ顔をしていた。

先ほどのまでの悲しみで曇った瞳はなく、きらきらとしたつぶらな瞳を真っ直ぐに向けて。

「——まったく、現金なやつだよ、なでしこは」

リンは深くため息をつく、呆れが少しだけ混じった安堵のため息。

なでしこは以外にも切り替えが早いほうなので、一緒に居てもそれほど疲れることはなかった。

「えへへ、ごめんね。でも、こんな素敵な友達が二人も出来たんだもん、泣いてばかりもいられないよねっ!」

「友達って、わたし達の事?」

燐は自分と蛍の事を少し不思議そうに交互に指差した。

「そう、蛍ちゃんと燐ちゃんはもう友達なんだよっ! ね、リンちゃん」

「うん。そうだね、私も二人とは友達だと思ってるよ」

なでしこは自分の事を庶民と言っていたが、このコミュニケーション力は庶民レベルものじゃない、リンはそう断言できる。

誰とでも仲良くなること、それはキャンプでは割と重要な事だった。

そういう意味ではなしこは立派なキャンパーになれる素質があったのだ。

「じゃあ、みんな友達、だねっ！ ついでに臨時野クルに任命してあげちゃうねい！」

調子にのつたなしこは余計な事を言つてのけた。

「そういうえば、その“野クル”って何なの？ 何かの略？」

蛭はなしこが時折言っている聞きなれないワードの事を問いかけてみる。

「むふふー、よくぞ聞いてくれました！ 野クルはね、それはもう伝説の部活でね……」

「……そういうのはもういいから、ほらチョコっついてるぞ」

リンは呆れ返りながら、頬についている汚れを指摘する。

指を頬に差されて、一瞬きよんとした表情を見せたが、少し照れたように顔を赤らめて尋ね返してきた。

「えっ、どこかな？ ……リンちゃん、特別に嘗め取つてもいいんだよっ！」

「そんな汚いこと出来るわけないだろ」

あまりの悪乗りにさすがのリンもしかめた顔を向けると無情な一言を呟いた。

なしこは割と本気だったのか、シヨックのあまり猛抗議をしてくる。

「ええー、汚くないよお！ 私が頼んだらリンちゃんは何でもしてくれるのにい」

（何でもつて……私は都合のいい女か。それにしても、誤解を生むような事を言うなよ、

恥ずかしいわ……)

恥ずかしさのあまり、リンは顔を赤くして無口になっていた。

その慚然とした表情になでしこが逆切れをおこす。

「わくん、リンちゃんに無視された〜！ いいもん！ こつちの燐ちゃんに頼むからっ  
！」

それまでテントの片隅でぼーっと見ていた燐の事を、なでしこはぐいつと腕を取って引き寄せた。

「うええっ、わたし!?!」

二人のやり取りを微笑ましく見てた燐だったが、まさか自分に振ってくるとは思ってなかったのか、変な声を出していた。

「燐。頑張つて、なでしこちゃんの事、綺麗にしてあげてね」

蛍から意味深なエールが飛んできて、燐はますます困りはてた。

(なでしこちゃんの頬を舐めるの？ わたしが？ ……普通にハンカチで拭いた方が良くない?)

なでしこは燐の手を絡めて嘗めやすいように頬を寄せてきていた。

何故か臉を閉じて、少し頬を赤くしているようにも見える。

燐は……それに笑顔を返すものの、目線だけはこちら——リンの方に助けを求めるよ

うに目を泳がせていた。

(何だこれ……ヤバすぎるぞ。でも、なんか面白いな……)

リンは自分のテントの中なのに何故か落ち着かなかった。

でもそれは居心地の悪さを覚えてるんじゃない、あの時のように浮足立ったような高揚感があつた。

みんなでグルキャンしたときのあの感じと酷似していたのだ。

それはこの狂った世界ではまだ一度も味わったことのない、幸せな時間だったと言える。

定員3人程度のテントの中に4人も居るとなると十分息苦しさを感じてくる。

だが、不思議とそれを口にする者はここには居なかつた。

だって外の土砂降りを感じないほどに楽しい時間だから、こんな素敵な集まりがあることを虫は初めて知ることが出来た。

4人で一番はしゃいでいるのは、なでしこという元気で小柄な少女。

この少女を中心にして幸せの螺旋が絡み合っていた。



リンは彼女に出会ったおかげでいつもの日常に様々な変化がおきたことを、今更のよ  
うに思い返す、それは割合楽しいことが多かった気がしていた。

だからリンは一人の時間と同じように、なでしことの時間も好きだった。

自分と同じ名前の少女に憐は不思議と親近感を覚えていた。

まだお互いのことは詳しくは知らないが、友達として仲良くしていきたい、たとえそ  
の場限りのものであったとしても……それでも悔いはなかった。

だつてもう自分に残っているものは少ししかなかったから。

蛍と共に出会ったばかりの少女達と過ごす時間は少し寂しい掛け替えのないもの。  
まるで、あの時の夕焼けの空のようだった。

とても楽しい時間、でもそんなに長くは続かない。

だつて、この世界はもう終わっているのだから……。

## Bear hairstyle

(ん……)

睡魔の中からゆっくりとリンは覚醒する、夏用のシユラフをまともに使うのはこれが初めてだったけど快適に眠ることが出来たようだった。

薄く臉を上げて横目で隣を確認すると、同じようにシユラフに包まれている人影が目に入った、多分なでしこだろう、見覚えあるくせ毛が確認出来た。

小さな寝息を立てて、ぐっすりと眠っているような気配を感じとった。

まだ完全に起きる気がしなかったので微睡の中で、これまでの悪夢のような出来事を少しづつ思い返してみる。

朝が来ない小平口町のキャンプ場、そこで、なでしこと交代でテントの見張りをしていた。

だが、恐怖のあまり一時間すらまともに寝れなかったのだ。

それは見張っている方も同様で、どこから襲ってくるか分からない状態では気の休まる時間など殆どなく、結局二人共眠ることを諦めていた。

(あのときは地獄のようだったな。眠りたくとも眠れないことがこんなに辛いとは考え

もしなかったし……)

リンは少し視線を下げて、話し込んでいる二人の少女を眺める。

——地獄ほとけに仏。

古風な言い回しだが、それぐらい有り難かったのだ。

今、熟睡出来たのも二人のおかげだ。

あの二人——込谷燐と三間坂蛭、今テントの入り口で語り合っている少女達のこと。

二人と出会うことができたことは、それは闇を照らす光のように眩しかった……なんて少し大げさかもしれない。

でも、まさに悪夢のような世界の中で唯一、嬉しかったことはそれだったのだ。

制服をきた二人の少女は私たちと違って利発的で健康そうに見えた。

そのことを尋ねたら、“青いドアの家”に居たおかげと言われたのだが、何のことかさっぱり見当がつかない。

こことは違うもう一つの世界があること、そこにいる“オオモト様”とかいう女性の事、実は割と眉唾物に捉えてはいる。

中二病の妄想という感じではないけれど、イマイチ信じがたい。

普通の状況ならば。

でもこんな世界に捕らわれたままだと今更嘘などいっても意味がないことだけは分

かる。

なにかの撮影かへんな奇祭かと最初のころは思ったりもしてたけど、そんな憶測を立てたところで結局何も変わってはくれなかったのだから。

だからあの二人の事は信用するんだ。

話しても嫌な感じは微塵もしないし、何より他の人間が居たことがたまらなく嬉しかったんだ。

二人ボツチじゃなかったんだって分かったから……だから……。

……

「あつ、起きた？ おはよう。まだ寝てても大丈夫だよ」

起きた気配を感じ取った隣が声を掛けてきた。

「お早う。良く眠れた？」

少し心配そうな優しい眼差しを向けてくる蛍、なんだか心が暖かくなる。

誰かに寝起きの挨拶を掛けてもらう、それがこんなに安心できる事なんて今まで思つたこともなかった。

当たり前のことが今はとても新鮮だった。

「ありがとう。なんか久しぶりに良く寝たって感じだったよ。ここ最近ともに寝た記憶なんてなかったからなあ……」

リンは欠伸を噛み殺して、両手をグツと上に開いてみる。

テントに触れるギリギリのところまで手を伸ばしていくと、固まった体がいつきに解れていくような感覚を味わうことができた。

「なでしこは……まだ寝てる、か」

安心しきったように穏やかに眠るなでしこの姿に、一同は癒しのようなものを感じていた。

リンはこの安眠した姿を久しぶりに見た気がしていた。

「まだ起こさないでおいてあげよっか。寝不足みたいだったし」

空腹が満たされたことと緊張が解れたことからの安心感があつたのか、なでしこはあの後すぐに急に眠気を訴えてきて、そのまま眠ってしまったのだ。

リンだってそれは同じらしく、出会ったばかりの燐と蛍に悪いとは思ったが、結局睡眠には勝てず、二人して小一時間程度眠ることを燐と蛍に伝えていたのだ。

「うん。でも、なんだか気持ちよさそうに寝てるのを見ると、こつちも眠くなりそうだね……」

蛍は軽く欠伸をしながら、まだ寝息を立てているなでしこの頭をそおつと撫でてみ

る。

柔らかく艶やかな髪に手が包まれて何とも言えず心地よい。

気付くことなく眠る姿は、普段よりも少女を幼くか弱いものに見せるようで愛おしくさせた。

頭をなでていた蛍だったが、なでしこにつられたように頭が前後に揺れ動いていた。

ここまでトンネルの中をひたすら歩いていたせいかな、すでに蛍の体は疲労のピークを迎えていて無意識のうちに休養を求めていたようだった。

「蛍ちゃんも少し休む？ 私は十分休養できたから」

シエラフから這い出たリンが蛍に場所を譲ろうと勧めてくる。

リンが入っていたのは最近買った夏用のシユラフで、小さく折りたたむことが出来る軽めの割とリーズナブルなものだった。

買ったばかりのこれを試してみる為に、普段は行かない夏キャンに行くことにしたのが今回のキャンプの目的だった。

思わずうつらうつらとしていた蛍だったが、リンの心配そうな声色にハッと目を覚ました。

「あつ！ 大丈夫だよ。リン？ ちゃん。ごめん……なんかまだ慣れてない感があるね」

燐とリン、呼び方も抑揚もほぼ一緒なのでちよつと紛らわしいかと思つてはいた。

当の二人は顔を見合わせて苦笑いを返し合うだけ。

「偶然にしては面白いよねえ」

「ホント、でもそんなに珍しい名前でもないよね」

燐とリンはにこやかに微笑み合う。

二人は名前が一緒とか関係なしに結構気が合うのかも、螢はそう感じていた。

そして二人の仲の良い姿を嬉しそうに見守っていた。

「ね。そちの学校の事、もう少し詳しく話してほしいな。実は私、女子高つて結構憧れだつたんだよね」

リンはこれまで誰にも言わなかつた焦がれた想いを口にしていた。

少女ならだれでも一度は夢見るお嬢様学校の秘密の園、これまでは恥ずかしくて親にも言わなかつたけど、現役で通つてこの二人なら笑われることなく聞いてくれる。

それが嬉しかった。

後に分かつたことでだが、この偶然の出会いを一番喜んでいたのは実はリンだつたのだ。

雨煙の中のテントで三人は談笑した。

まだ眠る少女を起こさない程度の柔らかな声色で話す少女達。

お互いの学校の事や地域の事、趣味の事など……時の動きを気にすることのない世界だったので、延々と尽きることなく話続けていた。

雨は降り止まず、狂った闇の世界に光が差すことも到底ない閉ざされた殻の中。そんな非日常の中において、今、この場所だけが唯一の日常の在り様だった。

（ううん……ん……ん……）

薄い感覚の海に浮いているような微睡の中、誰かの話声を耳朶から感じていた。

何処だっけここ？ 家じゃないみたいだなあ……。

じゃあ学校かな……そういうえば夏季テスト開けたら夏休みだったっけ……？

夏キャン、何処がいいかなあ？ 海か川が近くにあつて、やつぱり富士山が見える場所がいいよねい……。

あと、虫が少ないとこの方がいいなあ……リンちゃん苦手みたいだし、それとお化けとかはぜつたいノーサンキューだよお……。

そういうえばお化けって？ あの白いゾンビのことじゃないよね……でも、あいつ等っ



て、あれれ、何かおかしいぞ……？

あの顔のない白い影を思い出すと身の毛がよだって鳥肌が立っていく、それはとても現実的な嫌悪感。

気持ちのいい微睡が不快なイメージと歪な感覚の渦の中でぐるぐるとないまぜになつて、息が出来ないほどの寝苦しさが襲い掛かる。

このまま寝てたら……ヤバイ！ 本当にヤバイよっ！！

何がヤバイのかは分からない。

でも意識が一気に目を覚ました。

「富士山がヤバイよ——！！！」

意味不明な言葉がテント内を揺るがす勢いに木霊した。

あまりにも唐突にそして大音量の叫びだったので、燐と蛍どころかリンさえも飛び上がりそうに驚きを隠せなかった。

そしてそれはなでしこが起きながら発した言葉なんだと理解するのに、少し時間が掛かってしまうほどだった……。

「……で、何が富士山なんだよ？」

ジトつとした目つきでなでしこに問いかけるリン。

おはようの挨拶の前に鋭いツツコミが先に来ていた。

余裕の顔つきをしているが、内心はまだ驚いていてドキドキしていた。

常にクールさを保っているリンだが、こういうシンプルなサプライズにはめっぼう弱いほうだった。

「ごめんねい、リンちゃん。自分でも良く分からんのじゃよ。多分富士の霊峰に呼ばれたんじやお、ふおふおふお」

何故かお年寄りのような喋り方をするなでしこ。

それで誤魔化してるつもりなのか、まったく人騒がせなやつだ。

「おはよう。なでしこちゃん、よく眠れた?」

飛び跳ねそうならいに虫も驚いていたが今はなんとか平静を取り戻し、なでしこに優しく挨拶してきた。

前に聞いたサイレンの音と同じぐらいの衝撃だったとはさすがに言えなかった。

「うん、もうぐつすり眠って元気一杯だよっ! やっぱり睡眠って大事だねい!」  
なでしこがぶんぶん腕を回して元気をアピールしてきた。

テントを突き破りそうな勢いがあったので、リンは若干眉根を上げて怪訝な顔をしていたが。

「そういえば富士山がヤバイ——、とか言ってたよね。なでしこちゃん富士山が噴火し

ちやう夢でもみたの？」

先ほどの寝言のようなものを燐が検証してみる。

寝言は大体が無意識的なものであつて意味などないはずだが、燐はちよつとだけ気になつていた。

「うーん。ハッキリとは覚えてないんだよねえ……なんかこう富士山の危険でピンチつて感じがしたんだよね……」

考え込むような仕草をみせながら、手で富士山の形を作つてみるなでしこ、息苦しさを覚えたのは間違いないはずだった。

ただ富士山要素はどこから来たものかは分からない。

(それはどつちも同じ意味じゃないのか?)

リンは心底呆れかえつていたが、結局その発言にはつつこまなかつた。

「……もしかして富士山の事好き、なの?」

蛸は何ともなしに聞いてみる。

寝言は人の無意識化で起こるものなので当たらずとも遠からずといったところだろうか。

「富士山好きだよ——! 富士山グッズだつてもつてるよん! それに山梨に越して

きたのだから、実は富士山を近くで見ることが目的だったしねい！」

なでしこはボディランゲージを駆使して富士山への愛を臆面なく高らかに語りだした。

燐と螢はおおーつと感心しきりになっている。

（引つ越しと富士山は全く関係ない話だろ……）

普段は純粹で素直な、なでしこなのだが、一旦富士山の事となると別人のように興奮し何でもありな性格になってしまふ悪い癖があった。

「じゃあー、富士山に登ったことってあるんだ？」

燐も何気なく問いかけてみたが、なでしこはびくつと体を震わせていた。

それはなでしこにとって最も胸に来る質問であったから。

「ううー、登山部の人は登ってるらしいけどお、まだ私には荷が重そうなんだよねえ……それに登るなんて、なんか罰当たりな気がしちゃうんだよねえ……」

富士山が好きななでしこだったが、いざ登山となると殊勝な心掛けを見せていた。

好きだからこそ登るのには抵抗があるのかもしれない、理解するのは難しいが。

「確か燐は富士山登ったことあったよね？」

螢は緑のトンネルでのやり取りを思い出した。

雪の重みで木が曲がることを燐は富士登山での経験で知っていたのだった。

「うん。三度頂上まで登ったことあるよ。富士山は何度登ってもいいよね。さすが日本一の山ってカンジ」

燐は両親や従兄と富士登山したことを思い返す、あの頃は何かをするのも楽しかった。思い出は美化されるといいうが、本当に楽しかった思い出はより美しく鮮明に残つてくれるものなのだろうか。

「か、神だ……こちらの燐ちゃんは何かをするのも神すぎるよ……」

なでしこが燐に向かって手を合わせて拜んでいた。

その様子を見ていたリンは割と無表情に冷めた目線で見ているのだが……。

(なでしこのやつ、燐ちゃんをすっかり神と崇めてやがる、まあ仕方ないかこれは。でもなんだか悔しいぞ……)

思いのほか燐にジェラシーを感じていたようで、少しだけの妬ましいオーラは隠し切れなかった。

でも少し前までは他人にこういった感情を抱くことすらなかったのに、どうしてなんだろう？ 名前が同じだから？ は関係ない気がする……。

なんとなくモヤモヤとした気持ちになつていた。

「ええつと、富士登山なんて年間何万人も登ってるんだし、そこまで特別なものでもないんじゃない？ ……よね？」

跪いて拝むなでしこに戸惑いながら燐は言葉を選んだ。

もともとトレッキングは両親や従兄から教わったものだし、燐としては日常的な趣味の範疇のことだった。

それよりリンの妬ましい目線のほうが気になっていたので、どちらかというところリンに向けて喋っているようにみえた。

そんな気遣いが分かってしまったからか、リンは小さくため息をついた後、できるだけ冷静を装って答えることにした。

「でも、富士山が好きななでしこだってまだ登ったことないんだから、燐ちゃんは十分凄うと思うよ」

いちおう本心で語ったのだが、少しぎこちない微笑みになっているかもしれない。

心と体がちぐはぐなのか、頬の筋肉が引きつりそうになる、がなんとか堪えきった。

(夏季はキャンプだけじゃなくてトレッキングにもチャレンジしてみるか！)

今季の目標を心の中で密かに掲げてみる。

リンはこう見えても結構負けず嫌いな少女であった。

「んもう、リンちゃんは素直じゃないんだからあく。本音だだ洩れだよっ！」

なでしこが軽く肘でツツコミを入れてくる。

さほど痛くはなかったが、心の弱いところを突かれた気がして思わず顔をしかめてし

まった。

「だいじようぶ、リンちゃんの良い所は私がいっぱい知ってるからねい！」  
親指を立ててポーズを決めるなでしこ。

相変わらず恥ずかしいやつだ……でもなんか嬉しかったりする。  
やつぱりなでしこと一緒に来て良かった。

でもなでしこのせいでこんな気持ちになったのではないのだろうか？

なんとなく腑に落ちないリンだった。

「あ。そういえばリンちゃん、髪はそのままでもいいの？」

なでしこがリンの艶のある長い髪を手にとって問いかける。

手入れの行き届いたさらさらとしたロングヘア、密かに自慢の髪質だった。

「ああ、そうだな。何かあった時動きやすいし今のうちに結んでおくか」

「私がやってあげるよん！ だからじっとしててね〜」

リンがいつもの様に自分の髪を丸めて結ぼうとしたのだが、なでしこがそれを遮って自ら志願してきた。

「いや、自分でやるからいいよ。変な髪形にされたら困るし」

嫌な予感があったのでリンは断固として断った。

「大丈夫、大丈夫。恵那ちゃん直伝の“クマヘア”にしてあげるからねい！」

「おい、それだけはやめろ」

嫌な予感的中して露骨に嫌がるリン、だがなでしこはとても嬉しそうに髪を触っていた。

「くまへあーって何？」

なんとなく可愛い響きがしたので、螢はなでしこに聞いてみた。

「うんうん、気になるよねくまへあー。クマっぽい髪形ってことなのかなあ？」  
燐も気になっているのか食いついてくる。

二人の疑問になでしこはいつもよりちよつとトーンを低くして、とつとつと勝手に語り出してきた……。

「ふおふおふお。クマへアーはのう、本栖高校でも二人と出来る者はおらん門外不出の髪形でな、中でも恵那ちゃんのクマへアーはそれはもう神業としてなかなかお目にかかることのできない妙技なのじゃ。ワシも何度も頼み込んでようやく教えを乞うことが出来たのじゃ、ふおふおふお、有り難い事よのお」

「田舎のおばあちゃんの振りして嘘を振りまくのやめろ」

—— “クマへアー”

それはリンのクラスメイト齋藤恵那さいとうえなの最も得意とする髪形で、彼女の手に掛かって頭



にクマを乗せた女生徒は数知れないほどであった。

しかも人に見られることなくこっそりとやるものだから、一部の生徒には“ステルス齋藤さん”と密かに恐れられていたのだ――。

「……というわけなんじゃよ。分かったかな二人とも、ここだけの秘密じゃよっ」

「はい。せんせー分かりましたー」

蛍と燐は声を合わせて返事をした。

変な所でも息の合った仲の良い二人だった。

（なんだこの小芝居は人の髪で遊ぶ気なのか？ それにあのクマヘアーとかいうの、解くのが大変で好きじゃないんだよね……髪が痛んじやう気がするしな……）

リンは齋藤の実験台にされるが多かったので、いつそのこと髪をバツサリ切ろうと考えたことさえあるほどだった。

「でも具体的なクマヘアーって想像できないよねえ……」

「うん。可愛い感じなのかな？ それともリアル寄りなやつだったたりして」

長々とマンガなどでしこ昔話をしたのだが、蛍と燐には結局クマヘアーが何なのかは上手く伝わってこなかったようだ。

「だいじょうぶだよっ！ こんなこともあろうかとスマホに画像を残してあるのですっ

！」

なでしこはズボンのポケットからずびしっ！と自身のスマホを得意げに見せつけた。

「最初からそれを見せればいいことじゃん……」

心の声で突っ込む気すらも失せたのか、リンは直接口に出してツツコミを入れる。

「まあまあ、固い事は言いつこなし！ さあさあ、みんなでクマヘアーが何なのか見てもよー」

リンのツツコミに照れた笑いをみせるなでしこ。

やれやれと言った口ぶりのため息をつくリン、だがあることに気づいてしまう。

（画像って、まさか私がクマヘアーになっているやつか？ そんなの見たら笑いものにされてしまう……！）

リンの切実な想いとは裏腹に、蛍と燐はなでしこのスマホの中身を興味深く覗きこんでいたのだが――。

「……あ、あのー。これってスマホ？ じゃ、ないよね？」

蛍が今一度確認するかのように尋ねてきた。

「う、うん。これはどう見てもトランプだよね……」

燐はなでしこの手に握られているスマホ……ではなくトランプを指差していた。  
なでしこが自慢気に取り出ししてきたのは百均で売っていきそうな普通のトランプだった。

(コイツ……同じネタをまたやるとは……天然か……いや天然だったな)

リンは本栖湖で初めて出会った時のやり取りを思い出していた。

今思えばあれが全ての始まりだった。

そう思うと……なでしこのやつ、まるで成長していないことになるな……。

「ああっ!!?」

なでしこは髪の毛が逆立つほど驚愕すると、荷物をごそごと漁り出した。

暫く待って、ようやく目的のものを照れながら出してきた。

「ごめんごめん。こっちが本物のなでしこスマホでしたー!」

そう言っただけで今度こそ本当のスマホを見せる、が画面は黒いまま。

「あれ? でんげん……入らないよお、なんでえ?」

スマホを片手に悪戦苦闘している様子を見せる。

だが、何度電源ボタンを押しても画面が点灯することはなかった。

「あ、そういうえ……スマホ弄り過ぎて充電切れのままだったよお……」

てへへ、と愛想笑いをするなでしこ。

怖くて眠れない日が続いたのでスマホで現実逃避をしていたのだった。

その間、電源はもちろん付いていたのだが、回線は一度たりとも復帰することはなかったのだが。

「わたしたちもいつの間にかスマホの電源無くなっちゃったんだよねえ」

燐も自分のスマホをバッグバックから取り出してみせた。

ちよつと前まではホーム画面で時間だけでも確認することができたのに、今はうんともすんとも言わないただの板切れとなっていた。

蛍のスマホも同様だった、二人共そんなに使った覚えがないのに何故か充電切れになっていた。

もうこの世界では必要のないものだと言いたいかのように役目を終えていた。

「私も充電切れになってるよ」

リンも自分のスマホを片手で見せてくる。

そしていつの間にか頭をお団子の様に丸く結わいていた。

この騒動の間にかつそりと自分で素早く丸めておいたのだ。

それだけクマヘアーには抵抗があつたのかもしれないが、それにしても素早い決断であつた。

「みんな充電切れかあ……これつてもしかして……つてリンちゃん！ いつの間にし

まりん団子”にしちやったの!?”

むう、と何かを思いついたように考えこんでいたなでしこだが、リンの髪形を見てその考えは即座に打ち消された。

「しまりん団子……その髪型のこと?」

蛸がリンの髪……の上についている丸めた髪を指差して尋ねる。

団子とは言い得て妙かもしれない、そのネーミングセンスに思わず微笑んでいた。

「なんか老舗の銘菓っぽい名前だよね、しまりん団子」

燐はその名前から一口大の和菓子を想像していた。

中の具は餡子が定番だろうか。

「ふおふおふお、しまりん団子はのう、身延町の隠れた名物でそらあもう一口食べるとほっぺがずり落ちる程の味でのう、観光客の間では……」

「マンガウそうそ昔話はもういいよ」

少女達はリンの髪型のことです想定以上に盛り上がりを見せけている。

とりとめのない会話だけど今を生きてることを確かに実感できた。

辛いこと。

悲しいこと。

苦しいこと。

このテントの中にはそんなものは微塵もなく、ただただ喜びと楽しさだけが詰まっていた。

こんな狂った世界で偶然出会った四人の少女。

極限状態で出会った為なのか妙に惹かれ合っていた。

趣味も性格も違う四人だけど求めるものは一緒だった。

——この世界から逃げること——。

それだけが少女達の最後の望みだった。

だがこの世界ではそんな少女達の想いなど簡単に踏みにじるものたちも同時に存在していた。

緑のトンネルの奥深く、不気味に蠢く白い影があつた。

それは一体ではなく複数いるようで、皆群れをなして歩いている。

足を引き摺るようにずるずるとおぼつかない足取りで。

顔のない白いヒトのような“何か”、そうとしか言いようがなかった。

辛うじて衣服は身に着けているが、肝心の顔はなく、代わりに大きく裂けた赤い口だけが残っているだけ。

体には黒いひびが入り、人間の皮膚とは明らかに異なるものとなっていた。

時折意味不明な言葉を発するが、誰に向けての言葉なのかは定かではない。だが、昆虫等と違い意思だけは持っていた。

——求めるものは歓喜と快樂。

この歪んだ世界を象徴するかのように、歪んだ幸せしか残っていなかった。求める先はどこなのか、それはもう近くなのかもしれない。白い顔の裂けた口がニンマリと黒い闇の中に浮かんでいた。

……

……

……

## No. 1 &amp; No. 2

「ごほん、えー。今日からあなたは燐ちゃん1号です！ 類まれなる才能を生かして頑張ってくれたまえ、ふおふおふお」

タオルを髭のようにしたなでしこが仰々しく肩を叩いて宣言する。

それを受けた“燐”は困惑の表情を向ける。

「えっ、わたしのこと？」

自分のことを指差して、半笑いになる燐。

ちよつと気になつて隣で座る何とも言えない表情の“リン”を横目でみた。

無表情な感じに見えるが、心の中では多分呆れてるんだらうなあ……。

まだ出会つて間もない燐にもその様子は手に取るように分かった。

「こつちのあなたはリンちゃん2号です！ ソロキャンパワーで頑張ってくれたまえ、ふおふおふお」

なでしこはリンの肩を軽く叩いて2号に任命していた。

2号に命名されたリンは表情を変えることはなかったが……。

(誰が2号や——!!!)



と心の中で軽くブチ切れていた。

でもさすがにそれを口にするのはドン引きされるだろう……仕方なくリンは努めて冷静な表情を保ったまま、ぼつりと呟いた。

「どういう選考基準だよ……」

というか2号とか女の子に使っていい言葉じゃないぞ。

だからって1号ならいいってわけでもないんだけど……。

「うーん、蛍ちゃんと話し合った結果なんだけどなあ……」

なでしこはちらつと蛍の方を向いた。

その視線を受けて、まず蛍から解説する。

「うん。燐は、器用で何でも出来るし、みんなの人気者だから1号が相応しいってなでしこちゃんに言われたの」

（嬉しいような、そうでないような、なんとも言えない気分だよ……）

燐は蛍の解説に耳まで赤くしていた。

「そしてリンちゃんは、ちよつと近寄りがたいオーラ放ってるソロキャンパーだから2号が妥当なんじゃないかな。大丈夫、バイク乗れる分パワーはリンちゃん2号のほうが上だよっ！」

（いや、パワーって何だよ、バイクで体当たりでもさせるつもりか？）

リンは原付バイクに乗ったまま敵アジト？ に突っ込む自分の姿を想像してみる  
……。

——ソロキャンブレイク!!

燐ちゃん1号のピンチに分厚い壁をぶち破って颯爽と原付バイクで登場するリン  
ちゃん2号の姿がそこにあつたのだ!!

なんだそれは。

……第一、壁を壊す前にバイクが壊れるに決まつてるだろ常識で考えて……何とも無  
駄な妄想劇場だった。

「ねえ、燐。じゃなかった……燐ちゃん1号、わたしちよつと気になることがあるんだけ  
ど」

蛍がわざわざ言い直して聞いてくる。

その謎の気遣いに燐は少し呆れ気味に笑って答えた。

「蛍ちゃん……その言い方は止めようよー。なんか恥ずかしさを通り越して悲しくなっ  
てきちゃうし」

「そうなの？ ごめんね。それじゃあ燐。気になってることがあるんだけど、外はこんなに雨が降ってるのにテントの中はそんなに濡れてないよね？ どうしてなんだろうね」

濡れてないというのは雨漏りしているという意味で聞いたのではなく、地面から雨水がテント内の床まで染み出してこないという意味での質問だった。

「ああ、それはね。周りより少し小高い場所を選んでテントを立ててくれているからだよ。こんな状況でもちゃんと立地を選んでるあたり結構なベテランキャンパーだね、リンちゃんは」

燐は未だに押し問答を続けている二人に視線を向ける。

あの二人は何だかんだいってキャンプが好きなんだろうなあ。

その視線と褒め言葉になでしこが歓喜の声をあげる。

「おお、2号ちゃんが1号ちゃんに褒められるなんて珍しいねー。リンちゃん2号はキャンプレベル5の玄人キャンパーだから中々レベル高いんだよねえ」

不思議な言葉を継ぎ足して褒めるなでしこ。

何かネタを仕込まないとダメなんだろうか。

「なんだそのキャンプレベルって。今の私がレベル5ならMAXはどうなるんだ」  
リンはどうせスマホゲームの受け売りかなにかだろうと呆れかえっていた。

「それはもうキャンプマスターとして他のキャンパーから崇められるわ、好きなキャンプ地を優先的に使えるようになるわ、薪は貰い放題だわで、もううはうはですよっ！めげせキャンプマスター!!」

「ただの晒し者じゃねーか」

「やっぱりゲーム系だったか……」

リンはゲーム等に興味はなかったのでこういうのには疎かった。

「……こんな雨の日でのキャンプなのに楽しそうだよね、あの二人」

燐は二人のやり取りを楽しそうに眺める。

あつたばかりなのになぜだか昔からの友達みたいに思えていた。

「ホントね。でも、せめて月が出てくれたらいいのにね」

蛍と燐はテントの入り口から空を再び見上げてみる。

どす黒い雲に覆われた空は、月の欠片さえも見ることが出来ないまま雨を芝生に落と  
していた。

蛭はふと視線を下に戻すと、一瞬だが何かの影を視界の隅に捉えていた。

瞬きを繰り返してその影が映った場所にピントを合わせてみる……。

緑のトンネルに続く唯一の道の奥に、白い何かがあるのを薄っすらと確認できた。

「燐……あそこに白いのがあるのが見えない？ あのトンネルの道の方」

蛭は怯えたように燐のアンダーシャツの袖を引いてその対象を指差した。

「え？ どこだろう……」

燐は蛭の指を差した先を注意深く観察する。

雨煙で良くは見えないが、二人が入ってきた茂みの奥に何か揺らいでいるようにも見える。

ハッキリとは分からないが、あまり大きくない感じに見えた。

「あの変な臭いはしないね」

「うん……大丈夫みたい」

蛭は周囲の臭いを嗅いでみたがあつた甘い不快臭はしなかった。

燐はテントから少し身を乗り出して臭いを嗅いでみたが、芝生の蒼い臭いと雨の臭いしか感じることが出来なかった。

だとするとアレはなんなんだろうか？ 人型ではないようにも見える。

「もしかしたら」

燐は目を皿のようにして対象を可能な限り認識しようと試みる。

すると……。

「あっ!!」

その物体と思しきものは突然のスピードで視界から消えてしまっていた。

こちらに近づいては来ず、そのままトンネルの先に行ってしまったようだった。

その様子を見ていた燐は慌てた様子で靴を履きだした。

あれの後を追う気なのだろうか、顔には焦りの色も見える

「燐!?!」

たまらず螢は叫んでしまう。

その悲痛の叫び声はリンとなでしこの耳にも届き、こちらを振り向いていた。

「もしかしたら、サトくんかもしれない」

トレッキングシューズを履き終えた燐はバックパックを背負って、持ってきた鉄パイ

プを手にとってテントから出る準備を完了していた。

「サトくん?」

燐の言葉に思わずきよとんとして首をかしげる。

白い犬——サトくんがここまで来ることにはそれほど疑問は無いのだが、でもそれならこつちに来るはずじゃ……?」

「わたし、ちよつと様子見てくるから蛍ちゃんはここに居て、すぐ戻ってくるから——!」  
蛍が逡巡してる間に、燐はテントから雨の降る外へと飛び出して行った。

引き留める間すら与えてくれず燐の姿は雨煙の中に溶け込んでいく。

「りーりーん!!」

蛍は外に向かつて叫んだ。

だが燐は振り向くことなく、雨の中をずぶ濡れになりながら走り、トンネルの中に入ったと思しきところで立ち止まった。

そしてこちらに向かつて大きく手を振っていた。

その無邪気な様子に蛍は深くため息をつく。

これまで二人一緒だったのに燐が突然自分から離れていくななんて思ってもみなかった。

それだけサトくんには想うところがあるのだろう、それは仕方がないと言えた。

目で追える範囲でしか二人は離れてないのに、なんだかお互いが遠くに行ってしまうように感じられた。

その子供っぽい仕草に小さく微笑み、蛍が手を振り返そうとしたその時、何かに気づ

いた

かのように燐は視界の先、トンネルのさらに奥へと一人で駆けてしまっていた。こちらに合図を送ることなくたった一人で。

……完全に姿を見失ってしまった。

螢は一瞬の出来事に声すら出なかった。

——燐がいなくなった——

その現実には螢は急に胸の鼓動の早さを意識し、どうしようもない息苦しさを感じていた。

不安と心細さで今にでも押しつぶされそうになる。

今すぐにも燐の傍に行かなくちゃ！ それは切実な思いを体现するかのようになると想いを突き動かす。

それでも一回深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、状況が全く呑み込めず目を丸くしている二人に声を掛けた。

「あのね、あれはわたしたちの知ってる犬……かもしれないの。それを燐は追いかけて



行っちゃったみたいなんだ、だからね……」

焦りのある口調で螢は理由を話した。

燐がどうなっているのかが気になって目線はどこか上の空だった。

「犬……?」

なでしこもリンも考え込む仕草を見せる。

この二人にも何か思い当たる節があるのだろうか?

だが、今の螢にはそれを気にかけている余裕はなかった、早く燐のもとに行かねば。

それだけが頭の中を大多数を占めているかのようだった。

「だ、だからごめんね、わたし燐の所に行かなくちゃ。ちゃんと戻ってくるから」

螢は靴を履くのももどかしく、早々にテントから立ち去ろうとしている。

戻ってくるとは言ったけれどその保証はなかった。

それまで四人一緒に楽しかったテント内が荒れ狂ったかのように慌ただしくなった。

あれだけ和気あいあいとしていたのにどうして?

なでしこの大きな瞳は戸惑いと悲しみで揺れていた。

「待って螢ちゃん。私も一緒に行くよ」

立ち去ろうとする螢の手をリンが優しく掴む。

困惑する蛍だが、リンの強い視線を受けて少しだけ動揺が収まりをみせていた。「リンちゃん!!」

なでしこは困惑と涙声の交じった叫びをあげる。

どんどんみんな離れて行っちゃう、なんで、どうして?　ここが一番安全なのに。「大丈夫だよ。燐ちゃん連れてすぐに戻るよ。だからちよつとの間だけここで待ってて欲しいんだ。行き違いになつたから困るしね」

なでしこの頭を優しく撫でながらリンが諭すように言葉を紡ぐ。

折角友達になれたんだ一人でも欠けるなんてあり得ない、リンにも強い信念があった。

「で、でも……」

「さつきだつてちゃんと帰ってきたから大丈夫だよ、すぐ戻ってくる。約束」

リンが小指だけをちよんとだしてきた。

約束の証、嘘を吐かないようにする為の子供の頃に良くやったささやかな儀式。

「もう、そーやって子ども扱いするんだからあ」

それを見たなでしこは明るい声で不満を漏らす、すつと小指を差し出してくる。

その指は微妙に震えていて、なでしこの心を表しているかのようだった。

リンはその様子に軽く微笑むと、なでしこの指に自身の指を絡ませて契約を結ぶ。

暖かい指の鎖、繋いだまま何度も上下に振る、気持ち伝えあう様に何度も何度もやがてその指は名残惜しそうに解かれた。

それと同時にとても寂しい気持ちになった。

「ねえ、リンちゃ……」

なでしこは何か声を掛けようとしたのだが、その前に。

「蛍ちゃん、少しでも雨がしのげるからこれ着たほうがいいよ。私は別のものを使うから」

リンが蛍に自分の合羽を差し出していた。

ほんの少しの間だけどリンの瞳はなでしこから離れてしまっていた。

割と大事なことを言おうとしたのにな……。

「あ、ありがとう……」

蛍はそれを躊躇いがちに受け取って出来るだけ素早く身に着けた。

一分一秒だって惜しかったが、リンの申し出を蛍は無下に出来なかった。

「なでしこ、さっき何か言いかけた？」

リンが振り向いて先ほどの問いかけを聞き返してくる。

でもなでしこは目じりを下げて微笑んだ。

「ううん、何でもないよ。気を付けてねリンちゃん、蛍ちゃん」

それだけを言うのが精いっぱいだった。

もつと他に言うことがあつたはずなのだが、それすらも忘れるほどに動揺していたのかもしれない。

「ごめんねなでしこちゃん。燐と一緒にまたここに戻つてくるから」

蛍も同じ様に小指を差し出してみる。

なでしこはそれに応じて小指を出して、二人でまた指切りをした。

「うん。約束だよ蛍ちゃん。燐ちゃんと四人、テントでまたパーティーしようねっ」

二人は微妙にぎこちない微笑みを返した。

お互いの視線はそれぞれをまっすぐに見つめているが、瞳の奥に映るものはお互いに違っていた。

それは“溝”というわけではなく、互いに本当に好きな人が居たからだった。

だからそれを気に病むことなどはせず二人は笑顔で指切りを終えた。

「蛍ちゃん、準備出来たから行こっか！」

「うん！」

リンもトレッキングシューズをしつかりと履いて、軽く足をほぐす。

手持ちの合羽は一つしかなかったのでビニールを頭からかぶっていた。

髪を解くのも面倒だったので、お団子頭にビニールが乗っかっていて少し恥ずかしい

格好だが気にもとめなかった。

肩には多少モノが入るカバンを下げている。

中には救急に使うような道具と、一振りのナイフも入っている。

それは本来枝を削る為のもので武器となりうるものではないのだが、それでも持っているだけで多少気持ちは楽になった、いわば護身刀の役割を示していた。

でも、これであの白いゾンビと戦ったことなど一度もない……それだけが懸念材料だった。

「ん。じゃあ行ってくるよ、なでしこ」

「うん……」

テントの入り口からなでしこが顔を出して見送った。

空は変わらずどんよりとして雨は無慈悲にも降り続けている。

そんな中二人は少女を連れ戻すために外に行くのだ、自分はここに留まっているのに。

リンはあまりにも元気がないなでしこが気になって少し戸惑いをみせてしまう。

だが、蛍が先だって行ってしまったのでその考えを打ち消し慌ててその後を追った。

「蛍ちゃん、ちよつと待って——！」

リンの声が耳に入らないのか真つ直ぐにトンネルに戻る道をひた走る蛍。焦りがそうさせているのか、普段ならここまで早く走れないはずなのに。

(燐……大丈夫だよね、無事でいて……燐)

蛍はその想いだけを一心に走り続ける。

それに負けじとリンも足を動かした。

あまり全力を出すことはしないが、こういうことなら遠慮はなかった。

実際体力には割と自信はあるが、それを口にしたことは一度もなく、仲間内のかけてこでも全力を出し切ったことなどなかった。

野クルメンバーで一番足が速いなでしこすら上回る瞬発力とタフさを兼ね備えていたが、それをひけらかすことなど考えたことすらなかった。

でもこの異様な世界になってからは手を抜く余裕すらなく常に全力だった。

そうでないと本当に大切なものを守れなかったから。

それだけだった。

二人はあつという間に雨煙の中の奥へと消えていた。

さつきよりも雨脚が強くなったのか、その姿形すらここから見えなくなっていた。

「リンちゃー……ん！ 蛍ちゃー……ん！ 燐ちゃー……ん!!」

三人の名を大声で呼ぶが誰からの返事も無い。

雨の音にかき消されたのか、それとも何かに遮断されたのだろうか。

これ以上考えるのはとても怖い。

なでしこはもう一度声を掛けることもせず、プルプルと首を振って暗い考えを霧散むさんさせることにした。

「ふう……」

誰の話し声もしなくなつたテント内で、自分のため息と天井を打つ雨の音がやけに大きく聞こえる。

元気が身上のなでしこであつたが、ここ小平口町に来てからはすっかり覇気が抜けたかのようにぐったりとしてることが多くなつていた。

特に一人きりになるとそれは顕著に見受けられた。

「やつぱり一緒に行けば良かったかなあ……?」

そう思つたが結局言い出せなかつた。

理由は自分でも嫌というほど分かつていた、もう十分なぐらいに。

——単純な恐怖。

それだけがなでしこの心と体を縛り付けて動きを鈍くさせていた。

あの晩、小平口町までお姉ちゃんに送ってもらった日の夜のこと。

なでしことリンは夕食後、椅子に座って並んで星空を眺めていたのだ。

丁度満月だったこともあって、とても綺麗な夜空だった……あの時は小平口町最高――

――とか言って二人で浮かれてたっけねい……。

遠い昔の思い出話のように、あの平穏な時のことを断片的に思いだす。

小平口町は隠れた星空観光スポットらしく、人気も少ないのも相まって初夏のキャンプ地として二人で選んだものだった。

春頃にリンちゃんとアヤちゃん――土岐綾乃ちゃんとぎあやのと、三人で大井川沿いの辺りまで

キャンプと観光に来たことがあったけど、小平口町のことは全然知らなかったんだよね

……キャンプ雑誌で紹介されてたときも、静岡の秘境中の秘境って触れ込みだったしなあ……。

(秘境中の秘境ねえ……だからってあんなのが出てこなくてもいいのにさあ……)

ここに来てからの何十回目のため息をついた。

人生でこんなにため息をついたことなんてなかった、もう一生分ついてしまったかもしれない……。

それは全部あの白いゾンビ達のせいなんだ。

あの顔のないゾンビは突然二人の前に現れたのだ。



前触れ的なものはなかったかと思っていたが、今にして思うと管理人も他のキャンパーも確かにいたはずなのにいつの間にか居なくなっていて、入れ替わるようにあのゾンビが出てきていたのだ。

リンちゃんはいつらひよつとして……とか言ってたけど具体的なことは言わなかったなあ……もしかしたら言ったのかもしれないけど聞きたくなかったのかも。

未曾有の危機を察知したのか、普段でもなかなかできない速さで撤収ができたんだよね。

いつもはダラダラとテントを片づけるのに、こんなときだけ早く出来るなんて……ちつとも嬉しくないんだから、ね……ホントだよ。

その後のことは正直よく覚えていない。

何処へ逃げてもアイツ等は湧き出てくるし、夜は明けてくれないしでまさに地獄――

！

ううん、それ以上のことだよねこれ……そう前に読んだマンガのセリフ、“地獄すら生温い!!”これがピッタリ過ぎて泣けてくるよ……あ、でもこれは悪役に言うセリフだったか……。

(そういえば私、結構泣いちゃってるかも……でもその度にリンちゃんに慰めてもらってたんだっけ……子供みたいで恥ずかしいな、でもありがとうリンちゃん……)

なんでこうなっちゃったんだろうなあ……。

またため息をついた、もうこれが癖になつてゐるのかも。

ため息と一つ付くと幸せが一つ逃げるとか言われてるんだっけ……私の幸せはもうなくなっちゃったのかなあ？

なんだか急に悪寒がしてきた。

そんなに雨にあたつたわけでもないのに体の内側から寒さが湧き出てくるようで、怖くて小刻みに体全体が震えてしまう。

暗い考えのその先を思うと怖くて心が拒絶反応をおこすみたいだ……。

体が無意識に求めていたのか、なでしこは思わずシュラフに潜りこんだ。

夏用のシュラフなので初めは冷やっとするのだが、少し前までの温もりがまだ残つていてほんのりと暖かく、予想外の反応でちよつとビックリした。

（あ、これリンちゃんのシェラフだ、間違えちゃったなあ……でもリンちゃんの香りに包まれてなんだか心地いい……早く戻つてこないかなあリンちゃん……あ、蛍ちゃん燐ちゃんも……みんな早く戻つてきてよお……）

夜が明けなくなつてからは時間の概念がすっかりなくなつていた。

それでも二日ぐらいまではスマホでいちおうの時間は確認出来たのに、三日目が経とうとした頃に突然電源が入らなくなつた、それはあまりに突然で故障かと思つたほど

だった。

まるでブレイカーが落ちたようにプツツリと画面が消えそのまま映らなくなっていた。

ただでさえ時間の進みが遅く感じられるほどの異常な世界で、その時間が分からなくなる……無間地獄のようにさえ感じられた。

だからあの二人、燐と蛍に出会えた時はすごく嬉しかったんだ、初めは異世界の人かと思っただけね。

それは無理もないことだった、それまでまともな住人と会わなかったのだから。

でも……今は誰も居なくなってしまった。

あんなに楽しくみんなでお喋りしてたのに今は独りぼっち……普段笑うことの少ないリンちゃんだつてとつても楽しそうに笑っていたのに……どうして、どうしてなんだろう。

やば！ また暗い考えになってるなあ……だめだねい……そうだ楽しいことだけ考えてよう。

そうすれば心も暖かいし、その間にみんな戻ってくるよ、うん、きつとそうだよ。

なでしこはシユラフに包まりながら瞼を閉じて楽しかったことだけを集中して考え

ることにした。

ぼつぼつと五月蠅い雨音をBGMになでしこは楽しかった思い出に浸ることにした。本栖湖での出会いからアウトドアにすっかりはまり込んだこと、素敵な仲間との出会い、ソロでのキャンプデビュー、それをいつも暖かく見守ってくれる家族、そして今の自分をここまで導いてくれた今でも一緒にいる大切な人……夢の様に楽しい毎日だったと今更のように自覚した。

(ねえ、リンちゃん。私に残っている幸せはリンちゃんだけなんだよ……だから……だからね……)

なでしこは幸せそうな表情で眠りの中に意識を落としていく。

寝ている間は嫌なことを見ることも聞くこともしなくてすむんだからとにかく楽しかった。

次に目が覚めたときはすべて元に戻ってたらいいのにな……。

少女は一縷の望みを抱きながら深い眠りの中に再び落ちていった。

……  
……  
……

## Mt. Fuji plush

とても不思議な光景だった。

天井を見上げると緑で出来た梁が天高く渡されており、真つ黒な夜空を覆い隠すように緑のアーチが隙間なく掛けられていた。

それは左右の壁まで伸びており、緑の森の中を切り開いたみたいにぼっかりとした空間となっていた。

(あ、そうか。これが“緑のトンネル”なんだ……すごいなあ)

なでしこはふいに燐と蛍が話していたことを思い出した。

あの二人は緑のトンネルから来たって言ってたよね……ここがそうなのかな……？  
遙か上空に伸びた緑の天井に雨音が葉を打つ音が微かに聞こえてくる。

緑のトンネルは殆ど雨漏りもせず、遙か遠い先まで続くかのようにその奥まで見通すことが出来なかった。

(まるで緑のオーロラの中にいるみたい……)

初夏にオーロラとはおかしな表現に思えたが、それぐらい美しい光景であったといえる。

緑のトンネルの中はなぜか薄く発光しているかのよう、淡い光を所々に射して、夜の世界よりも明るく、守られているようにさえ感じるほどだった。

どういう構造になっているんだらう？　なでしこはその疑問を確かめるため、身を起こそうとシユラフから足を引っ張り出そうとしたのだが。

「えっ?!　あううっ!」

ごろんと体がひっくり返って、枕木の上に落下してしまう。

すんでのところで体を捻り顔から落ちるのは回避出来たが、お尻を強かに打ち付けてしまっていた。

だが、枕木に落下した割には思いのほか痛みは少なかった。

何かがクツションになってくれたのだろうか、今のなでしこはそれには気づかなかった。

「あいたた……あれれ?　これって線路かな?」

金属製のレールが2本トンネル内に伸びていた。

赤く錆びていて古そうにみえたので、今は使われてないような感じが見て取れる。

(んー?　もしかして線路の上に寝かされていたのかなあ?)

痛むお尻を擦りながら、なでしこは今の状況を理解しようとする。

線路を跨いで寝るなんてヨガの人じゃあるまいし、さすがにそこまで寝つきがいいと

は思わなかった。

だが、いつここに来たのかだけは見当がつかなかった。

「おーいー！」

誰かがトンネルの奥から声を出しながら手を振って駆けてくる。

聞いたことがあるような、明るい感じのアニメっぽい声。

「なでしこちゃんー！ 起きた?！」

心配そうに覗き込んでくる、明るい瞳の快活な少女、込谷燐だった。

あの時、何かを追いかけてテントから出て行ってしまった栗毛の少女。

それから堰を切ったようにみんなバラバラになってしまったのだ。

「燐ちゃんー!? 無事だったんだねい!!」

まだ座ったままの姿勢で、燐の下半身にがばつと抱きつくまでしこ。

顔がお腹にあたってなんだかくすぐったかった。

「あはは、ごめんね。ホントごめん、ついちよつとだけ見に行くつもりだったんだけど、気になって奥まで確かめに行っちゃったんだ」

燐は困った顔で少し笑いながら弁明した。

あの時、燐は対象を追いかけて行ったのだが見失ってしまい、それでも気になったので奥まで探しに行ってしまったのだ。

「そうなんだ……それでどうだったの？」

「うん、それが、これ……」

燐はポケットから四角く畳んだ白いものを取り出した。

それを広げてみると誰しもが見覚えのあるものになった。

「ビニール袋?！」

なでしこは殊更大げさに驚いた。

でもワザとというわけではなく本気で驚いていたのだ。

「そう、これが流されて行っただけみたいなんだ……ここつてあまり風も吹かないみたいなのにね」

燐はなでしこから視線を外して、トンネルの奥を眺める。

その奥は霧に包まれているかのように遠くまで見通すことが出来なかった。

なでしこもその先の奥へと視線を向ける、似たような景色がずっと続いてそうで少し怖くなってくる。

「そっかー、それは仕方がないねえ」

「うん。ごめんね、わたしらしくない勘違いだったよ……ええと、大丈夫、立てる?」

燐はまたなでしこに謝罪すると、未だ座り込んでいるなでしこに手を差し伸べる。

「ありがとう燐ちゃん。でもね私、気にしてないよ。だつてちゃんと戻ってきてくれた



んだし、そういうえば燐ちゃんが私をここに寝かせたの？ 誰も居なくて心細かったよお……」

なでしこは手を借りて立ち上がると明るい笑顔でそう言った。

だが、目覚めた時一人だったことには疑問を投げかけてきた。

「あはは、あれはねリンちゃんの提案なんだ。なでしこちゃんが起きる時って決まって大騒ぎするから、少し離れた場所に置いておこうって、ね」

「えー、リンちゃんってば酷いなあー。私そんなに寝相悪くないよねっ?」

大きな瞳をまっすぐに向けて、寝相について尋ねてくるなでしこ。

寝相はどちらかと言うといいのだが、寝言があまり良くなかったのだ。

「あ、うーん? ど、どうかなあ? と、とりあえず、蛭ちゃん、リンちゃんのとこに行こ。二人共なでしこちゃんが来るのを待つてるよ!」

燐はなでしこの質問に微笑み返すだけにして、二人が居る場所まで行くことをとりあえず勧める。

「なんか誤魔化された気がするう……」

その取り繕った様子になでしこは不満を露わにして頬を膨らませていた。

「まあまあ、気にしない気にしない ね?」

なでしこの手を取って立つことを促す燐。

その手の暖かさは悪夢から目覚めたことを何よりも実感させた。

その手をぎゅつと握ってみた、燐もそれに応じて握り返してくれる。

それだけでとても安心出来てなでしこは嬉しくなった。

「うん！ そうだねっ！」

二人は手を取り合つてトンネルの奥へと歩を進める。

白い靄の様なものが奥まで広がっていて、その先は分からない。

地面には廃線跡の線路がまだ残っていて、砂利や枕木が邪魔してことのほか歩きづらかった。

燐は丸めたシユラフを小脇に抱えていた。

迷惑を掛けたせめてものお返しにと持つていくことを志願したのだ。

なでしこはきよろきよろと興味深そうにあたりを見回しながらも、燐に引かれるまま、まっすぐ奥へと足を動かしていた。

少しの間トンネル内を進むと、それまで見ることが出来なかつた二人の人影と、それが何かを広げている様な光景が突如して現れてきて、なでしこはビツクリしてしまつた。

思わず繋がれた燐の手を強く握りしめる。

だが、燐は気にすることもなく。

「おーい、なでしこちゃん起きたよー!」

とシユラフを片手にあげて合図を送った。

その声に気づいた二人は何かの作業の手を止めてこちらに振り返える。

「あつ。お帰り燐、ご苦労様。お早う、なでしこちゃん」

「お。お寝坊さんの重役出勤だな」

優しい声で出迎えてくれる蛍と。

少し茶化すことを言ってくるリンの姿があつた。

「蛍ちゃん! またあえて嬉しいよおっ!」

勢いを付けて蛍の胸に飛び込むまでしこ。

あまりの勢いにバランスを崩して倒れ込みそうになるが、燐が咄嗟に手を掴んで支えてくれた。

「ふう、そんな急に来られるとビックリだよなでしこちゃん。逃げたりしないから、ね?」

「本当? じゃあもう置いてつたりしないでねっ」

蛍の胸に顔を押し付けたままなでしこが尋ねてくる。

その声色は純粹さと切実な願いが混ざっていて、まるで母親におねだりする子供のよ

うだった。

「……うん」

そう言った蛍の顔は寂しそうだった。

蛍の憂いを帯びた表情を見た燐はたまらず居た堪れなかった。

三者三様の在り様を一步離れたところで見ていたリンは、軽いため息をついて少し大きな声で呼びかけた。

「はいはい、感動の再会はそれぐらいにして、なでしこもテント干すの手伝ってくれないか。ずぶ濡れになったのを此処まで蛍ちゃんと燐ちゃんと持つてきてもらったんだし」  
「ああつ、本当だ！ すっかりぐちゃぐちゃになっちゃったねえ……起こしてくれれば手伝ったのにい」

リンのテントは雨で濡れそぼっており、底面は泥でぐちゃぐちゃとなっていた。

トンネルの端の折れ曲がった木の幹とを持っていたロープで繋いで、水気を少しでも取るために干している最中だったのだ。

「いや、起きなかつたじゃないか」

「ええっ！ そうなの？」

未だ蛍の胸に抱かれながらなでしこが上目遣いに聞いてくる。

「あ、うん。なでしこちゃん爆睡してたよね」

その問いに螢は苦笑いを浮かべながら答えていた。

「そうだぞ、雨にあたっても平然と寝てたしな」

「ええー、うそだよ——!?!」

リンの指摘に、口を尖らせたなでしこが抗議の声をあげる。

「いやいや、嘘じゃないって。ねえ？ 燐ちゃん」

リンは燐に同意を求めてくる。

それを受けて燐は少し困った顔であの時の事を大まかに説明する事にした。

「あー、うん。あの後さ、すぐに螢ちゃん、リンちゃんがやってきて三人でテントに戻ったんだけどなでしこちゃんずつと寝ててさ、このままだと広場が水浸しになりそうだから、緑のトンネルに行こうって話になって……」

……

あの時、燐がサトくんと勘違いして緑のトンネルで押し流されていたビニール袋を手にとると、すぐに螢とリンが息を切らせながら追いかけてきたのだ。

螢は燐にギュッと抱きついて無事に安堵した。

息を切らせながらも、一途に燐の元に飛び込んでくる螢。

燐は螢の純粋な想いと、自身の早合点に申し訳なくなつて同じようにきつく抱きしめた。

その間二人は何も喋らなかつた、だつてお互いの気持ちは誰よりも良く分かつていたからそれ以上は何もいらなかつた。

リンは抱きしめ合う二人を見て、とても安心していた。

ああ、この二人はこうやつてお互いを気遣いながらここまで来たんだ、だからこの先にながらうときつと大丈夫だろう。

何故だかそれが理解できていた。

螢と燐は強く手を取り合つてテントのある広場に戻る。

その二人の先頭をランタンを手にしたリンが緊張の面持ちで務めていた。

そして何事もなく三人でテントへ戻つたのだが……そこにはシユラフに潜り込んで気持ちよさそうに爆睡してゐるなでしこの姿があつた……。

……

……

……

「というわけだったので……いやあ本当に申し訳ない。わたしが迂闊なことをしたばつ

かりにみんなに迷惑かけちゃって……」

燐はみんなに深々と頭を下げ、謝罪する。

なんであそこまでサトくんを求めたのか肝心な事は良く分かっていなかった。

「もう気にしなくていいよ燐ちゃん。みんな無事だったんだし」

「私だつて気にしてないよん！　だつて寝てただけだしねっ！」

なぜか誇らしげな態度をとるなでしこにリンは目線でツツコミをいれていた。

「ね。だから燐、頭を上げて。燐がサトくんを気に掛けるのはわたしだつて分かるから

……」

燐の手をやさしくとつて螢が諭すように呟く。

まるで聖女のようなだと、なでしこはうつとりとした表情で見つめていた。

「あ、うん……えへへ、今度は軽率な行動をとらないことをここに誓います！」

燐は恭しく一礼すると、身を正してびつと敬礼して宣言する。

「うんうん、よろしい」

燐の態度に螢はにこやかに微笑むと、燐の頭を優しく撫でた。

皆の前でこんなことをされるのは恥ずかしかったけど、なんだかとても嬉しかった。

二人のやり取りになでしこもリンも微笑んでいた。

だがなでしこは突然はつとあることに思い立った。

「起きなかつた私が言うのもなんだけど、どうやってここまで運んだの?」

確かにずっと寝ていただけののなでしこが言う言葉ではなかつた。

呆れた目線を向けるだけのリンに変わつて燐が答える。

「いつまでもあそこにいるのは危ないから、まず、なでしこちゃんを緑のトンネルに避難させて、それから三人でテントを片づけてきたんだよ。でも殆どリンちゃんがやつてくれただけだね」

テントという拠点があるのは有りがたかつたけど、囲まれたら逃げ場はないというデメリットもあった。

だから五月蠅いのが寝ているうちに緑のトンネルへと避難しようと三人で決めていたのだ。

「燐ちゃんも蛍ちゃんもいっぱい手伝ってくれたから早く撤収出来たんだよ。私一人じゃもつと時間掛かつてたよ、ありがとう」

二人にお礼を言うリン、なでしこが寝てる間、三人の絆はより深くなっているように見えた。

(なんか私だけ除け者になつてるよう!)

なでしこは急に一人だけ取り残された気分になり、いじけモードに入っていた。



それを見かねた蛍が殊更明るい声でなでしこに話しかけた。

「そういえばなでしこちゃん、途中から何だかうな覽されてたみたいに見えたけど……怖い夢でも見たの？」

「あつ！　そ、そうだよつ！」

蛍の問いかけに、なでしこは先ほどまで見ていたホラー映画のワンシーンのような悪夢を思い出した。

だが既にこの小平口での状況がホラー映画のようなのだが……とにかく気になったことを矢継ぎ早に聞いてみる。

「り、燐ちゃんつ！　あのつ、靴はちゃんと両方あるの？」

「うん？　ちゃんと履いてるよ、ほら」

なでしこの切羽詰まったような質問に少し戸惑いながらも、燐は自分の履いている靴を指差した。

そこには多少土に汚れているが、鮮やかな色のピンクのトレッキングシューズがちやんと燐の両足に収まっていた。

迎えにきたときもずっと履いていたはずなのだが……。

「わあ、良かったあ……あ、蛍ちゃんのポシエットは？　あの可愛いネコっぽいー！」

燐のトレッキングシューズに安堵のため息をつくなでしこ、だがまだあの悪夢の検証

は終わっていない。

今度は蛍の持ち物を気にしてみる。

「わたしのポシエット？　これのことかな？」

蛍は肩から下げているお気に入りのおネコのポシエットをなでしこの目の前に差し出す。

蛍が何時も身に着けているポシエットだが、実は前に燐からの誕生日プレゼントで貰ったものであった。

それ以来、蛍の一番の宝物になっていて肌身離さず、どこへ行くのにも持つてきていたのだ。

燐としては恥ずかしかったのだが、蛍が気に入ってくれたので何時しか気にならなくなっていた。

「はあ……やっぱりあれは夢だったんだあ、良かった……あ、でもでも一番肝心なことを聞いてないよっ。リンちゃん！」

二人の暢気な様子になでしこはため息を漏らした。

だが、これは前座とばかりになでしこはあることをリンに聞かねばならかった。

「な、なんだよ……？」

なでしこの剣幕にリンは珍しく気後れしていた。

これはよほど大事なことを聞いてくるに違いない、リンは息をのみ込んだ。

「リンちゃんの大事にしている富士山のぬいぐるみ、ちゃんと持つてる!?」

「いや、そんなもの大事にしていな……」

何事かと身構えていた自分が恥ずかしい、リンは顔を真っ赤にしていた。

気恥ずかしさを隠すように、リンは少し早口で言葉を続けた。

「大体それはなでしこが大事にしているものじゃないのか？ それになんで山梨県民の私  
が富士山のぬいぐるみを大事に持つてるんだよ……」

なでしこの言う富士山のぬいぐるみとは、富士山をモチーフにした大きな目と足が付  
いているだけのよくあるマスコットぬいぐるみのことだった。

名前は覚えていない……が、富士山に“くん”だか“ちゃん”を付けただけの割と適  
当なものだったとリンは記憶していた。

「山梨の人だつてあのキャラ、好きにきまつてるもん！ みんな一家に一匹は持つてる  
はずだもん！」

なでしこは根拠がまったくないことを声高に主張してきた。

（なでしこも結局あれの名前を覚えていないのか……それにしたつて“一家に一匹”は  
さすがにないだろうに）

リンは名前も分からない富士山のマスコットのぞんざいな扱いに少し同情した。

「あ、あれなでしこちゃんのものだったんだ？ 一人じゃ寂しいかなと思つて横に置いておいたんだけど……？」

蛍が突然話に参加してくる。

線路で器用に寝ているなでしこの横に寂しいだろうと思つて蛍が気を利かせて置いてくれていたものだった。

横に置く？ なでしこには何のことかさっぱりで目が“？”になっていた。

「そっういえばさつき潰れた富士山っぽい形の物があったね。もしかしてあれのことだったのかな？」

燐はなでしこを迎えに行つた時のことを思い出した。

眠りから覚めたなでしこと共に線路を歩いているとき、ふと視線を感じて後ろを振り返ると富士山のように見える潰れたぬいぐるみが見えたのだ。

燐はまた余計なことになるだろうと特に指摘しなかつたのだが、それこそが今回のキャンプで何故かなでしこが持つてきていた富士山のぬいぐるみだった。

だが、線路の枕木の上に蛍が置いていたので、なでしこが起きて落下したときに尻に押されて潰されていた。

おかげで多少は痛みを軽減するが出来たので、クッションとしては役に立つたと言えたのだ。

「あつ！ あのおしりの感触は富士山が身を挺して私を守ってくれたんだ！ ふおおおー待ってて私の富士山く。今迎えに行くから〜！」

単身なでしこは先ほどまで寝ていた線路上へと足早に戻っていった。

独りぼっちで待っているはずのぬいぐるみを救いに行く為に。

なでしこは走りながら、内心ホツとしていた。

自分の見た夢が正夢じゃなくて本当に良かったと……でも。

（いまいるこの場所だつて夢じゃないのかな？ どっちが夢でどっちが現実が分からないくなつてきちゃった……）

夢なのか現実なのか、そのどちらも間違っていてどちらとも正しいとも言えた。

考えると簡単なのに答えは出てこない。

だからみんなという今を現実だと区別した。

そのほうが楽しいし、もし夢だったとしても良い感じで目覚めることだけは出来るのだから。

……

……

「二人で行っちゃったねえ……」

呆然と見送る燐。

あのとき拾っておけば良かったかと少し後悔をした。

「まあ、あれだけ元気ならすぐに戻ってくるよ」

隣で呆れかえるリンの姿があった。

寝起きのハズなのに駆けずり回るなでしこの姿に割と安心しているようだ。

「ごめん。わたし余計なことしちゃったかも。なでしこちゃんのぬいぐるみ、大丈夫だ」といいけど……」

反省モードの蛍、手持ち無沙汰を解消するように長い髪を手でくるくると回していた。

その程度の事で気に掛ける二人がなんだか可笑しくなり、リンは苦笑いを浮かべてる。

「大丈夫、アイツは犬みたいなものだからね、玩具をみつけたらすぐに戻ってくるよ。飼い主のもとにね」

少し口をにやにやさせてリンはそう答えた。

(なでしこの事だ、きつと想像通りのリアクションで来るだろう。だったら私もそれに応えてやらねば……)

「飼い主って……?」

燐と螢は顔を見合わせて目を丸くした。

すると線路の奥の白い靄から息を弾ませる元気な声と、猛ダツシユしてくる少女の姿があつた。

「リンちゃん、リンちゃん！ まだあつたよ富士山のぬいぐるみ！ ちよつと潰れて平べつたくなつちやつたけど、まだふかふかの富士山だよっ！」

なでしこがリンの元に少し汚れて潰れ気味のぬいぐるみを見せつけた。

それはリンの言う通り、オモチヤを啜えて飼い主の元に持ってきた小型犬のようにも見えた。

「よーし、よーし、良い子だ」

リンは無造作になでしこの頭をわしやわしやと撫でつける。

その行為になでしこの頭が右に左にと揺れていた。

「んもう、リンちゃん！ 私、わんこじゃないよっ！」

そう言いながらもなでしこは手を払いのけることもせず、わしやわしやとされ続けていた。

その二人の様子に螢と燐は思わず吹き出してしまふ。

なんとも緊張感のない微笑ましいやり取りだった。

「も、もう、見世物じゃないんだよっ!？」

そう抗議するが、ずっと撫でられたままなので説得力はなかった。

(さつきからしつぽ振りまくってるじゃねーか)

リンはなでしこのお尻の見えないシツポが嬉しくて揺れるさまを想像して、余計に撫でてあげることにした。

(わたしもあんな感じだったのかなあ？ 傍からみるとすつごく恥ずかしいことだったのかも)

なでしことリンのやり取りに、蛭に撫でられた事を思い返して燐は顔を赤くした。

「どうしたの燐？ 燐も頭を撫でられたいの?」

きよとんとした表情で蛭が尋ねてくる。

それを聞いた燐は首を大きく横に何度も振って否定をした。

「だ、だいじょうぶだよ蛭ちゃん。あれは恥ずかしいからもういいって……」

「燐ってば、照れなくてもいいよ。リンちゃん達に負けないぐらい撫でてあげるからね」

にこやかな顔を向けながら蛭が頭に手を伸ばしてくる。

その様子に燐は……。

「うふふ、よしよし。燐もどっちかというと犬属性だもんね、可愛い」



蛭に頭を撫でられていた。

逃げ惑うことも出来たのに何故か無抵抗のまま。

(なんか蛭ちゃんには抵抗できないんだよね……何でだろ?)

(リンちゃんにこうされると何か落ち着くなあ……何でだろ?)

その隣ではなでしこが未だにリンに撫でられまくっていた。

二匹のわんこは、それぞれ恍惚くわくこの表情を浮かべて、見えないシツポを振っているかのやうにとても従順であつた。

燐となでしこは行為そのものに疑問を持ちながらも、わしやわしやと撫でられ続けていた。

それはリンと蛭が飽きるか、二人の髪の毛が尽きるかの譲れない勝負でもあつた。

(そんな勝負嫌だよっ!)

薄く光が差す、緑のトンネルの中で少女達はつかの間の平穏を楽しんでいた。

狭く暗いテントとは違い、緑の下でのびのびとしているように見える。

廃線跡の線路がどこまでも続いているかのやうに、真つ直ぐに伸びていた。

行きつく先は何なのか、それでも四人の進む道はこれしかなかった。

でも、今は立ち止まっている。

雨にうたれぬことを幸いに、この楽しい時間をゆつくりと味わいたかったから。



## Metal offer box

「もう、死んじやうかと思つちやつたよお！」

なでしこは両腕を組んでぶんぶんと怒っていた。

それもそのはずで、リンに両目どころか鼻や口も塞がれていたのだからたまつたものではなかつた。

「ごめんごめん、つい口だけのつもりだったけど……悪かつたよ」

リンが両手を合わせて平謝りをする。

覗いているのがばれただけでも恥ずかしいのに、なんでこんな事まで……。

私はこんなにも好奇心旺盛な女の子だったっけ。

「危うく、あつちの世界に行つちやうところだったよう……」

遠い目をしたなでしこがあらぬ方向を見て、呟いていた。

「あはは……」

燐と蛭には割と笑えない冗談であつた。

何故なら二人は何度もあつちの世界に行つては戻つてきているのだから。

「そういえば、どう？ 薪木になりそうなのあつた？」

自分達のせいで変な流れになってしまったので、燐は話題を変えて今、必要なことを聞いてみる。

「あ、うん。いちおう集めてきたよ。ちよつと湿ってるけど何とかかなると思う」

リンはなでしこと共に焚き木になりそうな小枝をかき集めてきていた。

だが、線路上には枝の一つすら落ちてなかつたので、緑のトンネルを構成している湾曲した木を鉋で切ったり、折ったりしてようやく集めたものだった。

思いの外、木は固く鉋を何度も振り下ろしてようやく切り落とすことが出来るほどだった。

雨で湿気ってはいたが、表面をナイフで削ればなんとか使えそうだった。

リンは持っていたナイフで小枝に刃を当てて器用に削り出していく。

前に作ったことがあつたので、そこまで難しくはない、ただひたすらに削るだけだった。

「何、作ってるの？」

蛭が興味のある眼差しで覗きこんでくる。

先ほど覗かれたことなんて気にもしていない素振りを見せていた。

「これはね、フェザースティックって言って、天然の着火剤みたいなものなんだ。こう木を薄く削っていくと火が付きやすくなるんだよね」

「へえー、凄いなー」

蛍はリンのキャンプ知識にいたく感心していた。

蛍の趣味であるトレッキングは体力のない自分にはちよつとハードな気がして敬遠してたけど、リン達の様子を見てるとキャンプぐらいなら何とか出来そうに思えてくる。

「あ、リンちゃん上手だね。これ作るのって見た目より結構難しいんだよ」

リンが曼殊沙華まんじゆしゃげの花のように削っていくフェザースティックを見ながら、蛍も関心の声をあげていた。

純粹な二人の視線が何だか恥ずかしい。

そうこうしているうちに一本削り終わっていた。

もう一本削り出すときに、リンはぼつりと二人に言葉を零す。

「さつきはごめんね、覗く気なかつたんだ。薪を持って帰るときたまたま視界に入っちゃつて、そのまま見ちゃつてた……声かければよかつたんだけど、何だか掛けづらく……邪魔しちゃういけないって思ってたんだと思う……でも普通に見とれちゃつてたんだ二人に」

リンは自分でも良く分かつておらず、あの時の状況をそのまま語っていた。

かなり恥ずかしいことを言ってるのだが、枝を削ることに夢中になつてるせいなのか

珍しく饒舌に喋るリン、それだけ衝撃的だったのかも知れない。

「あはは、わたしたちは全然気にしてないよ。ねえ、蛍ちゃん」

「うん、全然大丈夫だよ。普段でも二人の世界に入っているとかわられることあるしね」

「もー、蛍ちゃん。誤解招くようなこと言わないでよ〜」

（誤解っていうか、この二人は学校でもこんな感じなんだろうな）

仲の良い二人を想像してリンはなんだか気持ちの暖かさを覚えていた。

女の子同士で仲が良いのは悪いことじゃない、むしろギスギスするより全然良かった。

「よし、こんなもんだね。さて次は」

リンは傍らに置いていたB6サイズ程度の金属プレートを袋から取り出して手に取った。

それを展開させ組み合わせて台座に乗せると、小さなローテーブルの上に置いた。

「そして上蓋を乗せると……じゃーん！メタル賽銭箱の完成ですっ!!」

最後はなぜかなでしこが手に取って商品紹介をしていた。

「お賽銭箱なの？ それ」

蛍が興味の手でそれをしげしげと眺めていた。

金属製のそれは表面加工が施しており顔が映るほどに綺麗に磨きこまれていた。

大ききの割には高級感がありそうに見える。

なでしこから実際に手渡されて持つてみて、更に驚いた。

500グラムほどはあるのだろうか？ 見た目以上の重量感があり、手にずっしりとした確かな手ごたえを伝えてくる。

その危うい持ち方に思わずなでしこが手を差し伸べる。

「気を付けて蛭ちゃん。これはキャンペーン神しまりん様の大切なお賽銭箱なんだからねっ」

「しまりん様って……」

燐はしやがみ込んで木くずを集めているリンをちらつと見た。

視線を感じて体をびくつとさせたリンだったが、目が合うと無言のまま首を左右に振って否定の意を示していた。

「こうやってお賽銭をあげて、しまりん様にお願ひするんだよっ！」

なでしこはテーブルの上にメタル製の箱を置くとおもむろに五円玉を取り出し、二拍手をして神頼みの作法をとった。

「しまりん様どうか我らをお助けください、しまりん様……」

両手を合わせて目を閉じるとなでしこは、賽銭箱に向かって何やらぶつぶつと拝み倒している。

それを見た蛸も何と無しにポシエツトからお金を取り出して賽銭箱に入れると、なでしこと同じように拜んでみた。

「わたしたちをここから脱出させてください。しまりん様……」

それを見たしまりん様——こと志摩リンはほとほと呆れかえり、はつきりと聞こえるような深いため息をついていた。

(なでしこのやつ、またこれをやるのか……今度は蛸ちゃんにまで伝染<sup>うつ</sup>っちゃったじゃないか)

「ご、ごめん。拜まれても私にはどうしようもないよ、大したこと出来ないし……つていうか、なでしこはこれが何か分かつてる癖に紛らわしいことをするなよ……」

リンはまず蛸に頭を下げて謝罪すると、今度はなでしこを少し軽蔑な目で嗜める。

今の状況には相応しくない冗談だったから。

「ふお、ふお、ふお、さっきのお返しじやよリンちゃん」

なでしこは素知らぬふりでの表情で開き直っていた。

なかなか強かな少女であった。

その強気的態度にリンはぐぬぬと齒齧みをしていた。

「ん？ じゃあこれ、お賽銭箱じやないの？ だつたら？」

なでしことリンのやり取りに一人取り残される蛸。



この箱の使い道がイマイチ分かっていないようだった。

「蛍ちゃん。これはね、この中に炭や薪を入れて、焚き火をするための道具なんだよ。キャンプ場では直で焚き火NGなどもあるから、こういうのを使う必要があるんだよね」

見かねた燐がフオローを入れる。

燐自身は持っていなかったが、従兄の聡が似たようなものを冬の登山に持っていったので知っていたのだ。

もつとも雪山の登山には一緒に連れて行ってもらったことはなかったのだが。

「さくらにこの鉄板を上に乗せるとグリルにもなるし、他にも金網なんかもあって、これだけで焼肉も料理も出来ちゃう優れものなんだ。小さくて可愛いのに持つてると凄く便利なんだよね」

燐は蛍にもわかりやすいプレゼンをする。

実際燐はこの手の説明を蛍にするのが好きだった。

蛍に色々なことを話して、それを含めて自分に興味を持つてもらおう、そんな蛍の様子をみるのがとても好きだった。

そのあまりに丁寧な解説は持ち主であるリンも目を丸くしていた。

(燐ちゃんトレッキングをしてるって言ってたけど、こういうのも当然詳しいのか)

燐の多芸さに羨望の眼差しを向けるリンだったが、同時に燐と一緒にキャンプをしてみたい気持ちもあった。

斎藤と野クルメンバーも含めた周りの連中はそこまでアウトドアに詳しくなく、リンが色々教えることが多かった、引率の先生でさえそうであったのだから。

それはそれで教える楽しさはあるのだが、不満がないわけでもなかった。

たまには同知識の“分かってる”誰かと一緒にキャンプを満喫したい、そうは思っても自分以上にアウトドアを知っている身近な人間は祖父以外はいなかった。

その祖父とも最近はめつきり会うことすら減って、いつのまにかソロキャンプばかりになっていったのだが。

でも燐——込谷燐とならばお互いに教えたり教えられたりの充実したキャンプが出来そうな気がしていた。

燐は自分と違ってアウトドア趣味を隠そうとはせず、普段の学生生活でも制服の下に長袖のアンダーウェアを身に着けて、トレッキングシューズとバックパック姿で登校しているらしい、本人が言うのだから間違いはないだろう。

初めて燐の姿を見た時はちよつと変わってる子と思つてはいたけど、よくよくみると良い感じのコンストラクトになっていて自然な感じがしてくる。

そんな燐とならトレッキングついでにキャンプなんてのも楽しく出来そうで、そのこ

とを想像するとちよつと胸が高鳴つてきた。

「……ちゃん、リンちゃん、どうしたの？ 火起こしするんじゃないの？」

燐が少し心配そうに顔を覗き込んだ。

「あ、ごめん。ちよつとぼーつとしてたみたい……火、つけなきゃね」

リンの意識はこの異常な世界から離れて、その後の楽しい可能性に向いていた。

すでにこの世界から意識だけは抜け出せているのかもしれない、それぐらいここでの事はもう考えたくはなかった。

(その為にも今出来ることやっておかないとね)

リンは誰にも聞こえないような小声でぼそつと呟くと、削りに使っていたナイフの柄の部分を取り外す。

すると柄の先には細い金属製の棒が取り付けており、それを片手に持つてナイフの背に当てると勢いを付けて何度か擦った。

耳を刺すような音が響くと同時に、ぱつと閃光のような火花が飛び散つて、木製の花に幾重にも降り注ぐ。

それは線香花火のよりも色濃く、熱い、光のシャワーだった。

その雨を受けて、木の花に炎の花が咲き誇った。

火が木全体に回らないうちに、茎の部分を持つてすばやくメタル製の焚き火台のなかに次々と投げ入れる。

箱の中で広がって暴れる炎に構う事なく、残った木くずも居れて、さらに火のついてない太い薪を無造作に突っ込んだ。

箱からははみ出てはいたが、火の勢いはより強くなつていく。

それでも金属製のプレートのおかげで異様に燃え広がることはなかった。

緑のトンネルの中で焚き火の細い煙がまっすぐに立ち昇る、それは無風状態を表していた。

四人は何も言わず、緑の天井へと延びていく煙を見上げていた。

出口を求めて、広がり続けると思われた煙だが、木々で出来たカーテンの隙間を見つけたのかそこから外へと吸い込まれるように消えていった。

自分達もこのように細い隙間の中から脱出できないだろうか？

この煙が出口を教えてくれればいいのに、なでしこはそう願ったが、煙は上に伸びるばかりでどの方角にも揺らいでくれなかった。

緑のトンネルの中は薄く発光してるみたいな淡い明るさがあったのだが、焚き火の赤い炎が立ち昇った途端、周囲が暗くなつたかのように感じられていた。

理由は分からないが、今が夜であることをはつきりと意識できるようになった。少女達は焚き火の前に集まって、雨に濡れた体を焚き火で乾かすことにする。

周りには自分達のほかに誰もいるはずがないのに何故か遠慮しあつて、誰も服を脱がなかった。

(やっぱりさつきのこと、みんな気にしてるんじゃない……)

燐は今更ながら恥ずかしさが込み上げてきていた。

だが表情には出さず、皆と同じように焚き火を囲んで黙って座り込むことにした。

顔が少し火照ってきているのは焚き火に照らされただけ、だと思う。

なでしことリンはそれぞれキャンプ用の椅子を持ってきていたのだが、あえて使わずに、燐と螢がしてるように線路に小さいシートを敷いてそこに腰かけていた。

そういえばこうやって火を囲むのも久しぶりなような気がしていた。

小平口町のキャンプ場では火起こしする前にあのゾンビが現れたのだからそれどころじゃなかったし、逃げ回ってる最中に雨は降ってくるので到底無理だったな。

それにしても……火をみるとなんでこんなに落ち着くんだろう。

今までの出来事が嘘のようにリラックスできている、初夏なのにこの炎の温かさが湿った空気と混ざり合つてて丁度よかつた。

「そっさいえぼさ」

それまで黙っていたなでしこが口を開く。

炎がその華奢な体躯の影を線路へと伸ばしていた。

「ここって廃線の線路、なんだよね……列車とか、来るはずはないよね？」

自分でも疑り深いなあと思ひながらもなでしこはその疑問を口にしていった。

何となく言ってみただけで深い考えなどなかった。

線路にそつと手を這わせてみても、長い間使われてないことが見て取れるほどに朽ちていたのでみんなに笑われちゃうかな、なでしこはその程度しか考えてなかったのだ。

でもその何気ない質問は燐と蛍に動揺を与えていた。

言ってもいいものかどうか顔を見合わせて迷いを見せる二人。

それを見てやれやれと言った感じでリンが代わりに答える。

「あの子、なでしこ。落ち着いて聞いてほしいんだ」

「うん？」

やや勿体ぶった言い方をするリンになでしこが不思議そうな声をあげる。

「電車が通過した後はどうみてもなさそうなのに、何を言おうとしているのだろうか？」

「どうやら前に一度だけ電車が通過したことがあるんだって。その時はたまたま木の根っこの隙間に逃げる事が出来たみたいなんだ」

そうだよな、とリンが二人に小声で尋ねると、蛍と燐は深く頷いた。

その真剣な眼差しは、みんなが嘘を言っていないことの証明となっていた。だからなでしこは激しく動揺してしまふ。

「ふええええ！　じゃ、じゃあここでのんびりしたら轢かれちゃうよお！　は、早く先へ行こうよお?!」

そのやり取りをみたなでしこは居ても立っても居られず、思わず立ち上がった。

ここだって安全じゃないのだったらぐずぐずしちやいられないはず、それなのに動いてくれない三人がもどかしかった。

「あ、待ってなでしこちゃん。多分……もう大丈夫だと思うから」

「な、どうして蛍ちゃん?!」

なでしこが何か行動を起こす前に、蛍がやんわりとした口調で引き留める。

パニックでどうにかなりそうだなでしこだったが、焚き火越しに蛍の落ち着いた顔を見るとそれ以上何も言えず立ち尽していた。

「あの時、逃げるのに夢中でわたしはハッキリと見えなかったんだけど、多分あの列車、白い人影が乗っていたんだと思う」

「う、うん」

蛍の優しい語りに誘われるように思わず相づちを返すなでしこ、それはその真意が早く知りたいゆえの焦りがあった。

「この世界はね、圧縮してるんだって、正直意味は良く分かってないの。でもね、多分だけど色んなものが一ヶ所に集中していくって意味だと思ってるの。列車を使うってことは遠くから来てるってことでしょ？　世界が縮んでいったら単純に距離が縮まるからそんなのを使わなくても行けるってことじゃないかなって……だから、二度目はない気がするんだ」

蛍は自分の想いを一つづつ考えながら口にしていく。

自分の頭の中であれこれ考えるのは好きなのだが、それを言葉として紡ぐのは正直苦手だった。

所謂口下手なのかもしれないが、それでも伝えておきたかったのだ、なるべく自分の言葉で丁寧に。

「それにね、なでしこちゃん。いちおう対策はあるんだよ」

蛍の説明を聞いていた燐は話が終わるタイミングで口を出す。

「対策？」

「うんうん。この場所から更に前の、なでしこちゃんが寝てたところよりも少し先に戻ったところにねロープを結んでおいたの、鈴も一緒に着けてね。もし列車が通過したら鈴がなって教えてくれるってわけ。これはねリンちゃんのアイデアなんだ。鈴もりんちゃんが貸してくれたんだよ」



燐は人差し指と親指を立てて、いいね！ ポーズを取った。

あの時の燐はなでしこを様子を見に行っただけでなく、その場所より離れた所にロブをかけて戻ってきた時になでしこの声を聴いたのだ。

「でも良いの？ あの鈴大事なものだったんじゃない？」

螢が少し申し訳なさそうに声を掛ける。

「ああ、平気だよ。よくお土産屋さんで売っているクマ避けのやつだしね」

リンが渡した鈴は北海道あたりの定番土産の一つで、クマを避ける為に鳴らすという代物だった、だが効能の程は良く分かってはいない。

（そんなもの鳴らす暇があるなら逃げたほうが良い気がする）

そう思っただけだったが、なぜか今回のキャンプには持つてきていた。

しかも相手はクマよりも質の悪いゾンビなのだから尚の事意味はなかった。

「なあんだ、じゃあ安心だねえ」

なでしこは素直に受け取って再び焚き火の前に座りこんだ。

……何かがおかしい気がするよ……。

（あー！ ということはもしあの時列車が来てたら……）

なでしこはそのプロセスを理解しようと頭を巡らせる。

列車が仮に来ちゃった場合、鈴が鳴りその音でみんなは逃げる準備をするけど、私は

その音で目を覚ますだけ。

私が必死に逃げてる間にみんなは更に安全なところまで逃げられる……私だけ逃げ遅れて潰れちゃうかも……。

「ん——」

なでしこは立ち上る煙を見ながらある結論を導きだす。

再び立ち上がるなでしこ、そして……。

「ひ、酷いよお！ 私、カナブンじゃないもん！」

ぱちぱちと焚き木が燃える音が香ばしく響いていた。

そんな莊嚴とした中でなでしこの言っている意味が分かるものなど誰一人いなかったのだ。

だが、あまりにも可哀そうなのでリンがツツコミをいれる、それが出来るのはリン一人だけだった。

「それを言うならカナリアだろう」

「あつ！ そ、そうとも言うね。酷いよリンちゃん私をカナリア代わりにするなんて！

ピーピー！」

過ちを指摘されて手を振って慌てるなでしこ、それでもカナリアの真似をして抗議をしていた。

(カナリアってそんな鳴き声だったか?)

リンはこれ以上なでしこに突っ込む気力はなかった。

「ごめんね。もつと早く起こしてあげればよかったかもね」

燐が代わりに謝罪する。

横を通るときにすこし迷ったのだが、無下に起こすのもかわいそうと思つて放置していたのは確かだった。

「燐ちゃん1号は悪くないよっ！ 悪いのはリンちゃん2号だよっ！ 2号は悪に魂を売ったブラック2号になったんだねい。さすがの私でも気づかなかつたよっ！」

リンを指差しながら、再びあの設定を持ち出してくるなでしこ。

なでしこ設定だとそろそろ中盤あたりになるのだろうか？

「またそれか、そろそろ必殺技を考えたほうがいいかもな」

リンは何やら怪しい手の動きを見せてくる、この茶番劇に割と乗り気のようにだ。それを見たなでしこはむむつとわざとらしい反応をみせる。

「あ、あれはまさかダークネス……いや、2号にそんな芸当が出来るわけがない！ だつたらどうして……ま、まさか邪フモトカイザ神の力を開放したのかっ！ あの力は危険だ闇のキャンブに飲み込まれるぞっ！」

焚き火を囲んでの妄想ヒーローショーが始まってしまった。

乾いた笑いしか出せない燐に、いつの間にか隣に寄ってきていた蛍がそつと耳打ちをする。

「ねえ、燐。いつまで続くのかなあこれ」

「うん……いつまでだろうね……」

焚き火の温かさが招いたことなのか、リンとなでしこは童心に帰ったように楽しんでいた。

その様子に肩を寄せ合ってその様子を微笑みながら見守る燐と蛍。

それぞれ対照的な楽しみ方だった。

星も通さない漆黒の夜の世界で、焚き火の炎だけが生命を感じさせた。

この炎は永遠のものではない、いつかはやがて尽きるだろう。

それは少女達の行く末とよく似ていた。

強く、激しく、そして儂くも美しい少女達。

でも輝きは最後まで失いたくない、その先に何かがある気がするから。

……

……

...

「ねえ隣。さつきの続きしよつか？」  
「えっ?!」

## hungry?

(みんな仲良しさんでよかった、よかった……それにいつの間にかリンちゃんもちよつとコミュ障なぼっち少女じゃなくなってるし! ……ママ、寂しいけど嬉しいよっ!)  
焚き火を挟んで明と暗が分かれていた。

なでしこ、いや、ママしこは遠い目をして成長したと思われるリンを見守る、その瞳は母性の様な感情で満ちあふれていた。

「やっぱり私の友はキミだけだよっ!」

なでしこはすっかり元のふわっと感になった富士山マスコットをきつく抱きしめる。あまりに力を込めて抱きしめるので、再び平たい富士山になりそうだった。

「あ、そうだ。少し火の勢いが落ちてきたら、薪を足さないよ。なでしこー」

リンが急に思いついたように、ぬいぐるみを抱きしめるなでしこに声を掛ける。

「な、なにっ?!」り、リンちゃん!!」

すっかりいじけていたのだが、リンに声を掛けられるとぱつと顔を明るくした。

そうは言ってもやっぱり一人は寂しいんだよっ。

「それを火種にするからこっちに投げてくれないか？」

リンの指がなでしこの胸……にある富士山のぬいぐるみに注がれていた。

「うん、いいよ〜。それじゃあ投げるねえ〜……」

富士山のマススコットを片手に、上から放り投げる動作をみせたなでしこだったが……。

「あつ！ だつ、だだだ、ダメダメダメっ!! これは私の心の友なんだからぜつたいにダメだもん!!」

なでしこはリンから隠すように富士山ぬいぐるみを更に抱きしめた。

そのせいで更に押しつぶされて、火口の部分から綿が漏れそうになっていた。

「全くもう、油断も隙もあつたもんじゃないよ、ね〜? 富士山は悪い2号から絶対に守ってあげるからねん」

物言わぬ富士山ぬいぐるみに話しかけるなでしこ。

すっかりぬいぐるみだけが友達となっているメルヘン少女のようだった。

「やれやれ、すっかり嫌われたな」

リンが肩をすくめておどけた素振りを見せる。

そんな二人のやり取りが可笑しくて蛭も憐もくすくすと笑いだしてしまった。

「あ、そういうえば！」

突然思い出したようになでしこが立ち上がる。

さつきから立ったり座ったりと忙しいメルヘン少女だった。

「どうしたのなでしこちゃん？」

さつきから挙動不審な、なでしこを氣遣つて蛭が声を掛ける。

リンはほっとけば良いのにと、瞳を向けていたが、口にはしなかった。

「——お腹すいたよねえ……」

その言葉には三人共絶句するしかなかった……。

富士山のマスコットも空腹を訴えるかのように、なでしこの胸の中でまた薄い煎餅のようになっている。

空腹ではメルヘンも何もあつたものではないようだ。



しゅぼつ、とシングルバーナーの青白い火が小さな銀のテーブルの上に灯る。

その上に備え付けのクツカーを乗せて、燐から受け取ったペットボトルの水をそこにすべて注いでいった。

後はお湯が沸くのをじっと待つだけだった。

「リンちゃんは色んな装備持つてるよね。ちゃんとバーナーも持つてきてたんだ。おかげで助かつちやつたよ」

感心したように燐がシングルバーナーと付属のクツカーを見つめていた。

小さいながらも風の影響を受けづらいそれは、登山家も愛用する程の一品であった。

青いドアの家でオオモト様が熱いお茶を入れてくれたが、あの家は電気だけでなくてガスも引いているのか、或いは家具はすべてオール電化なのかそれすらも分からない。ただ今はこれのおかげでお湯が沸かせそうだった。

「ソロだと重宝するんだよねこれ……それに助かったのはこつちだよ。アイツ、なでしこ燃費悪くてすぐお腹空くからなあ。腹に何匹猛獣飼ってるんだか……」

リンがちらりと焚き火の方を見ると、なでしこが両手にカップ麺を持って、うんうんと唸っていた。

「どつちにしようかなあ……カレーは大好きんだけどシーフードも捨てがたいんだよねえ……？」

どちらを食べるか悩んでいるらしく、二つを見比べて真剣に悩んでいるようだ。

その様子に苦笑いの蛍、こんなことで真剣に悩めるなでしこがなんか羨ましかった。

「うゝ、私じゃ決めがたいから蛍ちゃんが決めてっ！ それに元々は蛍ちゃん家のものなんだからっ!!」

なでしこは両手に持ったカップ麺を蛍の前にずいっと差し出した。

更に困った顔をしてしまう蛍。

蛍の家のものと言われても実際にそれを持ってきたのは燐だったのだから。

燐はいざという時の為に菓子パンと共に、荒らされた台所で転がっていた未開封のカップ麺を二つ、バックに仕舞っておいたのだ。

ただ、食べるのにはお湯が居るし、それにそこまで食欲が湧かなかったことが今まで残っていた要因だった。

だからそのままカバンのなかで寝かせて置いていたのだけど。

けれど、こんな形で日の目を見るとは燐は思わなかった。

人数が増えるということは、それだけ食料が必要になることでもあったのだ。

「わたしはどっちでも良いから、なでしこちゃんが食べたい味にしていよ」

実際のところ蛍は甘党であったので、必然的に辛いのは苦手だった。

けれど思い悩むほどに空腹を訴えるなでしこを見ると、何となく言い出せなくなっ  
てしまった。

それに、このカップ麺のカレー味はそれほど辛くないので、スープさえ飲まなければ  
なんとかなりそうだった。

「……」

燐には蛍が遠慮していることは明白だったが、あえて何も言わず蛍の考えを尊重する  
ことにした。

それは蛍の無償の優しさを誰よりも知っていたからだだった。

一方、クツカーの前でお湯が沸くのを見守っているリンはある妙案を思いついてい  
た。

前に動画サイトで見た、カレーとシーフードのカップ麺を半分づつ混ぜて食べると  
違った味になって美味しい、というちよつと考えると眉唾ものの動画を思い出して  
いた。

これならば取り合うことなく二つとも同じ味になるはずである。

いつか実践したいと思っていたのだが……今がその時なのかもしれない……。

——だが、奇怪な目で見られるのは間違いないだろう。

その証拠の動画もスマホが使えない今見せることは出来ないし、それになにより……。

(失敗したときが恐ろしいことになるな。一回も試したことないし……)

食べ物が高貴なときにやるもんじゃないネタだなこれ。

リンはそう思い直し、この件をみんなに提案するのを止めた。

我ながら懸命な判断だったと思う……ちよつと残念だが。

「うーん、じゃあシーフード! と見せかけてやっぱりカレーだあ!!」

シーフード味のカップ麺を前に出したかと思うと、即引つ込めて右手に持ったカレー味を高らかに天井にかざした。

カップ麺の味を選ぶだけでここまで盛り上がる人間はそうそういないだろう。

(やっぱりカレーか。まあ、そんな気がしてたけどさ)

先ほどまでの自分の提案はさておいて、リンは少し呆れたような目で見つめていた。

でも、なでしこの決定には蛭は内心ほつとしていた。

確かにカレーを食べられないこともないがスープまで飲むのは些か大変だし、残したあげくに捨ててしまうには抵抗があつたから。

シーフード味なら最後まで食べることが出来そうだった。

(でも、もしかしたら、なでしこちゃん、気を遣つてくれたのかな?)

蛭はカップ麺を手に踊り出しているなでしこを見る。

こんな風を毎日を楽しむ過ごせたら悩みなんて何もないのかもね、そう思いながら見つめていた。

ふと目が合うと、とてとてとこちらに近づいてきたなでしこは小声で話してきた。

「はい、蛭ちゃんと隣ちゃんの分。シーフードこつちの方が好みなんだよね? しつかり食べて元気出して、みんなでここから脱出しようねっ」

なでしこはウインクを決めると、そのままリンの元へ走つていった、そろそろお湯が沸いたに違いない。

(そっか、なでしこちゃん。元気がないわたしたちを気遣つてくれたんだね)

蛭はなでしこの細やかな優しさに心の中で感謝の意を唱えていた。

「いただきます!」

小さなテーブルに二つのカップ麺が置かれていた。

テーブルを挟んで二人づつ座り、その前にカップ麺が一つ置かれている。

二人分のフォークこそはあったが、取り皿も含めこれ以上は用意しなかった。

洗うのが面倒だったし、何より飲料水は残り一つだけだったのでこんなことで使いたくはない、それにいざ逃げる時に備えて余計な物は出したくなかった。

したがって一つのカップ麺を二人で交互に食べ合うことにしたのだ。

「はい、燐。先に食べてもいいよ。わたしは残ったのを少し貰えばいいから」

蛭が燐の前にカップ麺を置いて、先に食べることを勧めてきた。

シーフードラーメン特有の甘じよっぱい臭いが立ち込めてきて食欲をそそってくる。

その甘い臭いを振り切って燐は蛭にカップ麺をそのまま返した。

「ん、蛭ちゃんが先に食べてよく。わたしこそ残り物で大丈夫だから、ね？」

以前の燐なら蛭に遠慮せずに食べていたかもしれない。

それは遠慮するとかえって蛭に余計な気を遣わせてしまうからだった。

でも今は少し違っていた。

蛭をとても大切に感じる、だからこそ蛭に何でもあげたくなかった。

それこそこの身さえもすべて捧げるほどに。

そんな燐の想いを感じ取ったのか、少し真剣な眼差しで蛭が見つめてきた。

でもすぐにニコツと笑うと、燐に直接カップ麺を手渡してくる。

「燐、遠慮しないで食べて。そしてまた元気な笑顔を見せて欲しいな。わたしはそれだけで充分こころ満たされるから」

燐の気持ちは痛いほどに分かっていた。

でも蛍にはどうしようもない、それは燐自身が決めることだから。

だからせめて燐には元気になって欲しかった、そうすればきっと燐なら大丈夫、そう蛍は信じていた。

「もー蛍ちゃんそんな健気なこと言わないでよ。わたしとてもじゃないけど先に食べられないよ」

そのまま蛍にお返しする燐。

蛍にそんなことを言われたら食べるどころじゃない。

「燐が食べて、ね」

再び燐の手に持たせる蛍。

「蛍ちゃんが先に食べてよ」

燐も負けじと蛍に返した。

二人の間でカップ麺が行ったり来たりする。

その光景はなんとも奇妙なものであったが、ずっと見ていたいほどに微笑ましいもの

でもあった。

……麺がのびてしまうことを考慮しなければだが。

「……あの二人、なにしてるんだろうね」  
蛭ちゃんと燐ちゃん

そんな二人のやり取りをリンは微笑みながらも鑑賞していた。

仲のいい二人だとは思っているけど、何もこんなことでも発揮しなくてもねえ。

呆れるやら羨ましいやらで複雑な気分だった。

「このままだと麺がのび切っちゃうよねえ？ ん、なでしこ……？」

さつきからやけになでしこが大人しい、どうかしたのかとリンは隣で座っているはず

のなでしこに目をやると……。

もっ、もっ、もっ。

なでしこが一心不乱にカップ麺に嚙り付いていた。

麺を口いっぱい頬張って、これでもかと言わんばかりにスープを啜っている。

リンなどまるで眼中にないぐらいに、カップ麺に食らいついていた。

「ちよ、おまつ！ なに一人で食べまくってるんだ！ ちゃんと私の分は残しておけと

あれ程……」

リンはなでしこの手から強引にカップ麺を引きはがした。



そのスピードは、なでしこも目を丸くするほどの早業であった。

だが、一番驚いているのはカップ麺の中身を目にしたリンのほうだった……。

「ほ、殆ど食い終わってやがる……」

長細いカップ麺の容器の中には、全体の三分の一にも満たない黄色いスープと幾ばくかの麺の残りかすが残っているだけであつた……。

「ねえ、リンちゃん。食べた後でいいからちよつとだけ残り汁もちようだい。最後にあれを飲まないといふと食べたって気がしないんだよねい!!」

ここまで食べたのにまだ要求をしてくるのか……。

これで残りのスープまであげたら、空の容器しか残らないじゃないか。

外でごはんを食べると三倍美味しくなるとの見解があるようだが、これはそれのせいなのだろうか？ それともゾンビがいるという危機的状况からの異様な食欲の成せる業なのだろうか？

カップ麺を握つたまま、目の前で起きたことに呆然自失となるリン。

それを見たなでしこはこれはチャンスとばかりにリンの手から再びカップ麺を奪つて両手で持つと、そのままごくごくと一気にすべてを飲み干してしまつていた。

「ふはく、この一杯がたまらんですよ〜!」

酒好きの顧問の先生のようなことをのたまうなでしこ。

結局一滴も残すことなくすべて自分の胃袋の中へと収めていた。

リンには再び何が起こったのか理解不能だった。

目の前の惨状を脳が理解してはくれなかったのだ。

だがなでしこは悪びれることなく言つてのけた。

「もう、リンちゃん要らないなら最初からそう言つてくれれば良いのに。でもご馳走様でした。美味しかったよん！」

要らないなんて、そんなこと一言もいったことないのに……。

リンの中で怨嗟と混乱が巻き起り、もはや制御不能に陥つていた。

「なでしこ吐け、吐くんぞ！ 私の分のカレー麺を返せー!!」

あまり感情を露わにしないリンが珍しく憤つていた。

よほど食べたかったのだろう、目を真っ赤にして抗議していた。

「ぐえー、リンちゃんやめれえ！ カレー麺が鼻からでりゅうよお！」

なでしこは肩をガタガタを揺さぶられて、目を丸くしている。

このままでリンの言う通り、色々な場所から吐きだしかねなかった。

そんな二人の食い物にまつわる諍いがすぐ傍で起きていたのだが……。

リンとまでしこ  
二人のやり取りを尻目に蛍と燐は向かい合って話をしている。

すぐ隣の喧噪が耳に届いていないかのように二人だけの世界を作っていた。

「はい、燐。あくん」

「えー、本当にやるのお?」

蛍の手にはフォークが握られており、燐に食べさせるつもりのようなのだ。

「もう、さつきジャンケンで決めたじゃない。勝った燐から先に食べる約束でしょ?」

「だからって、自分で食べられるよお……」

蛍は事前の取り決めが合ったことを再確認する。

だが、燐は無性に恥ずかしくなり拒否している。

「だめだよ燐。ほら口を開けて……はい、あくん」

「もう蛍ちゃんって結構強引だよねえ……あ、あくん?」

少し強い口調の蛍に尻込みしつつも、燐は素直に口を開けた。

口の中にフォークに巻かれたままのラーメンの麺が入れられて、それをもぐもぐと食べる。

恥ずかしさが勝って正直味は分からなかった。

「どう? 美味しい?」

「う、うん。美味しいよっ」

曖昧な返事をして燐はそれに答えた。

実際のところ麵はすでにのびきってっており、美味しいとか以前の問題なのだが、燐のその気持ちだけはとても嬉しかった。

お腹はそれほど満足しなかったが、心がとても満たされた気はした。

「本当？　なら良かった。じゃあほら、もう一回。あ〜ん」

「え〜、もういいよお。今度は蛭ちゃんにしてあげるよ」

こんなこと何度もやられたら気がどうにかなりそうなので、今度は蛭にしてあげようと促した。

それにこの麵を何度も食べるのは胃によろしくない気がしていたし。

「じゃあ、もう一回だけ、それで交代しよ？」

「う、うん。もう一回だけだからね」

蛭は燐に食べさせる行為がよほど嬉しいのか、再度それを勧めてきた。

蛭としてはなんとしても燐に元気になってほしいという強い願いがあるのだが、燐にはその想いだけで充分であった。

「はい燐。あ〜んして」

「うっ……あ、あ〜ん」

恥ずかしいので目を瞑って麵を口で再び受け止める。

味はともかくすでにのびているので、あまり食感は良くないが今更だった。

それでも外ごはん効果があるのか、割と美味しい気もするから不思議である。

「ありがとう蛍ちゃん。とつても美味しかったよ」

燐はなぜか顔を赤くして微笑んだ。

それは外ごはんとは関係なく、蛍の献身な気持ち嬉しかったから。

(蛍ちゃんを食べてるみたい……とか言ったら怒られるね、きつと)

「そう、それなら良かった」

燐の気持ちのこもった感想に蛍はニツコリと微笑んだ。

だって燐の顔に嘘は微塵もなかったから、それが一番嬉しかったんだ。

「じゃあ今度は蛍ちゃんの番だね。あ……」

燐は蛍からフォークとカップ麺を受け取って中身を確認する。

すでにスープは全て吸っており、中には膨張した麺しか入っていなかったのだから。

「うん？ どうしたの燐？」

「あ、ううん。なんでもないよ、それより蛍ちゃん。はい、あくん」

「うん、あくん」

燐もフォークに麺を絡めて蛍の口へと近づける。

正直に蛭にこんなものを食べさせていいのか迷ったが、いちおう自分も食べたので多分大丈夫だろう。

燐は覚悟を決めて蛭の可憐な口の中にフォークを差し入れた。

それをもぐもぐと疑うことなく食べてくれる蛭、なんだかとても愛おしくなってくる。

蛭もこういう感情を自分にもっていたのだろうか。

胸がきゅんと鳴った気がした。

(なんか餌付けしてるみたい……)

「だ、大丈夫蛭ちゃん。美味しくないでしょ?」

燐は思わず口を滑らせてしまっていた。

それは自身が思っていたことであつたので、つい本音を零してしまっていたのだ。

だが、蛭は首を振って否定すると燐に笑顔で答える。

「ううん。すごく美味しかったよ。ありがとう燐」

ただ食べさせてあげただけなのにこんなに素敵な笑顔で言われたら、誰だつて嬉しくなつてしまふだろう。

それぐらいの笑顔で蛭は答えてくれたのだ。

すでにのびてしよっぱいはずの麺なのに。

「ど、どうする? まだ食べる?」

燐はいちおう蛍に聞いてみた。

このカツプ麺をこれ以上食べさせることに一抹の罪悪感があつたからだつた。

「うん、お願い」

蛍は短く答えると、瞼を閉じて自ら口を開けていた。

蛍の無防備な口の中が全て見えて、なんだかいけないものを見ているような気がしてくる。

「じゃ、じゃあいくよ……」

燐はなぜかとても緊張していた。

手が小刻みに震えて、フォークが歯に当たらないか心配になってしまふほどに。

口に入ったことを察知したのか、蛍ははぐはぐとそれこそ上品に麺を頬張ってくれていた。

こういうところにこそお嬢様っぷりというものは出るものであると、燐はいたく感心していた。

「うふふ、ご馳走様でした。わたし燐が食べさせてくれたら、なんでも食べられそうかも? 今だったら生クリームもいけるかもね」

口をハンカチで丁寧に拭いた後、蛍は眩しい笑顔を向けていた。

その笑顔は燐だけにみせる特別なものであったから、すごく嬉しかった。

「もう、蛍ちゃんてば調子に乗り過ぎ。でもちゃんと食べてもらえてよかったよ」

燐としては蛍にちゃんと食べてもらえるだけで良かったのだ。

蛍のほうが食が細いのは承知してたが、この常闇の世界になつてからは更に食べなくなっていたので密かに心配していたのだった。

「燐ってば心配しすぎだよ。さ、今度はまた燐が食べる番だからね」

「流石にもういいんじゃない？ これだけで十分楽しんだんだし」

蛍と食べさせっこしあうのは正直楽しかったが、そのせいで麺はのびてスープもなくなつてしまったわけで、燐としては遊びすぎな気がしていた。

「最後まで食べないとダメだよ。残してもゴミになっちゃうわけだしね」

「ま、まあそれはそうだけどお……」

蛍は基本自分が食べられる範囲でしか食事を採らないので、食べ残すなんてもつての外だった。

それはたとえ相手が燐であつても妥協しないよう、じりじりと詰め寄ってくる。

「わ、分かったからそんなに近づかなくてもいいよう、顔が近いよ蛍ちゃん」



「うふふ、燐が嫌がるなら口移しで食べさせてあげようかと思って……」

「ぎゃー！ それだけはダメー！」

「えー。そんなに拒絶されるなんてなんかショックだなー。燐はわたしのこと嫌いなのかなあ……」

寂しそうな口調で蛍がわざとらしくいじけた仕草を見せる。

燐もそれはわざとだと思っているのだが、それでも構わずにはいれなかった。

それだけ蛍の物寂しい様子はとても色っぽく映ったからだった。

「ごめんね蛍ちゃん、そうじゃないの。でもでもそんなことになったらすごく恥ずかしいし、それに……」

「それに？」

小首を傾げる蛍。

その様子もまた可愛らしいものだった。

「な、なんでもないっ。うー、じゃあ、普通に食べるから変な事はしないでね」

「燐、それって振りなの？」

「振りじゃないからっ！」

このまま話続けるのがとても恥ずかしかつたから、燐は頼まれてもいないのに自ら瞼を閉じて三度口を開けた。

変な事をしないでと蛍に伝えたが、意識してしまっているのか心臓がドキドキして、息が荒くなつていくのは、意識しないことを意識しているからだ。

期待してる、わけじゃないはずだけど自然と物欲しそうな口の形になっていた。

期待感の混ざった仕草を見た蛍は燐に覺られないように、こつそりと微笑んだ。

(燐つてば、やっぱり期待してるんだね。だったら、いい、よね……?)

テーブルの上に音を立てないようにカップ麺を置いた。

こと、つと静かな音がするが燐は気づいていないらしい。

蛍は膝の上にちよこんと乗せられている燐の両手に手を重ねて、顔をより近づけた。

その違和感に燐はすべから須く動揺してしまう。

(え? 蛍ちゃん手を握つてきたつてことは……何ももつてないの?! 嘘?! まさか……)

燐の疑問が確信に変わる前に、蛍の唇が燐に重なられそうになつた瞬間――。

「助けて〜! リンちゃんに襲われちゃうよお!!」

泣きわめきながら、なでしこが二人に駆け寄つてきた。

その突然の出来事に蛍と燐は時が止まったかのように、呆然としてしまう。

実に後、数センチのところであった。

燐の柔らかかそうな唇が当たったことを想像して、蛭は思わず口を抑えていた。名残惜しいかのように唇を色っぽくなぞっている。

その仕草で燐は蛭が何をしようとしていたのかを瞬時に察知した。

「蛭ちゃん。も、もしかして……」

「だって、燐が物欲しそうにしてるんだもん。期待に応えないとね」

蛭は一刻も悪びれることなく、夢うつつに答える。

心ここにあらずと言った感じで、どこか“ふあふあ”としているようだ。

「だからって……」

燐は照れ隠しの為か蛭に詰め寄ろうしたのだが。

「助けて1号〜！ 2号が今まで見たことのない形相でこっちにくるよ〜！」

すっかり忘れていたが、半泣きになったなでしこが助けを求めてきていたのだった。

もうそれどころじゃやないのに、燐はため息をついてなでしこの指差す方向を見る。

そこには……。

——ひとりの修羅がいた。

「カレー麺……私の大事なカレー麺を返すのだ！ なでしこ！！」

普段どちらかというところ、カーフェイスの志摩リンがまさに鬼の様な形相でこちらに近づいてきていた。

手にはぐにやりと潰された、富士山のマスコットを手にしている。

その富士山の顔は泣いているように見えたが、なでしこは助けようともせずただ憐れにしがみついて怯えていた。

「こんな怖いリンちゃん今まで見たことないよっ！」

お腹に手を回したなでしこが更にぎゅつとしがみついてきて、先ほど食べたものが出そうになった。

だが、そのことであることを思いついた憐は、テーブルの上のすつかりのびきったシーフードのカップ麺を手にとって、必死の形相のリンに訴えかける。

「リンちゃん落ち着いて、ほら！ わたしたちのカップ麺をあげるから、少しのびちやつてるけどこれで我慢して、ね？」

余計なことと言ったかもしれないが、嘘を吐いたら余計に怒りそうなので、今の麺の状態を憐は正直に話した。

「嫌や！ カレーが良いんや！ あのカレー麺が無性に食べたかったんや！ うええん！」

普段言わないであろう方言で、リンの絶叫が緑のトンネル内に幾重にも木霊した。

それは魂の叫びであり、カレー麺への愛の証でもあった。

「あつ、リンちゃんが泣いちゃったよお！　ぐすつ、リンちゃん可哀想だよ！　私も泣きたくなってきちやうよおく!!」

なでしこはリンに同情したのか目を赤くして鼻を吸った、この騒動の張本人のハズなのに……。

泣きたくなるのはこつちの方だよ、胸の内で呟く燐。

小さくため息をついて線路上で泣き崩れるリンの背中を擦ってあげた。

「よしよし、大丈夫、大丈夫。お腹、空いたんだよね。シーフードだって案外いけるんだよ。ほら、口あけて、ね」

先ほどまで蛸としていた行<sup>食べさせっし</sup>為をリンにもしてみることにした。

その問いに戸惑いをみせるリンだったが燐に絆されたことで、たどたどしくも口を開けた。

あまりに素直だったのでちよつと拍子抜けしたが、同じようにフオークに巻き付けた麺を口に運んでみる。

すると既のびきった麺だったが、むぐむぐと可愛らしく頬張ってくれた。

「ごめんね、リンちゃん！　どう、美味しい?」

なでしこも近くまできてリンに謝りつつも、その味を聞いてみる。リンはそれに答えることはなかったが、こくこくと頷いてみせた。

美味しくはないだろうな、と燐は内心思っではいるが、残っているのはもうこれだけなのでどうしようもない。

だが、外ごはん効果だろうか、予想に反してちゃんと食べてくれたので、試しにもう一度聞いてみる。

「まだちよつと残ってるけど、どう、まだ食べられる？」

「……………うん。食べる……………」

先ほどと同じ様にフオークで巻き付けてリンの口元に持つていく。

少し照れた表情を見せるが、それでも素直に食べてくれた。

……………結局、残りはリンが全て平らげていた。

空になった容器を見て燐が複雑な笑みを浮かべていると、照れたような声色でリンが話しかけてくる。

「ごめん……………私、子供っぽかったね。たかがカップ麺なのに……………ホント、自分が恥ずかしいよ」

リンは照れたように俯きながら謝罪をする。

それは小さい子が叱られてるかの様だった、それを見た燐はリンに優しく微笑み返す。

「お腹がすいたら誰だつてそうなるよ。それにわたしだつてさつきまで一人でいじけて、まるで子供みたいだつた」

今やつと分かった。

こうしてみんなで行動してる時点でもう友達なんだ。

今さらだけどそれが理解出来た。

それぞれは個の存在だけど、なんでも一人つてわけでもないんだね。

急に肩が軽くなって気持ちも楽になった気がした。

一時、ほんの一時だけど幸せを感じた、気のせいかもしれないけど、それでもよかつたんだ。

「よかつたねリンちゃん。一時はどうなることかと思つたよ」

鼻を赤くして瞳を潤ませたまま、なでしこが安心したようにため息をもらしていた。

(誰のせいだと思つているんだらうか?)

燐とリンは偶然にも心の声がぴたりと一致していた。

「さ、食事も採つたしそろそろ片づける準備しよ。アイツらが来るとも限らないだし」

燐は二人に声を掛ける。

この先に行っても希望なんてないと思っていたけれど、今は少し違ってみえる。

志摩リンと各務原なでしこ、この二人に出会ってからは何かが変わった気がする。

上手く言えないけど、パースペクティヴ視野が広くなった気がした。

「うん」

「うんっ！」

リンもなでしこも元氣よく返事を返してくれる。

それだけで胸が熱くなる思いがした。

少女達は撤収の準備を進める。

火を消して、ごみを片づけ、必要なものをバッグへとしまい込んだ。

あのクマよけの鈴はそのままにしておこう、リンはそう考え回収に向かわなかった。

まだ列車が来ないとは限らないわけだしね。

木の焦げた臭いが辺りに充満すると、楽しかった時間の終わりを告げているようで、

妙に寂しくなった。

銀の箱のなかで激しく燃えていた焚き木も今は炭と灰の塊になっっているの、後は熱が冷めるのを待つだけだった。



やることはやったし後は、元の生活へと帰るだけ。  
ただそれだけだった。

何か忘れていた気がしたが……。

「あつ！ 蛭ちゃんのこと忘れてた！」

……

……

……

「燐……わたしたちもう子供じゃないんだし、いいよね……」

蛭は線路に一人座ったままで、甘い夢想到に浸っていた。

|  
|  
|

## Double joker death match

「ほら、なでしこの番だぞ」

廃線跡のトンネルをひたすら歩く四人の少女。

その足取りは軽やかとは程遠いもので、一行は団子のように固まりながらゆっくりと歩を進めているようであった。

それもその筈で。

「うーん、どれかなあ〜？ 蛍ちゃん、ちよつと横からみてみて？」

なでしこは蛍に不正行為イカサマの提案を持ち掛けてきた。

そんなことを聞いてくるとは思わなかったので、蛍は思わず面食らってしまう。

「え？ さすがに……それはダメじゃない、かな」

まさかの覗き見防止のためリンは慌てて胸元に隠した。

「自分で決めればいいだろ。なんで提案者が不正をしようとするんだよ……」

「むー、こういうのは苦手なんだよー。そうだ！ 蛍ちゃん1号の透視能力でなんとかならないかなあ」

隣にいる隣の手を引っ張るなでしこ。

両脇に荷物を抱えているのに、こういうときだけは妙に器用だった。

「いやいや、透視能力なんてないからつ。それに、こんな事ババ抜きで使うのはないんじゃない？」

燐も荷物を片手に持ちながら手を振って否定する。

「ほら、早く取ってくれ。いい加減効率悪い遊びなんだよ。これ」

なでしこの目の前に数枚のトランプカードを差し出すリン。

歩きながらやるもんじゃないとしながらも、結局これに付き合ってしまった。

四人は歩きながらトランプ遊び——ババ抜きをしていたのだ。

ただ代り映えない道を歩くのは退屈だからと、なでしこが提案したことなのだが、どうにも効率が悪い。

というか余計なエネルギーを消費していかないだろうか？

そうは思ったリンだったが、せっかくトランプもあることだし、燐も蛭も乗り気だったのとどりあえずやってみることにしたのだが……。

——あつ！

後ろ向き歩きをしていた蛭が枕木につまずいてバランスを崩す。

歩きずらい線路での歩行と、荷物の加重のせいでおぼつかない足取りだったせいだった。

「おつとつと、蛍ちゃん大丈夫?」

倒れそうになる蛍の腕を掴んで、燐が支えてくれていた。

片手にトランプの束を持っていたので、自身もそのまま引つ張られそうになるが、足を踏ん張ってなんとかバランスを保つことに成功した。

「ありがとう、燐」

「こんなところで転んだら傷だらけになっちゃうよ。蛍ちゃんの折角の天使のお肌が台無しになっちゃう」

少し茶化した風な口調の燐。

ここまで来て蛍に危ない思いだけはさせたくなかった。

「ほら、やっぱりこれ危ないんだって。早く終わらせて普通に歩こう」

蛍と燐の様子をみて、リンは更になでしこに詰め寄った。

普段ならこんなこと歩きながらでは絶対にしないのだが、今のこの世界なら人目を気にすることなく出来ることだった。

でもその分、ゾンビっぽいのも居るわけで、決して安全というわけではない。

それに今のスピードだとただ歩くよりも遅いので、いざという時はより危険が伴うか

もしれなかった。

「むむ、じゃあこれですっつ！ ああっ!!」

焦ったなでしこは目を瞑ってリンの手から一枚のカードを抜き去った。

そこに描かれていた絵柄は……見るまでもなく、なでしこのリアクションだけで誰もが分かるものだった。

「じよ、じよーかーを引いてしまいました……」

そう言つてわざわざジョーカーのカードを見せつけるなでしこ。

ゲームのルールが分かっているんだかないんだか、リンは再三あきれかえっていた。

「なでしこ、そーゆーゲームじゃないから……」

「あはは、どんまいなでしこちゃん」

体勢を立て直した蛍が労いの言葉を掛けてくれた。

捨て札替わりのケースは蛍が持っていたので両手が塞がって危ないのだが、本人はそれほど気にしていないようだ。

それに先ほどのようなことがおきても、隣が助けしてくれるだろうと信じていたから。

「さあ、じよーかーはどこかな？ 蛍ちゃん分かるかな？」

ワザとらしい声色でなでしこがカードシャッフルする。

やっぱりルールが分かかってないんじゃないかなでしこコイツは。

「うーん」

片手で広げられたカードを前に蛍が熟考する。

だが、答えは分かり易かった。

「はい」

蛍はひよいつと一枚のカードの抜き去った。

この絵柄でペアが出来て、蛍の手持ちのカードが減っていく。

「えー、なんで違うの引いちやうのかなあ〜？」

なでしこは口を凹ませて大層ガツクリした。

その様子は本当に分かっていないようでなんだか可笑しかった。

「だって、なでしこちゃん顔に出るんだもん」

「えっ！ そ、そうかな？ リンちゃん！ 私出やすいかなっ」

自分の顔に手を当てて、ほっぺをむにむにさせてみたり、目じりを上下させてみた。

……変顔になったようでもみんなに笑われてしまった……。

「あはは、なでしこちゃん面白い顔〜！」

「ぶぶっ、だから分かりやすいって言われるんだよ」

燐はなでしこの変顔に大うけだった。

リンは必死に笑いを堪えながら、そう指摘した。

そんなリンもクラスメイト 藤には顔に出やすいと言われているので、割と他人事でなかったのだが。

「うゝ。じゃ、じゃあ。今度は分かりにくいようにするからね。覚悟してよゝ」

今度は負けない。

なでしこの勝負魂に火が付いたようだ。

だが、誰がジョーカーを持っているかは丸わかりなので、まず気をつけるのは蛭だけなのだが。

………

………

「はい、これで上がりだね」

「さすが蛭ちゃん」

蛭が最後のペアを完成させて手持ちのカードはなくなつた。

これで残っているのはなでしこの持つ一枚のカード——ジョーカーだけとなつた。

「ま、また負けた……」

がくつと項垂れるなでしこ。

これで通算三度目の負けだった。

あれから回る順番を変えたりしたのだが、やはり最後はなでしこだった。

あらゆる方法で表情を変えたり隠したりしたのだが、結局見破られてしまうし、誘われるようにジョーカーを引いてしまっていた。

リンはなでしこの負けっぷりにある種の見解をもっていた。

顔で分かりやすいのは当然だが、このような心理戦のようなものにはなでしこは向いていない。

人の顔色を探るとかそういうことはしない、裏表のない素直なやつだと思っ

た。逆に、正月のときに綾ちゃん

と三人でやったボードゲームでは、なでしこは圧倒的な強さをみせていた。

それだけ強運の持ち主とも言えたので、それなりにバランスはとれている気がしていた。

「まあ気を落とすな。たかがゲームだし」

なでしこの肩をポンポンと軽く叩く。

「うゝ。リンちゃん意地悪だよね。私が負けたの見て嬉しがってるゝ」

ジトつとした疑いの眼差しでなでしこが見つめてくる。

その瞳で見据えられると思わず罪悪感が湧いてきてしまうのだった。



「そんなことないって、さ。もう十分遊んだし先に行こうよ」

「むう……あつ！ 今度はじよーかー2枚入れてやってみない？」

未だになでしこは納得をしていないようでも新たな遊びを提案してきた。

「名付けて、<sup>ダブルジョーカーデスマッチ</sup>双子の死神の輪舞<sup>!!!</sup> どう？ 面白そうでしょっ！ ってあれ……？」

「ほら、置いていくぞー」

リンがなでしこを置いて、先に歩いていった。

荷物を持って歩くのが面倒なので主に自転車や原付バイクでキャンプに行っていたリン。

逃げる途中で少々荷物を捨てていこうかと思っただけ、結局殆ど持ったままだった。

もはや相棒と化したキャンプ道具を抱えて森林鉄道の廃線跡を歩いていく。

変わらず肩にずしりと来るけど、その重さがむしろ心地よくなってきていた。

「なでしこちゃん早くー」

「先に行っちゃうよー？」

蛭と燐もその後が続いて歩き出した。

お互い脇に荷物を抱えているが、それぞれの手と手は繋がっていた。しつかりと離さぬように固く握られている。

「わ、みんな待つてよ。置いて行っちゃだよお〜！」

慌てて立ち上がると、なでしこは皆に遅れまいと走り出した。

勢いをつけすぎたので、思わず足がもつれそうになるが、左右に蛇行しながらもなんとか立て直した。

（みんなと遊んでいる時間は楽しいけど、それは後でも出来る。今はここから出ることが重要なんだよねっ！）

不安で泣き出した日もあったけど、今は違う。

燐ちゃん、蛍ちゃんが待つてくれている。

それにリンちゃんはずっと傍に居てくれたんだ、私のそばにずっと寄り添ってくれていた。

だから走ろう。

どこまで続くかは分からない線路の上だけど今はそれしかないんだ。

だって一人じゃないんだもん。

だからどこまでだって走っていける、そうでしょ？

きつと大丈夫、みんな一緒にこの悪夢の世界から抜け出せるよ。

そんな予感がしていた、それが確信に変わればいいのに、なでしこは切にそう思う。だから走ろう、きつと、多分、大丈夫だよっ！

……頑張りすぎてみんなを追い抜いちやった気がしたけど、気のせいだよね、ね？

……

……

……

「いや、ごめんごめん。いざ立ち止まったら誰も後ろにいないからビックリしたよお」

照れたように頭をかきながら、なでしこがととと戻ってきていた。

しつかり食べたおかげか、まだまだ体力が有り余っているようにみえる。

「そのまま一人で行ってもよかったのに、ね」

皮肉を含ませた口調でリンはそう言っただけだ。

同意を求められた燐と螢だが、二人は揃って苦笑いするだけであった。

「第一、そんなに元気なら私たちの荷物も全部持つてくれればいいのにな」

「んもう、リンちゃん意地悪だなあ。ワンフオーオール、オールワンワンの精神を忘れちゃったの？」

「いや、そんなわんこ向けの精神とか持ったことないし」

つつこむ気もなかったのだが、「わんこ」を連想させるワードにはリンは割と食いつきが良かった。

リンに犬好きかと問われたら……「別に」……と答えながら犬の頭をこれでもかと撫でるほどの隠れ？ 犬好きであった。

「まあとにかく、今はそこまで急がなくていいんじゃないかな。アレがいる気配もないしね」

二人の仲を取り成すように燐が会話に参加してくる。

微妙にかみ合わない二人の会話は聞いているこつちが疲れてしまうほどであった。

今はあの不快な臭いもないし、妙な唸り声も聞こえてこない。

あのヒビの出てきそうな感じもなかった。

「ごめんね。わたしみんなみたい体力なくなつて……」

申し訳なさそうな表情で蛍が言った。

もともと運動が苦手な蛍にとつてここまで歩き回るのは今まで経験がなかったことだった。

それゆえにアウトドア経験を持つ三人に比べて、蛍は体力にかなりの差があった。

さらに三人が履いている靴はアウトドア用の靴だったので、通学用のローファーを履いている蛍は余計に申し訳なく思っていた。

「大丈夫だつて、蛍ちゃん。きつともうすぐ出口が見えてくるはずだから、焦らず行こう。」

リンは俯いている蛍の手をぎゅっと握つて励ます。

この世界になつてから、燐に幾度となく励まされてきた。

だからそんな優しい燐をこの世界から救い出してあげたい、何としても。

でも……本当に出口はあるのだろうか？

自分で燐に提案したルートだけど、今更疑いをもつてしまう。

それだけ同じような景色が続いていたことと、どこまで行つても終わりがあるようにも思えなかった。

「うん……」

逡巡した蛭は薄い微笑みしか返せなかった。

「もう先に進むしかないもんね、今更後戻りも出来ないし。それにあの広場だつてもう……」

リンはくるりと振り返つて、今進んできた道行を見つめる。

どつちが出口か分からなくなるぐらいに、戻りの道も同じような景色が広がつていった。

先ほどまでリンとなでしこがテントを設営していた広場はもう既になくなつていた。

正確に言うと、リン達が広場を離れてからしばらくすると、その広場が見えていた場所は木々で塞がれていて何処すらも分からなくなつていた。

最初からそんな場所はなかつたかのように閉じられてしまつていたのだ。

これが二人の言う“標と蛭世界の圧縮”によるものかは分からない。

ただ、もう戻るべき場所はなかつた。  
でもそれほど急ごうとは思わなかつた。

この線路の上を歩いている分には何故か大丈夫な気がしていたのだ。

それにアウトドア用品はテントを含めて重量があり急ぐほどに体力を奪われてしまふ。

ゆつくり、じつくりが基本なのだが、なでしこ二人で逃げ回つてるときはそんな

ことは気にしてられなかった。

だから、今この時間をゆっくりと楽しみながら消費しかつたのかもしれない。他愛のない会話をしながら緑のトンネルのなかを四人連れ立って歩く。今はそれだけでも幸せだった。

「そういえばさ、燐ちゃん。白い犬を追いかけて行つたんだつたよね?」

先頭を歩いてきたなでしこが思い出したように燐に尋ねてきた。

あの時、燐がテントから出て行つたのを切っ掛けにして事態は動いたけど、今こうしてみんなで歩いているのだから良いタイミングだったのかもしれない。

「あ、うん。ただの勘違いだったんで恥ずかしいなあ……」

燐はもじもじと照れながらあの時のことを思い返した。

なんであれがサトくんだと思つたんだろう、思い込みが激しすぎたのだろうか。それにサトくんに会って、どうするつもりだったんだろうな、わたし……。

「そうじゃなくてさ、私たちも白い犬とあつたことあるんだよっ!」

「うんうん」

なでしこの意外な告白にリンも頷いて同意していた。

その様子は話題作りのための虚偽というわけでもなさそうだ。

「えっ！ どこで!？」

なでしこの顔を覗き込みながら燐が食い気味に聞いてくる。

その迫力になでしこはびくつとなっていた。

「あうっ！ え、えつと、たしか……」

なでしこがしどろもどろになっているので、代わりにリンが答える。

「昨日の夜ぐらいかな、私たちが逃げるときにゾンビに囲まれちゃって、もうダメだった時に、犬の吠えたてる声が聞こえてきて、そうしたら白い犬が現れたんだ」

「なでしこなんか、“ゾンビ犬”だってすごく怯えてたんだけど、その犬はむしろそのゾンビ達を追い払ってくれたんだよね。でもその後どこかに行っちゃったけどね……」

「リンちゃんはその犬を“早太郎”だって言ってたよね？」

立ち直ったなでしこが聞きなれない名前を口にする。

「うん、あれは多分……早太郎だと思う。私たちのピンチに助けに来てくれたんだっ！」

「ありがとう早太郎……」

握りこぶしを作りながら、リンは珍しく力説した。

その瞳は幼い少女のようにきらきらとしていて、空が見えると思われる緑の天井を見



上げていた。

犬に特別な思い入れがあるのか、それともその早太郎になにかシンパシーを感じているかは分からない、だが明らかに信用しきっている、そんな感じがありありと見えていた。

「もしかして燐ちゃんと言った」サトくん「も」早太郎「の事なんじゃないかって思ってるんだ、違うかな？」

「……」

リンの疑問に燐は戸惑いをみせる。

本当のことを言うべきかどうか悩むところだし、なにより言ったところで信じないだろう。

それに……リンの早太郎に対する想いを汚したくはなかった、だから燐は。

「うん。あれはきつと早太郎だよ。こつちだ静岡と悉平しつぺいたろう太郎だったっけ？ わたしたちはサトくん”って呼んでるけどね。わたしたちも助けてもらったんだ”

こう答えることにした。

嘘をついたことで良心の呵責が痛んだが、それでもこう答える他なかった。

「燐……」

蛍は燐の手をぎゅつと心を込めて握ってあげることにした。

燐の辛さを少しでも和らげてあげたかったのだ。

「そっかー、じゃあまた早太郎が助けてくれるといいね、リンちゃん！」

「うん」

なでしことリンは嬉しそうに頷きあった。

悪夢のような世界で唯一の味方だったとも言える白い犬。

それは必要以上に頼れるものだったのだろう。

それは燐と蛍にとっても同じであったのだが、真実を知った今、燐の胸中は複雑だった。

「燐……大丈夫？」

気遣うような瞳で蛍が覗き込んでくる。

「あはは、ごめんごめん、大丈夫。もう分かっていることだしね。それに今は蛍ちゃん二人だけじゃなくて、仲間……ううん、友達が四人になったんだし大丈夫だよ」

燐は何度も大丈夫と自分に言い聞かせるように笑顔で答えた。

蛍だけでなくリンやなでしこにも心配を掛けたくない。

「だから……まだ前に進めるよ」

「うん……」

蛍は燐とピッタリと肩を触れ合った。

燐の華奢に見える肩は小刻みに震えていて、その迷いの振動が伝わってくる。でもまだ力を失ってはいない、そう思えた。

(わたしはずつと傍にいるから……燐……)

蛍はそつと耳元で囁いた。

少しびつくりした燐だったが、こちらを振り向いて微笑んでくれる。空のように透明で儂い微笑みだった。

「やっぱり荷物重いかなあ。二人共、無理しなくても大丈夫だよっ」

線路の上で立ち止まっている蛍と燐に、なでしこが無邪気に話しかけてくる。

持っている荷物が重いから立ち止まっている様にみえたのだろうか、少し心配そうな瞳を向けてきた。

「わたしは軽い荷物だから大丈夫だよ。燐はどう、重たい？」

「わたしもへーきだよ。ごめんね、立ち話するぐらいならまだ歩きながらの方がいいよね」

燐はその場で二回ほど屈伸をした後、よいしょと荷物を持ち直す。

重い荷物でも姿勢や持ち方で体の負担にかなり差がでる、これはアウトドアの基本

だった。

そしてそれを教えてくれた大好きだった従兄の姿を思い浮かべる。

近くて遠い存在だと思っただけ、それがここまで苦しいものだと思わなかった。

どうしてこうなったのかを考えると、頭がパニックになつて叫びだしそうになつてしまふ。

だから今はとにかく前に進むしかない、それだけしかなかったんだ。

——それに。

わたしたちはともかく、他県からキャンプに来ていた二人だけでも元の県に戻してあげないといけない。

使命感があつたわけでも無いが、何故か今はそれがある種の目標のように感じてしまふ。

そうじゃないと歩く目的すら忘れそうだったから丁度良かった。

「疲れたらいつでも言つてね、無駄に荷物を背負わせちゃつてるんだし」

リンはやや気遣いしつつも声を掛けた。

二人がなにやら深刻に話しているのがみえたので、声を掛けずにいたのだが、先になでしこが声を掛けたので逆に話すタイミングを図ることができた。

「うん。でも皆が荷物持つてるんだし、わたしだけ手ぶらなのは悪いから」  
蛍もキャンプに来た二人リンとまでしこになにか手助けをしてあげたかった。

今まで口に出したことはないが、蛍は燐以上にこの不可思議な現象に対してある種の責任を感じていた。

明確に自分でなにかしたわけではない、全ては偶然と片づけることも出来る。

それでも大切な燐を巻き込んでしまっただけでなく、小平口町とは全く縁のない人達さえもこの奇妙な世界に巻き込んでしまっていた。

その為にも自分から前に進まなくちゃならない。

罪滅ぼしとはそういうのとは違うと思うけれど、それでもこの変わり果てた世界には留まらせたくはなかったのだ。

だから蛍も三人に負けじと足を動かしていた。

装備だけでなく、体力や歩き方にもやや劣るところはあるが、それでも前を見て歩けなかつた、この先にある出口を信じて。

少女達一行は色々な事を話しながら歩き続けていた。

“女三人寄ればかましい”と言うが、四人になると尚の事かしましかった。

無言で歩いた方が確かに効率が良いのだが、そんなことは気にせずに笑ったり、騒いだりを繰り返してしていた。

「サトくん……じゃなくて、早太郎の頭撫でたことある？ 柔らかくつてもふもふなんだよ〜」

燐はわざわざ言い直して白い毛並みの柔らかさを語っている。

「近づいたらすぐに逃げちゃったんだよね……早太郎……撫でてあげたかった……」

リンは早太郎を撫でた気になって、何も無い空気を撫でる動作をみせる。

「蛭ちゃん。こっちの富士山だつてもふもふ、ふあふあ、なんだよっ！ なんだつて限定5000個のレアものなんだからねっ！」

なでしこは未だ健在の富士山マスコットを蛭にも触るように勧めてきた。

限定数は関係ないと思うが、言われたままに富士山へと手を伸ばす蛭。確かにふあふあでもふもふだった。

だが、その綿の柔らかさで部屋にあつたクマのぬいぐるみを思い出して、すこし切なくなつた。

「ほんと……柔らかいね。お餅みたいね」

「お餅って言えばさ！ 信玄餅食べたいよねえ……部室で食べたの思い出しちゃったよ……」

同時になでしこのお腹がぐーっと鳴った。

あまりにもタイミングが良すぎて、疑ってしまうほどに。

なでしこの野クル入部記念？ で、信玄餅を一ケース持ってきたら殆ど一人で平らげ

てしまったのだから、なでしこの前で迂闊にお菓子など持ってくるものではないのだ。

なでしこの常識だと、お菓子は一人一袋以上なのだろう。

恐ろしくコストの掛かる女なでしこだった。

「もうその富士山食べればいいんじゃないか。なでしこに食われればスイーツも本望だろう？」

なでしこの顔を見ることなくリンが口を挟む。

胃に綿を詰めれば少しは食欲が落ち着くのではないかと思うほどだった。

「だめだよっ！ 富士山は世界遺産なんだから食べちゃダメっ！」

世界遺産じゃなかったら食べる気なんだろうか？

素朴な疑問が燐の中に湧きあがったが、とりあえず打ち消すことにした。

何処まで行っても同じような景色が続く。

それでも皆、何かを期待するように鼓動を高鳴らせていた。

——もしかしたら予感めいたものがあつたのかもしれない。

もうすぐ何かが起きようとしていることに。

だから今のうちに楽しんでいたかつたんだと思う、それがやつと分かつた。

緑のトンネルは同じような景色が果てなく続く……そう思っていたけれど、突然違う景色をみせることがあるようだ。

出口とは違う予想だにしない光景、必然的に立ち止まるしかなかつた。

それが今、目の前にあつたのだから。

森林鉄道の線路は真つ直ぐ一本だけ……そう蛍も燐も幼い頃に教わっていたはずだけれど。

今、四人の目の前でハッキリと分かれていた。

左と右に線路が分かれている。



二つの線路の先はこれまでと同じように白い靄がかかって見通せない。

完全な分岐点だった。

それはこの奇妙な出会いの終点を意味していたのだ。

……

……

……

## Z o m b i e   l i f e

一角に置かれた荷物に背を預けながらペットボトルの水を飲んだ。

常温で爽快感などはないが、それでも喉の渇きを潤すことができた。

「はい、なでしこちゃん」

飲み口を丁寧ハンカチで拭いた後、隣で座るなでしこにペットボトルを手渡した。

「ありがとう燐ちゃん！ いただきます〜」

なでしこは嬉しそうに両手で持ちそのまま一気に口の中へとペットボトルを運ぼうとする……が。

「全部飲むなよー」

なでしこが口を付ける前に、リングがしれつと忠告をした。

こう釘を刺しておかないとすべて飲み干す可能性が十分あるほどに遠慮をしないヤツだったから。

「んもう、分かっているってばあ〜。私だってもう子供じゃないんだよっ」

照れた表情を見せるなでしこ、そのあどけない顔は年下の少女にしか見えなかった。

（全然子供じゃないか……）

燐が蛍の家から失敬してきた食料は、今やこのペットボトルの水一本だけであった。おかげでバックパックは軽くなったが、これ以上この世界に留まることはより困難となったことが浮き彫りとなった。

残りの水はペットボトル半分程。

四人の少女の活動時間は若さを考慮しても1時間も持てばいい方だった。

今にして思うと、あの唯一動いていた自販機の商品をお金が続く限り買っておいでも良かったのだが、そこへ戻ることも出来ない。

二人だけとしてはちよつと多めの食料を確保していたのだが、四人だと単純に足りなかった。

「どうしようか……」

誰に尋ねるわけでもなく、何気なく蛍は呟いた。

先ほどの様に、少し行つては戻るを繰り返せば、安定して索敵は出来るけどかなりの時間を要する。

そんなことを続けていればあの白い影に遭遇する確率も高くなるし、その内体力が消耗して喉の渇きや空腹も早まってしまふだろう。

決断しなければならぬ。  
そうするしかなかった。

「……なんかこういうのって映画で見たことない？ 前に観たホラー映画で同じ状況だった気がするんだよねえ……」

燐は唐突に以前見たことのあるホラー映画の話をしてきた。

あまりに突飛の話だったので他の三人は何事かと目を丸くしてしまふ。

「あー、あれじゃない、”ゾンビぐらし”!! 私、夢でも出てきたんだよっ!」

ホラー映画で連想したなでしこが大きな声をあげた。

テントに一人取り残されているとき、夢の中であの怪物に襲われていた。

何かの状況に似てると思っただけど、あの伊豆のキャンプで恐々見た”ゾンビぐらし”、そのままだったんだ。

「そうそう、ゾンビぐらし! あれってカメラ一台で撮影してる低予算映画なんだけど、なんか大ヒットしたんだよね。でもあれってあんまり怖くなかったよねえ?」

「えっ! そ、そうかなあ? すごく怖かった気がするよお……」

伊豆キャンプでの初日、犬山あおいの妹、あかりについて見栄を張ってみんなでこの映画をタブレット端末で見たことを思い出した。

あの時は、なでしこたった一人が阿鼻叫喚の嵐だったので、なでしこの一人百鬼夜行として野クルの壁に拡大した写真と共に刻まれていた。

「あの時は寝ていたけど、その後であかりちゃんから何度も聞かされたんだよね。なでしこの慌てっぷり……」

ホラー映画には年不相応の冷めた目で見ていた犬山あかりだったが、なでしこの異常な慌てっぷりには腹を抱えて笑い転げていた。

そしてその様子を何も知らないリンに雄弁に語るものだから、伊豆キャンの間、なでしこはあかりに頭が上がりなかつた。

年下の子に笑いものにされるといふ屈辱は普段天真爛漫で通っているなでしこの胸にぐさりと突き刺さるほどのショックを与えていたのだ。

「前にこの映画、映画館で見てたはずなんだけど……あれってホラーだった？」

志摩リンは昨年の夏休み、斎藤恵那とともに当時の話題作としてわざわざ劇場に足を運んでいた。

所詮、長い休みの暇つぶし程度の事だった。

リンも恵那もお目当ては劇中に出てくる犬で、その犬が劇中で無事がどうかか気掛かりなぐらいで、後はそれほど関心はなかったのだ。

「わたしは見たことないけど、その映画って最後どうなるの？」

一人だけ見たことのない蛍が燐に尋ねる。

結末を知ってしまうのはちよつともつたない気がしたけど、今の状況と似ているなら聞いてみたかった。

「うん、クライマックスシーンだね。主人公の女の子四人が沢山のゾンビに追われるの。逃げてる途中で分かれ道があつて、さあどうする？　って展開になるんだけど……」

「そ、それから、ど、ど、どうなるんだっけ?!」

見た筈のなでしこが身を乗り出して聞いてくる。

パニックになつたみたいなので記憶から消しているかもしれないのだが。

「迷つた挙句、二手に分かれて逃げるんだよね。そこからが無駄に凄いやね」

リンが含みを持たせた言い方をするので、なでしこは身を震わせる。

最悪の展開になつたのかもしれない……ホラー特有の凄惨なシーンが頭に浮かんで、顔を青ざめていた。

「……うん。……までは確かに良いんだけど、この映画ここからがねえ……」

燐も同じ様に含みを持たせるので、なでしこの緊張感がどんどん高鳴っていく。

あの時の同じような感情がだんだんと昂ってきて、思わず耳を塞いだ。

（やつぱりこの映画って怖いんだ。とても酷い結末なんだ……私たちも同じような目に合っちゃうんだっ!?)

パニック寸前で顔色の悪いなでしこを見てみると、蛍も感化されて心配になってしま  
う。

「そーだよ。私、劇場で吹き出しそうになったよ」

「あ。わたしなんか大笑いして、一緒に見てたお兄ちゃんに怒られちゃったよう……」

リンと燐は初めてそのクライマックスシーンを見た時のことを思い出して笑い合っ  
ていた。

その和やかな様子に呆気にとられる、蛍と……耳を塞いだままのなでしこ。

ホラー映画なのに一体どうして？ 笑っちゃうほど怖いのか？

「それは仕方ないよ。まさかゾンビが二手に分かれたぐらいでその場で話し合うとは思  
わないしね、ゾンビなのに。それにその後がもつと酷くてね」

「そうそう、追うのをあきらめたゾンビ達は何をするかと思ったら、その場で一斉に踊り  
だすんだよね！ 何を考えたらあんな映画ができるんだろう」

「しかも監督兼カメラマンも一緒に踊り出してめちやくちやになつちやうしね。なんであれが大ヒットしたのか未だに分からないよ」

「本当だよね。ホラー映画じゃなくてコメディ映画だよね、絶対」

燐とリン、意外などころの共通点があつたので、思いのほか話に花が咲いた。

話に入つて行けない蛍となでしこは口をぽかんと開けているだけだった。

——ゾンビぐらし。

監督は40台にして新人監督の“青鬼山間一郎”。

一郎は演劇の経験を生かした2段構えのモキュメンタリーホラー映画、ゾンビぐらしを制作した。あまりにも予算が足りなかつたので、役者を一切使わず、アルバイトや制作スタッフだけでキャストイングした異例の態勢だった。だがそのせいかあまりにも場当たり的なスケジュールだったのと、主役四人を現役女子高生に拘つた為に意見が合わず結局全員に逃げられてしまった。そこで急ぎよ主役の女子高生四人をアニメ合成にし、専門学校に通う声優の卵に声を当てさせることにしたのだ。

しかしそれだけでは飽き足らず、インド映画からの着想を得て、モキュメントミュー



ジカルホラーとして世に送り出したのだった。

ラストシーンでの108匹のゾンビが一斉に踊り出すシーンは一見の価値あり！と論評されていた。

当初はミニシアター系で配給されていたのだが、ロコミで徐々に人気が出てきて大手配給会社と契約すると一躍、この夏の話題作となり、各映画賞を総なめにした。

当時のキャッチコピーは「怖かったら踊れ！ 命を尽きるまで。」だった――。

「えっと、だからさ……」

燐は話の勢いのままにある言葉を告げようとするが……唇を震わせるだけで、その先に続く言葉が出なかった。

もう肚は決まっているはずなのに言葉にするのはとても苦しい。

ただそれを言えばいいだけなのになんでこんなに難しいものなんだろう。

和やかな雰囲気のまま、さりげなく提案するだけだったのに、タイミングを失ってしまった。

ここからどうやって話を続ければいいんだろう。

燐は言葉を失ったまま立ち尽くす。

それと同時にあの時の言葉が頭の中で響いていた、山小屋での聡の言葉。

“簡単なことのハズなのに成し遂げるのは難しい”……あの時何を思つて言ったのかは未だに良く分かつてはいない。

だが、今なら少しだけ分かるような気がする。

あの時の聡も今の燐と同じように焦つていたのかもしれない。

その緊迫した様子に螢も声を掛けようとするが、口を開くだけでなんの言葉も出てはこなかった。

それは燐が何を言おうとしているかが分かるから。

だから何も言えなかった。

自分が代わりに言うことも出来た筈なのに、やはり言えない。

恐らく燐もそうなのだろう、この四人の關係バリエーションが壊れるのを恐れたんだと思う。

偶然出来た仲間を、友達を失う事、それは吊り橋効果の類かもしれないが、それでも掛け替えのないものだった。

立ち尽くす二人を見て、なでしこは困惑してしまふ。

先ほどまでと打つて変わつて空気が重くなつたからだ。

リンは不意に両手を上にあげて、ぐつと体を伸ばす。

その場で軽くストレッチをしながら、なでしこに問いかけた。

「なでしこ。自分の荷物は全部持てるよね」

「あ、う、うん。大丈夫っ！」

声のトーンが真剣だったので、突然問いかけられたなでしこは慌てて返事をした。

リンと二人で逃げているときも荷物は持ったままだったので、今更何てことはないのだが。

「そっか。じゃあ、準備しよう」

枕木の上に下ろしていた荷物を手に取るリン。

だが、言葉とは違い緩慢な動きで荷物を担いでいく。

それは何かを惜しむような挙動だった。

「あ、あのっ！ リンちゃ……」

燐が何かを問いかける前に、リンが口を開く。

「燐ちゃん、蛍ちゃん、ありがとう。ここまでくればもう大丈夫だよ」

「リンちゃん……」

「ここまで来れば後は、私たちだけで帰れるから」

「……………」

燐も蛍も何も言えなかった。

一番辛いことを言わせてしまったのだから、何も言う資格はなかった。

「これは独り言なんだけど、ずっととき、なんで小平口町なんかに来ちやつたんだらうって思ってた」

リンは上を向いたまま話し続ける。

緑のトンネルで塞がれた空は、微かに雨の当たる音がしていた。

仮に緑のトンネルが途切れても、星空は見えやしない。

せつかく星が綺麗にみえるとの触れ込みを信じてここに来たのに、結局一度としてみることが出来なかった。

「キャンプなんてどこでも出来るのに、なんでわざわざ小平口町に来て、こんな目に合うんだらうって、恨み言のように思ってたんだ」

「夢なら覚めて欲しいって、ずっと思ってるのになかなか覚めなくてさ……ホント最悪だった」

「リン……ちゃん」

なでしこは今初めてリンの秘めたる胸中を知った。

一緒に逃げてるときは的確な指示を出してくれたり、甲斐甲斐しく自分に世話をしてくれていたリン。

そんなリンだって自分と同じで恐怖や葛藤があることを今初めて分かった。

「でも……今はちつとも後悔なんてしていいない。多分こんなことが無いと出会わなかったんだと思うんだ。蛍ちゃん、燐ちゃんと。だから」

リンは大きく息を吸い込んでみる。

露の湿った臭いと木々の蒼い臭いが混じり、鼻孔から肺に爽やかな空気が満たされる。

「だから、後は自分の帰る方向に歩くよ。もういっぱい元気もらったから」

リンの告白に迷いや悲壮感はなかった。

諦観したような口ぶり。

だからよけいに悲しく聞こえてくる。

「燐ちゃん。これ」

リンはポケットから小さい犬のマスコットを二つ取り出して掌にのせた。

「これ、は……?」

涙声になってるのが恥ずかしかったので、燐は擦れた声を出すのが精一杯だった。

「これはね、〃犬みくじ〃。こつちが長野の光前寺で買った早太郎の犬みくじ。こつちのが静岡の見付天神で買った、悉平太郎の犬みくじ。よく見ると微妙に顔が違うんだよ」

手のひらサイズの二匹の白い犬。

そういうえば似たようなものを何処かで見た覚えがあった。

「それでさ、こっちの眉毛が凜々しい悉平太郎の犬みくじを燐ちゃんに貰って欲しいんだ」

「でも……大切なものなんでしょ？ さすがに悪いよ……」

手で摘まんで渡そうとしてくるリン。

いまいち意図が掴めなかったので、戸惑ってしまふ。

「そうだね、でも今の燐ちゃん達には必要な気がするんだ。何かあったらきつとこの悉平太郎が……」

そこまで言ったリンだったが、突然口をつぐんで考え出す。

トラブルがあつた訳ではなさそうだが。

「ど、どうしたの？」

リンが突然黙りこくつたので気遣う様に声を掛けた。

「あつ！ ェ、ごめん。やっぱりこっちの……早太郎の犬みくじを貰って欲しい」

リンは思いついたように手を叩くと、燐の手に強引に早太郎の犬みくじを握らせた。

手のひらサイズの白い犬は薄い陶器で出来ているようだった。

貰ったのにこんなことを思うのもなんだが、サトくんと同じ、磐田の悉平太郎の犬み

くじだと燐はてつきり思っていたのだが……。

「えつとき、 悉平太郎はどうも磐田——見付で力尽きて祀られたみたいなんだって。でも長野の光前寺の言い伝えだと早太郎はちゃんと自分の故郷——駒ヶ根に戻ったみたいなんだよね」

照れたように笑ってリンは話を続ける。

「燐ちゃんと螢ちゃんにはちゃんと自分の家に帰って欲しいんだ。こんな夜の明けない世界じゃなくて、普通のいつもの私たちの世界の家に。大丈夫、早太郎がきつと二人を導いてくれるよ」

「リン、ちゃん……」

手の中の白い犬をぎゅつと握りしめる。

小さいながらも固い陶器の感触がリンの気持ちを強さを具現化したようで、切なくなってくる。

「あ、でも良かったら、後で返して欲しい……後でって言ってもこの世界から出た後の事ね。その、やっぱり必ず返しにきて欲しいんだ。私もなでしこもずっと待ってるから。ずっと」

一つ一つ噛みしめるようにリンは言葉を紡いでいく。

なにかの呪文のように、ハッキリとした強い口調で。

燐は腕で顔をごしごしと擦ると、リンの目を正面からハッキリと見つめた。

穢れのない澄んだ瞳。

なでしこの様にきらきらとダイヤの様な輝きとは違う、もつと深く優しい紅玉のような瞳。

それが志摩リンの瞳だった。

「分かった。必ず返しにいくよ」

嘆息に近いため息交じりの微笑みを燐は返した。

まだ迷いはある。

でも出会って間もないのにこんなに想ってもらえることは普通に嬉しかった。

なでしこと螢は何も言わず二人を見守っていた。

少しの間、沈黙が続いていた。

……

……



「あつ、そういえば、私もっ!」

それまで一緒に黙っていたなでしこが急に何かを思いついたように荷物をごそそと漁り出した。

「こ、これっ!」

なでしこが慌てて取り出してきたのは、あの富士山マスコットだった。

いろいろ振り回されたせいとか所々汚れてはいたが、まだちゃんと富士山の形を保っていた。

「これってあの富士山のぬいぐるみだよね?」

蛭は確認するようになでしこに聞き返す。

あのとき、線路で寝てるなでしこの横にそつと置いたのも蛭だった。

「私もこれ蛭ちゃんに貰って……じゃなくてえ! 預かって欲しいんだよっ!」

「え? でも、これすごく大切なものじゃなかった?」

(確か、レアものって言ってたしね)

蛭は改めて富士山のぬいぐるみをきゅつと触ってみる。

指が沈むほどに柔らかいそれは、スクイーズのようで癖になる感触だった。

「結構荷物たくさんある、持ってて欲しいんだよねい……あ、でも後で返してねっ!

そ、その郵送とかじゃなくて、ちゃんと蛍ちゃんの手で返してほしいんだ……えへへ」  
リンと同じような約束事を蛍にも取り決める。

こんなことに意味がないかもしれない、でも、それでもやっておきたかったんだ。  
また会う口実には最適だしね。

なでしこは発案者のリンにウインクした。

「……分かった、でも結構汚れちゃってるから、ちゃんと洗って返すね」

なでしこの代わりにぬいぐるみを胸元でギュツと抱きしめた。

なでしこの無邪気な温かさが伝わってくるようで、切なく甘い想いに包まれる。

そして顔を見合わすと互いになっこりと笑い合った。

なでしこは蛍に実姉の面影を映していた。

普段はぶつきら棒にみえる姉——桜と、どこか控えめの蛍では全然ちがう印象では  
あつたけど、それでも慈しむような優しい眼差しは同じに見えたのだ。

あの見守る様な優しい瞳、なでしこにしか分からない姉と同じ香りがしていたのだ。

蛍は一人っ子だが、妹がいたらこんな感じだろうとは思っていた。

同じ年のようなのに何故か年下のように見えるなでしこに、母性がくすぐられていた

のかもしれない。

そんな妹の様な少女と分かれるのは本当の姉妹の様で辛かった。

本当の妹を持ったことがないので詳しくは分からないが、それでも寂しさを感じていた。

四人の少女は何も言わず向かい合っていた。

風も吹かず、鳥や虫さえもない。

居るのはただ四人だけ、それだけだったのに、それももう終わろうとしていた。

「ん、ねえ、みんなで踊ってみない？ 映画も最後は踊ってるんでしょ」

「まあ、そうだけど……」

なでしこが特に意図を見せずに元気よく提案してきた。

確かにあの映画も最後は踊るのだが、だからって……。

しかしリンは踊る行為よりも、「最後」という言葉に引っかかっていた。

(やっぱりここで別れるしかないんだ……)

また会う約束をしたけれど、それでも辛い。

でもそれは一人の感情じゃなく、みんな同じだった。

「いいね！ 踊ろうか蛍ちゃん」

「うん！ 燐、踊ろう！」

燐と蛍はその提案に快く了解した。

その即決ぶりにリンは口をぽかんと開けてしまう。

「ほらリンちゃん。私たちも負けてられないよっ。ダンス勝負に逃げはないからねっ  
！」

「いや、勝負とかそういうのは……」

「ほらほら〜」

「ちよ、なでしこ手を引つ張るんじや……」

リンはなでしこ手を引かれるままに踊り出す。

こういう経験はあまりなかったので、なんかギクシヤクした踊りになってしまった。

そんな様子を蛍と燐がくすくすと笑うので尚のこと恥ずかしかった。

でも不思議と高揚感もあつたのだ。

音楽や楽器さえもない線路の上で、導かれたように踊り出す少女達。

だから無性に楽しかった。

無駄にスタミナを消費するとかそんなことも考えずに踊っていた。

焚き火を囲んだときでさえ踊らなかったのに、今はみんな笑いながら踊っている。

みんな悲しい別れはしたくなかったんだ、きつと。

だから全てを忘れて踊っている今が、一番最高の時間だったんだ。

わたしたちはお互いに手を振り合った。

仲の良いクラスメートが下校するときの様なごく自然な感じで。

あのときみたいに自然な別れ方、嫌なこと思い出しちゃったけど、またそうするしかなかった。

実感がないのかもしれない、まだどこかで余裕があったのか、それともただの冗談だと思っただのかは分からない。

それでもそれぞれ別の道を選んだのだ、比喻ではなく、物理的に別の道を。

このほうが効率がいい、そんなことを自分から言った気がしたが、それはただの言い訳だった。

やっぱり止めようなんて誰も言ってくれなかった、もちろん自分だって。

物は試し！ いつも元気なあの子なでしこが軽く言った気がするけど、そんなことで決めちゃっていいの？

別れる理由も、別れないほうがいい理由ももつといっぱいあったはずなのに。

議論すら惜しむほどにみんな心に余裕なかったのかな……。

ちゃんとした別れの挨拶すらなかった、もつと伝えなきゃならないことがあったはずなのに、それなのに。

「蛍ちゃんーん！ 燐ちゃんーん!!」

なでしこちゃんが大きく手を振りながら、わたしたちに声を掛けてくれる。

常に元気で明るい子だったな、一緒にいて楽しい子だった。

こんな子とキャンプに行けば誰だって笑顔になる、そう思えるほどの眩しい少女だった。

横で小さく手を振ってくれる、わたしと同じ名前の少し小柄な少女。

見た目以上にしつかりしてるから大丈夫だと思う、リンちゃんがいるからこそ別れることが出来たんだ、きつと。

それに一人の楽しさも知っている思慮深く優しい子だった。

そんな二人にわたしたちは手を振り返すことしかしなかった。

声、いや音を出すことすら怖がっていたのだ。

だつてきつと泣いてるから、顔には出なくても泣いてるんだ多分。

隣の蛍ちゃんの顔すら見えない、見るのが怖かった。

これ以上二人の姿を見るのがつらかったので、踵を返す。

結局残ったのは泣き虫で凹みがちなわたしと、いつも一緒にいてくれる大好きな親友だけ。

そう。

また二人きりに戻っただけだった。

どつちの道が正解かは分からない、そう決めつけていた。

でも恐らく、こつちの道が正解なのだろう。

四人でいる限りは出口どころか何も起きないだろう、だからこそその分岐と推測していた。

そして四人は二人になった。

蛍ちゃんとわたし、二人だけの道に……だからきつと何かある、それが真理だった。

「……燐。それ気に入ったの？」

あれから二人は一言も話さずに歩いていたのだが、妙な胸騒ぎを覚えて蛍が声を掛けていた。

「……うん」

燐の手は蛍と固く繋がれたままだったが、空いた手には白い犬の置物をちよこんと乗せたまま器用に歩いていった。

「早太郎……やっぱりサトくんに少し似てるね」

友人に託された大事な白い犬のおみくじ、物言わぬそれは確かにサトくんに似ているかもしれない。

ただサトくんと違いしつかりと両目を開いている。

そしてそれはあのヒビとも違う事を示していた。

「やっぱり、戻ろっか？」

切なそうな表情の燐を見ていると胸が締め付けられそうになる。



だから蛍はそう提案をしたのだ、今更かと思われてもそれでも言いたかった。燐は軽く首を振ってそれを拒否した。

「戻っても何も変わらないよ、きつと」

視線は掌の白い犬に注がれたまま、ポツリと眩いた。

諦めを含ませた声色だったので、蛍は居ても立っても居られなくなった。

「燐!!」

不意に繋がれた手が離れたと思ったたら、蛍が首に手を回して抱きついてくる。

そのはずみで、富士山のマスコットが宙を舞っていた。

燐は宙を舞うそれを目で追って、なんとか片手でキャッチした。

手の中のものもちとしたぬいぐるみの感触に思わずホツとした。

「もう蛍ちゃん。いきなりだとビックリしちゃうし、それに折角貰ったものを投げちゃだめだよ」

はい、と蛍の目の前に差し出すが抱きついたままの蛍は受け取ってくれようとしな  
い。

蛍の目線はまっすぐ燐の瞳しか見えていなかったのだ。

「ねえ、燐。キスしてあげようか?」

熱っぽい声で蛍が囁いてくる。

密着することで甘いバニラのオーデコロンと混ざり合って、甘い世界を作りだす。蛍の好きなバニラの香りは燐に対する無垢な気持ちの象徴に見えた。

「蛍ちゃん。さつきからそればかりだよ」

少し呆れた表情で蛍の瞳を見つめる。

綺麗で一つの染みのない、まるで蛍のこころを映し出したようで綺麗だった。傷つくことも穢れることもそして、自分の運命さえも呪っていない純粋な瞳。

三間坂蛍は可憐な少女だった。

「だって……燐、元気がないから。キスしたら元気出してくれるかと思って」

澁みない微笑みを向けながら蛍はそう言った、告白に近い文言だったので燐はさっと顔を赤くしてしまう。

「ん……元気になるのはわたしじゃなくて蛍ちゃんじゃない？」

「そうかもね」

線路の上で抱き合いながら立ち尽くす二人の少女。

それは緑の中の幻想的な風景と相まって、ことさら美しいものに見せていた。

「ね、蛍ちゃん」

「うん？」

「前にも言ったけどわたし蛍ちゃんと一緒にいるだけで幸せなんだ。特別なことなんてしてもらわなくてもいいよ。今こうしてもらってるだけですごく幸せ……。幸せのミルフィーユ状態だよ」

瞼を閉じて蛍は幸せをかみしめるように、耳を鼻を澄ませた。

こうして瞳を閉じていると蛍の体温や鼓動を直に感じられて、心が安らかになっていくのが分かる。

「わたしだってそうだよ。蛍といると幸せ。でもこの想いはわたし一人だけのもの。だから想いは共有<sup>リンク</sup>できてもそれぞれは違う方向で良いんだよ」

蛍も瞳を閉じる。

手に少し力を入れれば、もしくははちよつとだけ体を寄せれば想いは成就出来そうなのに、それをしようとはしなかった。

お互いの吐息が交わるほどに近くても、それ以上は何もしようとしなかった。

困惑されたり、拒絶されるのが怖い、でも一番怖いのは、そんなことを考えてしまう自分の心の在り様だった。

でも蛍の憂いの表情をみていると心がざわついてしまう。

それがただの勘違いならいいのだが、でも不安は膨らむばかりだった。

「蛍ちゃんつてさ」

首に回した手を優しく解かれる、あの時と同じように簡単に。

それでも燐の意思は変わらないとでも言いたいようにあっさり。

「やっぱりすごく可愛いよね。こんな可愛い蛍ちゃんをわたしが独り占めするなんて、ズルいと思うんだ。だから蛍ちゃんの本当の幸せって教えて欲しい。わたし全力で応援するからっ」

澄み切った空のように淡い微笑み。

燐の言葉はまるで最後の願いのように聞こえたので。

蛍は一瞬驚いたあと、燐から顔をぶいっと背けて一言だけ呟いた。

「……しらない」

蛍の意外な言葉に燐は目を丸くして固まっていた。

だが理由が分かると、燐はあまりにも可笑しくなって、ついつい噴き出してしまった。

「蛍ちゃん怒っちゃったの？ 可愛すぎだよ、もう！」

いつまでも笑い続ける燐。

目の前で笑われるのがすごく恥ずかしくなって、蛍は耳まで真っ赤にして俯いてい

た。

「あつ！ ごめんごめん。蛍ちゃんすごく可愛かったからついね。大好きだから許して〜！」

今度は燐が蛍にギュツと抱きつく。

あの富士山のマスコットは頭の上に器用に乘せたままで。

「ほんとこ」

それまで黙って俯いていた蛍がぼそつと呟く。

「ええっ!？」

「本当にわたしのここと好き？」

恋人に尋ねるような甘い口調で蛍がひそひそと訊ねてくる。

「も、もちろん！ 蛍ちゃんのこと好きだよ。友達としてじゃなく、蛍ちゃんとして好き！」

燐は少し動揺しつつも、ハッキリと蛍の頭の上でそう告白した。

少し恥ずかしかったけど、偽りの気持ちではなかった。

「じゃあ……キスしてくれる？」

「蛍ちゃんごめん、やっぱりそれは無理」

燐はきっぱりと言い放った。

拒絶という訳ではないけれど、今はそんな気持ちになれなかったから。

(だって、誰も見てなくてもさすがに恥ずかしいし、それに……そんなことしたらわたし蛍ちゃんに溺れちゃうよ絶対……絶対のぜったい！)

「え〜」

口を尖らせてまたも蛍が拗ねる。

そんな膨れた様子もとても可愛らしく、燐は抱きしめる手をより強くした。

「え〜、じゃないでしょ。蛍ちゃんいつからそんなにキス魔になったの」

「燐と出会ったときから」

「そんなすぐばれるような嘘つく〜。もう、どれだけ一緒だと思ってるの?」

そんなことを言う蛍がたまらなく愛おしかった。

蛍には自分がいるから大丈夫と何度も言われてきたが、結局自分が蛍の想いに救われているだけだった。

蛍がいなければ、この緑のトンネルすら歩くことはなかった。

きつとあの風車の下にずっと居ただろう、もう考えたくもなかったから。

でも蛍が手を取ってくれた。

自分だって苦しいのに、それでもわたしのことを気遣ってくれる優しい蛍ちゃん。

だから、今はまだこのままがいい。

両想いの淡い気持ちままで……。

「ありがとう蛍ちゃん。やっぱり蛍ちゃんと一緒に良かった」

「わたしは、ただ燐と一緒にいたいだけ。それだけだよ」

正面から向き合う燐と蛍。

不安も迷いも消えてないけど諦めもなかった。

「はい、これ」

頭に乗せていた富士山のマスコットを手に取り、再び蛍の目の前に差し出した。

ぬいぐるみである為、表情に変化はあるはずないのだが、ぞんざいな扱いを受け続けたせいか、少し怒っているようにも見えた。

『ほたるちゃん。ぼくのこともっとだいじにしておくれよお』

ぬいぐるみを左右に振りながら、燐が後ろで妙なアテレコをしていた。

その微笑ましさに蛍はにこにここと笑みをこぼす。

「ごめんね。キミのこともう絶対離したりしないから。ずっと一緒にだよ」

差し出されたぬいぐるみを手に取って、胸元でぎゅつと慈しむように抱きしめる。

その言葉は誰に向けてのものなのか、蛍はその真意を語ろうとはしなかった。

二人は手を取って代り映えのない廃線跡をまた歩き出した。

どんな結果が待っているかと先に進むほかない、仮に戻ってもそれは同じだったから。

「ねえ、燐。もし、もしもちゃんとこの世界から出れたら……」

「出れたら?」

「わたしの家に一緒に住まない? 使っていない部屋ならいっぱいあるし、友達同士なら問題ないと思うんだ」

蛍は特に気負いもせずにそう言ってきた。

あまりに突飛な提案だったので、燐は面食らってしまった。

「蛍ちゃん。話が飛躍しすぎだよ」

「そうかな? 良い案だと思ったんだけど」

蛍は小首を傾げた。

「ドゥーサーしてるとかみんなに疑われちゃうんじゃない?」

顔を赤らめながら、燐がからかうように言ってくる。

突飛な考えになっているのは燐も同様だった。



「わたしはそれでも問題ないよ」

蛍はきっぱりと言い切った。

何か策があるというわけではない、本心からの言葉だった。

「わたしは問題だよ」

燐は更に顔を赤くする。

蛍とそういう関係になることにそれほど抵抗はないが、それでも恥ずかしかった。

「えー」

「ほら。また、えーって言った。もう蛍ちゃんってばホントに……」

「だって燐が……」

他愛のない。本当に他愛のない会話を続けながらわたしたちは先に進む。

県境、もしくは隣の町まで逃げられるかと思っただけけれど、その可能性は限りなく薄かった。

でもそれはある意味分かっていたことでもある。

ただ二人で会話をずっと楽しみたかっただけなのかもしれない。

結局それが一番したかった事だった。

振り返ってみるとこの三日間、ただ這いずり回っていただけ、ただそれだけ。時にゆっくり歩いて、時には全力で走って、車を使ったことさえもあつた。

でもこれといって解決はしなかつた。

あの二人と出会つても何も変わりはしない、やっぱりこの先へ行くしかないのだ。

それならせめてあの二人だけはここから出て欲しい。

それがわたしたちの最後の望みだつた。

だから、こつちの道を選んだ。

わたしたちは多分、ずっと前から“白羽の矢”が胸に刺さつたままだつたから。

だから、仕方なかつたんだ……。



M a i s o n   p o r t e   b l e u e

ふと、蛍は足を止めた。

何かに呼ばれたような気がして、思わず後ろを振り向いてみる。

そこには先ほどまで歩いてきた廃線跡の線路があるだけで何の姿も見えなかった。

「ん？ どうしたの、蛍ちゃん」

引いていた蛍の手が急に重くなったので、何事かと思い燐も立ち止まって振り返る。

「うん。何かの音が聞こえた気がしたんだけど……」

「声って、まさかアイツらじゃないよね?!」

燐は蛍の手をぎゅっと握ると、緊張した表情であたりを伺った。

だが、燐の耳には何も聞こえないし、あの独特な異臭もしなかった。

「ううん、そうじゃなくて、なんか名前を呼ばれた気がしたんだ。燐とわたし、二人の名前を」

「わたしたちの名前……」

今、この狂った世界で二人の名を呼べるものは特定出来ている。

だからその場で耳を澄ませて待つことにした。

……数分ほど待ったが何もこなかった。

遙か頭上の遠くから聞こえてくる、雨が葉や梢に当たる音だけが微かに耳に聞こえてくるだけだった。

「ごめんね、気のせいだったのかも」

少し困った顔をして螢が謝る。

燐は首を横に振った。

「ううん、螢ちゃんの言いたいこと、分かるよ。もしかしてって思ったんだよね」

「うん」

蛭と燐は並んで元来た道を見つめていた。

もうここからではあの別れた場所は確認できない。

そこまで急いでいたわけでもないのにそれっぽい場所はもう見当たらなかった。いくら目を凝らしても分からず、それすらもなくなつたかのように見える。

それでも待つておきたかつた。

途中まで一緒に歩いていた二リンとまでしこ人のことはずっと気掛かりだったから。

だからもう少しここで待ち続けていたかつた。

息を止めたように静かな林の中だったが、追いかけてくるような靴の音や、あの明るく元気な声が聞こえてくることはない。

今、線路の上に居るのは燐と蛭、ただ二人きりだった。

「燐。行こう、ここで立ち止まっても仕様がないし」

「……うん」

寂しそうな微笑みを二人は返す。

それでもまだ未練があつたのだろう。

螢は抱いている富士山のぬいぐるみをぼんぼんと軽く叩いた。

すこし怒つた感じに見える富士山だが、その柔らかい音とのギャップがなんだか可笑しくなつてしまい、二人は顔を見合わせて笑つていた。

悩んでたつて仕方ない、なでしことリンならきつと大丈夫、そう信じるしかなかったから。

やがて二人は緑のトンネルの中をまたゆっくりと歩きだした。

もう振り返ることはなかった、その少し後ろに二人の仄かな残滓が残つていたことも知らなかったから。

ただ前へと進むだけだった。

……

…  
…

うーん……。

今日、何曜だっけ？ まだ起きる時間じゃない、はずだ……。

学校、は今日は休みだっけ？ それともバイトの時間？ それとも今日はキャンプの予定立ててたっけ？ なんだかごっちゃになって良く分からないぞ。

とりあえず起きよう、眠いなら後でまた寝れるし。

じゃあ起きちやうぞー、起きるぞ……。

体に言うことを聞かせるように、覚醒させていく。

ゆつくりと重い瞼を開いてみる……なんだか白いな。

まるでコンクリートの上に寝てみたい、体、固まったかも……。

今寝ている場所を寝ぼけ眼で触ってみる、つるつるとして堅そうだけど熱くも冷たくもない、やっぱりコンクリート？ でもなんか違うな……気味悪い。

少し腕を回してうつ伏せの体勢になってみる……なんだこれ眩しい……。  
まともに目を開けてられなくて反射的に手で遮った。

なんだ、ここ？ 何がドーナツだったんだっけ？

手で光のようなものを遮りながら、しばらくぼーつとして目を慣らしていった……。すると徐々に目の前の光景が分かるようになってくる。

これは……青い、空、なのか——?!

目の覚めるような青い空に、帯状の白い雲がゆっくりと流れていた。

この地に来てから一度も拝むことの出来なかった日常の風景がそこにあった。

「そっか、帰って、来れたんだ……！」

ぼつりと声に出して呟いた。

夢か現実かを頭で確かめるため、声に出して言いたかったんだ。



リンは両手をついてぐぐつと上半身を立ち上げてみる、なぜだか妙に身軽だった。

周りを見渡すと傍に赤いジャージが見えた、多分なでしこだろう。傍まですり寄って小さい肩をゆすってみる。

すう、すう……。

小さく無邪気な寝息を立てていた。

どうやらちゃんと息があるみたいだ。

安堵のため息をついたリンは改めて周りを見渡してみる。

あの世界から一先ず脱出できたのはいいが、ここは一体何処なのだろうか？

膝を立てて立ち上がってみる……ぱきぱきと膝が鳴って少し、いや大分恥ずかしかった。

少し背筋を伸ばして周りをぐるりと見渡してみる。

……その風景の在り様に驚愕した。

慌てたリンはなでしこに駆け寄り、早く起こそうと躍起になった。

「なでしこ、おい、起きろつてば。なでしこー！」

肩をがくがくと揺すつてみる。

それでも起きないようなら多少荒っぽい方法でも仕方ない、リンはそう決断したとき。

「んー、リン……ちゃん？」

寝ぼけ眼のなでしこがあくびを噛みながら返事をした。

「ほら、見て、夜が明けたんだ。私たち、戻ってこれたんだよ！」

起き抜けのなでしこにリンは空を指差して叫んだ。

まだ寝ぼけたままのなでしこは言われたとおりに空を仰ぐ……。

「ひゃううう、眩しいよおー！」

眩しさに目がくらみ、なでしこはカメの様に丸くなった。

「ほら、やっと帰ってこれたんだよ」

リンは興奮しているのか、うずくま蹲るなでしこの頭を掴んで無理やり向けさせようとした。それだけこの光景はリンの脳裏に現実のものとして理解出来なかつたのだ。

だからなでしこに一刻も早く確認してもらいたかつた、嘘のように綺麗な青空は現実なのか。

「リンちゃん怖いよう！ 目が潰れちゃうよう！」

背中を丸めながらなでしこはそう拒絶する。

なでしこの悲痛な叫びにリンはやっと我に返つた。

「あ、ごめん。もう少し経てば慣れるから、それまで待つてる……ごめんなでしこ」

小さい子をあやす様に背中を擦ってなでしこの機嫌をとる。

自分だって慣れるのに時間が掛かったのに、いい加減なやつだ私……リンは胸中で反省した。

「ありがと、もう大丈夫だよっ……多分」

暫く傍にいと、目が慣れてきたのか、なでしこがようやくこちらを振り向いてくれた。

でもまだ完全には慣れないようで、何度も瞬きを繰り返すことで目を視界に馴染ませる。

そして目の前の光景を見た瞬間目を丸くしたと思うと、即、立ち上がって叫んでいた。

「富士山のように青い空、白い雲っ！ やったあ！ やつと悪夢が終わったんだねい！

リンちゃん良かったよお!! ……ってあれ？ 何処なのここっ!?!」

すっかり目が慣れたなでしこが歓喜したと思つたら即、驚愕の声を上げた。

忙しいやつとは思ったが、そのなでしこの混乱した様子でこれが現実であることをようやく受け止めることが出来た。

青い空の下にある駅のホーム、それが今、二人の立っている場所だった。

ホームにはちゃんと線路もあり、それはどこまでも続いている様に長く果ては見えない。

まるであの廃線跡のように見通しが利かなかつた。

だが、あの錆て古ぼけた線路とは違い、一つの傷もない新品同様の線路だった。

周りは白い砂の様な大地と池のような水たまりがホームを囲むように無数に広がっており、遠くには地平線も浮かんでいる。

あまりにも広大すぎて身震いした。

終わらない夜の小平口と対極をなす、白い砂漠のオアシスみたいな光景であった。

日は差しているが熱さは感じない、それに太陽が見当たらなかつた。

「ふおおおおおー！　アアレだよっ！　ほらっ、OPでバルバトスが倒れていたところ

！ なんだっけリンちゃん、ほら、あそこっ！ 私、今アニメと同じ世界にいるんだっ  
！」

肝心の名前が出てこないのか、なでしこがバタバタと手を振り回しながらリンに尋ねてくる。

「バルバ……？」

なでしこが何を言いたいのかリンには全く理解出来なかったのでとりあえずスルーした、どうせアニメか何かの例えだろうし。

(つて、なでしこのやつアニメと現実をごっちゃにしてるぞ……)

でも、それほど間違っていないのかもしれない。

先ほどまで居たはずの小平口町でのことも夢の中かと思うほどに現実感がなかったわけだし。

ここでの光景もそう、どこか地に足が付かない感覚があった。

夢の中の夢……とか意味が分からなすぎるが。

「なでしこ」

「うん？ どったのリンちゃん」

ちよつと慣れてきたのか、物珍しそうにあたりをキョロキョロとしているなでしこ。それは熱に絆されたように夢見心地の顔であった。

その様子からリンはちよつと確かめてみたくなつた。

「ちよつとき、腹パンしてもいいか？」

リンは無表情のまま拳をぐつと握り、なでしこのお腹に狙いを定める。

突然物騒なことを言われたのでなでしこは飛び上がるほどビツクリして意識を現実へと戻した。

「い、嫌だよつ！ そんなことされたら私泣いちやうよつ！ どうしてそんなことしようとするのっ!？」

思わず手でお腹をかばってしまう、それぐらいリンは本氣の目に見えたから。

「いや、夢かどうか分かるかと思って……」

「他の方法で確かめてよお……」

脱力した様にその場に膝をつくまでしこ。

妙案かと思ったんだが……まあ夢にしてはリアルすぎるけどさ。

折角だから自分の横っ腹をぼこんと殴ってみた……普通に痛いぞ……。

……やっぱり現実か……確かめるべきもないことだけど。

少し涙目になったリンは恥ずかしさを隠すように再び頭上を見上げてみる。

ホーム上部にはちゃんと屋根が設けており、乗客が待つためのベンチも備えてあった。

ホームに面している線路は一本だけで、行先を示す表札も時計すらもない、あまりに簡素な作りをしていた。

どこまでも続くような線路、その上には架線も引いており、ちゃんと電車が走れる構造になっていた。



誰が利用するかは分からないが、まるで砂漠の上の秘境駅だった。

「……何駅なんだろうね？」

少し落ち着いた口調でなでしこが尋ねてくる。

なでしこもこれが現実であることに理解したのだろう。

「あの廃線跡じゃないみたいだし、前になでしこが乗った大井川鐵道とも違うみたいだね」

リンは春頃三人で井川方面にキャンプに来たことを思い出した。

あの時なでしこだけは電車を使っていたのだが、ネットで調べたときもこんな駅は無かった気がする。

何より駅名を記すものがないのでどの県の何という路線なのか特定出来ない。

ただ意味の分からないプラットホームがある、そういう場所だった。

さらに。

ホームの傍に寄り添うように一軒の家が建っていた。

「リンちゃん、リンちゃん、あれってもしかして二人が言ってた“あの家”なんじゃないかなっ」

「あ、そういえば確かにそれっぽい」

なでしことリンはひそひそと小声で話し合った。

今更こんなことをしても無意味かもしれないが、住宅を前にして誰がいるともしれないので気を遣っておいた。

燐と蛭から聞かされていた不思議な世界にある不思議な家の事……作り話とはちよつと違うと思っていたけど、実際にみると良く分かる。

確かに不思議な光景だった。

そして多分これが……。

「二人の言っていた“青いドアの家”なのか……」

「きつとそうだよっ。玄関青くて綺麗だしっ」

この家のことは話に聞いていたが、実際見るのは初めてだった。

表札のないその家はその名の通り、鮮やかな青の玄関扉を確かにつけていた。

外観はよくある分譲住宅のような作りになっており、ドアと屋根が青く塗られている以外にはこれといって特徴はない。

ただ、青と白のコンストラクトがこの世界とマッチしてそれほど違和感を感じなかった。

どこな廠かで静謐な空間に駅のホームと普通の家が建っている、不思議以外の表現がない。

それにどうやらこの家に電力が供給されているようで、二階からケーブルで繋がっているようだ。

そのことから誰かが住んでいることが伺えた。

「だーれーか、いーまーすかー？」

跳ねるように近づいたなでしこが、ひよこつとと窓の外から中を覗いていた。

リビングの中の家具が見えるが、誰の姿もない。

「誰もいないっばいねえー」

傍からみると通報もの行為をしてるなでしこ。

あえてスルーしたリンは青い玄関扉の脇に立ち、少し躊躇した後、思い切ってチャイムを鳴らしてみる。

ピンポーン、ピンポーン。

玄関越しに呼び出しの音が聞こえるが人が出てくるような感じはしない。

もう一度試してみるかと思ったら、いつの間にか傍に来ていたなでしが面白がって呼び鈴を連打した。

ピンポーン、ピンポーン。

ピンポーン、ピンポーン。

「ピンポーン、ピンポーン！ 各務原です！」

(…………小学生みたいな真似するなよ、恥ずかしい…………)

……

……

……何度鳴らしても、声を掛けても誰も出てはくれなかった。

不思議そうに首を傾げたなでしこは、さも当然のように玄関のドアに手を掛けた。がちやりと音がしてドアが開く、カギは掛かっていなかった。自分達以外誰も居ないのだから鍵など無用なのかもしれない。

なでしこはそのまま玄関ドアをすべて開けるつもりのようなのだ。

音もせず青いドアは開かれていく、その中は……。

……なんてことはない、中の玄関先も至って普通だった。

靴が一足もないのでモデルハウスかと思えるほどに小奇麗だった。

さすがにスリッパまでは置いていなかったが。

「おっ、じゃまします〜!!」

誰も出てこないのを言いことに、なでしこはそれこそモデルルームの見学者のように靴を脱ぎ、躊躇うなく家の中へと入っていった。

「……お邪魔します」

なでしこの厚顔無恥な振る舞いにリンはため息をつきながら、同じように靴を脱いで中へと入った。

……さすがに気になったので自分の靴と脱ぎ散らかしたなでしこの靴を揃えて置いた。

こんなことをしても不法侵入には変わりないのだが。

——本当にモデルハウスなんじゃないか？

そう思えるほどに家具は綺麗できつちりと配置してあった。

ソファアやテーブル、テレビもあり、ごく普通の家具しかない。

強いて違いを言うなら液晶テレビが壁に掛けてあるぐらいであとは何処にでもあるものばかりだった。

「ふおおおー、ふかふかだあ〜！」

勝手に人の家に入り込んでいるだけでも相当な行為なのに、そのソファアで勝手に寝ころんでいた。

「なんの番組かな？ 同じような映像に見えるけどねい」

更に寝ころんだままリモコンを手に取り、テレビの電源まで入れていた。

すつかりくつろぎモードのなでしこ、親戚の家か何かと勘違いしてるんじゃないだろうか。

かるい頭痛を感じながら、リンは立ったままテレビモニタの映像を眺める。  
白い地面の線路を電車が走っているような映像、カーブもなく直線ばかりなので同じ  
ような映像に見える。

あまりに代わり映えしない映像というのはさすがに退屈を覚えるものだ。

しかも音声も無いものだから尚の事詰まらない。

それに線路の上を走るだけの映像……既視感が無いわけでもない。

「……………こういうの動画サイトで見たことあるよ。電車の運転席のライブ映像。最近  
は海外からのが多いみたい」

「じゃあこれは外国の線路からのライブ中継かなあ？」

「どうなんだろう……」

そのまま二人は映像を眺めて続ける。

しばらく見続けるが、これといった建造物等が映らないので何も分からない。

海外というよりも異世界の映像にも見える程に殺風景すぎた。

「ねえ、リンちゃん。この映像ってここの世界でのライブ中継かも。だってほら外と同



じような景色だよこれっ！」

映像をじつと見ながら、なでしこは液晶テレビに指を差した。

なでしこにしては鋭い考察だったが、それなら別の疑問が浮上する。

「そう、かもね。だつたらどこ向けの映像を配信してるんだろう」

仮にここ電車のライブ映像だとしても何の意味があるのだろうか、まさか私たち向け？  
だとすればこのライブ中継が電車がホームに来る目安にでもなるのだろうか。

リンは窓の外の景色をぼんやりと眺めてみる。

改札口もない無人のホームに目を向けてみても、到着のアナウンスも電光掲示板も何もない。

つまり、ただ無意味なプラットホームだった。

ゆつたりと雲は動き、穏やかな時間が外と内に流れていた。

いつ来るか分からない電車を待つのに飽きたので、リンはなんとなく家の中を再度見渡してみる。

当たり前のようにキッチンもあつた。

よくある普通のアイランドキッチンで、食器等は置いてあるが使われてないかのよう

に綺麗で整然と並べられていた。

(やっぱりモデルハウスか？ でもここに建つても宣伝にもならないだろうに)

リンの視線がすでにテレビではなくキッチンに向けられていることに気づいたなしこは、同じようにテレビから興味をキッチンへと移して、跳ねるようにキッチンに近づいてきた。

料理を作るのが得意だったのでやっぱりキッチン関係の道具が気になるかと思ったのだが、まず最初になでしこが目を付けたのは案の定、冷蔵庫だった。

「何か食べ物あるかな〜？」

欲望を隠そうともせず、歌う様に冷蔵庫の扉をあげるなでしこ。

やはり居心地が良いのか、もはや自宅の冷蔵庫感覚だった。

「あっ！」

中を見て驚いた声をあげる、冷蔵庫の中は……予想と違っていたのか空っぽだった。

あうううう、落胆した声をあげるなでしこ、仮に中に何か入っていたら食べるつもり

だったのだろうか？

いや食べるだろう、コイツはそういうやつだ、リンは経験則からそう確信できた。

諦めきれないなでしこは野菜室や冷凍室まで片っ端から開けてみるが結局何一つ入っていないかった、氷の一欠けらさえも残ってははいない。

なでしこは脱力したようにぐだつとソファアに寄りかかった。

「アイスぐらいあると思ったのに……」

「バナナでも良いのになあ……バナナ……」

なでしこの食い意地に呆れたリンだったが、そんなことよりも先ほどから妙に落ち着かなかった、何かの疑問がずっと取れず違和感を感じていた。

そんな折、ソファアでぐだぐだするなでしこの背中を見てようやくあることを思い出した。

「私たちの荷物どうしたっけ？」

やけに身軽だったのでつい忘れ去っていたが、リンもなでしこも上下のジャージ以外身に着けていない、肝心のキャンプ道具一式を持っていなかった。

「あれ？　そういえばそうだねえ。どこかに忘れてきちやったかな？」

言われて他人事のように背中を確認するなでしこ、ずっと使いこんできたリュックさえも背負っていないかった。

「ホームに置いてきちやったか？」

「戻って取りに行こうよ！」

考えられるところだとそこなのだが、荷物を下ろした覚えはない。それでも確かめに行くしかなかった。

それにここに居たって特に変化はなさそうだし。

ソファアールから跳ね起きたなでしこと共に家の玄関に向かおうとしたその時。

「あなたたちの荷物はそこにあるわよ」

二人の背後から柔らかな声が響いてきた。

「うひゃああ!!」

「うわっ!!」

突然の事だったので大声を上げてのけぞってしまった。

恐る恐る振り返るとそこには綺麗な黒髪の女性が一人立っていた。

手には不思議な模様の鞆を大事そうに抱えて。

燐や蛍のような同年代の少女とは違う、大人の女性。

「あら、ごめんなさい。やっぱり驚いてしまうようね」

女性は頬に手を当てて、少し小首を傾げた。

やっぱりという事は前にもこういうことがあったのか。

未だに驚いて声も出ない二人に女性は言葉を続けた。

「それでこれはあなたたちの荷物で間違いないのかしら」

女性がすつと指を差す、その方向に目だけ向けると確かに私たちのキャンプ道具が積まれていた。

さつきまでそこには何も置いてなかったはずなのにどうなってるの？  
困惑の視線で女性を見ると、その女性は薄く微笑むだけだった。

「えっと、あの……」

リンは何かを問いかけようとしたが、その前に。

「立ち話もなんだし、そこへお掛けなさい。長旅で疲れてるんでしょ？」

「あ。はい！」

すつかり緊張しているなでしこが裏返った声で返事をする。

リンは頷くだけに留めた。

なでしことリンは長めのソファアに並んで座った。

女性は傍らの小さめの椅子に腰を掛ける。

沈黙した空気の中で先ほどまでのテレビの映像だけが悠然と流れていた。しかし音は流れていないので緊張感を緩和するには至らない。

女性の前でかちかちに固まる二人。

何か話さないと喉が枯れそうになるが、何から話していいか分からなかった。

リンは思わず横目でなでしこに合図を送るが、ぶるぶると首を振って拒否されてしま  
う。

(多分この人だよね……でも何て言って切り出そうか?)

こんなとき物怖じせずになががん行くはずのなでしこが、今は借りてきた猫の様に萎縮している。

この人の醸し出すオーラにやられたのか? 確かに只者ではない感じはするけど。

リンは俯いたまま、横目でちらりと女性の顔を見る。

目をまともにも合わせられないぐらいに綺麗な人だ、そういう意味ではなでしこのお姉さんに似ているのかもしれない。

少し古風な感じが顧問の鳥羽先生にも少し似てる……かな？ 雰囲気はまったくの別人だけど。

それにしても。

（変わった着物着てるよね。着付け大変そう……肩こらないのかな）

その容姿と服装から、この女性はお伽噺からそのまま出てきたような感じがあった。

思考が絡まっているのか、どうしても良い事ばかりが頭に浮かぶ。

隣に座るなでしこも珍しく口を引き結んで黙り込んでいた。

そんな様子を見かねてなのかは分からないが、女性はため息交じりに声を掛けてきた。  
た。

「あの子たちから色々聞いてるんでしょ？ この世界のこと、そしてわたしの事も……」



あの子たち、とは蛍と燐の事だろう、なでしこもリンもそう理解した。  
そしてこの人が二人の言つてたあの人なんだ、きつと。

「あの、えつと、あなたがその、”オオモト様”……なんですか？」

かなり不躰な質問になつてしまつたが、とりあえず聞いておかねばならない事をリンは尋ねた。

「ええ、そうね」

黒髪の女性——オオモト様は短く答えた。

それで納得した。

燐と蛍の言う”安全な場所”というのはここに違いない。

“青いドアの家”とそこに住む”オオモト様”、そうそう来れない場所とは言つていただけ、じゃあ、なんで”私たちは”ここに來れたんだろう。

いちおう周りを見てみるが、燐も蛍も今ここにいる感じはない。

「今、ここに居るのはあなたたちだけよ」

考えを見透かしたようにオオモト様が口を開く。

リンはバツが悪そうに愛想笑いを返すだけだった。

「じゃあ蛍ちゃんや燐ちゃんは後から来るんですか？」

それまで黙っていたなでしこが顔を上げてオオモト様に尋ねた。

「それは、分からないわ。ここは世界の狭間にあるの。あちらの世界とこちらが重なり合うとき、その僅かな時間だけ来ることができるのよ。もつとも誰でも来れるわけではないけれど」

母親が子にお伽噺を聞かせるように、柔らかい声色でオオモト様が説明してくれた。

……話の半分も理解出来なかつたけど……。

「えっと……に、日本語でお願いしますっ！」

混乱したなでしこが降参したようにペコリと頭を下げた。

（最初っから日本語だろ……でも私も理解できない……。あの二人は何か分かってたんだらうか？）

リンの脳裏に燐と蛍の顔が浮かぶ。

どこか透明感のある二人だったが、同時に憂いも帯びていた。

今思うと二人の雰囲気はこの青と白で構成された世界とよく似ていた。

純真さの青と潔癖の白。

燐と蛍はこの二色で出来ていると言っても良いぐらいに透き通っていた。

「あの子達は自分の進むべきところに向かっているわ。そしてそれはもうすぐ終わりを迎えるはず」

“ 終わり ” その言葉のニュアンスにとっても嫌な感じがしていた。

悪気のある言い方ではないが、不安な感じをより大きくさせた。

「私たちもそこに行きたいです。どうしたらいいんですか？」

リンはオオモト様の顔を見て問いただす。

まともに顔も見れなかった人なのに、今はちゃんと目を見て話すことが出来た。

この人ならなんでも知ってそうだし、何より私たちの助けになってくれそうだったから。

「あなたたちは……」

なでしこがごくくと唾を呑み込んだ。

リンも固唾を飲んでオオモト様の言葉を待つ。

「あなたたちは、とても幸運なのよ」

「私たちが……幸運、なんですか？」

オオモト様の言葉をなでしこが復唱する。

それは意味が分からないことを公言しているようで、疑問の色が見えていた。

「この町に来て、様々な不可思議な出来事に襲われたと思うわ。でも、あなたたち二人は今、無事でいる。それは幸運の働きがあつたからよ」

オオモト様は淡々とした口調でそう続けた。

言われてみると確かに幸運なのだろう。

でもそれは絶望の中の希望というか、地獄に仏といった感じの九死に一生を得ただけのことで、幸運を既知として感じたことなどなかった。

燐と螢と出会ったことはまぎれもなく幸運だったけれど。

それですべてを帳消しには出来ないほどに絶望を味わったのだから。

「だからあなたたち二人にはそのままの道を行って欲しかった。そうすれば元の世界に帰ることが出来たのよ」

オオモト様の言葉にリンとなでしこは顔を見合わせた。

だがそれは後悔の顔ではなく、むしろ……。

「実は……なんとなくそんな気はしてたんだよねい」

「……うん」

普段とは違うどこか諦めた感じの口調でなでしこが呟く。

その顔を見たリンもため息交じりに頷いた。

「そう、それならあの道に戻ったほうがいいわ。今ならまだ間に合うはずよ。すべてが消えてしまう前に」

「でもそれじゃあ、燐ちゃんと蛍ちゃんはもうなるんですか?!」  
普段、寡黙なリンが珍しく声を張り上げた。

博愛主義というわけではないけれど、それでも自分達だけ戻るなんて出来なかった。

「私たちだけじゃなくて、燐ちゃん、蛍ちゃんも助けてあげてくださいっ！ そのために私たちなんでもします！ ねっ、リンちゃん！」

縫う様な瞳でなでしこが訴え掛ける。

「うん。二人には色々助けられたんだ、だから今度は私たちが助けなきゃね」

リンはなでしこの訴えに深く頷いて答えた。

燐と蛍がいたからここまでこれたんだ、だから今度はその想いを返してあげるんだ。

二人にどんな辛いことがあるのかは分からない、それでもこのまま黙って帰るほど私もなでしこもそれほど薄情じゃないんだ、むしろお節介かもしれない。

帰る家は違っても、私たちはここから誰も欠けることなく四人一緒に出る、そう決めたんだ。

「あなたたち、燐と蛍のことは好きかしら？」

オオモト様はにこやかに微笑む。

その急な質問に、二人ともどきりとした。

「うん。燐ちゃんも蛍ちゃんも、大好き！ 二人は一緒にキャンプしてくれた大切な友達なんだ！」

「私も燐ちゃん、蛍ちゃんは好き、だよ。でも、だからこそ助けになつてあげたい……」  
大つぴらに好きを宣言するなでしこと、恥ずかしいのかたどたどしく言うリン。

二人の価値観の違いが垣間見えるようだった。

「リンちゃんつてば照れてる〜」

「う、いいじゃないか……恥ずかしいこというなよ」

なでしこが軽く肘でつついてくる。

それに照れ隠しをするように少し語気を強くしてしまうリン、やっぱりこういうのつて口に出すのは恥ずかしい、ホントに。

「そう……」

二人の告白を受けて、オオモト様は眉根を下げて瞼を閉じた。それは哀しさを表しているように見えて、少し空気が重くなった。

「だったら、尚のこと元の世界へ帰ることね。だってあの二人はそれを望んでいるのだから」

「でも、それじゃあ——」

すかさずなでしこが声を上げる。

でもその先の言葉が続かなかった。

「あなたたちは何を願い、何を望むのかしらね。すべてはあなたたち自身の中にあるわ。転がった石をまた戻そうとしても何も変わらないのよ」

静かな声でオオモト様はそう忠告した。

謎かけのような言葉になでしこもリンも考え込むように黙り込んでしまった。

私たちの中にあるということは、本心を知るといふことなのか。

互いの心の内を探るようになでしこもリン、お互いは自然に視線を合わせた。



——なでしこは。

——リンちゃんは。

何を本心から望んでいるのだろう……。

瞳を閉じて考えても心の内までは見えてこない。

それに転がった石とは、それは何の比喩なんだろう？

オオモト様の言葉は分からないことだらけだった。

「それって、どういう意味なんです………か？」

妙な胸騒ぎを感じたリンがオオモト様にその真意を問いかけようとしたのだが……。

「私、富士山大好きなんですよお。ほらこのシャツ、可愛いでしょ？」

「あら、本当に可愛いわね。あなたの富士山への愛を感じるわ」

緊張感のあつた空気は何処へやら、いつの間にかなでしこがジャージの前を開けてオオモト様に“富士山スキー。”Tシャツを見せびらかしていた。

それに呆れることなく素直に受け止めるオオモト様、その微笑みは幼い少女の面影を宿しているように見えた。

意味深な言葉を言つたばかりなのに切り替えが早すぎるといふか何といふか。

……この人は本当に何なんだろう……？

和やかな雰囲気ですす二人とは対照的に、リンは一人深いため息をついていた。



# Beautiful Girls

無造作に床に転がっている手毬。

二人はもうここには居ない、少女達の姿も声も荷物さえも消えてしまっていた。

少女達の行先……それは。

オオモト様は一人、ため息をついた。

転がった毬を拾い上げようと手を伸ばす、すると自分の胸の内が暖かいことに気づいた。

「みんなで、キャンプ……」

最後に交わした言葉を誰ともなく反芻してみる。

面白い子達だった、燐と蛍とはまた違った、無邪気で素直、それでいて恐れを知らぬ二人の少女。

少しの傷どころかその傷さえも気に留めないほど、見かけ以上に逞しい二人だった。ほんの少し前のことを思い返してみる。

口角が自然と伸びて笑みの形を作っていた。

……

……

……

白壁の部屋の中で毬はくるくると優雅に空中で踊っていた。

リンとなでしこ、そして手毬を投げているオオモト様も宙を舞う毬に視線を注ぐ。

様々な糸でかがられた幾何学模様の毬、その複雑な糸の絡み合いは、数奇な運命を物語るかのようで。

三人共、何かに魅入られたようにただ一点、毬だけを見つめていた。

「こうやって一人で毬と戯れていたわ。だってそれしか知らなかったの。一緒に毬を付

いてくれる人はいなかった」

オオモト様は手の中へ戻ってきた手毬に視線を落とす。

少し寂しそうに、諦めきったような憂いのある表情、この人はどれだけここで一人であったのだろう。

時を止めたように肅然なこの世界では、時間という概念が一切感じられない、その意味さえないほどに。

「あの一」

なでしこがおおずおすと手を上げる。

「ここって映画のセットなんですか？　いつの間にかここに来ちゃって良く分からない

んですけどっ」

照れたように頭を掻く。

なでしこがやたらとくつつろいでいたのは、この世界がテーマパーク的なものとして感じていたせいでもあった。

それは夜の小平口に比べると真逆のまひるの世界だったのだから無理もなかった。

「ここは……思いや願いによつて作られた世界なの。そういう意味では人工的なのかも  
しれないわね」

「……？　人の思いや願いで駅や線路が出来てるんですか？」

思わずリンは聞き返してしまふ。

そんなことが出来るのはそれこそ夢の中だけだ、現実ではありえない。

「出来る、ではないわね。出来てしまったのよ。色んな思いを、それこそ緬い交ぜにして  
ね」

「そんなこと……」

にわかには信じられない。

人がモノを作る為には材料や仕様書、道具などがあつて初めて出来るものだ。  
想像だけでモノが形作るなんてことは、常識じゃ考えられない。

……常識では到底計り知れない世界だけけれど。

「あつ！　じゃあキャンプで何か必要なものがあつたら想像すればいいんだねつ。だつたら荷物少なくて便利だねい」

オオモト様の不思議な理屈になでしこは無邪気に喜んだ。  
そんなことが出来たらむしろ怖い、それに多分……それは。

「あの、それってこの世界だけの特別ルールのなんですか？」

「……そうね」

ポツリと呟くオオモト様。

含みをはらんでそうな気がしたが、特に気に留めなかった。

「なあんだあ、残念だねい」

何やら残念そうにため息をつくなでしこ。

人の考えや想いだけで何でも出来ることの方が恐ろしいのに。

「この世界は人の思いがとても強く働く場所なの。それこそがこの世界のすべてと言ってもいいわね」

「じゃあじゃあ、何か食べたいって思えば美味しそうな料理が出てきたり、家に帰りたいって思えば帰れるってことなんですか?!」

なでしこがソファーから身を乗り出して聞いてくる。

その瞳は疑うことなく不思議な力への希望に満ち溢れていた。

「そうよ」

オオモト様は短く答えた。

嘘を言っている感じには見えないが、夢に近い世界だから何でもありってこと？

リンは腕を組んで考え込んでしまう。

「本当！　ねえねえ、リンちゃん。何かリクエストある？　私、身延まんじゅう食べたいなあ」

「なでしこ、落ち着け」



なでしこはリンの肩を掴んで、うずうずしていた。

漫画のような夢を叶えられると知って、試してみたくて仕方ないのだろう。

まあ、その気持ちは分からないでもない。

でもその前に聞いておきたいことがあったので、興奮しているなでしこをとりあえず落ち着かせる。

「あの……何かを叶えるには対価が必要だと思うんです。その、願いと引き換えに何かを失うってことはないんですか？」

リスクにはリターンがつきものである。

現実世界では何か欲しければ相応の額を支払うのは当たり前だった。

こんな異世界のような場所で一方的に良い思いをするなんてことはないはず。

下手をすると取り返しのつかないことになり兼ねないそんな気がしていた。

それにリンは最近それを身を持って実感していたのだ。

——志摩リンは最近原付の免許を取ったおかげで今まで以上にキャンプが楽しく

なっていた。

それ<sup>自</sup>ら<sup>転</sup>車<sup>車</sup>までと違って行動範囲が大幅に増え、これまで行きたくとも行けなかったキャンプ地や観光スポットにも行けるようになった。

ガソリンさえあれば何処までも行けそうなほどに、今や自身の第二の足となっていた。

だが同時にリスクを負う事にもなる。

原付バイクは公道では割と中途半端な存在で、歩行者、自転車はもとより、車に気を遣う場面が特に多かった。

そして何より事故が怖い。

原付バイクはその手軽さもあって油断しやすいし、自動車と走行レーンの為、巻き込まれ等による重大事故に遭いやすい存在だった。

これまでどこかまったりと生活してきた中で突然の命を失いかねない恐怖。

原付程度と思うが、アウトドアで危険な目に遭うよりもずっと身近で重大な危険があった。

修羅場というには仰々し過ぎるけれど、リンにはこの世界がそれほど安全とは思っていなかった。

「例えば、今ここでお饅頭を出したとするわね。それを食べた時あなたはどんな気持ちになるのかしら」

オオモト様は白い手のひらを差し出した、そこにはまんじゅうの代わりに毬が乗せられている。

代わりにしては大きすぎる、けど……オオモト様って見かけによらずお茶目なところもあるのかな。

「身延まんじゅうは美味しいからねえ。もう天にも昇る幸せな気分になっちゃおうよ。その毬ぐらい大きいのも食べてみたいなあ」

饅頭を口に頬張ったことを想像して幸福そうな顔をみせるなでしこ。

オオモト様の手にしている毬ぐらいのサイズでも、なでしこなら平気で食べられそうではあった。

「ふふふ、そうね。美味しいものを食べたなら幸せな気分になるのは当然ね。食欲は人間の三大欲求だものね」

少し楽しそうに笑うと、オオモト様は掌の毬に目線を合わせて言葉が続ける。

「でも、その幸福さと引き換えに何かが不幸になるとしたらどうかしら？ 例えばあなた達の身近な人に何らかの不幸が見舞われたとしたら……」

「えっ、そんなのダメっ！ それならお饅頭いらないもん！」

興奮したなでしこはつい唇を震わせてしまっていた。

「ごめんなさい、脅かすつもりはないのよ。でも……」

オオモト様はなでしこに謝罪すると窓の外を見ながら言葉が続ける。

「世界はそういう構造になっているのよ、良いも悪いもバランスを保っている。良くないことがあるからこそ、そういう、幸せを実感できるのではないのかしら？」

「……」

なでしこもリンも黙ってオオモト様の言葉に耳を傾ける。

「この町は幸運だけを求めてしまった。その結果、歪みが起きてしまったの。そのせいで夜が終わらなかつたり、顔のない人々の存在、すなわち不条理が出てしまったのね」

「……そんな事って実際にありえるんですか」

眉をひそめてリンは恐る恐る尋ね返す。

オカルトの類はそこまで嫌いでもないけれど、幸運と歪みの関係が何も分からない。リスクとリターンだとしても代償があまりに大きい気がする。

「あなた達も遭遇したのでしょうか、日常ではありえないことの数々を。あなた達がこの町で体験したことは幸運を求めた人の歪みが生み出したもの。それが“偶然”起こっただけなのよ」

「偶然……ですか……」

リンはやはり困ってしまった。

脳はまるで理解出来ていないのに、情報として理解しないといけなくなってくる。

「リンちゃん、私に分かりやすく教えてよお〜」

ジャージの袖を掴んでででしこが泣きそうな目で縋りついてくる。

リンはそれに困った顔で返すことしかできない。

分からないものを教えることなど出来るはずもなかった。

「でも、幸せを求めただけでこんな事になるんですか？　なんか極端すぎて、その……」

今のリンにはこの程度の質問しか出来なかった。

情報量が多すぎて頭が上手く回転してくれない。

理解が追いつかないことがこんなにストレスフルになるなんて。

「この町には強い力が働いていた。幸運を引き寄せる強い力があつたのよ」

「強い……ちから？」

人差し指を顎に当てて、なでしこが口をへの字に引き結んで首を傾げた。

幸運を呼ぶものとしてなでしこが想像したのは巨大な青い鳥だった。

やたらと巨大だが愛くるしい姿を想像して、少し心が暖かくなる。

でも、そんな彫像っぽいとか小平口町にあつたっけ？

オオモト様の言葉は理解出来なかつたので、なでしこの心は完全にそつちに向いてた。

「でも強い力はその反動も大きかった。強い薬は即効性もあつて効果も高いですよ。でもその分、副作用も出てしまうわ。それと同じように町にも少しづつだけ歪みが溜まっていったの」

「それが溜まり続けたから？　小平口町はああなつたんですか？」

「ええ、そうよ」

かなりシヨッキングなことなのにオオモト様はあつさりと答える。

リンは終始苦笑いのままだった。

（うーん、納得したよう नाही ような……でもこの人は原因が分かっているみたいだ

し)

「えっと、すみません」

小さく手をあげてリンがオオモト様に向き直る。

なんとなく面接をしているような気になっていた。

「その、小平口町を元に戻す方法ってあるんですか？　オオモト様の説明だとそうしないと私たちって戻れない気がするんですけど……」

「それでもないのよ。だってあなた達二人は別の切符を持っているから」

「え、きつぷ？　別の……?!」

なでしこはジャージのあらゆるポケットに手を突っ込んでみるが、どこを漁っても何も出てきやしなかった。

リンもつられてポケットに手を伸ばすが、それっぽいものは何も持っていない。オオモト様からかわれた訳でもない——みたいだが。



困惑した二人は思わずオオモト様の顔を見つめる。

……微笑みを返すだけでそれ以上何も言ってくれなかった。

外の静けさが部屋の中にも入り込んでいた。

なでしこもリンも心の中はもやもやとした気持ちで渦巻いていたが、もうこれ以上何を聞いたらいいのか分からない。

オオモト様もただじっとこちらを見つめているだけで、これ以上話を振ってくれそうになかった。

「あつ！ えつとお！」

沈黙に耐え切れなかったのか、なでしこが何かに打たれたように急に立ち上がった。

「こ、こ、こで待ってればそのうち蛍ちゃん達も来るんじゃないかな？ どうかなあリンちゃんっ！」

「あ、そ、そうだな。ここで待ってればくるかも」

なでしこの緊張感が伝わってきて、リンも上擦った声をあげてしまう。そのせいか、ワザとらしい会話になってしまった。

「あなた達はもうすぐ元の場所に戻されるわ。ここに長くいることは出来ないのよ」  
「そ、そうですかっ」

突然話しかけられたので、びくっと身を震わせてしまう。  
オオモト様に怒られたわけでもないのだが。

「戻るって……?」

「どこに戻るのかはあなた達次第よ。もつとも、もうこの町に留まるのは止めたほうがいいけれど」

その言葉からリンとなでしこは部外者なんだと思った。

でも、燐と蛍は小平口町がこうなったことに何か関わっているんだろうか。

思考は新たな疑問でぐるぐるとループしまくっている。

このまま何も知らぬまま帰っていいはずはないけれど、私たちに何が出来るんだろう。

「私たちが願えば元の世界に戻れるかもしれないですよね」

「ええ」

「じゃあ私たちが燐ちゃん、蛍ちゃんの傍に戻りたいって願ったら戻れるんですか？」

リンは幾分緊張した声でそう訊ねた。

「あの子達の傍に戻りたいの？」

「うん。だってもう二人は野クルのメンバーなんだから一緒に居たいんだっ。それに友達が困ってるなら助けてあげないとねい」

リンの代わりになでしこが答える。

すっかり野クルの一員になって、いることにはもう気にしなかった。そしてリンもなでしこと同じ気持ちだった。

「そうだね、なでしこの言う通り、私たちはもう友達なんだ。だから四人一緒にこの世界から出なくちゃ意味がない」

「そう……」

一言だけ呟いてオオモト様は手にした鞆に視線をおとす。哀しそうに眉根を下げるが、二人の気持ちに揺らぎはなかった。

「あの、切符ってあそこのホームで売ってるんですか？ 二人の分も買っておいたほうが良いみたいですし」

「リンちゃん！ 私、ちよつと行って買ってくるよっ！」

いつの間にか財布を手をしているなでしこがプラットホームを指差していた。

リンがなでしこに頼もうとする前に――。

「お待ちなさいな」

今まさに駆け出して行こうとするなでしこをオオモト様の柔らかい声が呼び止めた。

「もう切符は必要ないわ」

「えっ、でも……」

呼び止められて困惑するなでしこ。

その焦った気持ちを表すかのように体をもじもじとさせていた。

「ここからはあなた達の足で歩くしかないわ。四人で出るというのはそういうことよ」

「歩く……か」

言われてリンは自分の足を見つめてみる。

ずっと同じジャージだったので大分汚れているが、歩くのには支障はない。

「振り返らずに前だけ見て進みなさい。あなた達に出来るのはそれだけよ」

そう言つてオオモト様は立ち上り何処かへ行こうとしていた。

長い髪をふわりと棚引かせて、奥の部屋への扉を開けようとする。

「あの……」

「……」

「わがまま言つたみたいですすみません。でも助かりました。有難うございます」

リンはその後姿に静かに声を掛け、丁寧に頭を下げてお礼を言った。

その様子から日ごろからの器量の良さが伺えた。

「オオモト様っ！」

対照的になでしこは元気な声をオオモト様にかける。

「私たち野外活動サークルは皆でキャンプやってるんです。よかったら今度一緒にどうですかっ？」

なでしこは無邪気にオオモト様を誘ってみた。

あの時のリンを誘ったときの様に、無邪気な笑顔を向けて。

「わたしが、キャンプ……っ？」

予想だにしてなかった言葉だったのかオオモト様は足を止めてこちらを振り返った。

「はい！ 皆でキャンプするのすっごく楽しいですよっ！」

「うん。みんなでキャンプもたまには良いもんだよね」

その意見にリンも多少は同意を示す。

「もー、リンちゃん素直じゃないー。家に戻ったらすぐにでもソロキャンに行くつもりでしょー」

「そ、そんなことは考えてないぞ……多分」

凶星を刺されたのかリンは驚いたように身じろいでしまう。

みんなで色んな場所に行ったが、結局ソロが自分のスタイルにあっていた。

「ふふっ、この世界から出た先の未来を考えているのね」

「あー、はい。早計ですよね」

リンは何となく恥ずかしかった。

私もわりと欲望が強いのもかもしれない。

「それでいいのよ。目的があるから前に進むことが出来る。それは未来への欲望があるから」

「あなた達四人、はとも綺麗な存在。だからもうこれ以上傷つくことはないわ。すべてを捨てて逃げなさい」



「そう過去の柵しがらみも何もかも。ここでの事も忘れて、すべて捨て去るの。そうすれば道が見えるかもしれない」

オオモト様は話続けた。

まるでもう言葉を忘れても良いぐらいに私たちに語り続けていた。

「燐と蛍にもそう伝えてほしいの。わたしが出来ることはもうそれだけだから」

「オオモト様……?」

オオモト様の言い方に僅かな違和感を感じたが、それに対して疑問は呈しなかった。

「あなた達が行きたい場所を心の奥で強く思い描いてみて。そこが本当に行きたい場所  
よ」

リンとなでしこはその言葉に強く頷いた。

二人は荷物を手に取って出発の支度をする。

ここに居たのは極わずかだったけれど、とてもリラックス出来た気がする。走り回った疲れもいつの間にか取れていた。

「リンちゃん」

なでしこがおもむろに手を握ってきた。

突然の事だったのでリンは少し戸惑ってしまう、でも視線はなでしこを捉えたままだった。

「うん」

それ以上、何も言わなくても分かった。

想いを、手を重ね合わせないと全てがばらばらになりそうだったから。だから手を繋いできたんだ。

「オオモト様っ！ 蛍ちゃん燐ちゃんと一緒にみんなでキャンプやりましょう！ 色々な面倒な事もあるけどすっごく楽しいですよっ！」

なでしこは満面の笑みを湛えながら手を振った。  
リンも何とはなく手を振って置いた。

オオモト様は少し困ったように微笑み返すだけだった。

二人はお互いに向き直ると、両手を取って心の中にあの場所を思い描く。

行きたい場所。

行かなくちゃならない場所。

はつきりとしたビジョンは見えないけど、感覚だけでそれを探り出す。

閉じた瞳の奥に二人の少女の影を垣間見た気がした。

ふいに瞼の裏側が白い光を感じだした。

ここに来た時と同じようなまばゆい光。

そうか、この青いドアの家に呼んだのは……。

意識が白い光に包まれる瞬間、頭の上に毬が落ちてきて、それと同時に二人の姿は消

えていた。

残ったのは床に転がった鮮やかな模様の手毬と、そこに佇む黒髪の女性だけだった。

……

……

……

「蛭はまた後ろを振り返ってしまった。

もう気にしないつもりだったのに、それが余計に気にさせていたのだろうか。

無意識のうちに横目で背後の道を伺ってしまう。

「やっぱりあれは気のせいだったとしても、それでもどこか期待があるのかもしれない。」

「ねえ、蛭ちゃん。ちよつとだけ休憩しよつか？」

前に行く燐が苦笑しながら駆け寄ってくる。

「えっ、どうして」

「なんだか疲れてるみたいだし。それに」

隣に並ぶ燐、そつと手を取ってくれた。

暖かく柔らかい燐の手、その優しさに包まれているようで虫は安心する。

「……」

「わたしも気になっちゃうんだよね。未練がましいかな」

「……そんなこと、ないよ」

二人は並んで来た道を再度振り返る。

追ってくるものはやはり誰も居ない、遥か頭上の雨音が静かにそれを告げているようだった。

とても長い緑のトンネル、もうかなり歩いているはずなのに一向に出口は見えてこな

い。

県境までかなりの距離はあるけれど、それでも終わりが見えてきてもいいはずだった。

そこは出口か、あるいはただの行き止まりなのか。

そのどちらにせよ、何かを期待せざる負えない。

それほどまでに代り映えしなかった場所だったから。

「やっぱり追ってこないね」

「うん。だとしたらちゃんところから出られたのかもね」

二人の願い、それは自分たちが小平口町から出ること。

そしてあの他県からきた二人も小平口町から出ること。

どちらか一つは達成しておきたかった。

だからあの二なでしこ人トリンだけでも出れたのは良かったと思う。

「じゃあわたしたちが戻ってみる？」

「それは……多分無理だと思う」

もしあっちの道が出口に通ずるのならば戻るのもありだと蛭は考えていた。

けれど燐はそれに首を横に振った。

別に否定したいわけでもないけれど、この世界はもうわたしたちの選択の余地はない気がしていたのだ。

「そうだね……戻っても、戻らなくてもきつと同じだもんね」

「そーゆーことだよ。行先は変わらないんだよね多分……」

諦めているわけじゃない、でも後戻りも出来ない。

それはこの世界になつてから何処かで考えていたことだった。

燐も蛍もこの狂ってしまった世界で何かをする必要があつた。

それは漠然としていて形を成さないが、対峙や決着の類だとは思っていた。

逃げ出したいけど逃げられない。

あのヒビのようにどこまでもどこまでも追ってくる。

暗い感情が頭を擡げそうになり、燐は涙が零れそうになるのをぐつと堪えた。

「それなら行くのか。わたしたちの進む先へ」

「うん……でも、蛍ちゃん……」

「わたしは燐と一緒に行くよ。ずっと、ずっと、だよ」

蛍はこの傷だらけの親友を何としても助けてあげたかった。でもそれは難しいのかもしれない、だったらせめて一緒に、ずっと一緒に……。

「そっか、わたしも蛍ちゃんと一緒にだよ」

蛍と燐は固く手を握り合って歩き出した。

今の二人には前も後ろも、夜も昼も関係ない。

行くべきところは一つだけだった。

それが分かったから、進むべき方向に進むのだ。

多分、待っているはず、何かがかならずあるはずだから。

(えっ……！)

何かがいた。

道を塞ぐようにそれは立っていたのだ。

二人の行く先を拒むように立っている二つの影。



だがそれはとても良く知っている少女達だった。

「ばきゅーん！　ここから先は通さないよん！」

「待ってたよ」

片手を拳銃の形にして仁王立ちする元気な少女と。

それをなるべく目線に入れないようにして、こちらに小さく手をふる小柄な少女。

「なでしこちゃん、リンちゃん……でもどうして？　だつて」

「後ろからじゃなくて、わたしたちより前にいるなんて……？」

蛍も憐も驚きを隠せなかった。

あの時別れ、そして追ってこなかった少女達が目の前にいたのだから。

「それは秘密ですっ!!」

「なんでだよ」

たまらずツツコミを入れるリン。

こほんと軽く咳ばらいをすると、ことの経緯を話し始めた。

「私たち、青いドアの家の世界に行ったんだ。そして……オオモト様に、合ってきた……」

“青いドアの家”。

蛍は何となくそんな気はしていたのだが、実際に自分達以外の人が行ったことには少し動揺していた。

だからといって特別扱いを受けていると思ってたわけではないけれど。

燐は……もう一人あそこに行った人がいることを漠然と理解していたので、蛍ほどは動揺していなかった。

でも、青いドアの家に行ったのなら、なんで二人はここに居るんだろう。それだけは理解出来なかった。

「それでね三人でトランプしたら今度はリンちゃんが負けちゃったんだよー！」

「ま、まだ負けてないっ」

あの勝負は途中で有耶無耶になってしまつて決着はついていなかった。

もつともジョーカーを引かされた時点ではリンは気持ちの上では負けていたのだけ  
れど。

「なんか楽しそうな情景が見えてきそうだね」

「ほんと。わたしたちも参加したかったな」

蛍と燐は口を揃えてくすくすと笑っていた。

あどけない笑い声に、リンは恥ずかしさよりも二人に微笑ましいものを感じていた。

そしてその様子に安堵する。

まだこの二人は絶望していないんだ、だったらきつと……間に合うはず。

「私たち四人で帰りたいて願ったらここに居たんだつ。だから帰ろうよみんな一緒に  
！」

「なでしこちゃん……でも、いいの？」

蛭は戸惑った表情で呟いた。

オオモト様の導きがあればきつと出ることが出来たはずなのに。

「うん。私たち間違っていないよね、リンちゃん！」

「ああ、こつちが正解の道だよ。間違いなく」

根拠はなかった、でも正解もない。

それは自分たちの足で見つけるものなんだ、だから間違いないはず。

「そっか……じゃあまた進むしかないよね、四人で」

燐はそつと呟いた。

二人が四人になって、一度別れた。

でもまた四人に戻ってしまったのだ、これは運命なのかそれともたんなる偶然なのか。

それを決めるものなどいない。

廃線跡に出来た緑のトンネルの中を談笑しながら歩く四人の少女。

それは少し前と同じようで、少し違っていた。

終わりはあるのかもしれないが、終わる必要性もなかった。

だってここには友達だけ、大切な友達だけしかいなかったから。

だからこのままずっと、ずっと一緒に良かったんだ。

……

……

……

「こーゆーの、〃こえつどーしゅー〃って言うんだよねっ?」

得意げな様子なのでしこが自信満々に聞いてくる。

「何か違うかい」

「うん。違うよね」

冷静なツツコミをいれるリン、蛍もそれに続いた。

「なでしこちゃん、それを言うなら雨降って地固まる、だよ」

少し困った顔で燐が訂正する。

「えー」

「えー」

「あつ！ 蛍ちゃんまた、えーって言ったあ。リンちゃんも！ わたし間違っていないもんっ！」

総ツツコミをもらうとは思わなかったので、燐は両手を上げて憤懣やるかたないといった仕草をみせる。

「なでしこちゃんなら分かってくれるよね、ね？」

藁にも縋る気持ちでなでしこに問いかける。

「……ええーっ！」

「もー、なでしこちゃんには言われたくないー！」

少女達の無邪気な笑い声。  
それはこの世界で唯一の生きている音だった。

## Switch machine

ぽっん、ぽっん。

遙か頭上の葉の屋根から雨音が静かな音を奏でていた。

静寂なトンネルの中に響く不規則な音色、それはどこか心地よく、懐かしさを感じさせる。

制服と体操服に身を包んだ四人の少女。

学校は違うが同じクラスの同級生のように仲良かった。

名前は偶然にも同じものがあったが、性格や趣味などに一部共通のものがあつたにせよ、普通では出会うことがなかったはずの四人の少女達。

そんな四人が言葉を出すことも忘れて立ち尽くしている。

絶望というより、困惑、疑念、戸惑い、それらが混ざり合つて各々に伝播していた。

——だつてまた分かれ道。



無情にも同じような分かれ道があったから……。

ただ、前の時とは決定的な違いもあった。

今度は分岐とともに標識も立っていたのだ。

燐はこれを見つけたのだろう、白く、背の高い無骨な標識を。

それは分かれ道のちようど真ん中、道案内をするようにそびえ立っていたのだ。

一般的な鉄道標識とは違って、登山道などでよく見かける、行先を示す矢印が付いているだけの簡素な標識だった。

しかも左右に矢印の表示はあっても、そこには何も書かれていない。

何処行きなのか、そこまで何メートル掛かるとか、標識として肝心なことは一切書いていなかった。

ただ白いだけの標識、だがその白くそびえたつものは、あの“白い風車”のように見えて、燐は軽いデジャビュを覚えた。

山の上に一基立っていた白い風車。

もうここからじゃ見えないけれど、あそこは燐にとって辛く、とても悲しい想いを呼び起こす場所だった。

……ふいに右手が暖かくなった。

何事かと見てみると、蛍がそつと手を握ってくれていた。気遣うような瞳を向けながらそつと寄り添うように。

「燐……大丈夫？」

「……うん」

大丈夫の代わりに蛍の手をそつと握り返す。

柔らかく、そして愛おしさを包み込むように指を絡める。ここまでこれたのは蛍ちゃんが傍にいてくれたからだからまだ、まだこのままで……。

(でけー)

リンは標識の下にしやがみ込んで、下から見仰いでいた。

緑のトンネルの中はあまりに変わり映えしなかつたので正直退屈を覚えていた、あまりに退屈すぎて眠りながら歩いてしまうほどに。

そんな中で現れたこの白く簡素な標識にリンの心は一時的に奪われていた。

些か不謹慎とは思つたが、こんなものでもこの退屈を埋めるには十分すぎるものだった。

「むううう、これは何の意味があるんだろお？」

一方、以外にも標識の前で一人考え込んでいるのはなでしこだった。

何かあればまず真つ先に飛びついてくるのはなでしこなのに、今回はやけに慎重だった。

それと言うのも、これはオオモト様の仕業だと思ひ込んでいたので、何の目的があるのかを珍しく真剣に計り兼ねていたのだ。

ただ行先が書かれていない以上、この標識は何の役にも立たない。

目印としての役割しかもっていない標識に何の意味があるのだろう。

それとよくよく見ると擦れた文字で何かを書いてあるのを微かに判別できる。

でもそれだけだった。

その文字が読めなければ書いていないのと同じで、これはただの物体オブジェクトでしかない。

それは使われなくなった灯台と一緒。

撤去されることなく残っているのはそれすらも面倒なのか、それとも目的があるのか。

意図も意思さえも、この狂った小平口町で分かっていることは殆どないのだ。

すこし飽きたのかリンは標識から目を離して、左右に分かれた道に目を配ってみる。

この道の感じも前の分岐と変わっていない……気がする。

悪い意味で変わり映えしていない。

左右に線路が延々と伸びていることも、見通しが悪くその先がまったく見えないことさえもまったく一緒だった。

間違え探しをしても分からないほど似通っていた。

(でも……これは違う)

リンは線路わきにある、鉄で出来たレバーとその装置を横目で見やる。

それは“てんてつき 転轍機”と呼ばれる、線路のポイントを切り替える金属製の装置だった。

鉄製のそれは、かなりの間放置されていたのか、ところどころが錆でボロボロになっていた。

それはちょうど廃線跡の線路と一緒にあった。

そのことから同じような時期から今日まで放置されていたのだろうと推測できる。

分岐を手動で切り替えるためのレバーがあり、持ちやすいようにグリップも付いていた。

極めてシンプルな構造をしているが、動くかどうかは微妙なところだ。

それは長い間使われていないのが見て分かるほどに錆びていたので、引いたとたんに折れる可能性のほうが高そうにみえる。

それぐらい脆く、意味のないものに思っていた。

でもあの白く意味のない標識も、錆びついてボロボロの転軸機も、なんとなくわざとらしさを感じる。

この狂った世界が作り出した不自然な力の流れから出来たもののように思えてならない。

その方が自然に思えるほどにこの世界はおかしなことが多かったから。

いる様でいらぬもの。

必要なようでもよいもの。

何かがおかしくなったこの町ですつと思っていたこと。

燐も蛍も。

なでしこもリンも。

何の為にそしていつまでここにいるんだろう。

そして——何をさせる気なのだろう。

白い標識はわりと太い木で作られていて、緑に覆われた中で一際異彩を放っていた。少し気分が落ち着いてきたのか、燐も改めて分岐の起点から両方の道筋を眺めてみる。

正直、もう測量の真似事をする気にもならない。

どちらの道が間違っているとも、別れて進むことなどしないであろう。

それはきつとみんな同じ気持ちのはずだ。

そうでなければリンちゃんもなでしこちゃんもここへは戻ってこないはずだし。

出ようと思えば出れるはずだったのに戻ってきてくれた二人、ちよつと複雑な気分

だったけど、今は素直にその気持ちを受け止められる。

だからってどっちの道を進んだらいいのかは分からないのだけだ。

「ここは燐ちゃん1号の予知能力を使う時がきたんじゃないかね。ふおふお」

なでしこがぴよんぴよんと跳ねながら燐の腕を取って話しかけてきた。

あれこれ色々と考えてはみたけれど、結局なでしこには何の結論も出せなかったの  
で、燐を構うことにしたらしい。

「予知かあ……あ、ひよつとしてこれを使えってこと？」

燐は背中に差した鉄パイプを引き抜いてみる。

あの単純なことを試したいんだろなあ、多分。

とりあえず燐は分岐の中心部分に近い線路の枕木に、持っていた鉄パイプを置いてみることにした。

L字に曲がっている部分を下にして、そつと手を離してみる……。

枕木の上でL字のパイプがゆらゆらと不安定に揺れていた。

どつちに倒れるんだらう。

燐もなでしこも固唾を飲んでパイプの倒れる様を見守っている。

「ふおおおお、ふ、ふ、これはっ……!？」



なでしこはことさら大げさに驚いてみせた。

鉄パイプは意図せずに、そのままバランス良く枕木の上に静止してしまっただ。

神業的なことが今、起きていた。

……こんなしようもない事だが。

「あははは、ごめん。上手くいかなかったよ」

なでしこの思惑通りに行かなかったことに憐は頭をかいて苦笑いした。

むしろこれは上手くいったほうである、無意味すぎることだが。

これでいわゆる鉛筆立て占いは失敗した。

安定しやすい鉄パイプで鉛筆の代わりをするのがそもそもの間違いであるのだが。

「むむむ、1号のチカラを持ってしても先が見通せないとは……これは困ったのお」

枕木の上に器用に立つ鉄パイプを見ながら、なでしこがうんうんと唸っていた。

だがもし鉄パイプがどちらかの方向に倒れていたら……行先はもう決まってきたの  
だろうか。

だとするとこれで良かった気がする。

こんなことで決めるのは流石に怖いしね。

「ねえ、やっぱりこれ動かないのかな？」

「古そうに見えるし……どうだろ」

蛭とリンはあの転轍機の前にいた。

もう動かないんじゃないかと思えるほどに錆と苔まみれの黒い鉄の塊。

レバーが一番下まで下りたままになっていたので、引き上げることは出来そうだ。

だが、このまま何年も放置してあったとしたら……もうこのまま錆びて固まってるか  
もしれない。

それに引いたところでポイントが切り替わるだけだ。

現状には影響ないだろう、列車を待っているわけでもないのだから。

それでも今この場で出来そうなことはこの転轍機のレバーを引き上げてみることで  
け。

それは大きな岩を頂上に運ぶように無意味な行為なのかもしれない。

「蛸ちゃん、どう？ 何か分かった？」

「レバーを引いたら落とし穴が出るかもねえ。ほら、消えるマキユーとかそんな感じで」

燐となでしこも鉄パイプ立てを諦めて、喋りながらこちらへとやってきた。

四人は転轍機の前に集まって、それぞれ好き勝手な事を言っていた。

さつきから色々考えては見るものの何も答えは出ない、だとするとするべきことは一  
つだけだった。

「むきき——！！ はあ、はあ、リンちゃん、やっぱり動かないよこれ……」

軍手をはめたなでしこがチカラ尽きたようにそう呟く。

「やっぱりダメか……まあ、そんな気はしてたけど」

リンはレバーが動かないことに大して驚きもせず、しげしげと黒い転轍機を見つめる。

朽ちてはいるが、駆動部分は無事な気がする。

だとすると問題は……。

「むむむうっ！ リンちゃん分かっててやらせたのっ!？」

「まあ、そう言うな。ものは試しと言ったのはなでしこじゃないか」

「むうう……まあ、そうだけどお……」

リンの指摘に腑に落ちない表情を見せるなでしこ。

何だかんだでこういうことを率先してやってくれるなでしこをリンは頼りにしていた。

主に実験台としてだが。

「それじゃ、油掛けてみるよ〜?」

燐はレバーの可動部分に持ってきたオリーブオイルをかけてみた。

これはなでしこが料理をする為にわざわざ持ってきたものだったが、結局使ったのは異変が起きる前の初日だけだったので、割と有り余っていた。

本来なら機械用の油を使うのが一般的だが、さすがにそんなものまでキャンプに持つてはきていなかったたので、代用品として使ってみることにしたのだ。

「これで動くの?」

「うーん、オリーブオイルだしねえ……」

「とりあえず浸透するまで少し待ってみよう」

オイルが機械に流れるさまをじっと見つめていた。

すると辺りに独特の香りが漂ってきて思わず思考が停止する。

「オリーブオイルの香り……堪らないよお……。パスタもいいしお肉にも合うんだよねい……」

涎を零しそうなほどに、なでしこがウツトリとした表情で流暢に話し出す。

その説明は三人の食欲にも訴えかけるほどに魅力的なものだった。

「あっ!?　　そういえばかける前に嘗めとけば良かったよお!　　今ならまだ間に合うかも……」

血走った眼を転轍機に向けながらなでしこが襲い掛かろうとしていた。

その瞳は獣のそののように鈍く光っているように見えていて本当にやりかねない気がする。

ここにいると食欲が刺激されてお腹がなりそうなので、嫌がるなでしこを無理やり引つ張つてあの白い標識の下まで移動することにした。

少女たちはそこに腰を下ろし、オイルが馴染むまでの間、しばらく休憩を取ることにした。

勿体無い、モツタイナイと暗く呟くなでしこは放っておいて、三人は他愛ない話を花を咲かせた。

「リンちゃんはアルバイトしてるんだっけ？」

「うん。たまたま近所の本屋さんで募集してたからね。アウトドアって結構お金かかるし、お小遣いじゃ回らないんだよね」

「そうだよねえ」

アウトドア用品は需要との兼ね合いでどうしても割高になってしまふ。

高校生が楽しむには安物を買って工夫するか、バイトなりしてお金を稼ぐしかないわけ。

リンの気持ちは燐にも良く分かるものだった。

「燐、アルバイトに興味あるの？」

「あー、まあ、ちよつとね……でも部活あるからなあ」

「私はバイトながら部活もしてるよん！」

さつきまで落ち込んでいたはずのなでしこが突然会話に加わってきた。

「……野クルは放課後まともな活動してないじゃん」

「まあ、部員三人しかないし、時間会わなくて不定期だしねえ」

野クル部員はなでしこだけでなく他の二人もバイトをしているため、三人集まつての活動はわりと稀なことであつた。

「だから燐ちゃん、螢ちゃんが野クルに加入してくれれば正式に部として認められるんだよ〜！ 一緒にやろうよ〜！」

二人の手を取って懇願してくる。



燐と蛭は顔を見合わせて苦笑いをするしかなかった。

「いや、他校の生徒が入部したらだめだろ」

やや呆れ顔のリン。

2年生になつてもこの調子で誰彼構わず誘うものだから、結局野クルはなでしこ、千明、あおいいつもの三人のサークルのままだった。

それはそれでお気楽で良いのだが、部活として認められないので部室も狭いままだし、部費も満足に貰えない。

その為、バイト代はもっぱらキャンプ用品に消えてしまっていた。

「野クルは部活の枠にとらわれない」ぐろーばるなサークルなのですつ。他校の生徒でもウエルカムだよ。だからお願い、ちよつとだけでいいから、ねっ」

なでしこは小動物めいた目で頼み込んできた。

蛭はこの手の頼みごとにことさら弱かったので、割と真剣に考えてしまう。

「じゃあ、燐が一緒ならちよつとだけやってみようかな」

「本当？　ありがとう蛍ちゃんっ！」

がぼつと抱きついてくるなでしこ。

ただ単に抱きつきたいだけじゃないのか、と疑いのジト目でリンは見ていた。

「じゃあ、後は……」

蛍の胸に顔を埋めながらこちらに期待に満ちた顔を向けてくるなでしこ。

燐の額に嫌な感じの汗が浮かんだ。

「うくん、わたしは……」

なでしこの純真な目で見つめられると燐も無下には断れなくなってしまう。

蛍もそれを見越しているのか、ニコニコと楽しそうな表情をみせていた。

「嫌なら断ってもいいんだよ」

隣に座るリンがひそひそと耳打ちをしてくる。

「もー、リンちゃんっ！ リンちゃんは野クル部員じゃないんだから変なこと言っちゃやだよお……」

その様子を見たなでしこは子供が駄々をこねるような表情をみせた。

何度か野クルとのグルキャンに参加している斎藤恵那と志摩リン、それでも部活に入るのだけはずっと拒否されたままだった。

理由を聞くと、自分の時間が大事とのことだが……。

(野クルに入ったって好きな事結構やれる気がするんだけどなあ……)

仲が良いだけに一向に入部してくれない二人になでしこは割とヤキモキしていたのだ。

恵那ちゃんもリンちゃんもキャンプ好きなはずなのに……。

はいはい、とリンは肩をすくめる。

なでしこの気持ちがあつていたので、リンにはこれ以上口を挟む気はなかつた。

「はうう、やつぱり燐ちゃん。私たちとキャンプするの嫌なの？」

潤んだ瞳を向けながらなでしこが顔を覗き込んでくる。

その様子からよほどキャンプが好きなのが分かつてきて、燐はたまらずため息交じりの声をあげる。

「う、もう分かつたよお。ここから出られたら蛍ちゃんと一緒に見学しに行くつ！  
それでいい？」

苦笑いしながら、こう答えるほかなかつた。

燐としては最大限の譲歩をしたつもりである。

いくら隣県と行つても毎回山梨まで行くのは大変だし、何よりホッケー部ではレギュラーメンバーなのだ。

燐の所属するホッケー部は活動時間も長く、休みの日でも容赦なく呼び出すものだから、バイトどころか遊ぶ余裕さえもままならなかつた。

部自体は楽しくてもそこだけは改善してほしい、燐は常々そう思っていた。だからちようどいい機会かもしれない。

ここから出ることが大前提だが、新しい何かにチャレンジすること、それは不安なことであると同時にこの先の楽しいことなのだから。

「うんうん。見学しにきたらきつと野クルに入りたくなくなるからね。期待しててよん」  
先ほどの不安な瞳とは一転、自信満々なでしこに戻っていた。

「良かったねなでしこちゃん」

「蛍ちゃんのおかげだよつ。やっぱり燐ちゃんてこういう風に頼まれると断れないんだねつ」

「それが燐の良い所だよつ」

なでしこはニッコリと笑い合った。

それはまるで事前に打ち合わせでもしていたぐらいに息の合ったものだった。

その様子から燐はあることを察知した。

「あつ！　もしかして二人共グルだったの？　酷いなあ〜」

頬を膨らます燐に、まあまあとリンが慰める。

「まあ、野クルに入るかは別として身延町に遊びに来ればいいんじゃないかな。田舎町だけどそこそこ観光名所あるし、その時は案内するよ」

三人の会話を微笑ましくみていたリンも身延町に来るのには賛成した。

静岡の浜松などと比べると大分田舎だけど、それでもリンはこの町を割と気に入っていた。

特に富士を望むことが出来る本栖湖はリンのお気に入りの場所で、初めてソロキャンプをしたのもこの本栖湖からだったし、なでしこ出会ったのも本栖湖の浩庵キャンプ場だった。

それからはリンにとって特別な意味を持つ場所となっていた。

「その時はもちろん私も案内するよつ。なんたつて梨つ子スランプリーもやったしね。今やリンちゃんよりも山梨の観光に詳しいかもつ」

「なでしこの場合、食べるところばかり案内しそうだけどな」

リンの的確な指摘はなでしこは、はうつと凶星を刺される。

「わたし、甘いもの好きだからおすすめのスイーツを教えてもらいたいな」

ナチュラルに甘いものへの想いをかたる蜚。

その質問になでしこは水を得た魚のように食い気味で答える。

「いいよつ！ あかね、今、身延町で一番ホットなスイーツは……」

しばし山梨県での話に花を咲かせる少女たち。

不安な事があつてもこうして集まって話をしていれば気を紛らわすことができた。

ここまで進んでも未だ出口は見えず不安はつねにある。

だからこうして不安を払拭するように声のトーンが高くしても気にしない、だつてそ

れを注意するものも、訝しく思う人もいないのだから。

この先どうなるかは分からない、でも誰も後悔なんてもうしていないかった。もうなるようになるしかないんだ。

「さて、そろそろオイルも馴染んだみたいだし、動かしてみようか」

話のきりの良い所でリンは、つと立ち上がる。

あれから結構な時間が経っているから、食用油とはいえ潤滑油の代わりになっているはず。

そろそろ頃合いとみて、率先して立ったのだが、誰も立たなかったのでなんとなく恥ずかしくなってしまう。

ふと、隣で膝を抱えて座っている燐を見るとやけに小さく見えた。

妙な胸騒ぎを覚えるほどに、か弱い少女を思わせていたのだ。

「燐ちゃん大丈夫？　立てる？」

妙に気になったのでリンは優しく手を差し伸べてみた。



こちらを振り向いた燐の顔はどこことなくぼんやりとしていて覇気が感じられない。

(こういうの未病っていうんだっけ？ 大丈夫かな？)

「……うん。ありがとう」

弱々しい動作で手をとる燐、その仕草がやけに儂げに見えて、リンは繋いだ手を少し強く引つ張り上げた。

あつ、と小さく声をあげて燐はすつと立ち上がる。

見かけ以上に強い力で引かれたので、虚を突かれた様に目を丸くしていた。

「リンちゃんって体細いのに結構チカラ強いよね」

「そう、かな？ 自分じゃ良く分からないけどね」

珍しく照れたような表情を見せていた。

リンにとっては思いがけない一言だったので少し嬉しくなった。

「やっぱり、リンちゃんって燐ちゃんに優しいよねい。私には手なんて滅多に貸さないのにい……」

羨ましそうな目を向けながらなでしこが呟いた。

今になって紛らわしい言い方をしたのは、やっかみ半分と言ったところか。

「そんなこと……ない」

なんとなく必死な素振りのリンが可笑しくなつて、燐は微笑みながらうんうんと頷き返した。

「えー、でもずっと手握ってるよー」

口を尖らせるなでしこ。

その指摘に二人は慌てて手を離す……わけでも無く、仲良く手を繋いだままぶんぶんと否定するように振っていた。

とても気恥ずかしかつたが、何故かどちらとも離す気にはならなかつた。

「蛍ちゃん、燐ちゃんが浮気してるよ。ほら、ラブラブだよー！」

告げ口を言う様に蛍のスカートをぐいぐいと引つ張る。

「ラブラブって」

「浮気って……そういうのじゃないよお！」

顔を真っ赤にしながら否定する。二人のりん。

名前が偶然一緒なだけに、その動作はやけに息ピッタリだった。

「そーゆーなでしこだって蛍ちゃんにべつたりじゃないか」

リンも負けじとなでしこにやり返す。

大きい胸がいいのなら普段からあおいちゃんにくつついているハズなのに、そんなの

は今まで見たことがない。

そうになると、この異様な状況が人肌を恋しくさせているんだろう。

なでしこは姉や母に甘えたいのかもしれない。

「蛍ちゃんはママだから良いんだよね〜?」

「うんうん。なでしこちゃん、もっとわたしに甘えてもいいんだよっ」

「ママ〜!」

勢いを付けて蛍の胸に飛び込むなでしこ。

二人が出会ってから、もう何度も見た光景。

それは微笑ましいというよりも。

「完全に親子の触れ合いにみえる」

「だよね〜」

半ば諦めたような声で見守る二人。

親と子というほどに身長は離れていないが、その振る舞いは仲のいい親子の抱擁と酷

似していた。

「でもさ……わたし、なでしこちゃんの気持ち分かるんだ」

「そうなんだ」

「うん、蛍ちゃんにああやって抱きしめられるとすごく心が落ち着くんだよね。そのかわりすつごく恥ずかしいけど」

「そっか……」

リンと燐はお互いの胸を思わずみてしまう。

胸は関係ないと思うが、それでも気にしてしまうのが乙女心だった。

燐はそれほどでもないようだが、リンは……年頃の少女にしては少し貧相にみえた。

「あ、えつと……」

なんとも言えなくなつて燐は口をどもらせてしまう。

別に優位があるとかそういうのではなく、蛍と比べたらどنگりの背比べだったし。

「大丈夫。わりと諦めてるから」

どこか遠くを見つめるように達観した瞳を宙に踊らせるリン。  
諦めはない澄み切った瞳……と思つたが明らかな絶望があつた。

「うちのお母さんもこんな感じでき、遺伝かな」

「あー、それは……なんともねえ……難しい問題だよね」

「うん、不条理つてこういうことかもね」

今、この場には四人の少女がいるが、三人がかりでも蛍一人に勝てそうになかつた。  
それだけの格差があつた、そしてそのことに気づいていないのも蛍ただ一人だつた。

「なんかさ、世界がどうこうよりもこういう身近な不条理のほうが気になるよね」

「……ね」

燐とリン。

二人は顔を見合わせて何か分からないけど笑っていた。

込谷燐と志摩リン、偶然名前が一緒なだけで顔も声も性格も違う二人。でも不思議とウマが合っていた。

アウトドアが趣味な点は同じだったけど、それだけじゃない。

お互いが欲しかったものを持っているようなそんな感じ。

何かに惹かれたように、出会うべくして出会った二人だったと思える。

それがどんな影響を与えるのかは分からないけど。

やっぱりみんな一緒に良かった……。

「あ、そろそろレバー動かさしに行ってみない？」

笑いつかれた後のなんとも言えない空気になったので、話題を変えようと本来の目的を指差した。

線路の脇にぽつんと置いてある転轍機。

それを動かしてみるのが今の目的だった。

……何の意味があるのか未だ分からないのだけれど。

「そういえばそれが目的だったね……ね、燐ちゃん」

「ん？ なぁにリンちゃん」

「ちよつと元気になったみたいで良かったよ。なでしこが変なこと言ったから気にしてるんじゃないかと思ってさ」

「ごめんね心配かけて、でも……ありがとう」

繋いだ手を少し強く握ってみる。



こういうことに慣れてないのか、リンはびくつと体を震わせる。

それでも手を離したりはしなかった。

燐はそれこそ聡や蛍とは手を繋いだことはあるけれど、出会ったばかりの女の子と手を繋ぐなんて滅多にないことだった。

それだけリンの優しい性格が良く分かった。

わざわざ戻ってきてくれた山梨からきた二人の少女、今はこの縁を大事にしたい。

「レバー引いてみるから手伝ってー」

未だに抱き合ってる蛍となでしこに声をかける。

「おーきーどーきーー!」

「うん」

軽快な返事を返す、なでしここと蛍。

お互いに手を繋いだまま仲良く駆け寄ってくる。

蛍ちゃんだって割と人見知りなのにリンちゃん、なでしこちゃんとはもうすっかり仲

良くなってる。

仲間ってこういうことかもしれない。

傷をなめ合ってるだけなのかも、でも……今はすごく助かってる。

一緒にいるだけで嬉しい、そういうものなんだ。

「やっぱり良い匂いするよねい……ちょっと舐めてもいいーい？」

「お腹の保証はしないで」

オリーブオイルの香り漂う転轍機の前に再び立つ四人。

なでしこの言う通り、香しい匂いが立ち込めてきて再度食欲が刺激された。

「はい、軍手。予備は一つしかなかったから燐ちゃんが付ける？」

掌に滑り止めのついた作業用軍手を渡される。

まだ使っていない真新しい白い軍手、燐はなんの疑問もなくそれを手にはめていく。

「まって、燐」

「うん？」

「わたしに片方貸してほしいんだ。やっぱりみんなと一緒に引いてみたいし」

「そう？　いいよ……蛍ちゃん、一緒に引こう」

燐は左手に軍手をはめると、残った右手の軍手を蛍に手渡した。

お互いの手に片方ずつ軍手をはまる、そしてそれぞれの手を取り合って固く握った。

「これで準備出来たね」

「うん」

蛍と燐、二人は顔を見合わせて深く頷く。

それを見たなでしこは慌てて片方の軍手をいそいそと外しだした。

「私もリンちゃんと手を繋ぎながらラブラブ作業やってみたいですっ！」

やれやれと言った感じのウザそうな顔を向けるリン。

「いちいち真似しなくていいから、普通にやってくれよ……」

「もー、リンちゃんの照れ屋さんっ！」

何故か笑顔のなでしこが気味の悪い事をいってウインクしてきた。リンは夏だというのに無性に寒気を覚えてしまった。

少女四人の六つの手が転轍機のレバーに伸びる。

お互いの体が密着するほどに無理な体勢だったが、四人で引かないと意味がない気はしていた。

「せーのっ!!」

なでしこの掛け声に合わせて四人は一斉にレバーを引いた。

ガリガリ、と金属が擦れる音がしたが、それだけだった。

事前に差しておいたオリーブオイルのおかげなのかさほど力を入れなくとも軽々と動く、四人が持たなくても拍子抜けするぐらいにあっさりとした音。

そのままレバーを上まで傾けた。

がきつ、と何かが嵌った音がする。

レールのポイントが切り替わった音なのかそれとも別の何かが作動した音なのかは

分からない。

その音の発生源を探ろうと周囲を見渡す前に。

ずしいいん！

地響きとともに何かの大きな音がカミナリのように鳴り響いた。

地震のように割れた音が周囲に広がって、少女達は訳も分からず身をすくめる。

その衝撃で土煙が舞いあがり、反射的に口を腕で覆い隠した。

茶色い煙が辺りを包み込んで一時的に視界が失われる。

何か良くないことが偶発的に起きた予感がして、蛍は煙の奥へと目を眇める。

その奥には白く長いものが横たわっていた。

何かが倒れているようにも見える。

「あっ!?!」

先ほどあったものが別の姿になっていたから、燐は思わず声をあげた。

「ああ——!!!」

悲鳴のような声をなでしこもあげる。

その驚愕の声はなんどもトンネル内に木霊する。

「……やっちった……」

リンはまるで他人事のように小さく呟いていた。

あの背の高い標識が無くついていたのだ。

転轍機と連動していたのか分からないが、レバーを引くとほぼ同時にあの白く何も書いていない標識も倒れたようだった。

別に誰かにぶつかつたわけでもなく、傍に置いていた荷物も無事だったのだが、その方向にあつた線路を塞ぐように倒れていた。

倒れた衝撃は大きく、線路や枕木も大破した可能性があつた。

もう廃線跡の線路なのだから、さほど問題ではないのかもしれない。

でも何か大事な、そうイタズラではすまない事をやってしまった感じがした。

そしてそれを行ったのは他でもない自分達自身の手だった。

単純な罪悪感が少女達四人の心を包む。

現実には程遠い世界なのに現実逃避したくなるほどにやったことへの衝撃が大きかった。

「あつ！ これつてもしかしておつきな鉛筆倒し機だったんじゃない?! ほら、鉛筆の代わりに標識が倒れた……とか……どうかなあ?」

……なでしこの突飛すぎる発想には誰も口さえも開いてはくれなかった。

……

……

……

## G l i t c h

白い瓦礫の山を越えても、線路も緑のトンネルも途切れることはなかった。同じところを延々と回り続けているように、緑が覆う不思議な景色は変わること忘れられたように続いている。

外に居ることを忘れてしまいそうなほど、現実から剥離された緑色の迷路の中。終わりはあるのかそれとも……誰も答えを知らなかった。

知っているのは、あの青いドアの家にいる、あの人だけなのかもしれない。

——いや、あの人さえも分かっている事がないの事が起きているのかもしれない。そんな予感めいたものがあつた。

「なんか……周りの森林って変わってきてない？」

なんとなく辺りを伺いながら歩いていたりリンが疑問の声をあげる。なでしこは無造作に緑のトンネルを構成している葉に触れてみた。



色は相変わらずの青緑だが……葉っぱとか植物の種類が変わってる？

葉や木が突然別の植物に変わることは物理的にあり得ないが、何でもありのこの世界では無理なことにはなさそうに思える。

試しに葉を指でなぞってみる、何となくだけどつるつる感がなくなつて別の植物の葉になつてる気もしないでもない。

そこまで注意深く観察していたわけでも無いので一概に違いは分からないけど。

燐と蛭もしやがみ込んで砂利と枕木の間に見える下草を調べてみる。

別に代り映えないようにも見えるが、それを示す根拠もない。

ここにいる誰もが植物に関する知識を持っていなかった。

スマホが使えれば写真を撮るだけで調べるアプリもあるのだが、今はもう無理だった。

連絡も情報も暇つぶしささえもスマホ一つに頼り切りなことが改めて分かっただけで疑問の答えは見つからなかった。

「ごめん。やっぱり気のせいかも」

自分の発言一つでみんなが一生懸命調べてくれるのでリンはとても申し訳なくなつた。

でもそれを非難するものは誰も居ない、それは僅かだけど同じ様に違和感を感じていたから。

何も変わっていないのに違和感だけは覚える、それは恐怖でしかない。

恐れを乗り越えるためには一つづつ潰していくしかないのだ。

周囲をさらに注意深く観察しながらも少女達は歩みを止めることはしなかった。

それでも焦ることはなく、むしろさつきよりもゆつくりと散漫な足取りで線路の上を渡って行つた。

(あれ? なんか……)

線路に敷き詰められた砂利の量が減っていることに最初に気づいたのは蛍だった。

さつきから妙に歩きやすくなっていたので、ずっと足元を見ながら歩いていたのでそれに気づくことが出来た。

歩きはじめの頃と比べると明らかに減っている、でもそれは何を意味するかを判断まではできない。

それでも確実に量は減っていたので、蛍は隣に声を掛けようと唇を開く、その前に。

「あつー！」

蛍以外の誰かが小さく叫んだ。

その鋭い言葉に蛍の考えは霧散してしまい、声の方に意識を向けてしまった。

そこには何かが浮かび上っていた、白く雪のようなふわつとしたなにか。

突如湧きあがったものの、彼女らは恐怖の叫びや慄いた態度をみせなかった。

ただ魅入られたように口をぽかんと開けて、その無邪気に浮かぶ白いものを見つめていた。

まるで当たり前のように浮かんでいるその白く丸いもの、タンポポの胞子しては大きすぎて、ピンポン玉よりは小さい丸い綿のような物体。

「ふおおおお！ これクラムボンだよつ！ 私、初めてみた〜！」

突如、声をあげたなでしこが興奮したように小躍りしていた。

リンも伸びあがって、その丸い綿毛にある特有の視線を向けていた。

(ワンコの尻尾が浮いている……)

クラムボンかどうかは別として、緑に囲まれたトンネルで白い綿毛は一際目を引くものであった。

それは少女達の心を和ませるのには十分で、しばらく足を止めてそれを眺めていた。すると足元から2つ、3つと数を増やして宙へと浮かびだしてくる。

なでしこはすかさずそれを捕まえて手の中に閉じ込めた。

少し手を開いて中をみると、薄く発光したような綿毛が掌でふわふわとしている。

本当のクラムボンのようだなでしこはとてもメルヘンな気分になっていた。

それはまるで上に向かって降る雹や雪のようで、徐々に景色を白く幻想的に染めていった。

発生源がなんなのか燐はやおらに足元を見ると、それまでなかったものが突然あった。

細長い葉と、茎、そして先端に白く綿のようなもの被っている多年草。

あの時の燐の記憶を揺り動かすもの。

それがいつの間にか線路の脇や、枕木、砂利の間から幾重にも伸びて広がっていた。

それまでの緑の景色とは一変して、四人は白い綿毛の海の中にいた。

「これって、綿菅だ……」  
ワタスゲ

燐は小さく呟いた。

その声はとでも小さく、誰の耳にも届かないほどか細いものだった。

「わたすげ？」

蛍はその小さな声を丁寧に掬い上げるように問いかける。

「うん。確か高い山とか湿原にしか生えないはずなんだけど、どうして……？」

燐はあのとときの幸せだった記憶を再び呼び起こす。

聡に背負られながら見たあの美しい風景。

それは燐だけでなく聡にとつても忘れられないほどに色濃く、完璧な瞬間だったはず。

好きな人と見たからこそその美しさ、何事にも代えがたい時間が確かにあった。

そして今、オオモト様の言葉が不意によみがえった。

“過去の記憶の残像”……確かそんな事を言っていた気がする。

あれは自分とその根源を知って欲しかった、ただそれだけの事だったんじゃないだろうか？　今ならそう思えてくる。

だから今ここで発生してるワタスゲの群生は……多分、わたしとお兄ちゃんの忘れることのない大切に大事な記憶。

だったら、わたしは……。

「——ねえ、蛍ちゃん。わたしね、前にこれと同じ景色を見たことがあるんだ」

「え、そうなの？　もしかして聡さんと？」

燐は問いかける蛍に背を向けたまま緑の天井に視線を向ける。

雨はまだしとしとと葉を打っていて、振り止んではない。

その音すらかき消すように、ワタスゲはぼんぼんと音を立てる様に湧きあがっていき。

白く淡い風景は何を言っても許してくれそうで、隣は言葉を止めなかった。

「うん。そう、お兄ちゃんと一緒に……見たんだ。すごく綺麗だった。でもそのとき気づいたんだ」

「わたし、この人の事がすごく好きなんだって……ね」

宙を舞う綿毛の数は更に増えていた。

なでしこだけでなく、リンもその光景に心を奪われていた。

綺麗なものを大事にするように、息を止めてワタスゲの行方を見守っていた。

「でもね、それは勘違いだったんだ……わたしとお兄ちゃんは違うって今、やっと分かったの」

「あ、でも、そういうことじゃないからね。なんていうかその……」

「うん、分かってるよ。燐の言いたいこと」

燐は訂正するように手を振った。

でも蛍には燐の言わんとしていることは何となく分かっていた。

それは蛍も同じだったから、燐と同じ思いで今まで来たから分かっていた。

燐は一旦深呼吸する、ここからが一番言いたいことだったから。

「そっか、あのね。蛍ちゃんに聞いてもらいたかったんだ。大好きな親友に聞いて欲しかった、ただそれだけなんだ。ごめんね、もっと早く言うべきなのにね」

燐は背を向けているので表情は見えなかったが、涙ぐんだ声にも聞こえた。

だから蛍が返す言葉は決まっていた。

「ううん……話してくれてありがとう。すごく嬉しいな」

蛍が言ったのは感謝の言葉。

悲しみを隠すことなく話してくれた親友への感謝の気持ちを伝えたかった。

二人は寄り添う様に立って風に揺られた綿毛の群れを遠くにみる。

ワタスゲの種子はなお一層咲きほこって、周囲に種をまき散らすように飛び回ってい



た。

それが上空にふわふわとあがっていく様子を四人は目で追い続ける。緑の天井に当たると思われたそれは、寸前で消えていた。雪が解けるようにすうっと空気に吸い込まれるように消えてゆく。

「あつ……クラムボン消えちゃった……」

「ホントだ……」

なでしことリンは残念そうに呟いた。

その声を合図にしたようにつぎつぎとあがっては消えて行くワタスゲ。

あれだけあつた綿毛の花もその長い茎さえも何もかもがなくなっていた。

なでしこが手の中に捕まえて置いたワタスゲも跡形もなく消え失せてしまった。

全てが雪のように解けて消えた。

何もかもが曖昧なこの世界で、少女たちは夢うつつのように立ち尽くしていた。

すべて元通りの線路に戻っていた。

トンネルも下草も何もかもが元のまま、違っていたのはほんの僅かな事。

それは燐と蛍だけが知っている事だった。

……

……

「なんかさ、どこかと似てるんだよね。気のせいかな」

先頭を歩く燐が首を傾げる。

相変わらずの緑のトンネルだが、不思議な違和感はより強くなっていた。

「うん、わたしも……さつきからそんな気がしてるの」

蛍の違和感は燐よりも強いもので、歩く感じがどうにも既視感を感じて仕方ない。近所の小道を歩いているような違和感のない歩きやすさがあった。

「そういえば、線路なくなってるない？」

リンが足元を指差すと、下の道には線路どころか枕木も砂利もなくなっていた。いつからなくなっていたのかは定かではないが、ともかくこれが歩きやすさの正体だった。

「あつ！ ほんとだつ！ 線路の上を歩くのも楽しいけど、やっぱり普通の道の方があ  
るきやすいねえ」

なでしこは軽くステップを踏んで、踏み心地を確かめるように跳ねていた。

道は次第に緩やかなカーブを描くように曲がっていく、それは何かに沿う様に湾曲しているようで、蛍の違和感が確信に変わろうとしている証拠でもあった。

「あれれっ？ トンネルがあるよ……？」

緑のトンネルの中にもう一つ、一般的によく見かけるトンネルが見えていた。

煉瓦造りの古いトンネルのようで、ところどころ赤錆や苔が蒸っていて蔦も垂れているが、その歴史を感じさせる作りが緑のトンネルと妙にマッチしている。

線路は途切れてしまったが、恐らく列車が通過していたトンネルなのだろう。

緑のトンネルの先はこのトンネルで蓋をしているように見えて、長い道の終わりが見

えた気がしていた。

「トンネルの中のトンネルって変だよね」

「そーだよねー」

リンの問いに燐は楽しそうに相づちを返す。

二人は妙に興奮していた、ここが勝手に出口だと思っていたから安心したのかも。

「お化けが出るトンネルだったりして……」

「ひぐつ！ あのトンネルミステリートンネルを思い出すから止めてよ〜」

なでしこは前にこの近辺でキャンプをしたときに通ったお化けトンネルの事を思い出し、身を震わせた。

そのトンネルも鉄道の廃線跡を利用したレトロなものであり、今や観光名所の一つとなっている。

「うちの県って心霊スポットとかそういうの結構多いんだよねえ。そういえばこの前も

や……」

「うー、隣ちゃんまで怖がらせようとしてるっ!! 蛍ちゃん、りんちゃん達が苛めるよお!」

トンネル一つで異様な盛り上がりを見せる三人に対し、蛍は一人、唇を戦慄かせて立ち竦んでいた。

このトンネルに蛍は見覚えがあった。

それは子供のころからあったものだから見間違えようはずもない。

廃線跡を利用した観光用の散歩道、それにこのトンネルはあったものだ。

——だとしたら……!」

喋り続けている三人をすり抜ける様に蛍は一人トンネル内へと駆け出していった。

(隣県に行かないと行けないのにどうしてこんなところに出るの?)

信じがたい事実が膨らみ続けて、パンクしそうだった。

あまりに急なことだったので誰も蛍の行動に反応することが出来なかった。

「蛍ちゃん、どうしたのっ!？」

その長い髪の後姿に慌てて声を掛けるが、蛍は振り返ることすらせずに単身トンネルの中に躊躇なく入って行ってしまった。

「ちよ、ちよつと待ってよ〜」

慌ててその後を追いかける、燐はそれほど危機感を持っていなかった。

蛍の表情が分からなかったので、たんに出口に行きたかっただけだと思っていたのだ。

「リンちゃん、私たちも行こうよ!」

「うん」

なでしことリンも頷き合って後を追った。

四人はレンガ造りのトンネルの中に入り込んだ、当然のように照明はついていない。誰も明かりになるものをこの時は持っていないだったので中も夜のように薄暗く、寒気を感じるほどに冷えていた。

この手のものが大の苦手ななでしこは慌てて立ち止まったが、一人取り残されても余計に怖いので無謀とは思ったが目をつぶって走ることにした。

「待ってよ蛍ちゃん！」

燐の音がトンネル内に響きまわって何度も反響する。

それでも蛍は立ち止まらなかった。

かんかんかんかん。

四人の靴音が警報機のようにトンネル内で鳴り響いた。

燐はなぜか蛍に追い付けなかった。

暗いトンネルの中で遠近感が掴めないせいなのかは分からない。業を煮やした燐は本気で走ろうと体に力を入れたその時。

ぐらりと視界が歪んだ。

だがトンネルの景色が歪んだわけではない、蛍の後姿だけが灰色に歪んでいた。

燐は走りながら何度も目を擦るが、ノイズの様なものがちりちりと蛍の姿を歪ませている。

先ほどと同じ現象が燐の身に起きていた。

(ぐっ！)

燐は奥歯を噛んでその異常を拒否する。

今は蛍に会うことが先決なんだ、そうすれば治るはず、そう信じて懸命に足を動かした。

「うわああああ!!」

後ろから何かの音が聞こえてきたので、燐は反射的に身をかわしていた。

暗闇の中振り返ると、なでしこが手を振り回しながら猛スピードで追いかけてきていた。

あまりの事に呆気にとられた燐は立ち止まり、なでしこの後姿を見送っていた。

そのことで目が覚めたのか、蛍の後ろ姿を見ても、あの奇妙なノイズは嘘のように消



えていた……。

……深い青の光が暗いトンネルの奥に見える。  
すべてから逃げ出す様にその奥の光に身を躍らせた。

トンネルから出ることが出来た。

が、日が昇っているわけでも白い雲が浮かんでいることもなく、漆黒の闇に包まれたいつもの見慣れた景色があるだけだった。

出口付近には蛍が息を切らしたようにぐったりと座り込んでいる。

燐はつつと駆け寄って声を掛けた。

「大丈夫、蛍ちゃん」

燐も息を整えながら蛍の肩に優しく手をおいた。

蛍は呼吸を荒くしながらも顔をこちらに向けたまま口を開く。

先ほどのことを思い出して燐は少し警戒したが、その顔は燐の知っている蛍のままだった。

……呼吸を整えるために口をばくばくと開け閉めしているところ以外は。

「はあつ、はあつ、り、燐……あ、あれ」

まだ息が整わない蛍だったが、それよりも伝えたいことがあるのか、ある方角に指を差す。

蛍の震える指が指し示すものそれは……。

蛍だけでなく、燐も良く知っている建造物が暗闇の中で佇んでいた。

「小平口……駅だよね!」

燐と蛍、二人の悪夢の始まりとなった小平口駅。

小さなロータリーを挟んで向かい側の道にそれはあった。

一見すると夜の駅舎の風景に見えるが、周りを取り巻く空気が圧倒的に違う。生命の気配が喪失したように閑散としていた。

(あれっ? どうして??)

燐は頭のなかで近辺の地図を描き出す。

風車から山の奥に入って、森林鉄道の廃線跡を辿っていったのまでは把握しているが、その先の線路は入り組んでいて方角までは分かっていない。

しかも一本道だと思われた線路は2度も分岐があり、予想以上に複雑化していて、もはやどこに向かっているのさえも分かっていなかったのだから。

とにかく今はあの小平口駅が目の前にある。

認めたくないが、辿り着いたのはここだったのだ。

(そっか、だから蛍ちゃんは焦っちゃったんだ。良く知ってる場所にきちやったから……)

燐は蛍の突然の行動を理解した。

「……燐ちゃん、ここにいとると雨に濡れちゃうよ」

リンに優しく声を掛けられて、燐ははつと意識を戻した。

引かれるままにレンガ造りのトンネルの中に身を隠す。

もう緑のトンネルは終わっていたので、燐はさつきから雨に晒されていたのだ。

暗いトンネルの中で少女たちは身を寄せ合った。

なでしことリンはバッグから急いでランタンを取り出す。

燐もそれを見て、慌ててペンライトの明かりをつけた。

ぱつとトンネル内に小さい明かりが灯った。

すっかり忘れていた人工的に無機質な明かり、それが今、みんなの不安気な顔を無造作に照らしていた。

今まで忘れていたことだけど、緑のトンネルの中は森全体がうつすらと発光しており、別段明かりがなくても支障はなかったのだ。

それに先の道をランタンなどの明かりで照らしても白い靄の様なものが光を吸収してしまつて意味を為さなかつたので、バッグに仕舞つておいたのだ。

「これからどうしようか……」

息が落ち着いた螢はため息交じりの口を開く。

ここまで長く歩いてきて、結局元の小平口駅では途方に暮れるのも仕方なかつた。オオモト様の言う通り、町は完全に閉じてしまつたかもしれない。

「小平口駅って今どうなってるの?」

少し声を潜めながらなでしこが尋ねてくる。

小平口町にキャンプに来た時は車で送ってもらったし駅の前は通らなかったので、なでしこことリンは小平口駅を見るのが初めてだった。

「うん……わたしたちが到着したときは普通の駅だったんだけど、そのあとあの白いあの人影がいっぱい現れてさ、なんか良く分からない内に地震があつて、電車もホームも壊れちゃって……」

「地震……?」

リンは腕を組んで考えこんでいた。

なでしこことキャンプしてるときも地震のようなものは感じなかったし、逃げてるときもそんなことには合わなかった。

二人が嘘を言っているわけではないし……うーん、局地的な地盤沈下がおきたとか?

流石にそれはないか……。

リンのもやもやは収まらなかった。

「それである……白いゾンビってどうなったのかな？」

「分からない。電車と一緒に殆ど落ちちゃったけど、今は駅がどうなってるかは知らないの」

恐々とその時の状況を聞いてくるなでしこに蛭は困った顔で答える。

蛭と燐は駅から裏の林道を使って逃げたので、その後の駅のことまでは分からなかった。

「じゃあまだゾンビがいるかもしれないってこと……か」

リンは緊張感を表すように唇を少し舐めた。

今にして思うと緑のトンネルの中は安全だったのだ。

ようやく出口に辿り着いたけど結局それは振り出しと変わらない。

雨が降りしきる夜の世界は変わっておらず、未だに月明かりも出なければ電気も付い

ていない。

あの時から結構な時間が経っても何も変わっていない小平口駅周辺の景色。

そう思うと急にあの白い影の存在が恐ろしく感じてきて、嫌な現実感がよみがえってきた。

「とりあえず駅まで行ってみない？ あれからどうなったのかはいちおう気になるし」

燐は勇気を振り絞って提案する。

ここから蛍の家に戻っても、図書室のある中学校に行ったとしても何も変化はないだろう。

だとすると鍵は、最初の異変が起きたあの小平口駅に違いはない、燐はそう睨んでいた。それしか行くところがなかったとも言えるが。

「……うん、わたしは燐の提案に賛成するよ」

蛍は少し考えた後、燐の提案に乗ることにした。

蛍の中には別の考えもあったのだが、ここはあえて燐のプランを優先することに決めた。

……四人は廃線跡の小道から、ぱつと姿を闇夜の中に晒した。

周囲に目を配りつつも、足早に小平口駅を目指す。

人数分の合羽はなかったので、みんなそのままの格好で外へ出ていた。

すっかり乾いたはずの頭や服に容赦なく雨が降り注いで瞬く間にびしょ濡れとなっていた。

その冷たい雨から逃れる様に、少女たちは一心不乱に足を動かしていた。

周囲の売店は相変わらず閉まっていて、当然明かりもない。

小さなロータリーを渡って、階段を飛び越える。

短い道のりだが、なんとか無事に駅の扉の前までくることが出来た。

大方の予想に反して、小平口駅の扉はなぜか閉まってはおらず、拍子抜けするように駅の中へと入って行った。

そこはLEDの明かりさえ付いていない、暗く鬱蒼とした待合室が四人を出迎えた。

静まり返った駅舎は夏だというのに妙な寒気を感じさせる。



それでも中にあの白い化け物が居ないだけでもマシなのだが。

なでしことリンは、小平口駅に入ったことが無かったので、戦々恐々としながらも周りを物珍しそうに眺めていた。

待合室の中は休憩するためのベンチやちよつとした売店、待ち時間の為の時間つぶしとして小さな文庫スペースも備えてあった。

改札は自動化しておらず、切符切りが硬券を切る、昔ながらのレトロな感じを売りにしていた。

乗降客の大半は観光客を占めるが、それでも通勤や通学にこの路線を使うものも確かにいたのだ。

蛸もその稀な乗客の一人だった。

燐もペンライトの明かりを壁や窓口に向けてみる、少し違和感があったが、何か分からない。

無人の改札にも光をあてる……改札の向こうは雑木林のはずなのに何かがそこで光を遮っていた。

光を当てながら少しづつ前に進む、緊張のあまり手が震えてきて、光も同様に震えていた。

それを落ち着かせるために両手でペンライトを握る、少し上に向けると光がこちらに反射してきて、燐は思わずひるんでしまった。

(なに？ 何か光に反射して、これって窓？)

燐は改札にかぶりつくように接近して、その先の周囲に光を当てる。

窓の様なものが付いた細長いものがホームに停まっていた。

「ごめん、ちよつとランタン貸して」

言うが早い、燐はリンからランタンを奪う様に借りて、改札の上に置く。

ランタンのぼんやりした灯りと、ペンライトを組み合わせてそれを照らした。

それでも光量が足りず全体を照らすまでは至らないが、闇夜の中、その一部がぼやつと浮かび上がった。

「やっぱり……電車、来てる……!?!」

燐は驚愕して唇を震わせた。

漆黒の夜のプラットフォームに普通に電車が停まっていた。

構内の電気は全て消えている為、色や形はまだ特定できないが、蛍と燐がいつも通学に使っている電車とよく似た車両にも見える。

電車の中も何の明かりが付いていないのでまだ不安はあった。

モーターの駆動音もしていないので電源も入っていないようである。何者かが動かして放置したものかそれは分からない。

だが、希望の列車というものでは無さそうだった。

「確かめに行ってみない?」

リンは素朴な提案をする。

電車が来てる以上、乗っていききたいのはやまやまだった。

なでしこは恐怖で目を泳がせていたが、リンの言葉に首を大きく頷かせる。隣もそれに頷き、改札を抜けようとする。

「む、無断で入ってもいいのかなあ? 無賃乗車にならない?」

怯えた感じのなでしこの声が足を遮った。

「非常事態だから行っちゃお」

「そうそう」

リンと燐は同じ意見のようだ。

今更この世界で倫理観を出しても無意味であることはよく分かっていたから。

「でも切符が……」

なでしこは倫理観よりも、単にこの先に行くことを怖がっているようにみえる。

「切符なら問題ないよ。二人ともオオモト様に言われたんでしょ？」

それまで黙っていた蛍が冷静な口調でそう言った。

少し威圧感があるような、どこかで聞いたような口調で蛍は喋る。

「あ、うん。でも……何も持ってないんだよね」

なんとなくバツの悪そうな仕草をするリン。

あれからポケットやカバンをひっくり返してもそれらしきものは出てくることは無かったのだから。

「大丈夫、リンちゃんもなでしこちゃんも電車に乗れるよ。わたしが保証する」

蛍は落ち着いた口調でそう言い切った。

根拠と言うものは微塵も感じなかったが、二人はなぜか納得したように頷き返す。

「蛍……ちゃん？」

蛍の仕草に違和感を覚えた燐は、確かめるように聞いてみる。

「燐だって切符、持ってるよね？」

「え、えーつと、どう、だったかなあ？ 忘れちゃったよ」

燐はワザとらしく惚けてみせる。

「ここでうん、などとは絶対に言うわけなかったから。」

「わたし、ちゃんと覚えてるよ、燐が切符を持ってるってこと」

「蛍ちゃん。だってそれは……!」

思わず声を荒げそうになった燐の口を塞ぐように蛍は殊更やさしく手を取った。蛍の健気さが手を通して伝わってくるようで、燐は胸が苦しくなる。

「燐。わたしは大丈夫だから、先に行つてて」

やさしく握る蛍の手、でも小刻みに震えていることは直ぐさに分かった。

だから燐は必死に頭を巡らせた……その結果。

「ごめん、わたし蛍ちゃんとトイレにいつてくるから先に行つてもらつていいかな？」

燐は申し訳なさそうな声リンとなでしこを二人に上げた。

二人は呆氣に取られたように顔を見合わせると一瞬、間を置いて理解したように頷き合う。

「うん。じゃあ私たち先に行ってるねっ！ あっ、その前に……」

なでしこは自身の置いていた鞆をこそごと漁る。

中から丸みを帯びたガス缶とカバーに入ったガラスの瓶のようなものを取り出した。

「これ可愛いでしょっ？ 初めてのバイトで買ったガスランプなんだよっ。テント内だと危ないし中々使う機会なかったけど、ここなら大丈夫だと思うんだよねん」

ガスランプを木のベンチの上で組み立てて設置する。

安定したのを確認すると、アウトドア用のライターを点火させ、スリットの中に火を入れた。

それと同時にガスのバルブを手で回す。

ぼっ！

軽い音とともに、細長いガラスの中に小さな焚き火の炎がたった。

暗く冷え切っていた駅構内がほのかな暖かさに照らされて、薄暗い影法師を作り出し

た。

「これ見てると癒されるんだよねえ……」

「ほんと、すごく綺麗であったかい……」

なでしこと螢は、悪夢のような現実を忘れて、その陽炎の様な赤い炎に並んで見入っていた。

ガラスの中の小さな炎はここにあるもの全てを癒すかのように小さく揺れていた。

「なでしこ。先、行くよ」

落ち着いたリンの声になでしこは慌てて意識を現実に戻した。

「あつ！ 待つてよリンちゃん。私も一緒に行くよう〜！」

ばたばたと忙しなく準備するなでしこ。



少し前まで暗闇に怯えていたはずなのにもう元気だった。

ガスランプの明かりがなでしこに勇気をくれた……かどうかは定かではない。

なでしこはリンとともに無人の改札を出ていこうとするが、直前でこちらに振り返った。

「ランプ、そこに置いておくから、少しの間見張つて欲しいな。すぐに戻ってくるから〜！」

「うん。ちよつとだけ偵察に行つてくるよ」

二人はこちらに手を振つて、誰も居ないステンレスの改札からホームに入つていった。

中は駅舎よりなお暗く、ほのかなランタンの明かりすら吸いこまれてしまいそうで。

「あつ！ そうだ」

燐は思い出したように、二人の背中に声を掛けた。

「駅のホーム。地震で崩れてたみたいだから足元に気を付けてね〜！」

「了解しました隊長！ 各務原隊員とリンちゃん隊員は必ず駅の謎を解き明かしてみせますっ!!」

「またこの小芝居……」

手を振ってそれに元氣よく答えるなでしこと、心底呆れ顔のリン。

対照的な二人の反応に、燐も蛭も小さく笑っていた。

二名の女子隊員はプラットフォームに甲高い足音を残して去っていった。

その場に残された蛭と燐はなんともなしに無人のベンチに腰掛けた。

二人の間には淡い光を放つガスランプが細く揺れていて、柔らかな情景を作り出している。

「……ねえ、燐。トイレは大丈夫なの？」

「あつ、えつと、大丈夫……になったみたい。出そうで出ない事って結構くない？」

蛭の問いに燐は思わず愛想笑いを浮かべて誤魔化した。

そんな燐の態度に蛍はくすくすと笑う。

「ふふつ、燐はやっぱり優しいね。わたしに気を遣ってくれたんだよね」

「あ、えつと……ただ蛍ちゃんと一緒にいたかっただけだよ」

「そう……それなら嬉しいな……わたしも燐と離れるのやっぱり寂しい」

燐と蛍はそれきり黙ってしまった。

ランプ越しに二人の目が合うが、薄く笑みを浮かべるだけで何も言葉を出さなかった。

お互いの瞳の奥に橙の細い炎が映り込む。

それぞれの寂しさを火の温もりが垣間見せているように儚げに揺れていた……。

……

……

……

## Another train

「うん？　なんか声、聞こえなかった？　叫び声みたいなの」

燐はひそひそとした声色で改札口の方に首を伸ばす。

枠に切り取られたような黒い空間に色すら分からない電車が停まっている、ここから見えるのはそれだけだった。

電車の機械的モーター音は無く、しとしとと降りしきる雨の音色だけが待合室の屋根を叩いていた。

「カナブンの鳴き声じゃない？」

「……蛍ちゃん、カナブンは鳴かないでしょ。もう、たまに変な事言うよね」

「そうかなあ？　カナブンだって鳴きたいときもあるかもよ」

蛍は基本頭のいい子なのだが、時折こう言った非現実的ファンタジカルなことを口にするのがあった。

悪気があって嘘をついているとはそういうのではなく、本人としては軽い冗談のつもりなんだろう。

蛍は自覚していないのか、普段の物腰とその儂げな声色で割と本気にしてしまう人が

多かった。

そのせいで誤解を受けやすい蛍、でも燐は蛍の一面をととも気に入っていた。

(なでしこちゃん達に何か遭ったのかも)

最悪の考えが燐の頭の中に浮かんだが、すぐには行動に移さなかった。

何か大きな力の働きがあるのか、それとも蛍の寂しそうな瞳のせいなのか、どちらにせよ今蛍を置いて改札を抜けるのには抵抗があつた。

行くなら蛍と一緒にが良い。

でも今の蛍には何を言つても断られそうな気がした。

改札口を挟んで待合室とホーム、なぜだか分からないけど、見えない壁で区切られた隔たりがあるように思えた。

「そういえば、今、電車つて駅に来てるんだよね?」

「うん、そうだけど……?」

唐突な蛍の問いに燐は慌てて改札口を振り返る。

ガスランプのほのかな明かりが、停車したままの車両を微かに浮かび上がらせて、不気味さに拍車をかける。

叫び声のようなものはもう聞こえなかった。

なでしことリンのことが少し気掛かりだったが、物寂しそうな蛍の横顔に燐はなにもしゃべり出せなかった。

「燐、わたしね……」

蛍も暗い改札の方に視線を向ける。

その淡い瞳の奥には改札口の暗い世界がただただ広がっているだけ、他には何も無い。

燐は少し首を傾けて、蛍の瞳をちらりと覗き込む。

蛍の瞳には電車の影は映り込んでいない、そこには雨の中の暗いホームしか映っていないように見えた。

「え!? 蛍ちゃんまさか!」

燐は慌ててベンチから立ち上がると、蛍の頬に手を当てて瞳の奥を強引に覗きこんだ。

一切の穢れもなく、鮮やかな金色の瞳。

その水晶のような瞳の奥に映るのは慌てふためく自分の滑稽な顔だけが鮮明に映っている。

「大丈夫、燐の顔はちゃんと見えるよ」

でも、と蛍は前置きして話を続ける。

「わたしは切符……ううん、出る資格がないから見えてないだけなんだと思う」  
「資格って、そんなのおかしいよっ！」

燐の言葉を遮るように、ふわりと蛍が抱きついてきた。

暖かく柔らかい胸元から、蛍の鼓動が伝わってくる。

少し焦ったように早鐘を鳴らす鼓動。

口調こそはいつもの蛍と変わらなかつたが、その心中は鼓動が示す通り焦っていた。  
「蛍ちゃん、すごく怖がつてる……わたしが何とかしなきゃ！」

そんな燐の強い決意をからかうように蛍は耳元にふっ、と息を吹きかける。

「うひゃあー！」

予想だにしない不意打ちに、燐は変な声を上げてしまった。

あまりに可愛らしい声だったので蛍は笑みを堪えきれなかつた。

「ほ、蛍ちゃんんっ」

戸惑う様に非難の声をあげる燐。

わりと真剣に悩んでるのにこんな意地悪するなんて――。

「うふふ、ごめんごめん。燐の耳が小さくて可愛かったからついイタズラしちゃった」  
拙い悪戯をした少女のように微笑む蛍。

その顔は抱きしめられているため燐からは見えないが、その明るい口調からいつもの

蛍だと少し安心する。

燐の微笑む声が聞こえらるとつられて蛍も微笑んだ。

そして耳元で囁くようにことばを紡ぐ。

とても、とても大事なことだったから、落ち着いて話した。

「この町から三人で逃げて欲しいんだ。わたしはこの町に残らないとダメみたいなんだ」

その言葉を聞いて燐は口から心臓が飛び出しそうな衝撃を受けた。

思ってもみなかった告白。

そうだ、まだ耳に余韻が残っているから変な誤解をしちやってるんだ。

もう一度聞き返そうと、燐はやわら丁寧に蛍から離れると、両手を握って蛍の顔を見

つめ直した。

少し唇を震わせながら先ほどの言葉の真意を問いたです。

「ねえ、蛍ちゃんさっきのことって……!?!」

蛍は燐の顔を見つめ返しているだけ、ただそれだけなのに蛍の顔がまともに映らない。

厳密にはちゃんと見えているのだが、燐の瞳には蛍の顔にノイズの様なものが走り、



正常な視界にさせてくれなかった。

(また、これなの——?)

目に異常があるのかと燐は何度か瞬きを試みるが、今度は一向に直らない。

脳が見ることを拒否させているかのように、蛍の顔を隠すように灰色のノイズが視界を遮っていた。

燐はぎゅつと目を閉じる。

目か頭、あるいは別の場所で何かを異変があるのかを体に聞いてみるように感覚を研ぎ澄ます。

自分の体の異常に燐はパニックで逃げ出したくなった。

「大丈夫だよ」

優しい蛍の声と手が燐を暖かく包み込む。

そのぬくもりは燐の焦燥感や灰色の感情をすべてかき消してくれた。

とても穏やかな微笑み。先ほどまでのノイズが嘘の様に消え失せて、蛍の姿を五感で確認できた。

「蛍ちゃん、わたし……」

「燐はこっちの道を選択したんだよね。そのせいで歪みが大きくなったのかもね」

燐の背中を擦りながら、螢は窓の外の黒い空に何かを探す。

黒い雲に覆われて、絶え間なく雨が振り続けているだけの漆黒の世界。外灯さえ灯っていない、闇の中に何かがあるのだろう。

「わたしが行かないきゃダメなのかな……」

「行くって……?」

螢の温もりに包まれたまま燐は聞き返す。

暖かい感情、ずっとこうしていたいすべてを忘れて甘えたいほどに心地よかった。

「……多分、あそこ」

螢はロータリーから先の道に視線を向ける。

その方角は雨煙に包まれて何も見えないが、それは二人が良く知っている方角だった。

「まさか螢ちゃん、また戻る気なの!？」

夢見心地から目覚めたように燐が顔をあげる。

ノイズはすっかり消えていたが、それに安堵する余裕もなかった。

「うん……でも、ちよつと違うかな、多分だけど」

「ふえ? じゃあ、何処なの?」

「あのね。これはわたしの憶測なんだけど……」

蛍は静かに語り出した。

青いドアの家にいた、あのどこか憂いのある柔らかな人のように穏やかに。

それはいつもの蛍のようで何処か違っていた。

変わったものと変わらないもの。

わたしたちは、何を変えようとしているんだろう。

……

……

……

漆黒の闇の中、雨だけが主張するように降りしきっていた。

ホームの上で三人の影だけが枝葉の様に伸びていて、まだら模様を写し込む。

流星にここに居ると雨に濡れるだけなので屋根のあるところまで移動した。

当然あの少女も一緒に。

こちらをじっと見つめている幼い少女。

前髪は短く切りそろえていて長い後ろ髪は大きな飾紐リボンで纏めている。

幾何学模様の着物を着て、素足にぼっくり下駄を履いている。

そして手には目を引く印象的な模様の手毬……その出で立ちは確かにそっくりだっ

た。

外見は似てると言えば似ているのだが、何かが違う気がする。

単純に妹というには何かが違う、その何かまでは分からないけど。

「どうしたの？ 迷子になっちゃったかなあ？ お姉さんオオモト様とはぐれちゃったのかなあ

？」

なでしこはすっかりオオモト様の妹して接している。

その様子にリンも少女もほぼ同じようにため息をついた。

そんな呑気ななでしこに構うことなく、リンの方をまつすぐに向いて少女は話し始めた。

「ねえ、この町から出たいんでしょう？」

同じような質問、声のトーンもどことなく似ていた。

他人の空似というレベルではないのは分かる。

体だけ子供になったとか、そんなマンガ的な事が短期間で起こるのもおかしい話だし……。

リンが直ぐに答えなかったので少女は少し不審な顔を向けてきた。

その大きな瞳は非難を訴えているように見えたので、リンは少女に意識を戻し慌てて返事を返す。

「あつ、ご、ごめん。うん、私たちこの町から出たいんだけど、何か方法あるのかな？」  
少女と視線を合わせるように、やや中腰の姿勢になる。

普段のリンにしては珍しく温和な態度だが、ご機嫌を取っていると言うわけではない。

本来リンは小さい子と接するのはそれほど嫌ではなかったし、それにリンもこの少女のことをオオモト様の妹、もしくはは姪のようにしか思えなかった。

初対面だがどこか顔見知りの子、その印象が強かった。

「歩いて出ることだけは無理ね。だからこれを使うしかないわ」

雨に打たれる鉄の列車を少女は指差す。

そのためにここにあるのか、リンはようやく理解出来た。

「使うって？　あなたが運転できるのっ？」

女の子がなかなか視線を合わせてくれないので、華奢な両肩を掴んで強引に自分の方に振り向かせる。

可愛いなあ、視線の合ったなでしこが頬を緩ませてそう呟くと、女の子は少し顔を赤らめて俯く。

恥ずかしさを隠すように手にした毬だけを見つめていた。

「わたしは……出来ない。あなたたちが運転するの」

「えええっ!!」

「……っ!」

突拍子もない事に心底ビククリするなでしこと、言葉すらまともに出せないリン。

普通の学生にはあまりにも無謀な推薦ノミネートだった。

「で、でもっ! 鍵っぽいのがないと動かないよ、ね? それに免許っぽいのも? いる

よね……なにより動かし方が分からないよお!!」

なでしこは困惑しながらも妙に冷静な思考で、運転に際しての必要な事柄を指折り数えていた。

リンも同じような事を考えていたが、現状では明らかに無理だった。

「鍵なら持っているわよ、ほら。それにある程度の操作手順なら分かるわ」

少女は着物の袖から可愛らしい巾着袋を取り出して、軽く振って見せる。

ジャリジャリと鈍い金属音がするので何かは入っているのは分かった。

少女から巾着袋を手渡されて中を確認する。いくつかの鍵の束が入っていて、少女の言っていることが本当だと知った。

この電車用のカギなのかは分かっているとはいえないけれど。

「でも、運転方法を知っているのなら私たちじゃなくてもいいよね? その、悪いけどお

願いしちゃうっていいかな」

リンは小さい子にお使いを頼むような明るい声で少女に手を合わす。明らかに年下の少女に頼むのには気が引けるけど、この際仕方がない。

それでもずぶの素人が運転するよりかはずっとましなはず。

でもこの少女は何処で運転技術を知ったのだろうか？ 色々知っているようなので見た目と違って鉄道マニアとか……さすがにないか。

「わたしでは無理なの」

「どうして？」

「……」

リンの問いに少女は少し憂鬱そうな表情のまま唇を引き結んでしまった。

何か癪に障ることも言ってしまったのだろうか。

「あっ！ そっか！」

閃いたようになでしこがぼんと手を鳴らす。

そしてにやにやと意味深な表情を浮かべながらリンの肩をばんばんと叩いてきた。

何となく不快な態度だったのでリンは怪訝な顔を向ける。

「もう、リンちゃん鈍いなあ。ほら、こんなに小つちやいんだもん。背が届かないんだよね？」

なでしこは無遠慮に少女の足先から頭までの長さを図る動作をした。

その子ども扱いの行動に、少女は儼然とした表情のままそばを向いてしまった。その様子からなでしこの言うことは当たっているのだろう。

そういえば電車の運転席が高くなっているのはこういった子供のイタズラ防止のためのものかもしいれない、リンは少女の態度で突然沸いた疑問が解決してしまった。

「はあ……そういうわけで運転は任せるわ。教えるから運転席に来て」

大きなため息を一つつくと、少女は踵をかえして電車の側面にある運転席と思しき扉を指差した。

まだ正体も分からぬ少女に電車の運転を任される、それはひどく滑稽なことに思えた。

ただでさえおかしな世界なのに更に現実感がなくなりそうな事例が舞い込んでくる。

それにはリンもなでしこも普通に気後れしてしまうことだった。

「その、さ。無理に電車使わなくてもいいんじゃない？ 線路が無事なら歩いて出ればいいことだし……ね」

リンは言葉になでしこも、うんうん、と大きさに首を振って同意する。

この路線は確か大きな川に平行して走っているのだから、箇所によつては電車が通ることしか考慮してない箇所もあった。

それでも素人が電車を動かすよりはリスクが少ない気がするのだ。



歩けさえすれば何とかなる、そうやってここまで来たのだから。

過去の経験と照らし合わせるのは理屈じゃなく人間の本能だった。

「さつきも言ったけれど歩いて出るのは無理よ。もうこの世界は限界を迎えている。ただ歩くだけでは出れないのよ」

「じゃ、じゃあ、もし歩いて出ようとしたらどうなるの?」

恐る恐る尋ねるなでしこ。

怖い予感がするが、とりあえず聞かないことには納得は出来ない。

「何かが邪魔をするかもしれないし、あるいはあの連中のようになるかもしれない。どちらにせよ命の保証はないわ」

怖い事をさらりと说つてのける幼い少女。

あの連中……間違いなく白いゾンビ達の事だろう。

何の根拠もない発言のはずだが、この女の子が言うとなぜだか説得力があるように聞こえてくるから不思議だった。

それにその真意を問わずとも、リンとなでしこに底知れぬ恐怖と徒歩での脱出を断念させる効果はあったのだから……。

「開けてみて」

「うん」

リンはごくりとつばを飲み込んで扉に手を掛ける。

金属製のドアは雨に濡れているせいかつるつとして握りづらい。

錆びついて開かないのかと思ひ少し強めに引いてみるが、案外簡単にドアは開いた。

立て付けの悪さを示す不快な金属音すら出すこともなくスムーズに。

なでしこは怖がつて中に入つてこようとしないので、リンが先に中へと足を踏み入れた。

薄暗い室内には当然のように誰も居ない、外との区別がつかないほど暗く縦に狭い場所だった。

リンは手頃な場所に持つていたランタンを置くと、中の様子がぼんやりと浮かび上がる。

見たことのない計器がそこかしこにあつて、思わずこめかみを押さえてしまった。

(これ、やっぱり無理じゃないか)

リンは電車で興味はないので車両ごとの運転席の違いなど分かるはずもない。

それでもこの車両が相当古いことだけは分かる。

地元でもここまで古い車両はもう使つてないだろう、それだけレトロな装備だったのだ。

「ここここそこにその鍵を刺すの。その後、このスイッチを入れてみて」  
薄暗い明かりの中でも気にすることなく少女は指示を出してきた。

この少女には恐怖というか、感情の起伏が少なくみえる。

その辺りもやはりあの人に似ているのだ。

リンは言われるがままに鍵を取り出して、少女の指示のままの手順で進めていく。

最後のスイッチを入れる際、何となく緊張してしまうが、この少女を信じて実行する。

「ごん!!」

地鳴りにも似た高い音がしてことのほか焦りをみせるリン。

だが後は微かなモーター音がするだけとなったので、ほつと胸をなでおろす。

死んだように停まっていた電車に命が吹き込まれたようで、リンはなぜだか少し感動してしまつた。

「凄い音がしたけど、大丈夫っ? リンちゃん!!」

何事かと思つたのか、なでしこが運転室に駆け込んでくる。

それでも薄明かりしかないのがまだ怖いのか、入り口で周りをキョロキョロと見るだけで奥へは入ってこなかった。

「多分……」

リンはたつた一言だけ返した。

原付バイクだつてまだ一年も乗つてないのに電車の調子など分かるはずもない。エンジンが掛かったことだけは分かるが……。

それに今更だがとても気掛かりなことがあつたのだ。

（電車つて勝手に動かしたりしたらヤバイやつじゃなかつたつけ？　もしかしたらけーさつに捕まつちやつたり……）

今、考えなくてもいい事で頭を悩まされる。

とりあえず後のことは後で考えよう！　うむ。

リンはとりあえず事後の事は置いといて、現状を脱することに専念した。

ランタンの灯りだけだとさすがに危ないので、リンは照明のことを尋ねようと、こちらを見つめている女の子と向かい合つた。

淡い光に照らされた大きな目と視線を合わせる、すると女の子はふいに顔を背け運転台の窓にとてとてと近寄ると、興味無さそうに外の景色を眺めてしまった。

（変なところで子供っぽい）

車両前面にある大きな二枚のガラス窓からは、鬱蒼とした黒い闇と止むことのない雨の景色だけが映るのみであつた。

「……あとは良くわからないから適当にやつて」

少女はこちらを見ることなくそう一言だけ呟いた。

真面目で気難しそうな少女からの投げやりな言葉。

一瞬の間をおいて、リンもなでしこも口を開けたまま絶句してしまった。

「ここにきて丸投げ……」

リンは思わず口に出してしまっていた。

慌てて口を閉ざすが、少女の耳には聞こえているだろう。

怒りだすかもしれない、その思っていたのだが。

「丸投げは悪い事じゃないわ」

「えっ?」

少女の小さな呟きになでしこが耳を澄まして聞き返す。

「だって、地球は丸いもの」

なでしことリンは再び絶句してしまう。

少女の言葉は本気なのか冗談なのか分からなくなった、これぐらいの年の子の感性が掴みとれない。

そんなに年は離れていないはずなのに二人は世代のギャップを感じていた。

二人は手分けして色々なボタンに手を触れてみる。

さすがに二つの重要そうなハンドルには触れなかったが、誤って警笛を鳴らしたとき

は飛び上がりそうなほどに驚いてしまっていた。

暫くした後、無人の客席にパツと蛍光灯の明かりがつきつきと付いていく。

それでようやく電車が動きそうな実感が湧いてきたのか、なでしこは嬉しそうに車内を駆け回った。

「わあ……」

まるでイルミネーション見た時のような声でなでしこが感嘆する。

小平口町では殆ど見ることが出来なかった、豊かでくつきりとした明るさ、それが今ここにあるのだ。

リンは黙ったまま光の有難みを噛みしめていた。

「そろそろ運転の仕方を教えるけど準備いいかしら」

女の子は照明を気にすることなく、流れ作業のように話を進めてきた。

もう少しこの安心できる明るさに浸っていたかったが、ここからが肝心なので二人は後ろ髪を引かれる思いで運転室へと戻っていった。

……ブレーキにアクセル、構造はバイクや車と同じようなのだが感覚が全くつかめそうにない。

なでしこは一つ一つ口に出しながら覚えようとするが、自転車しか乗ったことのない

人間にはスタートラインに立つ事すら難しいものだった。

リンだってなでしことそこまで変わりはない、バイクと言っても所詮は原付バイクなのだから。

なんとか進むことぐらいは出来そうだが、停車というか減速には全く自信がなかった。

まあ最悪、速度を極限まで落として走行すればいいのだけれど、それはそれで別の怖さもある。

例えば、狭い橋梁でゆっくり走るとは早く走ることよりも怖いことだった。

以前吊り橋を渡ったときのように、バランスを取ることも出来ない。

誰だって怖いことから早く逃げ出したいのは本能だった。

少女の講義が一通り終わったところで、なでしが疲れたようにため息をついた。

それはリンも同じことで、二人はぐったりと広い座席にもたれ掛かった。

知らない言語の短期講習を受けているような気分になり、脳が休息を欲しがっているようだ。

このまま寝てしまいそうな雰囲気なのか、なでしこが怠そうに呟く。

「そういえばさあ……電車の明かりついたのに蛍ちゃんたち来ないよねえ？」

「うん。そうだね……」

短い間に色々な事がおきたせいなのか、何故か忘れていた燐と螢の事。

この少女と出会ったときに、戻って声を掛けることも出来たのに何故だかそうしなかつた。

だがそんなことすら考えるのが億劫でリンは瞳を閉じて休憩しようとする。

「リンちゃん！ 私、ちよつと行って呼んでくるね〜！」

言うが早いがなでしこは開かれたドアからホームに出て改札口まで走り去つてしまつた。

リンはなんとなくその一部始終をぼーつと見ていたのだが。

あつ、と今更に気づく。

（逃げられた……）

なでしこに体よく逃げられてしまい、リンは一人客室に取り残される……。

と言う事は……。

「あの子は行ってしまつたのね」

背後から可憐な声。

振り向くまでもないあの小さな女の子だろう。

「友達を呼びに行つたんだよ。すぐ戻ってくる、はず」

リンはため息交じりに口を開く。



なでしこは多分、少し時間をおいてから戻ってくるだろう、運転したくないだろうし……。

リンは自分にすべての責任が掛かったみたいになり、憂鬱な気分になってしまった。そんなリンの苦悩に気にも留めずに少女は横に立って話し続ける。

「行っても無駄かもしれないわね」

「え!？」

その言葉を聞いてリンは今の悩みがすべてどこかに行ってしまった。

それぐらい嫌な感じが瞬間的に頭の中に過ぎってきたから。

「だって、あの子たちはもう……」

—

—

—

「わわっ!」

「きやつ!」

突然地鳴りのような音が待合室まで響いて、燐と蛭は同時に驚いていた。

何か爆発の様な音したと思うとそれっきり音は止んでしまっていた。

「なんだろう？ やっぱり何かあったのかな？」

燐はステンレスの改札に手をかけて懸垂をするような体勢でプラットホームの奥を覗き込んだ。

暗くてよく見えないが、二人の姿はホーム上にいない気がする。

「うーん、ホームの下に降りたってわけはないよね……」

「燐、気になるなら見に行ってみれば」

「もう、蛍ちゃん。まだそんなこと言うし〜」

燐は改札からびよんと身を離れた。

ふわりとスカートが翻り、可愛らしいストライプのショーツが闇に映える。

「行くなら、蛍ちゃんも一緒だよ」

「でも……」

それ以上言葉を紡がせないように燐は蛍の手を握る。

力強く、でも包み込むような優しきで握っていた。

「燐……」

ガスランプの炎が二人の心を落ち着かせるように優しい燈火を湛えている。

「蛍ちゃんがさつき言いたかった事なんとなく分かるよ。でもあそこに行つたつてもう

……」

「うん、それはわたしも知ってる」

蛭の家の近くにあるという小さな旅館、そこが多分蛭の行きたい場所だろう。

女人禁制であることを義務付けられたそこで何が行われていたのか、もう二人には具體的な事まで良く分かっていったことだった。

「ねえ、燐。覚えてる？ 三間坂家が無駄に広いのは昔から増築を繰り返したからだ、って言ったこと」

「うん、そのせいで旅館みたいに広くなっちゃったって言ってたよね」

それはこの変わった小平口で蛭の家に行ったときに蛭自身が話してくれたことだった。

「あの時、離れまで行こうとしたけど、オオモト様の影みたいのが見えてそっちに行っちゃったじゃない？ 考えてみたんだけどあれってわたしたちを遠ざける為だったのかなって……」

蛭と燐は家に人が居るのか探し回っていた。

蛭の提案で奥の離れにも行こうとしていたのだが、そこから色々なことが立て続けに起こってしまい、結局有耶無耶になってしまった。

「えっ!?! じゃあ蛭ちゃんは……」

「うん。オオモト様はわたしの家の近くにあるって言うてたけど、それは多分わたしの家の敷地内を差してたんじゃないかって思ってるんだ」

蛍は待合室の天井をなんとなく見上げた。

いつも使っていた駅なのに今は嘘の様に静まり返っている。

嘘なのは駅だけじゃない、駅から見えるお茶屋さんも、あのお店も、何もかもが嘘の世界で出来ていた。

そしてそれは自分の家だって例外じゃなかった。

「考えてみたんだけど、家の離れて一度も行ったことなかったなあって思ってる……」

「じゃあ、わたしたちをそこから遠ざけるためだけに、蛍ちゃんの家から追い出されたってこと!？」

「分からない。でも今になってみるとそんな気もするの」

蛍は蛍の考えに曖昧な返事を返す。

(でも、それならオオモト様も関係してるってことなの?)

蛍は様々な情報を纏めきれず、頭の中で攪拌されているような気分になった。

「ちよつと、蛍大丈夫?」

「うん……じゃあ結局何なんだろうね”マヨヒガ”って」

「そうだね。でも、あんまり行きたくないところかもね」

蛍と燐、二人はベンチに座ったまま蛍の家の方角を見つめる。

あのときは単なる目的の地だった蛍の家、でも、それはすべての始まりで終わりの場所なのかもしれない。

二人がぼんやりと考えを巡らせていると、突然それが起こった。

二人の背後からぱつと閃光が走ったのだ。

あまりのことに燐は咄嗟に振り返ると、改札口が明るく輝いていた。

電車の窓から零れでる光、客室の上部に備え付けられている照明の光だった。

それがホームを抜けて待合室まで照らしている。

忘れていた本物の明かりに燐は瞳を潤ませた。

「蛍ちゃん見て！ 電車、明かりがついている！ この電車動くんだよ！」

燐は興奮して蛍の手を握ったまま、手を上にぶんぶんと振った。

蛍はそんな燐の楽しそうな様子に嬉しくなつて、薄く微笑んだ。

燐はそんな蛍の儂い表情にあることを思い出した。

「あ、ごめん……蛍ちゃん見えないんだっけ……」

燐は小声で呟いた。

そして蛍の気持ちを考えずにはしやぐ自分がとても恥ずかしかった。

(やっぱりわたしはまだまだ子供なんだ……)

「ううん、気にしてないから。それに燐が楽しそうにしてるとわたしも嬉しくなるんだ」

「蛍ちゃんごめんね。電車が動いても蛍ちゃんと一緒じゃないとわたし乗らないから」

「わたしのことはいいから燐は電車に……あれ？」

改札口をみた蛍の動きが止まる。

あれだけ見ることが出来なかつたはずなのに今はなぜか見ることが出来た。

「電車が……見える!? 緑色の電車……」

蛍光灯の光に浮かび上がる深い緑色のレトロな車体。

2両編成のそれは胴体部分に一本のラインが入った、親しみやすいデザイン。

例えるならその配色も相まってカエルのような車体が蛍の瞳にも確かに映っていた。

「蛍ちゃん、本当!？」

瞳を滲ませながら燐が興奮気味に見つめてきた。

「うん。見えるよ燐。今はつきりと電車が見えた」

「蛍ちゃん良かったあ! これで一緒に町から出れるねっ」

「え? そうなの?」

「そうだよきつと。わたしは蛍ちゃんも切符を手にしたんだと思う」

「そっか……燐がそう言うなら間違いないよね」

蛍は思わず目元を拭った。

電車が見えたことだけじゃない、燐と同じものが見えたのが嬉しかった。

「きつと、リンちゃん、なでしこちゃんが何とかしてくれたんだね。二人に感謝だね」  
「うん。お礼言わないとね」

「それじゃあ、行こうか。あ、でもみんなの荷物ここに置いてつてるよね……さすがに全部持つのはちよつと難しいか……」

そう呟くと横目でちらりと蛍の方を見てしまう。

蛍と目が合うと一瞬びくつとしたが、すぐにか細かい笑みを返してくれた。

「やっぱり、二人が戻ってくるの待つてよつと」

燐はすこし慌てたように蛍の隣に腰かけた。

余計な事を言つて蛍に迷惑な思いをさせたくなかつた。

「そんなに気を遣わなくてもいいのに」

申し訳なさそうな蛍の声。

「ダメダメ、あの二人にはちゃんと自分たちの道具を持つてもらわないとね。これはアウトドアでの常識だよつ」

人差し指を横に振つて持論を展開する燐。

形式張つたその態度が可愛らしい声とのギャップでなんとも愛おしかつた。

「……ねえ、燐。燐は今まで何かを諦めたことつてあるのかな？」

「えっ!？」

突拍子のない質問に燐は目を大きく見開いて膠着してしまふ。

「あ、ごめんね。突然変なこと聞いて。出来ればいいから聞いておきたかったんだ」  
頬に手を当てて申し訳なさそうに眉を下げる蛍。

燐は首を軽く振ると小さくため息をつく。

「大丈夫、ちよつとビツクリしたただけだから」

「そうだね……前はそんなことなかったんだけど……」

燐は複雑な顔で遠くをみるようにランプの明かりを見つめている。

ガラスの瓶に閉じ込められた炎は自身のように見えて、寂しい気分を駆られた。

「あはは、なんか……急に諦めることがいっぱい出来ちゃってさ、どうしてこうなっちゃったんだろうね」

「わたし変な事で悩んでるのかな? みんな上手くやってるように見えるのに」

自身のやるせなさを表すように燐は握った両手を何度も擦り合わせる。

上手く気持ちいがコントロール出来ないことがとても歯痒かった。

「わたしはね」

握りしめた両手の上から蛍の手が被せられる。

暖かく柔らかい感触にはつとまった。



「わたしは隣のそういうところ好きだよ。すごく可愛い」

「んもー、蛍ちゃん。人が真剣に悩んでるのにい。それに大体、蛍ちゃんから聞いてきたんでしょー」

「ごめんね。でもわたし、本当は隣に嫉妬してるのかも」

「え？」

さつきから恥ずかしい反応しかしてないと隣は思ったが、それだけ蛍の言ってること  
が見当もつかないことばかりだった。

「だって隣は色々悩めるでしょ。両親の事、友達のこと……色々悩めるのっていい事だと思うんだ」

「そう、なの？」

「だってわたし、隣の事しか考えてないから」

「でもっ、蛍ちゃんはっ」

「うん。確かにね……でも隣の悩みに比べたらちっぽけな事だよ。それに今に始まったことでもなさそうだしね」

「それは……」

「わたし、もう一度自分の家に行ってみようと思ってるの」

蛍は駅舎の窓の外から見える暗い景色に目をやった。

「ここからでは蛍の家は見えないが、それでも体はその方向を向いていた。」  
「だって、もう」

「うん。今更行ったって意味ないと思う。でも燐の心が少しでも晴れるなら行ってみる価値はあると思うんだ」

「それにこの町だってこのまま放っておいたらどうなるのかなって……もしかしたらこの町が地図からなくなっちゃうのかなって思うと可愛そうって思っちゃったんだ」

「わたし、一応ここで生まれたんだしね」

「蛍ちゃん……」

蛍はくるっと回ってこちらを振り返る。

寂しそうな瞳、それでも笑顔を絶やさなかった。

そんな蛍の顔にレースのような灰色のノイズが降りかかる。

蛍の顔を見る資格すらないと言わんばかりに、白と黒のノイズがちりちりと蛍の姿を消していく。

燐は俯いたままベンチから立ち上がると、蛍のことをぎゅっと抱きしめた。

突然の事に目を丸くする蛍、それでも無意識に燐の背中に手を回していた。

「蛍ちゃん、一緒に行こ？」

「でも燐は……」

「わたしは蛍ちゃんと一緒にじゃないとこの町から出ないって決めてるから。それにわたしの我儘で蛍ちゃんをずいぶん振り回しちゃったから今度は蛍ちゃんに付き合わないとね」

「燐……いいの？」

「うん」

燐は力強く頷く。

蛍の顔を見えなくしてるのは自分自身の弱さが作用してるんだ。

弱いなら弱いなりにやりようはある、今度は蛍のやりたいことにつきあうんだ。

「蛍ちゃん!! 燐ちゃん!!」

ばたばたと、けたたましい靴の音とともになでしこが改札口に滑り込んできた。

「電車、ばつちり動くようになったんだよ……って、うわあ! ご、ごめんなさいっ!  
な、何も見てないからっ!」

駆け出してくるなり矢継ぎ早に話すなでしこだったが、燐と蛍が抱き合っているのを見て、顔を赤らめると両手で素早く目を隠した。

「あ。ちょうど良い所に、って……なでしこちゃん、誤解与えるようなこと言わないでよ」

「そうそう、わたしと燐にとつてはこれが普通なんだから」

螢はしれつとした顔でハグを正常な行為として認定しようとする。

「もう、螢ちゃん」

燐は抱き合いながら横目で抗議の目を向ける。

「それより電車、大丈夫そうだね。でも運転手さんとかいるの？」

「うん。リンちゃんが今、運転を教わってる、はず、かなあ？」

目を隠したままのなでしこがたどたどしく答える。

別にやましいことはしてないし、そこまで刺激の強い行為なんだろうか。

妙なところで価値観の違いに気づいてしまう。

「え、リンちゃん電車の運転できるの？ それに教わってるって誰に？」

「ええつと……オオモト様の妹さんっぽい子かな？」

指の隙間からこちらを見ながらなでしこはそう答える。

オオモト様の妹？ 二人はシンクロしたように顎に手を当てて考え込んだ。

「もしかしてわたしたちが前に見たのと同じ子なのかな？」

「そうかも、しれないね……」

二人の脳裏にあの時見た、幼い頃のオオモト様の姿が思い浮かんだ。

見ていないので確信はないが、他に該当しそうな人はいないので間違いないだろう。

でも何で……今ごろになって？

それに……。

蛍と燐はオオモト様がどういう目に合っているかを知っているのです、あの幼い頃の姿のままだったらと思うと複雑な気分になる。

二人が黙ってしまったので、不安に駆られたなでしこは少し声を大きくして呼びかける。

「リンちゃんならもうベテラン運転手レベルになってるから大丈夫だよ。私たちも行ってみようよっ！」

なでしこはようやく目隠しを取ると、元氣よくガッツポーズを決める。

割と無責任な発言だったが、燐と蛍を現実に返すほどに力強い言葉だった。

つねに元氣で明るいなでしこを見ると、二人の心にも伝播したように元氣が湧いてくる。

だからこそ今、言わなければならなかった。

「あのね。なでしこちゃん」

「うに？」

キャンプ道具を背負ったなでしこがちよっとおかしな返事をする。

蛍と燐はそれを気にすることなく話を進めてきた。

「わたしたち、その……」

なでしこの無垢な表情を見てると言い出せなくなってしまう。

分かれ道のときだつて上手くいえなかつたお別れの言葉、それをまた言おうとしている。

そう思うと螢は急に胸が苦しくなつてそれ以上言葉を紡げなかつた。

「あ！　もちろん、分かつてるよん！」

「えつ？　分かるつて……なでしこちゃん？」

口をばくばくさせる螢を見てなでしこは何かを察したのか先に口を開いてきた。

心の内を見透かされたようで燐が驚きの声を上げる。

「ちゃんと二人が並んで座れるラブラブシートを用意しておいたよん。目印にブランケットを引いておいたからそこに座つてねい！」

なでしこは口に手を当てて、分かつた風な口調のおばさんキャラになっていた。

「あ、いや、そうじゃなくて……」

「いいから、いいから。ほら遠慮しないでリンちゃんも妹ちゃんも待つてるよん」

燐と螢の両方の手を取つてなでしこが強引に引つ張つてくる。

決して強い力ではない、それでも二人は振りほどくことが出来なかつた。

悲しみを無邪気に包み込んでくれる暖かい手、それを無下に出来る程二人の心は強く

ない。

でも——これ以上甘えることも出来なかった、だから。

「わたしたち行くところがあるんだ。だから、ごめん。一緒に行けなくなっちゃった」  
「……えっ?」

突然立ち止まる蛍と燐になでしこは顔を見上げる。

複雑な表情で見つめている二人の姿があつた。

「せつかくここまで一緒に来たのにごめんね。わたし一人でも良かったんだけど……」  
蛍は未だに抱き合っている親友の顔を見る。

意思の強い瞳、蛍の好きな燐のきらきらとした瞳が近くにあつた。

輝きの奥にある深い悲しみ、燐が必死に隠してきた本当の気持ちが霧が晴れたようにハッキリと見えていた。

「わたしは蛍ちゃんと一緒に行くよ。何があつても一緒に」

強い瞳の輝きと力強い語句、燐の気持ちには迷いはなかった。

「燐は一度決めたら梃子でも動かないもんね。だからごめんね、なでしこちゃん」

「ごめんね、リンちゃんによろしく……」

「嫌だっ!!」

蛍と燐、二人の体を包むようになでしこが抱きついてくる。

肩を震わせて嗚咽を押し殺しながら顔を押し付けていた。

「そんなのダメっ！ もう二人はどこへも行かせないもん！ もしどこかに行くなら私も一緒に行くっ！」

「なでしこちゃん……」

蛍は堪らずなでしこの頭に触れる。

小刻みに震えるその体をいたわる様に撫でてあげた。

「もう帰ろう……みんな一緒に……後のことは後で考えればいいんだよ……」

何も言えなかった。

正しいとか間違つてるとはではなく、燐も蛍も何の言葉も選べなかった。

「なでしこく、準備できたか」

静寂を破るように、ことのほか暢気な声が駅舎に響く。

「ぐずっ、リンちゃん!!」

「お、うっ!!」

鼻水を垂らしながら泣くなでしこと、困った表情で立ち尽くす蛍と燐。

場違いな場所に来たことへの驚きでリンは思わず変な声を上げてしまった。

……



……

「そっか……」

なでしこは二人を離すまいと顔を埋めながら嗚咽をあげていた。

そんななでしこの頭をリンは優しくなでてあげる。

「ごめん。わたしたち自分勝手だよね」

燐はなでしこの手に自分の手をそつと重ねた、振り払うわけではない。

ただ重ねたかった、小さく暖かい手の感触に触れていたかった。

「もう、そんなに謝らなくていいって。それにさ」

リンは待合室にあったパンフレットを見ながら呟く。

「行き当たりばったりを楽しむのも旅なんだって、ウチのお爺ちゃん言ってたんだ。だから寄り道するのもありなんじゃないかな。私もそういうの好きだし……」

「リン、ちゃん……」

リンの意外な言葉に螢は少し驚いていた。

てつきり反対されるとばかり思っていたから。

「でもね」

リンはなでしこの両肩をポンと叩く。

なでしこはびくつと体を震わせるが、

「行くなら私たちも一緒だよ。待つのは苦手だしね。これでいいだろ、なでしこ？」  
「リンちゃん……いいの？」

「四人で行けばなんとかなるよ、きつと」

「うん！ 私、たとえ地獄の果てまでもついていくよっ！」

なでしこは両手で目を拭って元氣よく答える。

今更、進むも戻るもないのかもしれない。

どっちみち目的地は一つしかないのだから。

「地獄っていうか……」

「ブラックホールの、底って感じかなあ」

燐と蛭は顔を見合わせて苦笑いする。

あのテールブルクロスの場合で蛭が何気なく言ったこの町の歪んだ原因。

ブラックホールのような途方もない力が町や人に影響をあたえていた。

その“穴”が多分あそこにある、そんな予感がしていた。

それを塞ぐ術があるのかは分からない、行ってみるまでは分からないことだった。

「ふおおおお！ ブラックホール、良いねい！ 何か盛り上がってきちやうよん！」

さつきまで泣きはらしていたはずのに、SF的な言葉を聞いた途端でしこはテン

ションMAXとなっていた。

(怖がりなくせに好奇心だけは人一倍強い、見てて飽きないよ本当)

ため息交じりの表情を浮かべるリン。

だからこそ惹かれたのかもしれない、常に全力で楽しむなでしこの存在に。

「あそこへ行くのは止めたほうがいいわ。あそこはもう意味がないもの」

熱くなつた空気を冷ますように静かではつきりとした声が耳に届く。

いつからそこに居たのだろうか、改札口の先に一つの影があつた。

電車の窓から零れる光がその影と形を浮かび上がらせる。

それは幼い少女。

リンとなでしこはそれ程驚かなかつた、でも蛭と鱗は蛇に睨まれた蛙の様に膠着して  
いた。

それは良く知っているはずの人なのに、初めてあつた人だつたから。

なでしこの話から何となく分かつてはいたものの、実際に見ると衝撃が凄かつた。

その姿はおとぎ話の座敷わらし、そのものだったのだから。

「あなたは……オオモト様、なんですか?」

蛭は前にも同じことを聞いていた、けれども今は相手が違う。

声の震えを抑えきれなかつた、目の前の人物を信じ切れなかつたから。

四人と一人の少女。

それは銀色の改札口を挟み込む様にして対峙していた……。



## T W O t i c k e t s

一瞬の事だった。

意を決した蛍が唇を開ける瞬間、それは起きた。

ガシャン!!

大きな衝撃音が鳴り響いたと思うとキラキラとしたものがバラバラと落ちていった。

ああ、良く分からないけど硝子が割れたんだ、スローモーションの様な光景を目でぼんやりと追いながら蛍は何となく理解する。

カツン、と力を失ったように床に転がるものがあつた、それは普通の石ころに見える。でも誰が? というより、何が起きたの? 状況がまだ理解出来ない。

見ると駅舎の正面のガラスに穴が開いていた、多分この石の作業で。

「みんな大丈夫!?!」

リンの鋭い声が飛ぶ、その声でぼんやりとした頭も目も冴えることができた。

「蛍ちゃん! 怪我はない?」

蛍の姿は燐のすぐ目の前にあつた。

今気づいたが燐と蛍は無意識に抱き合っていたのだ。

「うん……燐は、怪我してないの？」

「あ、わたしも……うん、だいじょうぶ、みたい」

自身の体を見回して見るが、破片が刺さったあとなどなさそうだ。虫の体も確認してみるが傷らしきものはない。

「なでしこちゃんは？」

「私もランプも無事だよっ！」

なでしこは大事そうにガスランプを抱えながら元気な声をあげる。

全員無事なのは幸いだが、確実にこちらを狙ったものだった。

一体誰の仕業とガラス越しに夜の街を見渡す。

犯人はすぐに分かった、確認するまでもない、それは割れたガラスの間から漂ってきたから。

甘ったるい不快な臭い——それこそがあいつ等の存在を確かにするものだった。

「なんでアイツ等こんな時に！」

非難するように燐は叫ぶ。

駅舎の窓越しに見える暗いアスファルトの上に、異形の存在を確認出来た。

視界に映るだけでも十数体ほどいる、白く顔のない人影の群れ。

雨に濡れた体を気にするわけもなく、ただ意味不明な言葉を口々に発しながらずるず

ると、こちらに向かつて歩みを進めてきていた。

奴らの狙いは間違いないこの場所だろう。

「ここには彼らの欲しいものが全てあるから。眩い光、脱出するための足、そして欲望を満たすため捌け口。あなた達にも都合がある様に、彼らにもまだ都合があるのよ」

燐のやるせない叫びに、少女は落ち着いた声色で説明する。

こうなることが分かっていたような口ぶりだ。

灯りが少ないので窓の外の様子はまだ暗く、詳しいことは分からないが、白い人影は皆、何かを手を持っているようにみえた。

棒の様に長いものや、四角いブロックの様なもの、皆何かを手にしながらかちらへとゆつくりと近づいてきていた。

あからさまな攻撃性を持っていることに少女たちは顔を青くして戦慄わなないた。

「蟻のように群れるのは言わば元の人間性がなせるもの。だから誰かが武器を持ってばそれを模倣してしまう。仲間外れになるのは怖いから」

(二元の人間って……ゾンビってこの住人なのか……)

リンは少女の何気ない言葉に眉を寄せる。

薄々感づいていたことはいえ、いざそれを知ってしまうことは少なからずショックがあった。

あの白いゾンビが本当にゾンビだったなんて。

良く考えれば分かることだが、いぎ目の前に恐怖が襲い掛かると、そんな事はどうでもよくなってしまう。

それが何者であるかなんて気にする余裕もさえない、ただ恐怖から逃れるのみだから。

そう思うとリンは急にあの白いゾンビ達が怖くなってきた。

元が人間ということは、ここにいればいずれ自分たちもそうなる可能性もある事だ、それは行き過ぎた妄想かもしれないが、今のリンには理屈が正しいように思えてならなかった。

「ねえ、蛍ちゃん。あのゾンビって強い光が苦手なんだっけ？」

「あ、うん。蛍が車のヘッドライトを当てたときあの人影たち後ずさりした気がしたんだ」

ここそこそとした動きでなでしこが近づいてきたと思うと意外な事を聞いてきた。

今、まさに恐怖が襲い掛かろうとしているのに妙に暢気な質問だった。

だから、蛍は頭で理解する前にさりと答えてしまった。

余計な事を含ませたことも気にもせず。

「ふえ？ 蛍ちゃん。車の運転、したの？」



きよとんとした表情でなでしこが顔を覗き込んでくる。

突然の振りで、燐は慌てふためいたように誤魔化しつつも問いに応じた。

「あ！ もう、蛍ちゃん！ その、ちよ、ちよつとエンジンを掛けてみただけだよ。でもつ、どうしてそんなこと聞いたのっ？」

なでしこ達が電車を運転するかもしれないのに、何故か自分の運転の事は隠しておきたかった。

友達なんだから告白しても良いんだけど、蛍との大切な約束を守りたかった。

（肝心の蛍ちゃんはすぐバラしちゃうんだけどね……）

「なんだ、ちよつとビックリしちゃったよん。ほら、今、電車の照明があるからあいつ等来れないんじゃないかと思つて。ほら、このガスランプもあるしねい!!」

ランプが魔除けになるとでも思つたのか、なでしこは何を思つたのかガスランプを頭上に掲げた。

淡いランプの明かりがゾンビ達を退散させる。

当然そんなわけではない、むしろそれはあいつ等から見れば良い的のように見えた。

ひゅん、と風切る音がしたと思うと。

ガシャシャーン!!

再び何かが破れる音が響く。

今度は更に激しい音が駅舎の中を振動するように鳴り回った。

「ふああああ!？」

その音にも負けないほどの甲高い声、なでしこの悲鳴が木霊した。

目を丸くしたまま凍りついたように立ち竦んでいる。

どうしたの？ と蛍が声を掛けようとするがその手が止まった。

あまりにショックな出来事が起きてしまったから……。

「わ、割れぢや、っ、だ……私の大事な大事なガスランプが木っ端みじんに……」

震えながら手にしているのはガス缶と本体と思しき金属製の部分のみ、肝心のランプ部分は無残にも割れて吹き飛んでしまっていた。

「なでしこ……」

「大丈夫なでしこちゃん！ 怪我は？ 手とか切ってない？」

リンは燐は即座になでしこの傍によって安否を確認する。

リンはなでしこの手から強引にランプを取ると、コックを捻ってガスを止めた。

燐は半ば強引に手を開かせて怪我がないか確かめる、幸運にも傷はついておらず、ガラス片も服にすら刺さっていなかった。

「えぐっ、えぐっ、なけなしのお金で買った、可愛いランプが、大事なランプが……」

割れたランプを手になでしこが泣きじゃくっている。

まだ破片が残っているかもしれないので、見ているこつちが心配になつてしまう。蛭は床に転がっている別の石を発見した、これが駅舎のガラスとランプを同時に壊した元凶だろう。

なでしこの体に当たらなかつたのは幸いだった。きつ、と窓の外にいる奇怪な連中を睨む。

だが連中は下卑た笑ひ声をあちらこちらから上げている。

「スゲエ、2枚抜き……ナカナカヤルナア」

「ヒヒヒ、涙目ノオンナノコ……ソソルヨネ」

コイツ等は人であつて人でない、この低俗な笑みでそれが嫌と言うほど理解出来た。

可愛そうな存在であるが、危害を加えてくるコイツ等には同情の余地はなかつた。

「ば、ば、ば、バカあ!! 何てことするんだよおー」

涙声のなでしこの絶叫が駅舎を抜けて町全体に響くほどの反響を揺るがす。

普段悪口を言つたりしない純真無垢ななでしこだが、自分の大事にしていたものが傷つけられたのには我慢ならなかつたのだ。

それでもあの白いゾンビには届かない、彼らはより大きな声でゲラゲラと笑いだしていた。

そしてその声は数を増やし続けている、いつしかそれらはロータリーを覆いつくすほ

どの数にまで増殖していた。

小平口町に残っているすべてのアレがここに集結している、そういつても過言ではないほどに。

そしてそれは何かの合図のように手を上げていた、皆、何かを手にして振り上げている。

(まさか!? そんな嘘でしょ!)

燐は咄嗟の判断して蛍の手を掴み、ベンチの後ろにあるごみ箱へと身を隠した。

それを見たリンも察したように、涙ぐむまでしこの腕を強引に取って太い柱の影へと身を隠す。

身構える四人と、対照的にぼーっと立っている少女が一人。

リンは改札の外にいる女の子と目があつた。

「隠れてたほうがいいよ」

リンはなでしこをなだめながら少女に身を隠すようにジエスチャーを交えて指示をだす。

「わたしのことは気にしないでいいわ」

それだけを呟いて関心なさそうに顔を背けた。

「……小さいから大丈夫なんじゃない?」

素つ気ない態度を見た燐がわざとらしい声で話す。

「ちよつと燐」

蚩は燐のスカートの上を掴んで窘める。

見た目は女の子だけどオオモト様だよ、と言わんばかりに。

「……」

少女は一瞬年相応に見える、ふくれっ面になったが、思いの外素直に改札から離れて建物の影に身を隠した。

ねっ、燐は目で合図を送る。

蚩はそれに苦笑いを返した。

「ヒヤッハー！ 新鮮なJKダー！！」

叫び声のような怒号が響く、それに呼応したように様々なものが駅舎に投げ込まれる。

台風のような暴風が駅舎の中で暴れ回った。

ガラスはパリパリと割れ響き、待合室の設備はつきつきと傷ついていった。

そこまで古くない駅舎なのに、投げ込まれるものが壁や床までも無秩序に破壊していく。

何時までつづくのか分からない、投石と雄たけび。

何かがぶつかる音が出る度に悲鳴を上げそうになる。

四人の少女は照らし合わせたように声を我慢してやり過ごすことにした。

直ぐにでも改札を抜けて電車へと行きたかったが、今、動くことはとても危うい。

嵐が過ぎ去るまでは四人は物影に身を縮こませるだけが出来ることだった。

「合図出すから、みんなで一斉に改札に入ろう！」

「うん！」

喧噪に負けない声で燐とリンは確認し合う。

蛍もこくりと頷いた、なでしこもベそをかきながらも小さく頷く。

投げるものがなくなっただのか、次第に音が収まっていく。

途切れたタイミングが鍵だった。

「いくよー！ いっせーのー！」

少女たちは一斉に動き出した。

リンはなでしこを強引に立たせて、素早く改札を抜ける。

なでしこは未だランプが壊れたショックから立ち直っていないが、それでも半泣きの

ままゲートをくぐった。

燐と蛍は手を取り合ったまま、改札を抜ける……はずであった。

だが二人は金縛りあったように立ち尽くしていた、後数センチで改札を抜けられるは

ずなのに。

それは体の問題でなく、心の問題であった。

ここを抜けるという事は全てを諦めることと同じ、町も人も大事な人も全て黒い卵の中に閉じ込めてしまうということ。

わたしたちはこの世界で何をして、そして何をしに来たんだろう、今になって疑念が泡の様に沸き起こってきていた。

「蛍ちゃん！ 燐ちゃん！」

改札口の直前で二人が立ち止まっているのを疑問に思ったリンが切羽詰まったように声をあげた。

二人がここへきて立ち止まる意味はリンには分からない。

いや分かっているつもりだった、燐と蛍、二人には何かしらの悩みがある、それは分かっていた。

それは漠然とした悩み、同じ年の女の子だったから分かったつもりだった、この年の子は色々で悩んでしまう、それは自分だって同じだったから。

でも今になって思い知らされる、何も分かっていたいなかったことに。

僅か数センチの改札が潜れないほどにあの二人は思い悩んでいるのだ、すぐ後ろから絶対的な悪意が迫っているというのにそれ以上に苦しいことなんて、リンにはとても考

えが及ばなかった……。

「蛍ちゃんごめんね。わたしの目にはどつちの世界もそれほど変わらないんだ……灰色か黒かその程度の違いしかないんだよ。だから今更迷っているんだ」

燐は自虐気味に呟いた。

ここから脱出出来たとしてもその先の嫌な事は何も変わってくれない、むしろそれ以上で悪化する恐れもあるのだ。

だったらこのままのほうがまだ、いいのかも……だってまだ、あの人を好きでいられるから。

綺麗な思い出のままの自分でいられるから。

「そうなんだ……じゃあ辛いよね」

「うん……」

燐の告白。

何となくは分かっていたことだけど、蛍はそれを聞き出そうはしなかった。

多分知るのが怖かった、でも一番怖いのは燐に嫌われてしまうこと、そのことを考えただけで身を引き裂かれる思いがするのだ。

だから燐の辛さは分かっている、それは同じ思いだったから。



だからこそ改札をこえることが出来なかった、螢には電車も光も今はハッキリと見えているのに、ただ燐が動かなかったから螢も動かなかった。

それは燐が好きだったから、ただそれだけ。

「だったらさ、燐が楽な方を選ぶと良いよ。その方が苦しむことが少なくてすむよ。でも、どっちの道でもわたしはついていくから。たとえどんな結果になったとしてもね」  
 「それに、今更なんてことはないよ。遅いも早いもない。燐とわたしは、今、一緒にいるから」

ぎゅつと強く手を握ってくれる優しい親友。

いつもどんな時でも味方になってくれた、どこまでも透き通った瞳と心をもった少女。

優しく、そして儚く微笑む螢の顔を見つめる。

これだけ魅力的な子がわたしと一緒に居たいって言ってくれてる。

——その微笑みにぎっつ、と音を立ててノイズが走った。

(そっか、心が迷っているからこうなるのか)

今更自分の弱さを知った。

弱い事は強い事なんていうけれど、言葉通りになるなんてことはない、弱いは弱いまままだ。

だから弱いなりの行動をするまでだ。

燐はそつと瞳を閉じた、本当は弱い自分の目を潰したかったが、そんな事をすれば蛍が悲しむ、それは何よりも辛い事だったから。

「蛍ちゃん！ 一緒に、一緒に飛んでくれる？」

「うん！ いいよ。一緒に、二人で飛び越えよう」

蛍は燐の言葉に疑問を抱くことなく即答した。

それは燐の手の震えが、冷たさが、怖さが伝わってきたから。

（ごめん、お兄ちゃん。わたし、わたしたち、今からすごく簡単に楽なことをするから。だから……ごめんね）

パキツ、と二人の背後から踏みしめる音がする。

投げる者がなくなつた白い影が駅舎に侵入してくる音だった。

「コレデ定時でカエレル……」

「仕事辞メテエナ、マジデ……」

意味不明な言葉を発しながらも迷うことなくこちらへと向かつてくる。

ぱきぱきとガラスを踏み割る音が次第に増えてきていた。

「早くこつちへ来てえ!!」

自分の悲しみなど忘れてなでしこが叫ぶ。

ガスランプの事はとても悔しい、でも今はそれどころじゃない。

背後から迫る白く不気味な顔が歓喜の喜びで歪んでいた。

二人の肩を掴もうとイビツな手を伸ばしてくる。

「燐、飛ぶよー！」

「……うんー！」

手を繋いだまま改札を跳び越す。

ちようど二人が通れる程度の狭いステンレスの間をジャンプした。

別に下に崖があるわけでも障害物があるわけでもない、それでも断腸の思いで改札を跳び越した。

瞬く隙も無い時間、本当に僅かな時間だが、この世界から二人は解き放たれた。

飛んでいるなんて感じることもない時間だった、でも不思議と軽やかだった。

蛍も燐も目を瞑っていたが、あっさり到着地できた。

大した高さでもなければ距離もない、それでもちゃんと地面に立つことができた。

気持ちも体も歪むことはなかったのだ。

二人はほぼ同時に目を開けた、ちゃんと地に足がついたのを確認すると顔を見合わせる。

「どうしたの？」

何も言わずに顔を見つめてくる燐に蛍は恥ずかしそうに尋ねた。

「うん。やっぱり蛍ちゃんって可愛いなあって思ってた」

綺麗な蛍の瞳、それが今はつきりと燐の瞳に映っている。

もうノイズのようなものは見えてない、そんなものなんて最初からなかったのかもしれない。

弱さが迷いが作り出した、文字通りの“ノイズ”だったのだろう。

「燐だつてすごく可愛いよ。今の燐なら何でも出来そうじゃない？」

蛍から見た燐、少し前まではちよつと顔色が優れなかったから気になってたけど今は大丈夫みたい。

いつもの綺麗な燐のままだ。

「くすつ、ありがとう蛍ちゃん」

「いえいえ、どういたしまして」

二人は笑みを零しながら和やかなやり取りをした。

やつと普通に笑うことが出来た気がする、それぐらい久しぶりの心からの笑顔だった。

「もう、そんなところでいちゃいちゃしないで早く早くー！」

ふいになでしこに手を引かれて、慌ててつんのめりそうになる。

手を繋いだままバランスを取るとなでしこに引かれるがまま、ホームを走った。

「オオモト様っ！」

蛍が開いた手を少女に差し伸べる。

予期せぬ言葉に少女は一瞬迷いをみせるが、おずおずと手を前に出してきた。

蛍は半ば強引にその手をとると燐に歩調をあわせるように駆けだす、少女もそれに続いた。

ちりん、ちりん、と鈴の音がプラットフォームにか細く響く。

少女の履くぽつくりの底についている小さな鈴が鳴っていた。

その可愛らしい音色は少女たちの心を少し和ませるものだった。

「おーい！ こっちから中に入ってー」

いつの間にか運転台に乗り込んでいたリンが急かす様に手を招いている。

「リンちゃん、準備できてる？」

「まあ……なんとかね」

息を弾ませながら訪ねてくるなでしこにリンは少し目を逸らして呟いた。

一通りの運転手順は覚えたが、実際に動かしたことはない、いきなりの実技だったので当然緊張していた。

「私もサポートするから、頑張ろうねい！」

「お、おう」

頼もしさのアピールなのか、なでしこが胸を叩く。

それほど期待していないがそう言ってもらえるだけでもここは有り難かった。

どうせ逃げ道など殆ど残されていないのだ、だったら全力でやってやろう。

半ばヤケクソ気味にリンは気持ちをあげていくことにする。

「心配かもしれないけど、何とか運転してみるから。二人は座つててね」

「うん、分かった!」

「頑張つて〜」

切羽詰まった状況なのに、なぜか和やかなやり取りを行っていた。

ここまで来たら反対も何もない、全て任せるほかなかった。

燐と螢1両目の車両の後方のドアに向かった。

2両編成の電車だったが、ワンマン列車の為、2両目のドアは開かない構造になっていた。  
いた。

開いたままの電車のドア、今気づいたがあの時乗ってきた型とカラーも形も色もよく似ていた。

だからと言ってどうなるわけでもないけど、それでも親近感は湧いていた。

「足元濡れるから気を付けて」

「うん」

手を取り合つたままで車両に乗り込もうとする二人。

そんな二人に声を掛けてきた。

「ちよつとだけ良いかしら？」

「ええっ！」

「あつ……」

それはあの毬を手にした女の子。

オオモト様の小さい頃の姿のままの女の子。

未だ正体はつかめないのので少し距離を置いておきたいが、話しかけてきたのだから無

下には出来ない。

自然と二人の足が止まってしまふ。

「あ、その、お話があるのなら電車の中でも出来るんじゃないや……」

蛸は少女を気遣うように提案する。

話なら電車内でも出来るし、それにここ長くいることはあまり好ましくはない。

いつアイツらが改札を抜けてやってくるかもしれないのだから。

「それは大丈夫、あの人たちはここまで入ってこれない」

「それってどう言う……」

「あそこから先はもう違う世界なの、次元が違うと言えいいのかしら。二人ともこの場所に見覚えがあるはずよ」

燐が言い終わる前に少女は指を差した、その先は改札口の方へ向いている。

謎かけのような言葉に、燐と蛍は改めてホーム全体を見渡した。

窓から零れる光が雨に反射して電車とホームを幻想的な風景にしている。

だがホーム自体は普通だった、いつもと変わらなぬ小平口駅……。

「あー」

蛍が思わず声を上げる。

この駅を一番利用していた蛍だからこそ気づいたことだった。

「蛍ちゃん、なにか分かったの?」

燐としては待合室にいるであろう、あのナニカの事がとても気掛かりだった。

何故入ってこないのか、それが気になって駅自体の変化には気づかなかった。

「……、小平口駅じゃない……」

「えっ!?!」

蛍は呆然と呟いた。

燐は慌ててペンライトをポケットから取り出すと、ホームを一つ一つ確認するように

周囲を照らし出してみる。



駅名を示す看板も、広告のポスターも何も無い、それと当然のことながら電車にも行先をしめす表示すら何もなかった。

それにあの時、小平口駅は確かに壊れていたのだ。

リンちゃん達に聞きそびれたが、このホームにとくに壊れた箇所は無い、直したような後だつて当然なかつた。

あれだけの陥没だからそう簡単には治せないはずだけど。

「ねえ、燐、この駅なんか見おぼえない？」

「見覚えつて……蛍ちゃんも同じこと聞くんだね」

少女と同じことを聞く蛍は苦笑いする。

そうだね、蛍は軽く微笑むと言葉を続けた。

「あそこつていつも青空だったから。夜だとこんな感じなんだね」

「じゃあ、ここつてやつぱり……」

燐の脳裏にも微かに引つかかるものがあった。

見覚えがある駅なんてそうそうあるものじゃない、精々通学の時に使っている駅ぐらいたつたから。

シンプルで特徴のないプラットフォーム、それはつまり――。

「うん……『青いドアの家』の、プラットフォームだよ、ここ」

月の光さえも通さない黒い雲が、冷たく振る雨が隠していたせいなのか。確かに見覚えがあった、あの静謐な世界のなかで何の為にあるのか分からない白く真新しいホーム。

それが今、ここにあった。

一台の電車とともにこの場所で……。

それは狂った世界のなかでもっとも普通で問題のない光景だった。

……

……

……

## floriology

真つ暗なプラットホーム、それは夜の海の灯とう浮標ひょうのように淡く不安定にゆらゆらと揺れているようにに感じられた。

外灯は一切なく、駅名を示す看板すらもない地図から切り取られた無名の駅。行先のない電車から零れるチラチラとした蛍光灯の灯りだけが頼りだった。

見た目は普通なのに何かが違う、その違いさえ分からぬほどに普通の駅。青いドアの世界にあった駅がここにあった。

どうしてこうなったのかは分からない。

この歪んだ世界で理由を問う事の方が間違っている気さえする。

次元が違う、そう言っていたけれど特に変わりはないと思う。

空は墨を零したように真つ暗だけど高さを感じることが出来るし、雨が一層強く降りしきっているが大地だつてどこまでも続いていたのだから。

常識の範疇でのことしかなかった。

次元の違いとはもつと異質で異常なものであるはずである。

その概念を覆すものもこの場所にはなかった。

(1)

燐はどうしても改札口で何が起こっているのかが気になっていた。

背中に差しした鉄パイプを引き抜き、蛍と共に様子を見に行ってみた。

一人で大丈夫だよ、と声を掛けておいたのだが、蛍は頑として聞かなかつた。

燐は仕方なく蛍と共に一緒に行くことに決めたのだ。

燐と蛍は改札口の近くまで来ると、さつと近くの壁にへばり付いて横目で中の様子を

伺った。

底知れぬ緊張感が暗闇の中から漂ってきて、少し腰が引ける。

蛍が緊張感を表すように手を強く握ってきた、燐も同じような強さで握り返す。

それでも確かめないと気が気じやない、あの女の子のことを信用してないわけじやな

いけど、信頼に足る理由も思つたほどないのだ。

蛍がぎゅつと体を密着させてくる、暖かさと柔らかさが少しだけ勇気をくれる。

燐は蛍を庇いながら改札口前まで来る、何も音はしない。

あの怪物の唸るような声もガラス片を踏む音も。

それは当然の事だった。

そこは何も変わっていなかったのだから。

改札口から見える待合室には何の姿もない。

正面にあつた窓ガラスも綺麗なまま、割れるどころかひびきさえも付いていない。

静まり返つた待合所は、時が止まつたように閑散としていて寒々しい印象があつた。

あれだけいたあの白い人影が全ていなくなるのはどう考えてもおかしい、どこかに隠れるにしても相当数いたはずだから隠れきれぬわけもない。

二人は答えを尋ねる生徒のように女の子の方に目を向けた。

それを遠くから見つめ返してくる黒い髪の少女、その黒い視線は物言わない代わりに強い光を放っているように見えた。

燐と蛭はこの場にいることに焦りを感じて頷き合ふと、少女の元へと舞い戻る。

息を切らして肩を上下させる二人に対し、少女は静かに呟いた。

「あなた達が見たのは単なるイメージよ。人は物体を見た時に概念的なイメージを作り上げる。それが幻となつて見えただけのことよ」

「そ、そうです、か……」

蛭は息も絶え絶えに駅のベンチに座り込んでいた。

冷たく何の変哲もないプラスチックのベンチ、その冷たさが火照つた体に心地よかつた。

「もしあなたたちが改札から一步足を踏み出せば、あちらの時間が戻ってくる。あの顔

のない人達とともに」

（そういえば図書室のときも、あの白い人影は通れなかったんだよね。目の前に透明な壁があるみたいに）

燐は漠然とだが次元の違いを理解した。

そしてこの場所こそが青いドアの世界そのものであることも。

現実との狭間にあると聞いていたが、もしかして世界が反転しているのかもしれない。

だからこそその電車な気がしていた。

「この町で起きたことは何も特別な事じゃないのよ。少し何かのズレが生じれば起きる程度の問題なの」

毬を手にした女の子が黒い空を見上げながらに呟いた。

こんなことが他の町や県で起こっていたらそれこそ未曾有の大惨事のような気がするけど。

「あの、わたし達と一緒に、来てくれないんですか？」

息が整った蛸は気を遣ったように少女に問いかけた。

答えはなんとなく分かっている、それでも聞いておきたいことだった。

「ええ」

少女は小さな口を動かして一言だけ呟いた、予想通りの答えだった。

「どうして？ だってこの町はいずれ圧縮して仕組みが変わっちゃうってオオモト様が……」

燐はあつ、と口を抑えて途中で話を切った。

この少女もオオモト様なのかもしれないのだ。だったら青いドアの家にいる大人のオオモト様は何なのだろうか。

少女の顔をじつと見つめても何も答えてはくれない、知つてるとも知らないとも何の色も見せてくれなかった。

二人にとっては在りし日の幻としか思えない少女の姿。

それでも今現実はこの場に居る以上一緒に連れて帰つてあげたい。

身元とか帰る家だとかそこまで頭が回らないけど。

見た目通りの少女ならば尚のこと手を差し伸べるのは必然的な行為だった。

「わたしはあなたたちとは違う。この姿はこの町だけのもの。いわばこの町とわたしは同一ということね」

「そんなことがあるの？」

「それじゃ、何の為にわたししたたちの前に出てきて、くれたんですか」

それは燐が気になっていたこと。

蛍はともかく燐は別のかたちでこの少女を知っていた、それはあのノートに漠然とだが書かれていたことだから。

「謝りたかったの、あなた達二人に」

女の子は真つ直ぐにこちらを見つめている、大きな黒い瞳の奥に小さな揺らぎが見えていた。

蛍と燐は黙って少女を見つめ返すのみ。

横殴りの雨が車体の隙間から入り込み、ホームに小さな水溜まりを作っていた。

………

………

………

「おい！」

「燐ちゃん」

ふいに背後から声を掛けられて、燐は思わず振り返った。



いつから居たのかリンとなでしこがこちらを見守るように少し離れた場所で立っていた。

「あ、ごめんね。でも、どうしたの？ この電車放っておいて大丈夫？」

ちよつと申し訳ない顔を螢は二人に向ける。

電車が勝手に動き出すことは無いだろうが一応聞いてみた。

「うん。多分ね」

自信無さそうにリンは答える、まだ何もしてないし問題ないはず。

それでも少し心配になり、確認するように少女を見た。

視線があつても特になにも言つてはくれなかつたが、何も言わないつてことは大丈夫なんだろう、多分。

「燐ちゃんも螢ちゃんもなかなか来ないから、リンちゃん、心配になつちやつて。だから迎えに行こうつて話になつちやつたんだよねっ」

「なでしこが泣き出すからだろ。しかも、あんな事するし……」

「あんな事つて？」

「い、いや、まあ、大したことじゃないよ」

燐の素朴な質問にリンは頭をかきながらはぐらかす。

「あれは私とリンちゃんの愛の証なんだよ……」

なでしこが意味あり気に呟く。

どこら辺に愛が隠れているのか、リンはジトつとした目を向けるだけ。

“愛”という意外な言葉に蛍と燐は感心したような声を上げていた。

(あれは愛というより“悪意”の間違いじゃないか……なぜ美化できるし)

リンはなでしこを呆れた目でじつと見つめるが意に介さないようにで何故か笑顔に向けてきた。

「ふふっ、やっぱり二人は仲良いんだね」

「だって二人だけでキャンプに来るぐらいだよ。仲良くないと出来ないよね。まあ今更だけど」

“愛の証”が独り歩きに、深いため息をつく。

リンは本当の事を言ってしまうかと思っただが、それは別の意味で恥ずかしいことなので、この場は我慢しておいた。

着物の少女は所在なさげに一人、毬をついて遊んでいた。

可愛らしい容姿と相まってとても絵になる光景なのだが、皆の関心は別の所にあつた為、注目的にはならなかった。

「リンちゃんごめんねっ。私、リンちゃんの”はじめて”貰っちゃったよ……」

調子に乗ったなでしこが更におかしなことを言ってきた。

雲に隠れた月を探すような仕草を見せながら良く分からないポーズで。

自分に酔いしれるなでしこの姿はハッキリ言つて、なんかムカついた。

燐と蛍からは、わあつと黄色い歓声が沸き上がる。

(何の誤解をしてるんだらうか?)

リンは他人事のようにぼけつとしていた。

まさか”はじめての腹パン”とか言うつもりなのか。

女の子の言う初めてはもつとこうロマンチックなものなんじゃ……経験ないから分からないけど。

初めての喧嘩ならまあ、当たらずと雖も遠からずと言つたところか。

それにしても一方的だったけどな……。

「燐、わたしたちも負けていられないね」

「蛍ちゃんは何を言ってるのかなあ? それにこんな事してる場合じゃない! リンちゃん達はなにか用事あつて来てくれたんじゃないの?」

何故か張り合おうとする蛍に燐は嫌な波動を感じ取つたので、強引にリンに話を振つた。

「あ、そうそう、あのさ、何か残したほうが良いのかと思つたんだ。その、安全を祈願するとか、そういうので。ほら、これとかどうかな?」

リンは慌てたようにジャージのポケットに手を突っ込むと、小さな白い犬の置物を出してきた。

それを見て燐も同じようなものを預かっていたことを今、思い出した。本来、中におみくじが入っているのだが今は何も入っていない。

リンによるとキャンプに行く際はお守り代わりとして持つていく事が多いらしいかった。

「わたしも持つてるよ。まあ、リンちゃんから借りたものなんだけどね」

燐もスカートのポケットからそれを取り出す、同じような白い犬の小さな置物。

モチーフとなっている犬は同じだが呼び名は違う、それと同じく顔だちも微妙に違っていた。

「それ、返さなくていいからさ、ここに置いてつてあげよう。あ、無事に帰れますように、とかそういう願掛けで」

リンはちよつと誤魔化すような微笑みを見せる。

それでも極力言葉は選んだつもりだった。

悪魔祓いとか鎮魂とかそういう意味ではなく、純粹に何かを残してあげたい。

あの白いゾンビの狙いが私たちならその代わりの“依り代”とでも言うのだろうか、それを置いていくことで少し安心を得ることが出来る気がする。

あの女の子の話から、多分白いゾンビは元人間だろう、一つに固まったと言っているものさえも恐らく。

ここには人間しかいなかったんだ、だからこそ何か“手向け”なものがある、リンはそんな気がしていた。

「サトくん……」

燐は手のひらの小さな犬の置物にそつと呟いた。

眉毛の凜々しい白い犬は何も答えてはくれない。

燐は心の中に片目の中型犬を思い浮かべる、心の中の犬は哀しそうな眼差しをしていた。  
た。

なんでこうなったのか、結局具体的なことは分からないままだった。

それなのにわたしは置いていこうとしている、この人形を代わりに置けば許してくれるの？ それとも直接会いに行かないとダメかな……？

何ともやりきれない思いが燐の心と体に楔を打つ。

自分に来れることはもうなかったのだろうか、これで全て終わりにしてそれで……戻ればすべて過去の出来事として……。

燐は白い犬甲太郎の置物をギュツと握る。

サトくんもこうやって自分の手で連れて帰りたいかった、願わくば元の姿で。

それはどんなに願っても頑張っても無理なことだ、燐の瞳に涙が滲んで景色が揺らいでくる。

いくら悲しんだって何も変わらないけど、それでも悲しさは止められない。

どれだけ悲しんだらこの苦しさが癒せるんだろう、もう一生このままなのかもしれない。

固く握られた燐の手に蛍の手が絹のようにふわつと被せられる。

燐は蛍を見つめ返すが何も言えなかった、ただ悲しく揺れた瞳を向けたまま薄く微笑むだけ。

何か一言でも喋れば涙が自然と零れ落ちそうだから、だから何も言えなかった。

蛍は燐と同じ様に小さく微笑みを返す。

悲しい想い、辛い別れ、蛍にもそれが分かっていたから何も言わなかった。

蛍はおもむろに自分の長い髪に手を伸ばし、無言のままゆつくりと髪飾りを外しだした。

「蛍ちゃん？」

驚く燐の声に蛍は困ったように笑みを返すだけ。

外した髪飾りを口で啣えながらも一つの髪飾りも丁寧に外しはじめる。

飾りを外した蛍の黒髪はそのままでも十分美しかった。

「わたしはこれを置いていくね」

蛍の手のひらに置かれた2枚の髪飾り、つい先ほどまで付けてきたもの。

思えば蛍は何かにつけて、綺麗な花の髪飾りをしていた。

お手伝いさんからもらったという金盞花キンセンカの髪飾り、蛍が幼い頃から身に着けていたお気に入りの一品だった。

「で、でもこれっ。蛍ちゃんが大事にしたものなんじゃ……」

「うん。でもこれは吉村さんから貰ったものだから。だから返したほうが良いかなって思っ」

蛍の家にお手伝いとして来ていた吉村さんとは出会うことはなかった。

家をあの“なにか”が侵入されたときに薄々感づいてはいたことでもあった、多分もう会う事はないだろうと。

それでも心のどこかでは期待していた部分もあった、万が一と言うことだっただけであるし。

家の敷地にあるらしい、“あそこ”に行けば何か分かるかと思っただけけど……もうそれも叶いそうにない。

「それにね、ここに置いておけば何かの目印になるかもって思っただの。でもね憐。本当のところはね」

「……うん」

「もう、わたしには似合わない気がするんだ。隣が、周りの人が良く似合っているって言うから気にしてなかったんだけど。ホントのところはそんなに好きじゃないのかもね」  
蛭はちよつと舌を出して笑った。

珍しく悪戯っぽい表情で微笑んでいる、気を遣ってくれたのかもしれない。

「えー、すごく似合ってて可愛かったよねえ？」

「うむ。とても似合ってた」

なでしこの素直な意見にリンもこくこくと頷いた。

「ありがとう。でもそういう外から見た自分にもう拘らないことにしたんだ。わたしがわたしであるためには何かを捨てる必要がある、そう……ですよね？」

蛭は少女に、にこつと微笑んだ。

透明なのに薄つすらとピンクに頬を染めた顔、色彩を失うことなくいつまでも綺麗なままで。

「わたしも、同じことをしていたわ。一人、あの部屋で」

「同じ……ですか？」

少女は蛭に同調したような言葉を発した。

“あの部屋”……多分マヨヒガの事だろう、ちよつと憂鬱な気分になって眉をひそめ



たが、螢は黙ったまま少女の言葉を待っていた。

「あそこでは幸運を縫い留める為に様々なものが消えていった。わたしはそれを忘れなように人形を作つて吊るしたわ。でもその数は減ることは無く増えていくばかり……」

「いつしか天井を埋め尽くす数にまでなつていったわ。でもだからこそわたしはこうやつて存在できている。それでもこの不幸の連鎖を止めたかつたの」

「あ、なんかすごく悲しい気持ちになつた、かも……」

なでしこは無性に胸が締め付けられる思いがしてリンの腕にしがみ付いた。

恐怖というよりも純粹に悲しさが込み上げてくる。

リンはなでしこの背中をそつとさすつてあげた。

背景が見えてないので全容は分からないが、情感は伝わってきた。

やるせない悲しみ、それは何も知らないリン達にも不思議と理解出来ていた。

（そっか……オオモト様はわたしを慰めてくれたんだよね。わたし一人だけが悲しいわけではないと）

「じゃあ、わたしもちゃんと自分のもの、置いていかないとね」

燐はバックパックを下ろすとストラップに括つていたお守りを外す。

あのトレッキングの時に聡と一緒に買った、お揃いのもの。

それだけに燐の中ではいつも着けていたいほどに大切な宝物だった。

「燐、いいの？」

「うん。お兄ちゃん甘えん坊さんだからわたしと分かるもの置いてあげないとね。それに一人だと寂しいから」

寂しそうに笑う燐の横顔、それは蛍が見た中でもっとも大人びている顔だった。

切なさが、憂いが、少女を大人の女の顔にさせていた。

「むあ——・ 私だけ置いておくものがないよお！」

一人だけ仲間外れされた様な気になって、思わず雄たけびをあげるまでしこ。

あまりに唐突なことだったので、燐も蛍も先ほどまでの悲しさがどこかにすつ飛んでしまっていた。

「蚊取り線香でも置いておけばいいじゃん」

「あ、それはナイスアイデアだねい！　じゃなくて、もつところ……メルヘンチックなのがいいんだよ！」

リン呆れ声の冗談に忙しく乗りつつコミをするまでしこ。

あまりに空気が違うので、燐と蛍は顔を見合わせて微笑んでいた。

でもそれは呆れたからじゃない、二人は慰めてくれたんだと感じていた。

「じゃあ、これは？ わたしがずっと預かっていたものだけど」

蛭はなでしこから預かっていたものを手に取って差し出す。

それはあの富士山のぬいぐるみだった。

「こ、これはダメだよお！ これが無いと眠れないし、風邪も引いちやうしでとにかくダメだよお！」

蛭の手から奪う様に持ち去ると、潰れんばかりの力できつくぬいぐるみを抱きしめていた。

ふつくらとした富士山が煎餅のように潰れていくのがつぶさに確認できる。

（それがあつたつて風邪引いていたくせに……）

リンは約束していたキャンプがなでしこの風邪によってドタキャンになったことを思い出していた。

そのおかげでソロキャンを満喫できたから全て悪いわけではないけれど。

「無理に何か置かなくてもいいんじゃない」

燐は自分の言った言葉が自身に言い聞かせている気がして、少し可笑しくなった。

理性を失ったものに何かを残しても意味などない、ただ心が少し軽くなった気がするだけだ。

「そ、そんなあ！ 私だけ仲間外れにしないでよお！」

「仲間外れって……」

「あはは、でも憐の言う様に別に何か残さなくてもいいんじゃないかな。こーゆーのつて気持ちの問題ぐらいだしね」

「でもお……」

なでしこは所在なげに、手をもじもじとさせている。

しおらしい姿はなでしこを必要以上に幼くみせていた。

「何も残さないことに越したことはないわ。それは後悔がないのと同じ事。きつとあなたはこれまで後悔のない日々を送ってきたのね」

女の子がやんわりと口を挟む。

あどけない姿でありながら、凜とした口調は青いドアの家の女性、そのものに見えて。

大人びた印象を皆に与えていた。

「でもそれじゃあ——」

「大丈夫、あなたの想いはわたしが受け取るわ。わたしはこの町、この地からは離れられないのだから」

蛭は哀しい瞳で小さなオオモト様を見ていた。

この人とは血縁関係もしれない、だからこそ一緒に行けない事は分かっていたから。

蛭は小平口町にそれほど未練はない、ただ生まれた場所であるだけ。

でもこの人は違う、ここで育ちはしたものの良い扱いを受けてないはず、それなのにここから離れられないなんて……。

「それにこれはあなた達が呼んだものよ。わたしは切符をもっていないわ」

「わたし達が呼んだ？」

燐の言葉に少女は小さく頷く。

青いドアの家に行ったときのように想いが願いを叶えたともいうのだろうか。

緑の鉄の車体を改めて見やる。

多少古くは感じられるがなんとなく力強さを思い起こさせるデザイン。

グリーンの配色に白のラインが入って、妙に愛らしい。

これに乗ってわたし達は逃げ出すんだ、暗闇の先にあるいつもの現実……。

電車を見ているのか誰も喋ろうとしなかった。

物言わぬ雨が電車や駅の屋根を叩く音がするだけ、僅かな間、囀る声が止まっていた。

「あつ、そうだつ！」

なでしこが両手をぱちんと鳴らす。

跳ねるように少女の前に立つと満面の笑みを見せてきた。

普段のなでしことさほど変わらないが、どこか違う感じがする。

少女が何か口を開こうとする前になでしこがぎゅつと抱きついていった。

それでも少女は顔色を変えることなくじつとしていた、戸惑っている表情も見せることなくされるがままになっている。

まるで、それが楽しいの？　と言わんばかりに。

ノーリアクションの少女は予想に反したものだっただけか、なでしこはちよつとむくれた表情を見せる。

「それならこれはどうかナツ！」

少女の体がふわつと持ち上がる、なでしこは幼い子にする“たかいたかい”をしていた。

これにはさすがに焦りを見せたのか、少女は目が見開いて口を大きく開けていた。

これまで見えなかった少女の色が初めて分かった気がした。

「えへへ、ちよつとはビックリしたかなあ？」

少女と目を合わすと、即座に地面に下ろす。

見た目通りの軽さだったのでまだ持ってあげても良かったのだけけれど。

「そうね、誰もそんなことしてくれなかったから」

少女は着物の皺を気にするような素振りを見せながら視線を外す。

表情には変わっていないように見えるけれど、少し照れているようにも見えなくもない。

見た目相応の少女のリアクションでもあった。

「なでしこ、なんで持ち上げようとしたの?」

訝しげな声色でリンが率直に聞いてくる。

「いやあ、私、残すものがないからせめて温もりだけでもあげようと思って」

えへへ、と照れ笑いを見せるなでしこ。

(なぜ照れる?)

なでしこの行動力には少し呆れてしまう。

でも少女はそこまで嫌がってないように見えたのでこれも良かったのかもしれない。

「もー、ダメだよ。なでしこちゃん」

「うー、ごめんー。ちよつとやりすぎちゃったかなあ?」

呆れたような声を出す燐に、なでしこは困ったように照れ笑いを浮かべる。

「あつ、そうじゃなくてね。ハグはね、やらなきゃならない人がいるんだよつ!」

「えつ、ちよつと燐、何を?」

燐は蛍の手を掴んで引き寄せると、強引に前に押し出した。

とと、つと蛍は前につんのめりそうになる、その目の前にはこちらを見つめる少女の姿があった。

「さあ、蛍ちゃんもなでしこちゃんに負けないぐらい熱いハグをしてあげよう」

「えっ？ ハグつてわたし？ だつてそんなこと……」

にこにこことこちらを見る燐に困惑の目を向ける。

確かにオオモト様には母親を重ねてみたこともあつたけど、今のこの少女の姿ではさすがに無理がある。

「あなたがしたいのなら別に構わないわよ」

少女からの静かな響きに蛍はうっ、となつていた。

先ほどまでのなでしこの様子から拒絶はないと思うがそれでも躊躇してしまう。

それこそ人形のように綺麗で壊れそうな姿をしているから。

このまま大事に飾っておきたいほどに綺麗だった。

「……っ(めんなさい)」

「え？」

少女からの突然の謝罪に蛍は更に困惑してしまう、口ではそう言うがやはり嫌なんだろう、蛍は少女から一步後ずさる。

それを見て少女は首を振った。



そして静かに語りだす。

「そうじゃないの。あなた、いえあなた達には謝っておいたほうがいいと思って。偶然が積み重なってこうなったのだけれど、多分原因を作ったのはこのわたし。謝って許されることでないでしょうけど」

「そんなこと、ない、です」

蛭は引つ込めた足を前に出した。

謝罪する為にわざわざ来てくれたんだろう、それも一番見られたくない姿で。

そう思うととても愛おしくなる。

自然と両手を回して少女を抱きしめていた。

母親がそれこそ我が子を愛おしく抱くように優しい気持ちで。

蛭は心の底から嘆息した。

少女の体は華奢で幼く、ちよつとでも力を込めたら壊れそうになるほどに細くか弱かった。

それなのにどこか母親の色を思わせる。

蛭の母の面影の残すものは何も残っていない、それこそ遺品や一枚の写真さえも。

だからこそ居ないことに疑念を抱かなかった、幼い頃から世話してくれた人も何も語ってくれなかったから。

ただ不憫とは思つたんだろう、だからこそそのあの金盞花キンセンカの髪飾りをくれたのではないだろうか。

“金盞花”——初夏にかけて咲く小さな花だけど、その花言葉は悲しみで彩られていた、別離、悲嘆、そして絶望と。

そのせいで身に着けているだけで余計なトラブルを招いたこともあった。

でも燐が友達になってくれるからは何を言われても気にならなくなった。

それだけ燐の存在はわたしにとってとても大きく掛け替えのないものなんだ。

だからもう必要なくなつたんだと思う、それは燐がいるから。

そして今感じている母の温もりさえももう必要のないものかもしれない。

それは拒絶ではなくて、前に進むためには過去に縋る必要なんてなかったから。

わたしを生んでくれたお母さん、育ててくれたお母さん。

どちらも大切な人だった。

わたしは燐と一緒に生きていく、すべてを捨てて燐と一緒にいつまでも。

少女の温もりに包まれたまま、螢は確かな幸福感に包まれていた。

燐さえいればそれでいい、そう思つてはきたけど実際は違つた。

燐もわたしも幸せにならなくちゃいけないんだ。

その為にはいっぱい考えなくちゃならない。

だからわたしが燐を守るんだ、今まで守ってくれた分、ううん、それ以上に、  
燐、一緒に幸せになろう。

その為にはもつとわたしが……。

「あなたが手を離さなければそんなに難しいことではないわ。しっかりと握っててあげなさい、少し強めに」

「オオモト様……」

虫だけに聞き取れるか細い声、それは母としての忠告、最初で最後の事。  
名も知らず、墓標すらない、そんな少女達の想いが形作つたもの。

その少女達さえ母を父を覚えていなかった。

この悲しい連鎖の終わりを予感した、それはずっと望んできたこと。

あの時、恋を知った時から羨望していたことだった。

だからすぐく暖かい、本当に暖かい心を持った少女だった。

わたしは向かい合う事を怖がっていたんだ。

「なんか分からないけど涙が出ちゃうね……」

「ついでに鼻水も出てるぞ」

感化されたのか顔をべとべとにしてすすり泣くなでしこ、それにタオルを差し出すり

ン。

二人の様子も偶然に親子のように見えた。

(蛍ちゃん良かったね。お母さんと会えて……)

燐は蛍と少女を黙って見つめていた。

かつての自分もこうだったのだろうか、父と母の愛情に包まれていた日々、もう遠い遠い記憶の隅に少しだけ残っている忘れられたピースのようで少し物悲しくなった。

記憶の隅の両親との暖かい日々、多分もう戻ることはないだろう。

だからこそ目の前の二人が羨ましかった。

「ほら、燐も見えてないでこっちききて」

不意に蛍に話しかけられて燐はきよとんとなった。

抱き合いながらも手招きしてくる蛍、何かあったのか。

「どうしたの蛍ちゃんって、ええっ!」

手招きに誘われるように燐が二人に近づくと、不意に蛍に手を引っ張られる。

急な事で足を踏ん張ることも出来ず、そのまま後ろから少女に抱きつくこととなってし

まった。

「あつ、ご、ごめん。もう、蛍ちゃん。どーゆーこと?」

口を尖らせる燐に蛍は楽しそうに笑いだす。

「ふふっ、さっきのお返し」

もう、と燐は口を膨らませる、そんなとき少女の黒髪の甘い香りが鼻をくすぐった。その香りは花のようでもあり柑橘系の匂いでもあった。

なんとなく心が落ち着いていくような柔らかい薫り、それがこの少女のそのものを表しているように思えた。

「わたしだけ幸せなのは嫌なんだ。燐にも幸せを感じてもらいたいって思ってた」  
優しい笑みの蛍、屈託のない透明な瞳が真っ直ぐに向けられて少し恥ずかしい。

心の中を見られた気がした、でも理解してくれるのは嬉しい。  
「じゃあ……オオモト様は幸せそのものってこと？　なんとなく失礼なこと言っていない？」

おどけた口調で話す燐。

蛍は少し考え込む。

「そうでもないんじゃない？　幸せも幸運もポジティブなものだと思うし、普通に褒め言葉だよ」

少女を挟んで抱きつきながら好き勝手なことを言っていた。

それでも少女は嫌そうな顔をみせずそのまま身を委ねている。

青いドアの家のソファでの一時とは正反対の立場となっていたが、それほど悪い気は

しなかった。

それは二人に悪意がないことが分かっているから。

綺麗なものに挟まれて嫌なことは無い、それは花が咲き乱れる草原を歩くような感じ  
でとても気持ちよく美しいものだった。

「あー、蛍ちゃん達ズルいー！ 私にも幸せ分けて欲しいよお！」

「あ、ばかつ！ 鼻水垂らしたままで行っちゃだめだつて」

呼んでもいないのになでしこがこちらにやってくる。

涙と鼻水と涎を垂らしたまま。

その顔をタオルで押さえたままリンも一緒にやってきていた。

あまりの勢いで来るものだから蛍も燐もそして少女までもすこしたじろんでしまう。

わつと飛び込んでくるなでしこ、それを押さえようするリンも同じように飛び込んで  
きた。

「えっ！ 嘘でしょ！」

「きゃっ！」

少女達はホーム上で重なるように倒れ込んでいた。

「いたたた、みんなだいじょうぶ？」

「なでしこがダイブするから……ほらまだ鼻水でてるぞ」

呆れ声のリンが甲斐甲斐しくハンドタオルを顔に当てる。

なでしこはそのまま鼻をずるずるとかんでいた。

「なでしこちゃん行儀悪いなあ〜」

「ほんと、お行儀悪いね」

「リンひゃんが鼻をつねるから鼻みじゆが止まらなくて……くしゅん！」

なでしこの鼻声が面白くて普通に笑っていた。

きつとこれが幸せなんだ、本当に些細なことかもしれないけど、それが今分かった気がする。

幸運はどこかから舞い降りてくるものだけど、幸せは自分の内側にあるものなんだ。

「ふふっ」

手で口を抑えて小さいオオモト様が笑う。

初めてみるにこやかな表情、もしかしたら今まで誰にも見せたことがないかもしれない本当の少女の笑顔。

それこそが幸せであり、かけがえのない宝物なんだ。

分かれの間際、少女たちはこの世界で大事なものをもらった気がした。

それは目に見えないけど、とても美しく大事なものの。

漆黒の空は夜をいつまでも映し出しているし、雨はますます強く降り続いていて水溜まりは大きくなっていた。

最悪の状況。

それでも、あの黒い雲のかなたに青白い月が隠れていると思うと、不思議と綺麗な空にみえてくる。

そうそれは。

雨が上がった後の澄みきった青い空、それがきつと見えるはずだから。





## Carry On Wayward Son

雨を気にすることもなく小さなプラットフォームでこちらを見つめている一人の少女。

その姿を切ない眼差しで見つめ返す車内にいる二人の少女。

両者の間には窓すらなくそれは開け放たれていた、ただ金属の車体があるだけ。

手を伸ばせば触れられる距離なのに、互いにそうしようとは思わなかった。

手を振り合う事すらせずに見つめ合うだけ、言葉すら出さない。

それは会者定離を認めてしまうことになりそうだから。

だから何も言わず微笑むだけに留めた、誰に言われるまでもなく極めて自然に。

発車を促すベルが鳴る。

それでも声を掛け合わなかった。

扉が閉まり、笛がなつても身じろぎもせず。

そのまますべてを受け入れるようにお互いを見つめづけるのみ。

最後になって幾ばくかの言葉を綴った、時に衝撃的な事を耳にしたがそれでも微笑んだままで。

場違いの様にやたらと元気な声が静かな駅舎に客室にと響き伝わる。

出発の合図サイン、これはマイク越しに言う言葉ではないのにスピーカーから届けられてきた。

その直後、がくと車内が大きく揺れたと思うと、本当にゆつくりとフィルムの様に景色が流れていく。

こちらを見つめる少女の顔それが徐々に離れていく。

燐は思わず窓から顔を出して少女を伺った。

我慢できず小さく手を振ってしまふ。それを見た蛍も同じ様に身を乗り出して手を振り出した。

少女はそれに少し驚くと、優しい笑みで小さく手を振り返した。

燐は少し視線を横に向けてホームに備えつけてあったベンチを確認する。

そこには皆の忘れて物が置いてあった。

二体の白い犬の置物、一对の金盞花の髪飾り、そして燐が身に着けていたお守りが置いてあった。

さらにその横にはあの手毬も置いてあった、あの黒い瞳の少女の手にはもう何も持つてはいなかった。

何かに共感したのかは分からない、でもそれはあたかも最初からそうであったかのよ

うにショーウインドーの玩具の様にきつちりと整列していた。

少女たちはそれぞれ色んな想いを抱えながらも確かにこの地に居たのだ、それを証明するための遺失物がここにあった。

それぞれ思い思いのものを置いていった、中には形にならないものを置いていくものもいた。

それはどんな形でも良かった、ただここで三日間過ごしたことに何かの証を置いておきたかっただけ。

雨を削り取るように電車は加速をつける、まだ十分追い付けるほどのスピード。

けれども誰も、少女も追いかけてはこなかった。

あどけない少女のまま、見送ってくれる不思議な人だった。

未来なんて、その先の事なんて誰にだって分からない、あの人の言葉でそれが良く分かった。

あの人はオオモト様は最後にこう言ってくれた。

「「いつてらっしやい」」

そういつて笑顔で送り出してくれる。

その顔はあたかも大人の女性になっていた、あの青いドアの家の人のように清楚で綺

麗だった。

だから二人も言葉を交わす。

「いつてきます」

それだけが言いたかった。

がたん、ごとな。

電車は加速度を付けて進みだしている。

なぜだかとても寂しくなった、それは心残りがあるからだときも当然の様に思う事が出来る。

きつとそれだけではない、実のところ四人共この環境を楽しんるような感じもあつた。

偶然出会った四人の高校生。

キャンプして笑ったり泣いたりして、時には喧嘩になりそうなこともあつたつけ。

それでもみんな自由に楽しんでいたなあー。

それは少女達だけではない、顔のないあいつ等も犬も猿も、みんな自由にふるまっていた。

羞恥心とか倫理観とかはどこかに欠如したようにそれこそ野生動物のように各々が好き勝手なことをしていたのだ。

それはアトラクションの的なものでもあり、何かの実験を受けているような理不尽さを味わう事もあった。

でも苦しいことばかりでもなかった、ちゃんと楽しいと思えるような記憶も時々と刻み込まれていた。

それはもしかすると完璧な世界だったのかもしれない。

夢の様な時間が終わる。

燃えるような瞬間の高鳴りがあつたはずなのに、終わるときは呆気ない、それこそ花火の様に僅かな余韻を残すだけ。

時間も記憶も流れるスピードの中で急速に過ぎ去っていく。

「あ……」

小さな姿のオオモト様がこちらを向いて祈るように手を胸元で握り合わせていた。

その何ともない動作に何故か胸が苦しくなつて、蛍は隣の手を強く握っていた。

さらにスピードが上がる、もうベンチもオオモト様の姿も小さくなつて表情すら分からない。

何もかもが過ぎ去つてゆく。

あちらが夢でこつちが現実なんて意味がないぐらいに早いスピードで離れて行く。  
黒い墨に塗りつぶされるように白いホームが雨の中に掻き消えていった。

——逃げたんだ。

その想いが燐の中に概念となつて覆いかぶさつていく。  
何もできず何も分からずただ逃げただけ、残つたのはその事実だけだった。

「おおおおおおあああ!!」

遠くの方から夜風とともに獣のような咆哮が突如として湧きあがった。

奇怪で地鳴りのようなうねりは前に防災サイレンと共に聞いたあの奇怪な声と酷似していた。

「うううううううう……!!」

町全体が悲嘆のような真つ黒な声で包まれていた、泣き声をあげながら駄々をこねる  
幼子の様に。

それは彼らの最後の声だろう。

恨みのこもつたような縋りつくような声が幾重にも広がり、怨嗟の音叉が共振する様  
は町だけでなく山の裾野にまで広がって、ここまで届いていた。

螢は嘆息する。

彼らは救済を、心からの許しを欲していたんだと。

だからわたしたちを欲しがっていたんだ、女からの慰めと承認が欲しかったんだ。

共鳴したように悲しさが包んでいく、失つて無くしてから気づいてももう戻ることは出来ない。

それが分かっているからこそ余計に悲しかった。

その声に重なりあうように犬の遠吠えが小高い山の中腹まで響き渡っていた。

たった一匹の哀しい遠吠え。

それは燐がとてもよく知っている犬の鳴き声だった。

燐は無意識に目を瞑っていた、そして出来ることなら耳も塞ぎたかった。

代わりという訳でも無いが螢の手をぎゅつと掴む、螢も同じような強さで握ってくれた。

聞きたいけど今はもう聞きたくない声、追いつがるような鳴き声はアイツらと同じで悲嘆に満ちている。

それは個別的なものだった、燐だけに聞こえるように燐だけに訴えかけるように声が枯れてでも鳴き続けるつもりだった。

「燐！」

手を握ってくれていた蛍が一層強く抱きついていた。

暖かい蛍の体に焔はとても安心する。

分かってくれることが嬉しかった。

「ありがとう……蛍ちゃん」

焔も蛍をぎゅつと抱きしめる大事な何かを守るように腕を伸ばして。

蛍も同じ様に抱きしめていた、壊れやすい大切なものに傷がつかないように。

二人はお互いを抱きしめながら静かに泣いていた。

後悔も謝罪もすべて内に秘めたままで。

奇妙な音に反応して、なでしこが二人の居る客室まで来ていた。

窓を閉めた方がいいと声をかけようとするがその声と手を引つ込めた。

互いを抱き合いながら座る二人の姿がとても美しかったから。

少女たちの嗚咽はなでしこに一時の同情を誘う、思わず一緒になつて抱きついてあげ

たくなつたけど、そこはぐつと堪えることにした。

(これで、良かったんだね、きつと)

なでしこは心中でそう結論付けた。

わたし達が、焔ちゃんと蛍ちゃんが背負うにはあまりにも重すぎたんだと思う。

人一人背負うのだからかなり重いのにあれだけの人は到底無理な事なんだよ。



せつかく電車があるんだからみんなを乗せてあげようなんてほんの少しだけ考えたこともあったけれど、やっぱりそれは違うね。

今、電車に乗っているのは私たちだけ、それはちゃんと自分達で選んだことだからこれが正解なんだよね。

二人から目を離して窓の外に意識を向ける。

黒い空に冷たい雨、まだ悪夢の終わりはやってこないようだ。

少し深めに帽子を被り直してリンの待つ運転席へと戻っていく。

残る心配事はもうこれだけだ、なでしこはそう信じて去って行った。

雨とともに入ってくる地響きのようなうねり声は次第に聞こえなくなった。

遠吠えも微かなものになっていく、距離と速度が過去を振り切るように進んでいたから。

後に残るのは静寂だけ、ぽつぽつと振りつける雨と黒一色の闇夜だけだった。

「……窓、閉めたほうがいいね」

「うん」

小さく首を振った燐が、微かに震える声でそう言った。

その声で螢はゆっくりと手を離すと、端を持つて窓を閉めた。

外気が入ってこなくなつたせいかな車内のエアコンに寒気を感じてしまう。窓を開けたままだったので髪も服も濡れていた、そのせいだろうと思う。

でも雨のおかげで最後まで聞くことが出来た、そうでないと体が火照つてどうにかなりそうだった。

「ねえ、燐。オオモト様の言つていたこと、どう思う？」

気持ちがが大分落ち着いてきたのか螢が唐突に話しかけてくる。

あの窓からの声のことは一切尋ねずにホームでの事に時間を戻した。

「うん……なんとも言えないけどさ」

そう前置きして燐は言葉が続ける。

あえて聞いてこない螢に同調して燐も同じ話題に乗つた。

もう議論を交わす段階は終わったんだろう、そう思う事にした。

「オオモト様も色々考えてたんだなあつて。誰にも相談できず一人で悩んでたんだつて思うと……ね」

少し困つた顔で微笑む燐。

オオモト様は誰にも相談できないからこそ独自であらゆる場面を想定して仮説を立てていたことを知つた。

正直全ての事が当たっているかどうかの検証は出来そうにないが。

炭酸飲料の入ったペットボトルを開けたら突然噴き出してきた、なんて分かりやすいものならまだ良かった。

前例がないことに前例を作るなんて出来るはずもないのだ。

結局は何かを試してみてもそれが前例となるはずである、それが失敗か成功かは関係なしに。

オオモト様は複数いるわけではなかった。

ずっと一人きりの存在、だからこそ誰にも打ち上げられずに悩んでいたのだと思う。

自分が本当にどういう存在か分からずに勝手に名前を付けられていたのだから。

同じ血が入った子が生まれても結局は不完全な状態だった。

それでもこの町のもものはその行為を止めようとはしなかった。

そのせいで消えてしまった子はそれこそ“神隠し”の説明で誤魔化され続けてきた、何年も何年も終わることなく。

妖怪も伝承も全ては人の手で生み出された、ただの言い訳にすぎない。

誰でも良かったということと同じで意味もまっとうな理由さえも存在していなかった。

た。

「わたし達だつてそうだよね。一人で悩んでたつてそんなにいい考えが浮かぶことはないし。誰かがいることで仮説も前提も意味のあるものになるはずだし」

「そうだね。でも仕方ないんじゃないかな。だつてオオモト様を認識できる人つて多分……」

燐はそこまで言つて口をつぐむ。

オオモト様が認知出来るのは燐や聡、なでしこ達のような外部から来た人間か、あるいはその血を受け継いだもの、蛍ぐらいなのだろう。

それに今それを言つたところでどうしようもなかった。

わたしたちは町を人を見捨ててしまったのだから。

「そういうえば、ちゃんと電車で動いてよかつたよね」

重くなった空気を払う様に蛍が少し明るい調子で話してくる。

「うん。わたし達は普通に乗つてるけどリンちゃん達は大変だつたと思うよ。二人には感謝しなくつちやね」

蛍と燐は運転席の入り口に目を向けた。

ちようどなでしこもこちらに気づいたらしく、にこにこしながら大きく手で合図す

る。

それでもリンの運転が気になるのかすぐに顔を引つ込めてしまった。

「二人は良いコンビだよね」

「うんうん」

顔を見合わせて笑っている之不意にスピーカーから声が出てきた。

『……えー、ご乗車ありがとうございます！ こちらは特別急行ゆるキャ……じゃなかった、リンちゃん2号です！ 次の停車駅は……リンちゃん、次の駅ってなに？

えっ！ 分からないの？ えっと、次の停車駅は身延駅です……お土産には是非、銘菓身延まんじゅうをお買い求めくださいっ！ どう？ 燐ちゃん、蛍ちゃん、私結構上手でしょっ！』

突然の車内アナウンスにビックリしたが、なでしこらしい可愛いアナウンスに燐も蛍もくすくすと笑いだしていた。

貸し切り状態の電車ではこういう事も出来るのかと蛍は変なところで感心していた。

「なんか慣れてる感じがするね」

「あはは、前にバイトか何かでやったことがあるらしいよ。結構評判良かったんだって」

「へえ、なでしこちゃんも見かけによらないね」

二人の言葉を受けて調子を良くしたなでしこが更にアナウンスを続ける。

自分の家族の事や野クルでの活動内容、山梨の観光案内など、あらゆることをマイク越しに話し続ける。

なでしこは妙に張り切っていた、自分の声で二人をそして一人運転しているリンが元気づけられるならと捲し立てるように喋り続けたのだ。

それは浸透するように燐と蛍にもわずかばかりの笑顔をもたらしした。

微々たるものかもしれないが、それでも悲しみとは違う素敵なものが二人の顔に出てきていた。

そしてアナウンスしたなでしこもマイクを持ったまま笑う。

寂しさを感じていた車内に一時の笑いの花が咲いていた。

無機質な昼白色の明かりおとぎ話のような照明にみえてくるほどに美しい空間になっていた。

(調子にのつてるなアイツ……でも何かなでしこらしいな)

そのせいで緊張が抜けたのか、リンの運転は安定してきていた。

今はクルーズコントロール状態いわゆる惰性で走らせている、鉄道はこれが基本らしい。

それでも視界は変わらず悪い、夜の雨という最悪のコンディションは月灯りさえ見せ

てはくれなかった。

闇の中を独りぼっちでひたすらに走っている型落ちの電車。

方向感覚が狂いそうなほどに真つ暗な中をレールを引かれるまま走っている。

“ 暗中模索 ”

夜の海の上を線路一本で進んでいるようなそんなあやふやな感じが気持ち悪かった。

ぶつちやけ怖くて怖くてたまらないがここまで来ると逃げ出すことさえも出来ない。

早くこの狂った世界が終わるところまで行くだけ、それまで逃げ続けるしかないのだ。

隣の町？ いや隣の県まで行かないとこれは終わらないのかも。

焦りからかスピードを上げてみたくなるが、それは早計である、オオモト様はそう言っていた。

線路の上をちゃんと走っている分には安定するけどそれがひとたび崩れると大変なことになってしまうだろう。

例えば脱線——。

それだけは何んとしても避けねばならない、その為には速度を維持しなくては。

次の駅に着くまでにこのテンションがどこまで続くかが問題であった。

もつともその駅があつてくれればの話なただけ。

そんな不安の渦中、突然すっぽりと何かの中に入った感じがあった。暗い世界からより暗い世界へと……多分トンネルに入ったんだろう。

耳の奥からごうごうと風のうねりが聞こえてきた。

「私、トンネルつてやつぱり苦手だなあ……リンちゃんは大丈夫？」

いつの間にか戻ってきたなでしこが震えながら呟いていた。

常闇の世界も真つ暗なトンネルもさほど変わりはない、どっちも灯りが乏しいだけ。

それでもこの圧迫感は何だろう。

乗客であったときには気にも留めなかったのに運転する側になると妙に息苦しく思

える。

ちやうど電車一台分のスペースしかない剥き出しの岩肌はどんな怪物クリーチャーよりも恐怖を

植え付けるものであった。

「……ぐぬぬ」

リンはつい口からうめき声をもらしてしまふ。

「……うううっ！」

真似するようになでしこも呻いていた。

つい少し前まで緑のトンネルの中を歩いていたのに、またトンネルとは。

でも緑のトンネルは広くて美しくそして歩きやすかった。



葉っぱや木で出来ていたせいかもしれないが、リンはその素朴さを気に入っていた。

この鉄道用のトンネルはそれとは真逆で、ただ電車を通すことしか考えられてない簡素で質素なものだった。

本来のトンネルとはそういうものなのかもしれないけど、あまりにぎりぎりの幅しか確保されていないのはちよつと慘く感じてしまう。

ちよつとでも車体が揺れば擦れてしまいそうで戦々恐々としてしまう。

このまま永遠に続くかと思われたトンネルだが思いの外、あつさりと抜けることが出来た。

それでも空は真つ暗なまま、入る前と少しも変わっていない。

なでしこもリンも思わずため息をついた。

夜も雨も続いていた、そのせいかループしてる錯覚を起こしてしまう。

この現象は小平口町だけでなくこちら一体全域に広がっているのではないか、へたすると県外にまでも……余計な考えにハンドルを握る手に力が入ってしまう。

それでも線路は平坦に続いていて、人の想いとは無関係にゆるやかなカーブを描いて進んで行った。

周りが暗すぎてよく分からないが、多分音からして橋脚に入ったんだろう、そう推測した。

ごとん、ごとん、と少し重い音が電車内を震わせる。

ただでさえ暗い夜道を走行しているのに橋の上だと思おうとよけいに怖い。

想定外の恐怖にハンドルを握る手が震えてしまい、減速をしたほうが良いか迷ってしまう。

結局その判断はつかないままで、現状を維持したまま橋脚を逃げるように走っていく。

本当は減速するのが良いのだがその判断を下すものがない、オオモト様も……何も言ってくれなかった気がする。

川の流れるせせらぎが癒しと共にどうしようもない現実感も与えてくる。

無事に渡り切れるかどうか、運転台の二人は祈る様な気持ちで前だけを見つめていた。

……もう小平口町を遠く離れていた。

トンネルを抜けたただけなのに遙か遠くまでに来た気がしてしまって、螢は見知らぬ土地にいる感じがしていた。

電車が弧を描くようにカーブを進むと、黒い山の上にポツンと浮かび上がる白い風車

が視界に映った。

風車と知らなければ分からないほどの大ききだが、燐と蛭にはそれが何なのか十分に分かつていた。

燐は風車を遠くに眇めながら、ぽつぽつと話し始める。

これまで言わなかったことを少しづつかみ砕くようにして。

それは蛭だけでなく自分自身にも語り掛けるように丁寧に紡いだ。

「やつぱりさ、勘違いしてたんだと思う。優しくしてくれるから好きなんだってわたし、思い込んでたんだ」

「燐……」

「でもさ、恋愛って違うよね。そういうものじゃないはずだよ。わたしまともに恋すら知らなかったんだなって思うと、すごく恥ずかしいな」

黒いガラス中でなお一層伸びている白い風車。

人工物なはずなのに最初からそこにあつたような錯覚を引き起こす。

白い十字架は誰の墓標なのだろう。

「わたしだって良く分からないよ。今まで恋なんてしたことないし。あ。でも、燐は好きだよ……こういうのは違うのかな？」

困った顔で蛭が微笑む。

透明で無垢な笑顔に燐は胸が高鳴って少し戸惑う。

この想いは恋とは違うはずだけど、何だか嬉しかった。

そういうのじゃなくて……燐は気持ちを誤魔化すように微笑み返すと、ちよつと顔を赤くしながら話し続けた。

「わたしさ、ただ寂しいだけなのかな。この寂しさを埋めて欲しい、誰か構って欲しいって、それだけだったのかもね。相手の気持ちとか全然考えてなかったかも」

「じゃあ、誰でも良かったって事？」

素直な疑問に少し考え込んでしまう。

「あ。うくん、なんかそれだと節操がないっていうかあ。寂しいとき傍に居てくれる人ってなんか惹かれない？ あ、それだと軽い感じがするね……」

「うくん、わたしはそんなでもないかな……あつ、でも燐と一緒にいると寂しくても耐えられたよ、どんなに怖い目にあっても大丈夫だった。これって、わたしも恋してるっていうのかな？」

普段以上に饒舌な螢に燐は目を丸くしてしまう。

「もう、螢ちゃん。だからそういうことじゃないんだってば〜！ さつきから恥ずかしいことばっかり言わないでよ〜！」

照れ隠しをするように燐は抗議する。

蛍の気持ちは嬉しいけど面と向かって言われるとやっぱり恥ずかしい。

それに好きだった人を放っておいて自分だけが幸せになったみたいで、少し後ろめたくもあつた。

「ごめんごめん、真面目な話だったよね」

蛍は両手を合わせて謝罪をする。

でもとても楽しそうにしていた。

「そう、真面目なお話し。真面目にさ、お兄ちゃん、とか町の人達つてどうなつちやうんだらうね……ずっとこのままなのかな。オオモト様は特別なことじゃないって言つてたけど」

「うん、このまま圧縮していくつて言つてたしね。この後どうなるかなんて想像もつかないよね」

「そう、だよね……」

もう一本の線にしか見えない風車、それは一度も動くことはなかった。

もし動いていればすべてが元に戻るのだろうか？

口に出すことを憚られるほどに淡い期待、心に留めておくことすらしなかった。

「ねえ、燐」

蛍は投げ出された燐の手をそつと握る。

冷たくなっていった手に暖かい温もりがとても心地よかった。

「後で戻ってみない？」

「戻るって？」

「あ、もちろん今すぐじゃなくて、ちゃんと出られて一週間か二週間ほど経った後の話」

蛍は微笑みながら訂正した。

仮に今すぐと言ったら燐はどうするのだろうか。

もしそうなくても蛍の気持ちは変わらない、それだけは確かなものだった。

「うん。それぐらいは分かっているよ」

燐は軽く笑う。

蛍の気遣った冗談がとても嬉しかったから。

「大事な事って一度離れたほうが良く見えるんだよ。近すぎるから見えない事って割とあると思うんだ」

燐の心を解きほぐすように冷たい手を包み込んだ。

蛍の手は驚くほど暖かかった、気持ちがあるまま手に宿ったようにあったかい。

暖かい微笑みのまま蛍は話す。

「それにね……どっちもわたしは戻らないといけないと思う。何だかんだ言ってもわ

たしの生まれたのはあの場所、小平口なんだから」

「蛍ちゃん……」

手を繋いだまま蛍と燐は稜線に消える黒い山をぼんやりと見送った。

そこには感情はなく、ただ事実があるだけ。

そう、わたし達は逃げ出しちゃったけどきつとまたここに帰ってくるよ。

隣に寄り添ってくれる人がいる、この優しい人がいるならまだ何とかかなりそう。

優しい瞳を向けて、勿体無いぐらいに透き通ってる人が傍にいてくれる。

わたしきつと今一番幸せなんだね。

だからそれまで暫くの間お別れだねお兄ちゃん。

ごめんね、また会いに行くから。

燐は心の中でそつと別れを告げた、好きだった人に届くように。

電車はいつの間にか橋を抜けて夜の茶畑の中を走っていた。

長い雨が家も畑も水の中に溶かし込むように振り続いていた。

がたん、ごん。

規則正しい音が安心感を与えてくれて、少し眠たくなってきた。

蛍は普段の通学のように燐に体を預けて、眠る体勢をとっていた。

燐は微かに微笑むと同じ様に肩を触れ合いながら目を瞑った。

二人の穏やかな寝息、それは線路の音と混ざり合つて、闇の中に溶け込んでいく……。

……

……

……

ごうごう、と風の跳ね返る音が黒いドーム内で逃げ場を失つたように騒いでいた。

それが緑の列車と内と外を震わせて、大きな音を作り出す。

電車は再びトンネルの中に入っていた。

視界が悪いのはどのみち変わらないが息の詰まる感じはなかなか慣れてこない。

漆黒の闇でも外のほうがいくらかマシだった。

リンは変わらず緊張の渦中であつたが、すこし慣れも出てきていた。

もともと一人で黙々と作業するのは嫌いではなかつたので、一人での運転にも慣れるのには早かつた。

一人原付で色々行つた経験がここにきて生きてきたのだ。

それを見込んでの起用なら、あの人は大したものだと思う。

もつとも青いドアの家で初めてあつたときから、全てを見透かされているような気に



はなっていたけどさ……。

あの人は見た目以上に大人な人だった。

もう一度会つてもつと話をしたい、リンはもう叶わぬ夢に想いを馳せていた。

「なでしこ、燐ちゃん達の様子を見てきてくれないか？ 多分寝てるとは思うんだけど……」

横目でなでしこを確認すると椅子にもたれながら、首を上下に揺らしていた。

明らかに眠っていたようなのでワザとらしく声をかけた。

多分、二人も同じ様に寝ているに違いないだろうけど。

燐ちゃんやと蛭ちゃんやんが寝ている分には気にならないが、なでしこが寝ているのはなんかちよつとモヤつとする、気持ちの問題なのかもしれないけど。

自分だつて結構疲れている、万一に備えてなでしこだけは寝させないようにしないとダメな気がした。

「うん……私、寝てたかな？ だいじょうぶだよねい？ とりあえず、切符きつてきまふう……」

何事か良く分かってないまま、ふらふらと運転室を出て行くなでしこ、そんな調子だと大体お約束の事が起きる。

そしてそれを裏切らないのがなでしこの面白いところだ。

「あうっ!!」

期待に応えたように頭を扉に思いつきりぶつけていた。

その場でぐだぐだと不格好なダンスを踊っている。

「リンちゃんもうだめずらく。目の中で星が瞬いてるずらく」

「いいから、さっさと行ってきて」

リンはなでしこの相手をする事なく、用件だけを言った。

慣れてきたといつてもよそ見をしてるだけの余裕はまだない。

レールの上では何かあつたら避けることは出来ない、ブレーキだけが頼りだったか

ら。

「もお、リンちゃん冷たいなく。私、怪我人なのになく」

何事かボヤキながらも二人の元へ向かうなでしこ。

ふらふらと揺れているところを見ると、頭をぶつけてもまだ眠気は取れていないようだ。

四角い黒色の窓の外にはごつごつとした石壁が見えるのみ。

普段なら震えあがるところだが、今のなでしこは怖さより眠気のほうが勝っていたのが幸いだつた。

二人の居る車両までうつらうつらとしながら移動する。

そこでは蛍と燐が抱き合う様に眠りについていた。

しつかりと手を繋いだまま、安心しきったように小さな呼吸音を出している。

あまりに気持ちよさそうなので、なでしこもつられて一緒に横になろうかなと欠伸をしたちようどその時。

『お前まで寝たらだめだぞ』

スピーカーから突然低い声が出てなでしこは飛び上がりそうになった。

ちらつと運転席の方に目をやるが誰もいない。

リンの位置からはこちらが見えないはずなのに……なでしこのルーティーンは察知されていたようだ。

「ふあ〜い……」

気の抜けた返事をスピーカーに返す。

その声は聞こえていないのか何も返事は返ってこなかった。

寝ぼけ眼のまま運転室に戻るなでしこ、途中で自分の荷物が目に入って何事かを思いついた。

ごそごそと荷物を漁り、そこから大きめの布を持ち出して二人の元へ戻ってくる。

そしてそれを寝ている二人にそつとかけてあげた。

青を基調にしたネイティブ柄の夏用のブランケット、薄手だがちようど二人分の大き

さがあった。

「そのままだと風邪引いちやうからねい。秘密結社ブランケット(夏)こつそり入隊させちやうよん」

すつかり目が覚めたのか、なでしこは満足そうに頷くと、今度こそ運転室へと戻って行った。

お互いの手を重ねあわせながら穏やかに眠る蛍と燐、幸せとはこういうことなのだろう。

なでしこの胸もほんのり暖かくなった。

「どう？ やっぱり寝てた？」

「うん、二人ともよっぽど疲れてたんだね。ぐっすりだったよん」

「そっか……」

リンは安堵したようにそれだけを言うともた暗闇の先と計器だけをみる動作に戻った。

レールの上を走るだけ、ただそれだけなのにずっと緊張しっぱなしだ、さつきから喉が渴いて仕方がない。

唾をいくら飲んでもこの渴きは癒えそうになかった。

二人はしばらく無言のまま地獄の入り口のような暗いトンネルを見つめていた。今度のトンネルはやけに長く感じられる。

それこそ地底の奥深くに向かっているのではないかと錯覚を覚えるほどに暗かったから。

低い風の音と空調の静かな音が微妙なハーモニーを醸し出し、リンの疲弊した体に眠気を誘ってくる。

「なあ、もしこのまま出られなかつたらどうする?」

リンは前を向きながら口を開いた。

このまま黙っているると睡魔に襲われてしまいかねない。

話し相手がいれば少しは気が紛れるだろう、その相手が眠らなければの話だが。

「お、お化けトンネルパート2ってこと……?」

なでしこは薄めを開けながら恐々として答える。

どうやらまた睡魔に負けそうになってるようだ。

「お化けって……もうそういうの平気だよね?」

「いやいや、お化けは別腹ですよ、リンちゃん……お化けは皆の心の中にいるんだよお」

再び眠ろうとしているのか言ってることが支離滅裂としている。

リンは呆れて肩をすくめた。

「お化けは卒業できただろ」

「いや、やっぱり見えない物つて怖いんだよね。テントの外の物音だけでも怖いからねん。リンちゃん一緒に寝よう」

なでしこはふらふらと揺れながら悪魔の囁きをしてきた。

さつきから寝ぼけているのか、会話がかみ合っていない。

でも……。

(見えないもの、か……)

結局小平口町での事は最後まで何も見えないままだった。

終わらない夜、異形の人影、そしてオオモト様と青いドアの家、真実の欠片さえ知ることが出来なかった。

逃げ出さなければ分かることだったかもしれない、だが真実を知ったところでどうなるのだろう。

今となつてはすべて暗い箱の中、この暗く長いトンネルはその比喩だろうか、それとも逃がさないためのトラップなのか。

そんな猜疑心に飲まれそうなリンの手に小さな手が乗せられた。

それはなでしこの手、気持ちを落ち着かせるようにそつと乗せていた。

「リンちゃんて凄いやね、なんでも一人で出来るしき。私なんてあのゾンビから逃げればかりだったしねい……。やっぱり怖いんだもんっ」

ひきつった笑いを浮かべながらなでしこは真っ直ぐに見つめてくる。

「だからね、私はリンちゃんを信じるよっ！ たとえこの先の出口がなくなってもリンちゃんが運転すれば何とかなるよきつと！ 蛍ちゃんも隣ちゃんもリンちゃんの運転を信じてくれたからこそ乗ってくれたんだからっ！」

重ねた手に力が入る、こんな私でも信頼してくれる物好きがいるんだな。

「だったら信じるしかないか……最後まで全力で。」

「信じれば道は開く、あの人もそう言ってたな、確か……」

「そうだよ！ ワンフォーオール、オールインワンだよっ！」

「またそれか、でも……そんなに嫌いじゃないなその言葉」

信じることは無意味ではない、柔らかなあの人の言葉を胸のなかで反芻する。

不思議とずっと気になっていたことを急に思い出した

「なんでソロでキャンプ始めたんだろうって今更な事、そのきつかけをくれたのはお爺ちゃんだけきつとそれだけじゃなかったはずだ。」

多分あの頃の私は何も信じる事が出来なかったんだらう。

だから誰もいない冬のキャンプを始めたんだ、たった一人で誰にも教わることなく。

それでもやることと言ったら読書と簡単な食事をとって後は寝るだけ。家でやることとそんなに変わらない、むしろただ不便なだけだった。

それでもなんで毎年続けていたんだらうか。

暗いトンネルの中でぼんやりと考え込む、傍らには暖かい手、それだけで何かの答えが出た気がした。

シンプルな答え、ちよつと癪だがそれは多分……この為、この純粋な奴に会うためなのかもしれない。

決して言葉にはしないであろう答えになんとか恥ずかしくなつて、咳ばらいをする。

クエスチョンマークを浮かべるなでしこ、その横で何が小さいものが光った気がした。狭く黒い道の先に小さい光が蛍のように浮かんでいる。

それは先に進むたびに少しづつ大きくなつていって、光が楕円に形を作つていった。興奮したようになでしこが指を差して騒ぎ立てるがそれが耳に入つてこない。

それぐらいリンも興奮していた。

そのままの速度で光の中に入る、白いドームを突き抜ける。

トンネルを抜けた先は。



なんてことない普通の景色。

どこまでも青い空、雲はいくらでも形を変えそうに悠然と流れている。

ごく普通の夏の景色。

青い空が普通に広がっているだけ、この時期ならではの眩しい景色がどこまでも広がっていた。

—  
—  
—

なでしことリンは何の言葉も出すことなく目の前に広がる景色をただ見ていた。

目の前の景色をにわかには信じられなかったから。

がたん、ごとん。

そんな万感の思いを気にすることもなく電車はただレールに沿って進んで行く、そのままの速度で。

リンは思い出したように2本のレバーを握り直した。

「リンちゃん……空だよ。青い、青い空だね……」

「……そうだな」

二人は何故か騒ぎ立てることなく呟くのみ。

言葉にしてしまえば消えてなくなりそうなほど青く澄み切っていたから。

だから、そっと呟くだけにした。

「二人にも知らせてあげなくっちゃっ!」

さつきまでの情感はどこへやらなでしこが叫び出した。

運転席の戸を開けて、さっそく二人の元へと走り出そうとする。

「まって」

「おおよ?」

すんでのところではリンは呼び止める。

なでしこは扉にしがみついて振り返った。

「まだ、寝かせてあげようよ。知らせるのは電車がちゃんと停車してからでいいんじゃないかな」

自分だつて疲れているはずだが二人を寝かせておいてあげたかった。

この空の景色はもつとも見たかったはずだから落ち着いてから一緒に見たかったのだ。

「うん。そのほうが良いね! って、リンちゃんあれっ!」

なでしこが変な声をあげたので、何事かと思ひ指を差す方を見た。

小さな白い屋根と、小さい踏切、その二つが示すものは……。

——駅!?

「——マジか!？」

リンも思わず変な声を出してしまった。

停車したいと思っていたけど本当に駅があるなんて、しかもこんなに早く。

「リンちゃん、ど、ど、ど、どう? 停まれそう?。」

「間に、合う……かも」

考えるより早くレバーを動かした。

アクセルレバーを全て切って、その後ブレーキレバーを少しづつ下げて減速する。

目の景色に目を奪われていたので完全に遅れてしまったが、やれるだけの事をやるつもりだ。

カンカンカンカン。

遮断機のない踏切の音が焦燥感に拍車をかける。

記憶を頼りに段階を決めながら徐々に減速していった。

その度にかちつ、かちつ、と小気味いい音がして少しづつ速度が落ちていくのを感じて分かるようになってきた。

停止する目印のようなものは見当たらない、目視だけを頼りに減速から停車までもつていくしかない。

やけに短いホームに電車が滑るように入った。

ブレーキが早すぎたのかかなりの微速で、それでもまだ完全には止めなかった。

ちょうど電車の前方が待合室のようなものに差し掛かったところにブレーキを全部入れた。

今のところプラットホームに人影はない。

利用しているか定かではないぐらいに静まり返ってきた。

ごん、ごん……。

力を失ったように静かな音が一際静かなホームに響く……。

そして電車はホームぎりぎりまで進むと、ネジが切れたように停車した。

「はぁーっ……」

少女たちは殆ど同時に長いため息をついた。

心からの安堵、何もかもが一発勝負だったので奇跡としか言いようのない運転であった。

「ちやんと、停まつてるよね！　すごいよ、リンちゃん！」

「上手くいった……みたいだな」

二人は喜びを分かち合うように元気よくハイタッチを交わした。

……なでしこは手加減という言葉を覚えた方がいい、痛む手を擦りながらリンはひしと感じていた。

「じゃあ、今度こそ二人を呼んで来るよ……あつ、そうだつ！」

マイクを手取るなでしこ、それだけでやることは一つだけだった。

『え、コホン。ご乗車ありがとうございます。終点、つて言うかここで途中下車したいと思いません。お忘れ物等無いように速やかに下車してください。アナウンスはみんなのアイドル各務原なでしこがお送りしましたっ！』

「アイドルって柄じゃないよな」

呆れ顔のままではそつと呟いた。

大きく欠伸をして椅子に腰かけたままぐつと体を伸ばす、ずっと同じ姿勢でいたせいか体が固まった感じがする。

何となくぼーつとしてしまう、今頃になつて疲れが出てきたのかもしれない、リンは大きな欠伸を噛み殺した。

「リンちゃん大丈夫？　でも、早く出る準備したほうが良くない？」

顔を覗き込んでなでしこが心配そうに声をかけてくる。

安心したせいか急に眠気が襲ってきて、なでしこの言っていることがイマイチ理解出来ない。

「こんなところ誰かに見られたら私達って犯罪者になっちゃわない?」

とても怖い事を言ってくる、だがそのおかげで覚醒することが出来た。

いつまでもこんなところにいる暇なんてなかったのだ。

「なでしこ! 一人を起こしてきてくれ、すぐここから出よう!」

「う、うんっ!」

リンは客室の扉を開けると、可能な限りのスイッチを切っておいた。

ついでに指紋を残さぬように運転台を周りをミニタオルで拭いておくことにした。

こういう時だけ余計な知恵が回るのは何なんだろうか。

でもこのことは後で色々詮索されるだろう、場合によっては全国ニュースになるかもしれない……とたんに寒気がしてきた。

(本当に誰もいないよね。通報とか勘弁して……)

運転席の扉から顔だけ出して、身を屈めながら辺りを伺ってみる、今のところ人つ子一人いないみたいだ。

駅として機能しているのか疑わしいほどに閑散としていた、恐らく無人駅なのは疑い

ようもないだろう。

多分、運が良かったんだ。

これかもし普通に駅員の居る大きな駅だったらと思うと、想像しただけでも震えあがりそうになる。

言葉の通じないゾンビ相手だと逃げるだけで良かったのに、言葉が通じる人間相手の方が色々と説明しなくてはならないので面倒くさい、とても奇妙な感覚だった。

みんなが出たら客室のドアを閉めて運転室から脱出しよう。

鍵は……抜いてその辺に置いておくしかないな、その方がまだ自然に見えるだろうし。

やつてることが犯罪者心理で憂鬱になる。

今更だがこの現代はいちいち許可を取ることが多すぎる気がした。

キャンプだってその辺で適当にやることさえ出来ないんだから。

それにしても……なでしこのやつ遅すぎる、三人共何を手間取っているんだろう？

「おーい、準備出来たー？ そろそろ出るよー」

それなりの声量で客室に声を掛けてみた。

さすがにマイクを使うのは恥ずかしいし誰かを呼びかねない。

……今更かもしれないことだけれども。

……誰の返事も返ってこなかった。

流星に不審に思い、リンはみんなが集まっているだろう二両目の客室まで行ってみることにした。

「どうしたんだ、なでしこ。燐ちゃん、蛍ちゃん」

暢気に声を掛けながら静かな客室をゆつくりと歩く、なんかやけに静かさがやけに耳に痛い。

二両目の客室に入る、まだクーラーの余韻が残っていて少し涼しい。

二人の姿は見当たらない、そこにいたのは床に座り込むなでしこただ一人きりだった。

「どうしたんだ、こんなところで座り込んで見下ろした。燐ちゃんと、蛍ちゃんは？」

リンはちよつと呆れた口調で見下ろした。

急げと言っていたのはなでしこの方なのになんで荷物さえ持っていないのか。

それにしても、辺りを見渡しても二人の姿は見当たらない、もう外に出て行ったのだろうか？

「ほら、もたもたしてるから置いてかれちゃったじゃないか。私達も行こうよ」

未だに座り込んでいるなでしこの手を取った、やけに冷たくて少し驚いてしまう。



なんで、と思ったが顔を見て分かった、なでしこの顔は涙でぐしゃぐしゃになっていたので。

「いないの……」

「居ないって何が？」

「蛭ちゃんも、燐ちゃんも居なくなっちゃってるのっ!!」

急に大声を上げたので少し狼狽えてしまう。

落ち着かせるように優しい口調で話した。

「だから、それは先に行っちゃったって……」

「そうじゃなくて、ドア開ける前から居なくなってたんだよっ!!」

泣き叫ぶなでしこの声、何を言っているか理解出来なかった。

居なくなるってそんな事……ここ以外何処にも降りる場所なんてなかったのに。

「うえーん! どうしようりんちゃん!」

座ったまましがみ付いてくる、涙が頬を伝って幾重にも零れ落ちていた。

「お、落ち着け、な。先に降りただけだって、駅舎で二人共待つてるから、だからもう泣くなって」

頭をかき抱きながらとにかく落ち着かせようとする。

走行中に扉を開けた覚えはないし、それが妥当な理由のはずだ。

「で、でもこれ……」

なでしこが震える手で差し出してくる布、それに見覚えがあった。

夏用のブランケット、なでしこが持ってきたものだった。

「二人が寝てるところに掛けてあげたの……そしたら、その場所に綺麗に畳んで置いてあったの。だからもう……二人はっ」

泣きじやくるなでしこ、言いたいことがやつと分かった。

だからって理解できるはずはない、それはなでしこだって同じことなんだ、だから。

「もう泣くなって頼むから……そんなに悲しむと私だって……」

目の奥から何かが込み上げてくる、ずっと忘れていたもの。

心の奥の大事なものが今瞳から零れ落ちようとしていた、それが止まらない。

「ごめんね、ごめんね、私が、私がつとちゃんと見てれば……」

なでしこは何に対して謝っているのか分からない。

それでもごめん、ごめんと泣き続けるなでしこを抱きしめてやることしか出来なかった。

ここまで来たのに、何でどうして、無意味な疑問ばかりが浮かんでくる。

ただどこまでも不条理に。

まるで最初から他に誰もいなかったかのように二人だけが客室に取り残されていた。

.....

.....

.....

「探しに行こう」

「でも……」

「そう遠くまででは行つてないよ。すぐ追い付ける」

「うん……そうかもね」

もう無理なことかもしれないけど自分を思つて言つてくれる気持ちが少し嬉しい。

それが良く分かったから涙を拭いながら頷いた。

「二人揃つていなくなるなんてことあり得ないよ。だからすぐ近くにいるよ絶対」

自身の心中に刻み込むようにリンは語気を強くした。

空調を止めたせいか、じりつとした暑さを感じる、噴き出した汗がこぼれおちた。

今が夏であったことに気づいた。

「早く行こう」

なでしこの返事を待たずリンは荷物を手に取る、少し遅れてなでしこも準備に取り掛かっていた。

大した時間電車に乗っていないはずなのに、とても長い時間をここで過ごした気がし

た。

一緒にいる時間の長さが友情の証だというのに、なぜ二人はここにいないのか。暗い考えを振り払う様になでしこがプラットフォームに飛び出す。

それを見てリンはドアを閉めると自身は運転席のドアからホームに飛び降りた。

バス停のような待合室と今にも崩れそうなほどに古い駅舎、それが三日間求めつづけた終着駅。

擦れた文字で駅名は記してあったが、今はそれを読む意味がない。

両手に荷物を抱えてホームから逃げるように出て行く二人の少女。

付近には遮断機のないよく言えばスマートな踏切と……整備したばかり思われる車道が伸びていた。

それ以外は一面の水、もしくは水溜まりが白い大地に点在していた。

あの青いドアの家の再現デジヤクのように。

二人はその景色に見とれることなく、二人はどっちに行つたのか思案した。

小平口町の方へ戻る可能性は薄いと思ったので逆の方向へと向かう事にする。

電車と同じ方向だけど、それだと見落とす可能性もあるし何よりもう運転はしたくない。  
い。

もう電車は必要なかった。

遠くには吊り橋のようなものも見える。

でもそちらへ行つたとは考えにくい、吊り橋までの道は巨大な水溜まりで塞がれていたので、たから。

開通して間もないであろう車道を無言で走り続けた。

荷物が肩に食い込み、リンは投げ出したい気持ちになつた。

息がどんどん荒くなる、照り付ける日差しが汗と共に気持ちまで流れ落ちて行つた。

しかしどういふわけか車が一台も通り掛かることはなかつた、もちろん人なんていらない。

時折囀る様な鳥の声とセミの鳴き声が響いてくるだけ、陸の孤島のように人の営みの音など何処かへ消えてしまったようだ。

勘だけを頼りに走っていくと、橋が目の前に見えるようになる、二人は無言のまま懸命にそこまでは走つた。

橋のたもとまで辿り着くとリンもなでしこも喘いだままでそこへ腰を下ろした。

頭上から降り注ぐ暑熱と纏わりつく熱風で目まいがしてくる。

ごうごう、と唸る音が涼風を運んでくる、爽快さが体を包んでくれて、疲れた気持ちを癒してくれる。

でも普段の川の感じとは違う気がする。

音が風が水しぶきが激しすぎた。

何事か気になって、荷物を投げ出したままで橋の中ほどまでまた走った。

橋の欄干にかぶりつく二人して吸い寄せられるように俯瞰する。

それで全てが分かった。

あの町が——小平口町がどうなったのかを。

圧縮と言うのは町の機能が失われていくこと、このうねる様な濁流がそれを如実に表していた。

上流から流れてきたと思われる木やごみ、家屋の一部など、ありとあらゆるものが渦を巻いて流れていった。

台風、いや水害とも言える圧倒的な力の渦が幾重にも折り重なるようにして全てを押し流していた。

壮大とも言える川の様相にどうしようもない無力感が込み上げてくる。

二人もこのような大きな流れの中に飲まれたのか、ちっぽけな私達じゃどうしようもない災禍の中に。

「きつと、ひとりじゃ可哀想だから、一緒にいったんだね」

橋の下を眺めながらぼそつと呟いた言葉、リンは俄かに鳥肌がたった。

純真ななでしこがおおよそ言う言葉ではなかったから。

疲れた目をしていた。

それは多分私も同じだろう。

ただ力なく橋の下から茶色く濁った川を見つめることだけしか出来なかった。

泣きたいのに涙が出てこない、汗と共に枯れ果てたようだ。

それでも二人だからまだ良かったんだ、なでしこが居てくれたからまだマシだった。

周りを見ると同じ様に橋から下を眺めたり、スマホで写真を撮ったりしている人達もいた。

ダムとか、決壊とかどうでもいい事のように笑いながら話していた。

彼らにとっては単なるイベントなのだろう。

話しかけようとは思わない、純粋な気持ちで穢れそうだったから。

二人とは違う人間しかここにはいなかった、否、人ですらないのかもしれない。

太陽がずっと眩しい。

ずっと待ちわびていた本物の日差しなのに、今は無駄に眩しく暑苦しかった。

皆に、家族に会いたい。

急にその感情が湧きだしてきて、胸が詰まった。

……お母さん、今日ね、友達が居なくなつたんだ。

いくら探しても見つからないんだ、だからね、どうしたらいいと思う？

誰か教えて欲しい、二人の行く先……二人の幸せを……。

……

……

……

……袂の先にあつた店に二人の事を尋ねたがこちらには来ていなかった。

もはや方々を探すだけの足が動かない、何より心がもう持たなかつた。

止む無く電話を借りることにした。

まず搜索願いを出そうとしたが、止めた。

まだ心の奥で引つかかるものがあつたし、二人の信頼を裏切る行為に思えたから。

それにより、二人の事をそこまで知つてはいなかつた。

そして私たちの事も特に連絡はしなかつた、親や友達は多分心配してるだろうけれど。



でも、電車の事だけは匿名で通報しておいた。

恐らく疑われられているだろう、けれどそれは仕方がないことだった。

それでも言っておかないと大事故につながるかもしれない。

この世で一番大事なのは事実を知らせることだったから。

そこからの事は殆ど覚えていない。

後で話を聞いたら、二人ともその場で電池が切れたように眠ってしまったらしく

て、慌てて救急車を呼んでくれたみたいだった。

家出したように見えたらしい。

でも、それほど間違っていないかも。

とにかくこれで終わったんだ。

私たち二人の長い三日間は夕暮れと共に終わりを告げた。



## なつびより。(epilogue)

(分かってはいたが二千円か……)

管理棟で受け付けを済ませた少女が、停めて置いたライトシヤンのスクーターの傍で一人待ちわびている小柄な少女。

スキニーなデニムにネイビーのアンダーシャツ、腰にはバイクを乗っている時に着ていたジャケットを腰に巻いている。

短くなったヘアスタイルと華奢な体躯、シンプルなコーディネートと制服姿のときよりもボーイッシュな印象を受ける。

照り付ける太陽の下、彼女の心は爽快な天気とは真逆の曇り空だった。

約束していた日。

7月も終わりに近づいているのに標高が高い場所のせいか、そこまでの暑さは感じない。

天気はあいにくの快晴であり、キャンプを楽しむのには申し分のない日和である。腹立たしいほど雲は真白く大きい。

夏の情景におあつらえ向けの富士山は普通に美しかった。

嫌味なほど風光明媚な景観が3Dパノラマのように広がっていて、以前に来たときよりも開放感に満ち溢れていた。

そのせいか人はかなり多い。

ハイシーズンであることもあつて付近の道路が混雑するほどの人出だった。

空はこんなにいい天気なのに、気分は曇り空のまま、にわか小降りだって降っている。誰が悪いというわけではない、ただいつまでも心の雲が動かないだけだった。

最後のキャンプかもしれないのにこんな最悪のテンションなんて、むしろ笑えてしま

う。楽しそうな周りのキャンパー達が違う世界の住人にみえるほどに寂しかった。

「はっ、はっ、お〜い!」

最近まともに聞いていなかった元気な声が道の先からやってきていた。

それでも疲労は隠せないようで、ふらふらとしながらも最後の力を振り絞るようにして自転車にまたがった少女がこちらに向かってくる。

「ぜい、ぜい、ま、待った?」

自転車ごと倒れ込みながら、肩で息をしている髪の長い少女。

白のショートパンツにスラリと伸びた生足をチェックのアウトドアシューズが包み

こんで、健康的に見せていた。

トップスは星をあしらった赤いタンクトップにフリルのキャミソールを重ね着している。

背には大きなリュックを背負っているが、それでも入りきらなかった荷物は自転車の両サイドに括り付けてあった。

40キロ以上ある山道をこの自転車を漕いでくるのは、少女の体力をもつても結構な道行であったことは間違いないだろう。

タフさなら誰にも負けないでしこでもこの疲れようなのだから。

「いや、大丈夫。今来た所だよ。それにしても……本当にチャリで来たんだ」

「うん……約束したからねっ」

額から汗をこぼしながらペットボトルの水をがぶがぶと吸い込むように飲んでる。

無理して明るく振舞っているのだろう、それが分かるだけに複雑な気分になった。

だが、それにしても少し顔色が良くない気がする。

なでしこの体力ならいくらなんでもここまでバテることはないはずだ。

それとなく聞いてみることにした。

「もしかして寝てないの？」

「えへへ、なんか久しぶりのキャンプで興奮しちゃって寝れなかったよう」

まだ地べたに座り込んだまま、なでしこは照れ隠しするように笑っていた。

よく見ると目に隈くまも出来ている、でもこれは最近出来たものじゃない気がした。

あれからずっと寝られてないのかもしれない、リンは不憫に思っていた。

「そっか、実は私も寝られなかったんだ」

「リンちゃんもなんだ。私達、結構似てるところあるよね？」

「そうだな」

お互いに大事な話はしなかった。

あの時の話題になるのを恐れるように他愛のない話で言葉を濁し続ける。

はたから見たら楽しそうに見えるのかもしれない。

気持ちの良い青空とは正反対の私達の事を。

受付を済ませたなでしことともにキャンプサイトを眺める。

予想以上の人出にちよつと嫌気がさした。

「ふおおおお、やつぱり夏は人が多いね！」

「まあ、人気のキャンプ場だから」

あれだけ落ち込んでいたはずなのにいざキャンプ場を見るとテンションがあがって

いた。

この突き抜けるような開放感がそうさせるのか、それともあの時の事を思い出したの

か。

偶然から出会った私達が初めて夜を明かしたキャンプ場の事を。

去年の冬に訪れた“麓キャンプ場”。

リンとなでしこはこのキャンプ場にまた来ていたのだ。

広大な敷地を持ち、そこには色とりどりのテントが見渡す限り並んでいる。

壮大な富士山を間近で見れることもあり、夏は特に人気のキャンプ場だった。

(それにしてもあの時は驚いたな。突然、鍋持ってここまで来るんだから)

去年の事を思い出して、リンはとても懐かしくなった。

あれから一年も経ってないのに色んなことが変わった気がする。

ソロキャンしか知らなかった私かなでしこに出会ってから色んな出来事が立て続けに増えて行つた。

面倒な事もあつたけど楽しかったことの方が多かった気がする。

そしてまた違った変化が起きようとしている、元のソロキャンに戻るだけかもしれないけど。

(それにしても……なでしこのやつ本当にキャンプ止めるのかな、まだ良く分からない) 何処にテントを張るかキョロキョロとしていながら見るといつもと変わらないうようにみえる。

このまま普通にキャンプを楽しんでも良いんじゃないか？ 後の事は後で考える、そうあの時だつて言つてたし。

とにかく難しい事は後回しにして今はキャンプを楽しむことにした。

リンとなでしこはそれぞれスクーターと自転車を押しながら、秋口とは違う夏の景色を散策しながら歩いて行つた。

二人は景色の良いキャンプ地から離れ、人気の少ないなるべく端の方でテントを設営することにした。

どこで建てたつて富士山はほぼ必ず見えるし、何よりささやかに楽しみたかつた。

それに、二人つきりで話したいことがあつたから。

普段言えないことやSNSじゃ伝わらないことなんかもキャンプだと素直に話せる気がしていた。

なでしこが誘つてくれたのはそういうところなんだろう、少し緊張してしまふが。

リンは緩慢な動きで荷物を下ろすと、手頃な場所にペグを差した。

今回はテント一基のみ、自転車で来てるなでしこに遠慮してお互い最低限の装備だけに留めた。

すっかり慣れてるためか、ものの数分で設営し終えた。

もってきた椅子に腰かけながら、冷たいお茶で喉を潤す。  
山からの涼風が緑の大地に雲を運んで、蒼い影を落とす。

言葉もなく穏やかな時間だった。

「なんか、ふらふらしてない？」

「うん……ちよつと眠いかも……リンちゃんも、眠たそうだねい……」

「なんか、ね……」

隣で座っているなでしこがうつらうつらとしていた。

つられたようにリンも生あくびを噛んでいた。

「最近、あんまり寝付けないんだ……またアイツらが追ってくるんじゃないかって……」

こくりこくりと頭を揺らしながらリンは曖昧な言葉を使う。

夢うつつ感じが未だに抜けてくれなかった。

「だったら、ちよつとテントで休もうよ……どうせ夕飯までやることないし」

両手を打ち付けて良案とばかりにテントを指さすなでしこ。

気を遣ってくれてるのだろうか、しきりに手を上下させていた。

「先に寝てなよ。ここまで来るのだけで疲れてるんだろ」

「うー、リンちゃんは？」

「私は本でも読んで……」



なでしこの訴えかけるような瞳を向けられると、それ以上リンは言葉が出なかった。寂しそうな瞳の奥、その奥に映るリンもまた寂しい顔をしているのだろう。

お互いの心の傷は寝ても癒されない、でも二人一緒ならちよつとは違うかも。

「分かったよ、私も少し休む。最近、眠りが浅くつてき、満足に寝た気がしないんだ」  
「そっか……やっぱり同じだね」

なでしこの顔は少しだけ嬉しそうだった。

その微笑みだけでも来たかいた気がする。

なでしことリンは小さいテントの中でシユラフも使わず、エア―式の薄いベッドを横に並べて無造作に横になった。

少女二人と幾つかの荷物で定員ぎりぎりの少し古い三角テント。

さも当然のようにテントに入っているけど考えたら不思議なものでもある。

外と内を隔てているのは薄く柔らかい壁だけ、それだけのことなのに外にいるよりも快適に過ごすことができる。

単純に寝るだけじゃない、こうやって邪魔されずに話すのにも最適な場所でもあるんだな。

ページュに覆われたビニールの天井をぼんやりと見つめる。

空の色はまったく見えないのにその日差しだけは何となくわかる、大きな雲が動いていることも。

あの時と同じ、囁くような声色でリンは話した。

「あのさ、夏休みどつか行かない？ もうキャンプとか関係なくてさ。伊豆の時みたいに観光目的でも良いから何か楽しい事しようよ。何ならみんなも呼んでさ」

明るい調子で話すもなでしこからの反応はない。

それは至極当然な様な気がしていた。

そう簡単に気持ち切り替えられるなら、こんな思いをしていない。

リンははあ、とため息をつく、なでしこには内緒にしていたあることを告白することに決めた。

「……あれからさ、もう一度行ってみたんだ原付で。でも土砂崩れで通行止めになっちゃっててさ、結局何も分からないで帰ってきちゃったよ」

「あの時、お世話になった店の人にも聞いてみたんだけどさ。線路も道路も分断しちゃって何も分からないって言われたよ。なんか嘘みたいな話だよな」

「……」

「ごめん、黙って行っちゃって。でも、何か手掛かりが欲しかったんだ。二人の、燐ちゃんと蛭ちゃんの何か足跡みたいなものが。だから……やっぱ、ごめん」

なでしこはずっと黙ったままだった。

さすがに気になって覗き込むように体を動かす……。

すー、すー。

小さな体を丸めながら静かに寝息を立てていた。

拍子抜けする、でも少し安堵した。

(まあ、眠いって言ってたしな……)

無防備に眠るなでしこの長い髪をそつと撫でる。

柔らかく暖かい、わたあめのようなふわつとした質感。

長い髪がなんか懐かしくなつて、何度も梳いてしまった。

丸まつて眠る姿は、年の近い妹の様に見えて心が揺れる。

とたんに愛おしくなつて柔らかい髪にそつと頬を寄せた。

ふわりとしたヘアオイルの香りが鼻孔をくすぐつてとても心地よい。

汗臭くなると思つて気を遣つたのか、変な所で女の子らしくて少し可愛くみえた。

その幸福感がリンの瞼を重くさせてくる。

なでしこの香りに包まれるようにリンもいつしか寝息を立て始めた。

正午過ぎの穏やかな時間、風もそよぐ程度で立てかけて置いて置いた自転車やスクーターが倒れるようなこともない。

テントの中の小さな扇風機は小さな音を立てて風を巡回し続けていた。穏やかでちょうどいい、私達にはこれぐらいのゆるさでいいんだ……。

……

……

うーん、お腹空いてきたなあ……途中のコンビニあまり食べなかったからかなあ……。

お肉とか食べたいけど、あれ以来美味しいと感じなくなっただよねい、どうしてか分からないけど。

それでもやっぱり何か食べたいなあ……食欲は人間の三大欲求だから仕方ないよねえ。

食欲と睡眠欲……あと一つなんだっけ……？ まあいいや。

とにかく無性にお腹が空いてきたよう、最近食欲がなかったけどやっぱり野外だと食欲が増してくるんだねえ……ああ、カルビとか豚トロとかコースとかハラミとか牛タンとか食べたいなあ……。

あ、そういえば私持ってきたんだった、仕方ない起きて準備しよう。

多分これが最後かもしれないしね。

うむむ？ 何かいい匂いがするよ……油を焦がしたようなこの何とも言えず食欲を誘うこの匂い。

本能を呼び覚ますような甘さと辛みが混ざったような匂いもするねい、もしかしたらリンちゃん準備してくれてる？

ここまでいい匂いを出されたらもう我慢できない。

微睡のまま、ふらふらとテントから出てくるなでしこ。

いい匂いはすぐ傍からしていた、よだれを拭うことなく、本能のままそちらに近づいていく。

「リンちゃん〜。お腹空いた〜」

「あ。おはよう、起きたみたいだけど、もう食べられるの？」

「おはよう、なでしこちゃん」

最初から居たように、二人の少女は軽く挨拶をしてくる。

キャンプなら知らない人でも挨拶するよね、でも二人は良く知ってるから普通のことかな。

「でも、もう6時過ぎちゃってるんだよ〜」

スマホに目をやりながら微笑む少女、その笑顔は赤く染まっていた。

橙の光線が藍染のような富士山をピンク色に、少女たちを茜色に描き出していく。

夏の夕暮れはとても切なく、眩しかった。

「えへへ、おはようっ」

なでしこは自然に挨拶を返した。

挨拶とほぼ同時にお腹がぐぐ、と鳴っていた。

「ふふっ、お肉の匂いにつられちゃったかな」

「それはそうだよ。わたしだって早く食べたいし」

B B Q用のグリルの上に肉と野菜、トウモロコシが音を立てて焼かれている。

見るだけでも食欲が刺激されて、なでしこの目はそれにくぎ付けとなっていた。

「ふおおおお！ やっぱり夏キャンプといえばB B Qだねい!!」

「そうだよね。何か凝った料理が良いかと思っただけど、燐がシンプルにB B Qが良いってきかなくて」

「んもう、蛍ちゃん。料理するのはわたし何だから、楽なのがいいに決まってるでしょ」

少し口を尖らせる燐。

それでも視線はグリルの上の食材に注がれている。

徐々に焦げ目がカットされた野菜や肉に広がつていくようすがつぶさに分かる。

「わたしはこれがあれば何でもいいんだけどね」

そういつて蛭は何度目かになる串に刺したマシユマロを焚き火台の上の火に近づけていた。

雪の様に白いマシユマロが熱で蕩けて、何とも香しい甘い香りが漂ってくる。

「蛭ちゃんほんとそれ好きだよマシユマロね。一人で全部食べちゃうんじゃない？」

蛭が持っているのはアメリカではポピュラーのビッグサイズのものだった。

燐が一人で準備している間、蛭は串に刺したマシユマロを焼いては食べるを繰り返していた。

燐の言う通り一袋食べきるのは時間の問題だろう。

「焼きマシユマロもいいよねい！ 私も好きなんだよん！」

こぼれ落ちそうになる涎を腕で拭いながら、なでしこはやや興奮気味になっていた。マシユマロと焼き肉、どちらも甲乙つけがたい代物であった。

「んう？ ……どうしたの……？」

香ばしい薫りに誘われるようにリンもテントから這い出てきていた。

その目はまだ半開きのようであり、まるで状況は理解していないようだ。

「あ、リンちゃんおはよつ。今、燐ちゃんと蛭ちゃんがBBQの用意してくれてるんだよつ」

「……………ふん」

関心無さそうに欠伸を嘯み殺しながら一言呟いた。

リンの脳が覚醒するには少し時間があるだろう。

「おはよう、もう少し待っててね。それにしてもここだと富士山大きく見えるよねえ」  
「本当、わたしこんなに関近で見たの初めてだよ」

雄大な富士を間近で拝めながらのキャンプはここでの売りの一つだった。

壮大な山の景色に抱かれる開放的な空間、カタログの見本のようなキャンプ場だった。

「うん、富士山に雲も掛かってないし最高のロケーションだよね」

焼き加減を気にしながら隣は薄っすらとピンク掛かった顔の富士を愛でる。

パステルカラーに染まった山の稜線が羽のように白く光っていて神秘的だった。

「うー、富士山もいいけどお、お肉も食べたいよお」

なでしこは牛の様に鳴くお腹を押さえて喘いでいた。

あれだけの富士山好きでも食欲の魔力には抗えないようだ。

花より団子、富士山よりBBQと言ったところだろうか。

モーモーと喚くピンク色の子牛を、蛭がお皿を手になだめすかす。

「とりあえず、野菜から食べてればいいんじゃない。その後に食べるお肉が美味しいだし」



はい、と割りばしと共に野菜を乗せた紙皿を渡された。

ピーマン、玉ねぎ、トマトと野菜のオードブルが紙の上に踊る。

好き嫌いの無さを強調するようになでしこは躊躇なく箸を伸ばす。

炭で焼かれた野菜は新鮮さと香ばしさが半々で絶妙なミルフィーユとも言えた。

「ん〜、ピーマン甘くて美味しい!」

「焼きトマトも悪くないよね」

なでしこもリンも何の疑問を覚えることなく出されたものを食べていた。

美味しい食事の前には些細な疑いなど落ち着く間もなかった。

「おかわりっ!」

つまみ食いをしているだけなのになでしこは食欲旺盛だった。

気持ちのいい食べっぷりに隣は楽しそうに微笑んだ。

「なでしこちゃん食べるの相変わらず早いね〜。あ、もうお肉良さそうだね、カルビだけ

ど食べる?」

「もつちろんだよっ! リンちゃんも食べるよね!」

肉に対する喜びを表すように瞳をキラキラとさせながなでしこは振り返る。

だが、それとは反対にリンの唇は戦慄くように震え、顔は恐怖で青ざめていた。

リンの突然の変わり様になでしこは慌てて声を掛ける。

「ど、どうしたのリンちゃん!？」

「あ、もしかしてまだ生焼けだったかな?」

燐はトングでグリルの上の野菜をひっくり返してみる。

見た目には問題ない、ちゃんと火は通っていた。

「わたしは半生の方のほうが好きだな」

蛍は気にする様子もみせず、マシユマロを一人でクルクルと回している、蛍の視線は白いお菓子が独り占めしていた。

「い、いや、そういうことじゃなくて……その、何でここに、いるの?」

リンは唇を震わせながら交互に指を差した、その先に居るのは蛍と燐。

当然のようにいる二人にリンは戦慄していた。

「あー、それはね……」

経緯を説明しようと燐が言いかけたとき、突然の叫び声があった。つぴろいキャンプ場に木霊した。

それは遠く離れた他のキャンパーがこちらを振り返る程度の大声だった。

「うわああああ!!! ふ、二人の怨念が悪霊がエクトプラズムがあああ!!!」

まだ日の沈む前からホラー映画のような悲鳴が立ち昇る。

なでしこはパニックで頭を抱えながら走り回っていた。

「なでしこちゃん、落ち着いて！ ほら、ちゃんと足あるよ」

燐は以前から使っていたデニムのエプロンを身に着けて、キャンプ用の巻きスカートをしていた。

足元は黒のオーバーニーとあの時と同じピンクのトレッキングシューズを履いている。

一方の螢は、レースの入った丈の長い白のワンピースに、あつらえたような揃いのリボンをつけたストローハットをかぶっていた。

おおよそアウトドアをする格好ではなく、精々ハイキング程度の装いであった。

しかし足元はギャップのある黒のトレッキングシューズを履いていた。

「燐とキャンプデートするならこれぐらいは、ね。でもあんまり可愛くないよね、これ」  
履きなれないトレッキングシューズに螢が不満を漏らす。

清楚なワンピース姿に機能的なシューズはミスマッチだった。

「もー、それしかサイズ合うのなかったんだから贅沢言わないの。なんでキャンプにそんな恰好で来るかなあ。まあ、螢ちゃんは何着ても似合うからいいんだけどお」

「燐の恰好だつて悪くないよ。なんか燐っぽくって好きだなあ」

「わたしっぽい？ それって地味ってこと？ まあ、螢ちゃんが目立ちすぎんだけどね」

蛍の格好はそのプロポーションも相まって、どこに行くも人の目を引いていた。隣に並ぶ燐は色々な意味で恥ずかしかったが、それでも蛍と一緒に行動するのは楽しかった。

だがキャンプ場では靴が汚れてしまうので、途中のワークショップでアウトドア用の靴に履き返させていたのだ。

「燐、知ってる？ 最近の幽霊は足とか関係ないみたいなんだよ。あれって一種の迷信みたいだし」

幽霊の話で迷信とか言う事自体おかしい気もするが。

もし本当に幽霊だとしたら自分が幽霊という自覚を持っているのだろうか？

燐は余計な考えに頭を悩ませた。

「ひいっ！ じゃあやつぱり……っ！？」

「あのね、なでしこちゃん」

すっかり幽霊だと信じて怯えているなでしこの頭に、蛍はそつと手を乗せた。

それだけでなでしこの体は小刻みにぶるぶると震えあがった。

恐怖が燐と蛍を本物の幽霊にさせているようだ。

「は、はいっ！ なんですかつ！？」

触られたことで委縮したのか、なでしこは思いもよらず敬語になっていた。

「幽霊だってお腹空くんだよ。でも幽霊が食べるのはきつとお肉やマシユマロじゃないよね。だからわたし達は幽霊じゃないんだよ。生きているからマシユマロを食べるんだよ」

童話のヒロインの様に両手を広げながら空を仰ぎ見る蛍。

普段なら明らかな奇行だが、その服装とロケーションは違和感を限りなく減らしていた。

(説得力あるのかなあ、これ)

燐はやや呆れた眼差しを送る、けれどもここは黙って蛍となでこの動向を見守ることに決めた。

「あー！ そうだよねい！ 幽霊はBBQなんてしないよねい！」

蛍の説明で納得がいったのか、瞳を輝かせて声を上げるなでこ。

恐怖に打ち勝ったのか、あるいはたんなる食い意地か、どちらにせよもう怯えることはなさそうだ。

「分かってくれたんだね、なでしこちゃん！」

「うんっ！ BBQが私達に奇跡を起こしてくれたんだねっ！」

そのまま二人は再会を祝う様に抱き合っていた。

BBQに乗せたグリルがなければ絵になりそうなほど感動的な光景であった、少なく

とも当人たちは。

燐は安堵と呆れの交じったため息をつく、誤解が解けたのはいいことだけど。

「はいはい、蛍ちゃん、ストップストップ」

「どうしたの燐、ここからがいいところなのに。あ、もしかして妬いちゃった？」

蛍は察したような表情で悪戯っぽく微笑む。

それに対し燐はまたため息をついた。

「んもう、焼くのはB B Qだけでいいの。それより蛍ちゃんも少しは手伝ってよ。」

さつきからわたしばっかり焼いてて全然食べられないし〜」

「えー、燐が焼く係なんだから当然でしょ。わたしはもっぱら食べる係だから」

「んもー、そーゆーことじゃなくってえ！」

「あ、燐ちゃん、その、肉が……」

それまでやり取りと呆然と見ていたリンが声をあげる。

燐が指さした方向を見ると……肉を乗せたグリルから黒い煙が立ち昇っていた。

「へ？ お肉って……ヤバっ！」

慌てて肉を皿の上に退ける、そこには黒い墨の塊が転がっていた。

「あゝあ、勿体無いことしちゃったなあ。これじゃお肉じゃなくて炭だよ……仕方ない

これわたし責任もって食べるよ……」

「表面が焦げたぐらいだから大丈夫だよ。こうして削ってやれば」

リンは皿の上の黒い部分を器用に切り落として口に入れる。

「うん。大丈夫、美味しいよ」

「ごめんね。気を遣わせちゃって」

「ううん。またこうして会う事が出来て本当に良かったよ。夢かと思うぐらい。でも焦

げた肉食べたら、何かそういうのがどうでも良くなつてちやつた」

また会えてうれしいよ、リンは苦みを覚えながら微笑んでいた。

燐も同じように肉を頬張りつつ微笑み返す。

「あ、じゃあ、私も食べるよー」

「わたしも食べようかな」

なでしこは虫も黒くなった肉の不要部分を削ぎ落して口に入れた。

ほろ苦い味と肉の弾力感が否応なしな現実へと還してくれる。

友との再会、それは日常の中の非日常で起きた普通のことだった。

「あ、私も材料持ってきたんだよ」

なでしこはテントの中の荷物を取りに戻った。

見ると隣に小ぶりのテントが一基立っている、確か誰も居ない場所を選んだはずなのに。

ふむむ、と首を傾げていると、ある考えが思い立った。

「もしかして、燐ちゃんも蛍ちゃんのテントなのこれっ？」

「そうだよ、最近買ったんだ。中古なんだけどね」

燐は少し照れながらテントをぱんぱんと叩く。

その小ぢんまりとしたテントは軽量且つ立てやすく、初心者でも簡単に設営が可能で、なでしこの友達の綾乃も同じようなものを所有していた。

「そういうえば、よくここに居るのが分かったよね。誰にも言っていない筈なんだけど……」  
リンは言葉を選んで話しかけた。

なでしこと違って目の前の二人に少しだけ疑いを持っている。

失礼かと思うが幽霊の類と言われても信じてしまいそうなほどまだ現実感が足りてなかった。

「それがね。わたしたちに教えてくれた人がいたんだよね？」

「そうそう」

リンのもつともな疑問に蛍が考えながら答える。

隣で燐が同意を示すように頷いていた。

「教えた人？」



荷物を抱えて戻ってきたなでしこが会話に参加する。

鉄の鋳物と幾つかの材料を小脇に抱えていた。

リンとなでしこは顔を見合わせて首をひねる。

少なくともリンは二人の事を誰にも話していない、それは多分なでしこだって同じはずだ。

それに話したところで誰も信じてはくれないだろう、写真の一枚もないわけだし。

「ほら、これ。リンちゃん達の知り合い？ いきなりだったんでちよつと疑っちゃったけどね」

燐がポケットから真新しいスマホを取り出して画面を見せる。

そこにはメッセージとURLが添えてあった。

『リンとなでしこちゃん、ここでキャンプしてるみたいだよ』

またこれか……こんなことをやる暇人はアイツしかいない。

去年とまったく同じ手口をするとは。

それにしても斎藤のやつ……いつの間にか人の携帯を勝手に見ていたんだ。

カップルの浮気現場じゃあるまいし。

「この斎藤さんって人。リンちゃんの友達なの？」

蛍の問いかけには答えず、リンはすぐさま自分のスマホを取り出すと急いで操作をし

ていた。

「こいつはたつた今、友達じゃなくなったよ」

「あはは……なんだか込み入った話になってるみたいだね」

迷うことなく、黒髪でショートカットの少女からのフレンド解除の手続きをするリン。

燐と蛍は困ったようにその様子を見ていた。

——だが。

「あ、でも待って」

友達解除を完了する寸前、蛍が慌てたような声を上げる。

「うん？」

動作を止めたリンと興味津々にスマホを覗きこんでいた燐は突然声を上げた蛍に驚いたように視線を移した。

「あ、えっと。斎藤さんのおかげでわたし達はここに来ることが出来たんだから、解除しちゃうのはさすがに可哀想かなって思ってる」

蛍は少し困ったように微笑んでいた。

「あつ、確かに！もし連絡がなかったらわたし達会う機会失ってたかもしれないよねっ」

蛍の言葉に合点がいった燐はうんうんとうなずいていた。

リンは暫くスマホを見つめた後、燐と蛍二人の顔を交互に見回した。  
そしてため息を一つつくど。

「……今回は二人に免じて許すことにする」

少し照れくさそうに顔を赤くしてそう結論付けたのだった。

……

……

……

なでしこは小さな鉄製のフライパン——スキレットを持ってきていた。

お米と予め下処理をしていた具材が入った袋と、市販のパエリアの素を持っていったので、恐らくパエリアを作るのだろう、これで違う料理だったらむしろ相当な達人かあるいは……とも言える。

なでしこは慣れた手つきで、ニンニクを炒めていた。

そこへ無洗米を投入して透き通るまで炒める。

良い感じになったところで、予め下処理を施しておいた材料を火が通りにくい順番に入れていき万遍なく混ぜ合わせる。

細切りにしたパプリカとパエリアの素のスープを入れて、水気がなくなるまで焼きます。

後は蓋をして蒸らすと……。

「特製パエリアの完成ですっ!! 百し上がれ ボナペティ!!」

なでしこが蓋を取るとカラフルな野菜とソーセージがフライパンのご飯の上で香ばしい音と香りをこれでもかとお出していた。

「普通のパエリアに見えるけど、どこが特製なの?」

「よくぞ聞いてくれましたっ! 具材はなるべく山梨のものに拘っているのですっ!」

「いわゆる、地元愛つてやつだね」

ホルモンの焼き加減を気にしながら隣がなでしこにフォローする。

「えへへ、桃とかブドウも入れれば良かったかなあ?」

「それはもうパエリアじゃないし。それにパエリアって確かスペイン料理だろ? ボナ

ペティは違うんじゃないか?」

リンはツツコミを入れながら、香ばしいパエリアを器に取り分けていた。

普段はどこか落ち着かないなでしこだが、料理の腕だけは確かだった。

「じゃあメルシー?」

「それもフランス語、だよ」

蛸は一人でずつと焼きマシユマロを続けていた。

このままだと一袋完食しそうな勢いだ。

「じゃあじゃあ、ポーノ!」

「それはイタリア語だよ。美味しいとかそういう意味の」

すつかりBBQ専門シェフと化した燐が汗を拭いながら焼きあがった肉を端に寄せ  
る。

たまにこつそりお肉を食べているのは秘密だ。

「じゃあじゃあじゃあ!」

「いいから食べるよ。結構いけるよこれ」

リンは出来たてのパエリアを口に入れる、香ばしい味が口の中に広がって……うん、  
たまらん!

美味しく頬張るリンの姿になでしこは嬉しくなつて周りの事を考えずに叫んでいた。

「おー、リンちゃん、スパシーバ!!」

広大なキャンプ場にもちらほらと灯りが浮かぶようになってきた。

風も穏やかな為、平野部だと今夜は熱帯夜であろう。

富士の霊峰から流れ落ちてくる風が夜の淀んだ空気を押し流すように軽やかにかけてゆく。

ランタンの灯りとガスランプの柔らかい炎に揺られて、テーブルの上を料理が彩っていた。

肉と野菜のバーベキューに香ばしいパエリア、そして富士の恵みから作られたサイダー、いわゆるキャンプの定番料理がテーブル狭しと並んでいた。

定番中の定番だが、このぐらいの方が丁度良い、変に凝った料理よりもシンプルな方が好き嫌いも少なく、飽きることなく楽しむことが出来る。

「今までこういう定番っぽいものって食べなかったよねい」

「なにかしら凝った料理ばかりだったな」

「そうなの？ わたしキャンプってこういうイメージだったけど」

「最近は色んなレシピがあるからね。個性出したいのかもね」

各々が料理に下積みを打ちながら、キャンプ飯の事で盛り上がっていた。

周りのテントからもぎやかな声が届いてきて、同じようなタイミングで食事を探っている。

「じゃんじゃんお肉焼くからいっぱい食べようね」

隣はクーラーボックスから新しい肉を出して楽しそうに笑った。

「じゃんじゃんバリバリ食べちゃってますっ!」

なでしこは忙しく肉とパエリアを交互に頬張っていた。

口の中で二つの味が混ざり合うのがまた格別なのだ。

それを富士の水でつくられてたサイダーで流し込む、かなりお下品だけどこれこそがキャンプの醍醐味だと思ってる。

形式ぶった食べ方はむしろ勿体ないと言わんばかりだ。

「蛮族みたいな食べ方だな」

毎度思うがああ小さな体のどこにあれだけの量が入るのだろう。

しかしこのままだとアイツに全部食べられてしまうかもしれない。

なでしこの胃の強さに恐々としつつも、リンは自分のペースで黙々と肉を味わった。

一人で美味しいものを食べるのもいいけれど、みんなで食べる料理はまた違った美味しさがある。

それはソロキヤンとグルキヤンの違いのように、それぞれ異なる楽しみ方だと最近分かるようになってきた。

「あ、このパエリアちよつと辛めだね。舌がぴりぴりするよ」

痺れた口を癒すため富士のサイダーを頬張る蛸、ぱちぱちとはじけだすよう刺激が喉を貫いた。

「蛸ちゃん辛いのが苦手だったっけ？ ふつーのソーセージとうま辛ソーセージを混ぜちゃったんだよねい。ダメだったら無理しなくていいからね」

「あ、でもすごく美味しいから大丈夫だよ。まだまだ食べられると思う」

「本当？ 良かったあ」

安堵のため息をつくまでしこ、その屈託のない笑顔に蛸は微笑んだ。

星空の下、食べる食事は格別だった。

少女達は熱気に汗を欠きながらも、極上のキャンプ飯に舌つづみをうった。

「そういえばリンちゃん、髪どうしたの？ 確かそんなに短くなかったよねえ」

「あー、うん。最近暑くて鬱陶しかったから短くしたんだよ」

リン言葉の半分は正解だった。

長い髪はヘアアレンジを楽しめる反面、手入れが面倒だし、夏は暑いし、とおおよそアウトドアには不向きなのだった。

ちようどいい機会だったので結構ばつさりとやってしまった。(やったのは斎藤だが)

二人への当てつけに見えてないだろうか？ 少し後悔した。



「似合ってるよそれ。今のリンちゃんの髪形いいなく。わたしもちよつと伸びてきたから切っちゃおうかなあ」

「そう？　なんか嬉しいよ」

リンは複雑そうな顔で微笑む。

その表情のぎこちなさに燐は少し眉をよせる。

「ごめん、なんか変な事言っちゃった？　もしかしてわたしたちと関係あること？」  
燐は箸を止めて気遣うような表情を向ける。

リンは視線を逸らすように、短くなつた髪を少しかき上げた。

「あ、うーん。間違つてはいない、かな……でも誤解しないでね。そろそろ切りたかったのは本当だし。燐ちゃんたちのせいだけじゃないんだ」

「そう、なの？」

「うん、なんていうかさ、折り合いをつけたかつたんだよね。もう二人に合えないかも思っていたから。その程度のことなんだ」

リンの瞳はまっすぐに燐を見ていた。

憂いのある微笑みは彼女の中の大人に触れた気がした。

「わ、わ、わ、私だつてリンちゃんの髪、似合つてると思つてたよ。ずっとつ！」  
何グラム目の肉を胃に収めたなでしこが堰を切つたように喋り出した。

これでも気を遣ってくれたんだろう、なでしこなりに。  
「まあ、そういう事にしておくよ」

小さくため息をつくリン、だがその顔は静かな夜風のように穏やかだった。

青白い夏の月が新緑の穏やかな海原を柔らかく照らす。

あの時、最後まで姿を現さなかったもの、それが簡単に出ていた。

小さなテーブルに並ぶのはカラフルなお菓子と銀色のマグカップ。

にぎやかな食事を終えた少女たちはしばしの小休止に入っていた。

眼前に月とそれに照らされた富士の山が静かに浮かび上がっている。

極めて完璧な時間だった。

「うむ？ 風車だけのせかい？ そんなのもあるんだねい……」

楽しかった夕食も終わり、片付けも終わった後のこと。

少女たちはあの時の続きを再現するかのようにはトランプ遊びに興じながら夜風を楽しんでいた。

菓子とカードを楽しみながら、昼の熱気と夜の涼しさを交換する。

まだ眠るには惜しい時刻、少女たちの夜はまだまだこれからだった。

そして互いが知りたかったことを少しづつ、砂の様に語りだしていた。

「うん。白い風車がいっぱいあって、ちよつと物悲しくて綺麗なところ……また行けるとは思わなかったから。ちよつとビックリしたけど」

「わたしも、多分、オオモト様と呼んだっていうか、会わせてくれたんだよね……」  
「誰かに会いたかったの？」

リンは少し温めのルイボステイーを口に含む。

焼き肉の後のつかれた胃にはこのお茶がちょうどよかった。

「うん、もう一度オオモト様と……サトくんに会いたかったんだ」

「燐、それはわたしも同じだよ。だからきつと一緒に行けたんだね」

「うん……」

一言呟いて燐は星屑の空を見上げる。

……オオモト様もサト君もそこで待つてくれていた、静かに風車だけが回る世界で穏やかな瞳を真っ直ぐに向けて。

オオモト様の手にはもう毬はなかった、代わりに紙飛行機を手にしていた。

多分、あのときと同じもの。

二人で飛ばしたあの紙飛行機、それがオオモト様の手の中にあつた。

サトくんの右目は元に戻っていた。

それはオオモト様と同じ瞳の色、何かを溶かしたような深く濃い黒だった。

——そしてもうヒビはどこにもいなかった。

この白い世界にずっといても良かった。

そう思っていたのに、遥か頭上から降ってきた白と青のガラス片が燐を蛍を、そして二人を美しく包んでいく。

瞬きすら忘れるほどに早く、そしてとても美しかった。

青白い光がどんどんと増えていく、オオモト様の唇が微かに動いたように見えたが何の音も届かなかった。

そして何もかもが消えてしまった、瞼の裏の光さえ残すこともなく。

白昼夢のように霧散していった。

「結局、誰も何も言わなかったよね、ただ見つめているだけ……それだけだったよね」  
蛸はまだ夢の続きを見ているようにぼんやりと呟いた。

「うん、それだけで良かったんだよ」

燐は少し瞳を滲ませながら明確に答えた。

ぼやけていた輪郭にハッキリとした線を描くように。

「目は口程に物を言う、だっけ？　綺麗な場所にはもう言葉が要らないのかもしれない  
ねい。良いなあ……」

青と白と静寂の世界、なでしこはそれほど嫌いではなかった。

夢のような現実感を体感できたあの場所にもう一度、それは密かに思っていたこと  
だった。

しかもその、おとぎ話のような世界の先にまた違った世界があることは、なでしこの  
胸をととも躍らせるものだった。

「それでさ、その後ってどうなったの？」

夢見るような瞳のなでしこは気にせず、リンは話の先を促した。

この先の話がもつとも聞きたかったこと。

だって燐と蛍はこの数週間、連絡も付かずどこで何をしていたのかが、一番知らなくてはならないことだったから。

「あ、うん。それがさ、なんて言えばいいのかな……」

指を弄りながら言いよどむ燐、困った顔で蛍と顔を見合わせる。

困っている親友の代わりに蛍が柔らかく答えた。

「気づいたら燐の部屋のベッドで寝てたんだよね。二人一緒に」

「ふえっ!?!」

夢から転げ落ちたような声をあげると、なでしこは人差し指をこめかみに当てて首をかしげた。

リンは指くるくると回して点と線を結ぶような仕草をしていた。

「燐ちゃんの家って、小平口町から結構遠い?」

「うーん、わたしの家って、どっちかっていうと海に近いからね。結構距離あるよ」

燐の住んでいたマンションの一室はあの時のままであった。

引越しの準備で雑然としている室内には段ボールと最低限の家具しかない。

それは蛍の家よりも薄暗く静かだった。

だが蛭は特に驚かなかつた、それはすでに知っていたことだつたから。

蛭は全てを分かっていた上で、燐と自然に接していた、それが親友だつたからだ。

「結局、帰るところつてあの家なんだね。誰も待つていなくて」

このマンションの一室以外に燐は帰る家を知らない。

離婚した父の家、隣に居る親友の家、もちろん親戚の家だつて燐が帰る場所ではなかつた。

だからきつと柔和なあの方が、好きだつた従兄が、最後にお節介を焼いてくれたんだと思う。

燐はそう思うことにした。

そのほうが綺麗なものを大事にできると思つたから。

「燐ちゃん……」

なでしこが瞳を滲ませていた。

自身も引つ越してきたからか、燐の複雑な気持ちに共感できるのかもしれない。

燐となでしこは慰め合う様に両手をがっちり握り合つた。

「ごめんね、わたし達の事探してくれたんでしょ？　すぐに連絡すればよかつたんだけど」

困つたような顔で蛭は苦笑いを浮かべる。

自分達のせいできつと迷惑しているとは思っていた、でもすぐには連絡出来ない事情も二人にはあった。

「うん……ダムが決壊しちゃったからすぐに避難することになったんだよね。ほら、被害が下流にまで及んじやったし。だいぶ落ち着いたのつて割と最近なんだよね」

燐が手を川のように動かしながら説明する。

混乱した状況だったことはリン達にも何となく分かった。

「そつか、それじゃあ二人も大変だったんだねい……」

燐の説明になでしこが腕を組んで頷いていた。

どこから持ってきたのか顔には髭も付けている。

ぶつちやけ似合つてはいない。

「電話かけても良かったんだけど……ごめん、何か気を使つちやつて……」

「大丈夫、もう気にしないでいいよ。こうやって再会できたんだし」

燐の気持ちかわかるだけにリンは軽く手を挙げて応える。

悪気があつたわけじゃない、むしろとても気を遣つてくれたんだ。

私となでしこがそつであつたように。

「リンちゃんや、嬉しそつだねい」

田舎のおばあちゃんみたいな口調のなでしこが、からかうように言つてくる。



生粹のおばあちゃんっ子なのかもしれない。

「なでしこだつて楽しそうじゃないか」

リンは思わず余計な事を言いそうになったが心の内に留めておいた。

(これならキャンプ止めることもなさそうだしな)

「うん。すつごく楽しいよっ！ 皆がいるキャンプって最高だよねっ！」

両手を挙げて周りを駆け回るなでしこの姿にみんな声をあげて笑っていた。

髪をなびかせてはしゃぐ姿は尻尾を振って喜ぶ犬のそれと似ていて、余計に可笑しかった。

遠くの方から奇妙な男性の声が聞こえてくる。

炊事場の辺りからだろうか、笑い声と罵声の入り混じったものが風に乗ってここまで届いていた。

多分酔っ払いが喚いているんだろう、キャンプ場では割と良くあることだった。

その意味不明な言葉は蜚に何かを思いつかせたようで、くすりと含み笑いをしていった。

「なんかさ、あの白い人達もこうだったのかなって思ったんだ」

「こうつて？ 酔っ払いつてこと？」

燐は男たちのいる方へ視線を向ける、酒で酔った男たちの喧噪はなおも強くなつていて、忙しない虫の声よりも大きくなつていた。

「うん。でもお酒じゃなくて幸運に酔つてたのかなつて」

「ああ、そういうことね。でも、きつとそれは人だけじゃないよね。あの町全体が酔つてたのかもね」

「うふふ、そうかもね」

蛍と燐は星で散りばめられた空を見上げる。

彼らも町も幸運という美酒に酔つていたのかもかもしれない、あのオオモト様を祀った宴会の時ように、与えられた幸運を何も考えずに飲み干していたんだろう。

その結果がああ姿だとしたら……蛍は月にそつと語り掛けるように囁いた。

人の器をなくしたもののたちの嘆きは遠い星空へと吸い込まれたのか。

もしそれが輝く星の一つとなつたのならそれはきつと綺麗なものになつたはず。

蛍はそう願っていた。

（お兄ちゃんも、酔つてたのか？ お酒苦手なのに……）

燐はポケットの中の忘れ形見眼鏡をぎゅつと握る。

カバンの中のノートは何故かなくなつていた。

変わりに細かい傷のある眼鏡が折りたたまれて入つていた。

(わたしきつと振られちゃったんだね。でも、ありがとうお兄ちゃん)

夜空のどこかにあの人たちがいる星がある、それだけで星を眺める楽しみが出来た。それは隣の新しい発見だった。

「酔っ払い、ね……」

「あはは、他人事じゃない感じだねい」

リンとなでしこは顧問の“鳥羽美波”の事を思い出して苦笑いしていた。

普段は綺麗で優しい先生で通っているが、実はかなりの酒豪で、二人が初めて会った時も酩酊状態だったので、学校で再会したときは全くの別人と思っていたほどであった。

「お酒のせいでくっつて事件、結構多いもんね」

「何かの話で読んだことがあるよ。お酒は忘れる為に飲むんだって。嫌なことや恥ずかしかったこと、不安や疲れなんかも」

「もしかしたら、人であることも……?」

「多分……ありえるのかもね」

少女達には分からなかった、アルコールが大人たちにどれほどの癒しが与えることを。

また知りたいとすら思わなかった。

ただ、燐の場合、父親は酒の代わりにスポーツドリンクを飲んでいたので尚のこと分からなかった。

「何事もほどほどが一番、つてことだねい！」

「なでしこちゃん、おばあちゃんみたいな事いつてる」

「ふおふおふお、若いもんはすぐお酒に頼るからよくないのう」

（おまえの方が若いだろ）

心の中のリンのツツコミ、思えばこれも懐かしく思える。

あの時から色々な事が止まっていたことをリンは初めてののように思い出していた。

腕を目いっぱい広げて、なでしこがシートの上で転がっていた。

気が遠くなるほどに壮大な星の海、目いっぱい手を伸ばしても拾い上げることは到底出来ない。

月も星も山も全てが遠く、また小さかった。

「つまり、お酒も幸運も”ちゅーどくせい”があるつてことかなあ？」

「うーん、当たつてるようで間違つてるような……」

「どっちも気持ちよくなる、とか？」

「あ、そんな感じかも」

リンの独特な考え方に、螢は不思議な共感を覚えた。

螢はその幸運を呼ぶ側だったが、その恩恵が被った試しはない。

だから町の人が欲しがる“幸運”がいまいちわからなかったが、快樂としてなら理解できるところがあつた。

「じゃあ、螢ちゃんはどうな時、気持ち良い？」

なでしこの無垢な疑問に螢は一瞬呆気にとられるが、少し考え込むと可憐な思いを口にした。

「えっ！ わたし？ わたしは……やっぱり燐と一緒にいるときかな。」

「やっぱり、そうだよねっ」

「やっぱりね」

螢の答えになでしことリンは大変深く納得したように頷いた。

燐は一人、顔を赤くして抗議していた。

「な、なにながやっぱりなのっ！ もう、螢ちゃん変な事言わないでよく。誤解受けちゃうじゃん」

「えー、誤解じゃないよ、本当だもん。燐といると柔らかくて暖かい気持ちになるの。これって燐の優しさが全部わたしに向けられてるってことだよね」

月明かりさえ恥ずかしがるように、螢は少女漫画にも似た独白を続けていた。

「あ、私達、先に寝るよ」

「うん。その方が良いみたいだねい」

真顔のままのリンと困った顔のなでしこはテントへ戻ろうとする。

その手を燐がしっかりと掴んで引き留めた。

「ちよつとー、余計な気を遣わないでよおー！ これじゃあ寝られなくなるー」

他のキャンパーが寝静まる時刻になっても少女たちは喋ることを止めなかった。

蛍は新しい髪飾りを一対、長い髪につけていた。

それは蛍が“自分の為だけ”に初めて作ったもので、“撫子の花”をイメージに、色とりどりの装飾で飾られたお手製の髪飾りだった。

本人曰く会心の出来でとのことであつたが、みんなの反応は予想に反して芳しくなく、ライオンだパンダだと散々からかわれてしまった。

なでしこの行動もまたみんなの話のネタになつた。

大事なオイルランプを直すため、購入したカリブーアウトドアショップに赴き、定員に何度も頭を下げた。

替えのグローブ電球を通常よりも安く購入することに成功していた。

だがその必死な様子は野クル部員たちに撮影されており、その動画はSNSで拡散され、ちよつとしたバズ動画となつていた。

だがそれは、非難されるようなことではなく、みんなの笑いのタネとして広く愛されるものであった。

笑い声が闇に吸い込まれてくる時間になると、さすがに睡魔には勝てそうになくなっていった。

喋り疲れた少女達は周りの人が既に寝静まった後で、ようやくテントで就寝することにした。

リンとなでしこはリンのテントに、燐と蛍は二人で買った中古のテントにそれぞれ寝ることにした。

「ねえ、燐ちゃん、蛍ちゃん。明日早く起きて一緒に日の出見ない?」

おねだりをするようになでしこが声をかける。

長袖のパジャマスタイルはなでしこをいつも以上に幼く見せていて、年の近い妹のようを見せていた。

なでしこ達はキャンプする際に翌朝、日の出をみんなで迎えるのはすっかり恒例の儀式となっていたのだ。

燐と蛍はちよつと意外そうに顔を見合わせると微笑んで答えた。

「うん、いいよ」

「あ。わたしは寝てるから、燐だけね」

「もく、蛍ちゃんも一緒だよ。ぜったい起こすからね」

いつもの調子でじゃれ合う二人。

なでしこはなんだか嬉しくなっていた。

燐と蛍のこういうやり取りを見るのがすごく楽しい。

このままの気分で朝を迎えられたらどんなに気持ちいいだろうか、それを想像するだけであつてしこは幸福な気持ちで寝ることが出来そうだった。

今から朝が待ち遠しい、それは四人共同じ気持ちのはずだった。

影絵のような小さなテントが二つ、寄り添う様に立っている。

虫たちの声はなおもよけいに騒がしくなっていた。

とても寝れないのではと思っていたが案外あつけなく眠ることができた。

これまでの寝不足が嘘のように安らかに寝ることが出来ていた。

夢と現実の調和がとれたように静かに闇へと沈んでいく。

もう夜は怖くなかった。



ピピピピツ。

ピピピピツ。

簡素な機械音とともにスマートフォンに明かりが灯る。

煩わしそうに寝袋ごとゆっくりと起き上がると、騒がしく鳴る板をリンは引つ掴んだ。

4 : 3 1

薄暗い、というかまだ真つ暗だった。

夏なのに少し肌寒くも感じる時刻。

日の出までにはまだ余裕があった。

隣で気持ちよさそうにシユラフにくるまれているなでしこを強引に揺り起こそうとしたが、ふと気が付いてその手を止めた。

それよりもまず気になっていたことがあったから。

テントのチャックをやや大げさに引いてリンは一人、真つ暗な外へと這い出た。

辺りはあのときのように暗い。

鈴の様な小さな声と姿の見えない早起きの雉鳩キジバトが低く、唸る様なさえずり声をリズムカルに出していた。

まだ寝ぼけ眼のまま隣で隣のテントを手にしたランタンで照らし出す。

「……」

そこには何も無かった。

——なんとなくそんな予感がしていた。

だから少しだけ早くアラームをセットしていたのだが。

まだ脳は覚醒していないのか、これといった感情が何も湧いてこない。

抽象的な想いが胸の奥から目を覚ましてくれなかった。

ただ茫然と、何も無い芝生を見つめるだけ。

レンタルしたと言っていた背の高いグリルも、食べ散らかしたままだったテーブルさ

えも、何も残っていない。

最初から“二人”だったかのように静かに青草が凧いでいた。

急に背筋が寒くなった。

「リン、ちゃん……」

背後から絞り出すような声がした。

声の方を見る気がおきなかった、ただその声で事実を受け入れなければならなくなつた。

仄かな夢の続きが消えてしまったことを。

リンはランタンを地面に置くと、振り返ることなく目を瞑った。

そして独り言を風にそつと眩く。

「キャンプ、楽しかった」

「うん……」

なでしこの声。

掠れた声が痛々しい。

「キャンプやめるの?」

「うん……そのつもり、だった」

ぼそぼそとした声が耳にぎりぎり届く、風の音の方が強いぐらいに小さい声。

リンは強がるように少し声を張ってみた。

「なでしこがやめるなら、私も、やめるかな。遊んでばかりもいられないしき、進路とかもあるし……こういうのって早いよなホント」

「そう、だね」

感情のない声が背中から頭の先に響く。

なでしこが出した声なのか、それすらも疑わしく思えるほどぞつとした。

あの橋で聞いた哀しい声色だった。

「でも、まだキャンプを続けたら二人に、蛍ちゃん、燐ちゃんとまた会う事が出来る、の  
かな？」

「……………どうして、そう思うんだ？」

なでしこの意外な言葉にリンは戸惑いを隠せなかった。

ランタンの灯りが二人の足元を照らしている。

二人の体は小刻みに震えていた。

寒さとは違う、心が体を震わせていた。

「だって、二人とも楽しそうにしてたから。だから、またキャンプすれば会えるかもって

……………おかしいかな？　こういうのって」

「……………」

それまで重かった体が自然と動き後ろを振り返った。

そこには手の甲で目を擦りながらもしつかりと立っているなでしこの姿があった。

「そうだよ。きつとまた来てくれるよ、絶対」

「……………うんっ」

暗がりの中、細い指に手を伸ばしてぎゅっと握りしめる。  
なでしこは小さく、でもしっかりと頷いた。

宝石のような瞳が玉になり、雫が草の上に落ちていった。

(ソロだけが寂しいって思っていたけど……二人だって十分寂しいもんだな)

泣きそうになるころをぐっと堪える。

なでしこは何か決心しようだけど、私はまだ完全に割り切れていない。

理由が証拠が切実に欲しい。

こんな気持ちのまま夜明けなんて迎えたくない、むしろ夜明けなどこないほうがまだ  
まだ。

何か熱いものが頬を濡らしていた、暗がりであったからまだ良かった。

リンはそれでも恥ずかしいのか、まだ黒く壮大な山とは逆方向に顔を背けた。

その時、滲んだ視界の中に何かの気配に気づいた。

まさか？

リンは闇の奥、その更に奥にあった木を凝視しながら、耳に神経を集中させた。

……黒い木の影で揺れる何かと微かな音、それは……。

はあつ、リンは肺から深く重いため息を大げさについた。  
なでしこは不思議そうな顔でリンを見ている。

両頬には涙の線がくつきりと残っていた。

その頭に手をポンと無造作に乗せた。

髪をわしやわしやとしながら、その方角を見る……微笑ましいな、リンは小さく笑った。

そしてなでしこの瞳を覗き込む。

「案外、近くにいるのかもな」

「あ、うんっ！」

疑う事の知らない元気な返事、純真無垢とはこういうことを言うんだろう。

忠実な犬を褒めるようにさらに頭をわしやわしやとしてやった。

うー、とそれこそ本物の犬のように唸っているが満更でもなさそうで、少しだけいつものなでしこになっていた。

さて、どうやって説明したものか、リンは少し考える。

泣くかもしれないし、怒り出すかもしれない。

でも、それはとてもいいことだ。

いいことだから、早く来ればいいのに……。

……

……

……

(ねえ、燐。なんかバレてるみたいだよ)

(えっ！ そうなの?)

木の影に身を隠すようにして、二人の少女がなにやらこそこそと準備進めていた。

(蛍ちゃんかなかなか起きないからだよー)

(えー、燐の段取りが悪いんだよー)

(そんなこと言ったってわたし一人で朝食の準備をするのは大変なんだよ少しは手伝っ

てくれても良いのに)

(家事全般は燐の役目だから。燐、早くしないと日が昇っちゃうよ)

(んもー、蛍ちゃんはマイペースだなあ)

お盆の上に四人分の汁物が並ぶ、それは山梨の郷土料理“ほうとう”であった。

ちゃんとした専用の麵を使っているが、具材は昨日の残りを入れた物なのでどちらかと言うとごった煮に近かった、ちなみに南瓜は入っていない。

(蛍ちゃんの分は自分で持つて行ってね)

(うん、分かった。それにしても何でこんなことしてるの?)

(昨日も言ったけど、サプライズしてあげたかったんだもん。しかも中身は“ほうとう”で2度ビックリするよこれはっ)

暗くてよく分からないが多分ドラ顔してるんだろう、蛍は声を潜めて笑った。

(わ、笑うところじゃないよっ)

(だって、燐ってば……くすっ、なんか変わったよね、燐)

(そう? 例えばどんな風に?)

(なんか、子供っぽくなった)

(えー、何それー、なんか傷ついちゃうなー)

口を尖らせて不満そうな態度をとる。



これもまたおかしくて螢は口に手を当てて笑いを堪えるのに必死になった。

(ごめんごめん。でも、これはいい変化だよ。今の燐、わたし好きだよ)

透き通った顔のままで告白してくる。

燐は目を丸くするが、小さく微笑んだ。

(わたしも螢ちゃん好きだよ。でも、なんか上から目線っぽくない?)

(だって、わたし、お金持ちのお嬢様だから)

暗闇の中、螢はなにやらジエスチャーをするが燐には良く分からない。

お嬢様っぽい仕草で髪でもかき上げてるんだろうか。

想像して嘖き出しそうになる。

(ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。あつ！ そろそろ行こう。サプライズはタイミングが肝心なんだよ)

(あつ、燐に無視された……あ！ 待ってよ燐)

三人分の朝食が乗ったお盆を持って燐が走り出す、その後を自分のお腕を持ちながら螢が追って行った。

富士の裾から朝焼けが徐々に登ってくる、眩い光線が地平線の彼方から伸びてきていた。

光が少女の影を鮮明に照らし出す。

元気に走る姿を緑の草原が生まれだての大きな影を描きだしていた。

「二人ともく！ 朝ごはん出来てるよく!!」

「くすつ、遅かったね、隣ちゃん」

「ふおおお！ ほうとうだあ！ でも、ちよつと変わつてるね。これ」

「……ふつーのリアクションだよね」

「はあ、はあ、だから、バレてるつて言ったのに……」

眩しい光、始まりの光。

一日の始まりを告げる光が朝露に濡れた草原を山を白色に染めていく。

目を開けていられないほどの眩しさ。

でも。

とてもあたたかい。

太陽の視線が、右手が、脈打つようにあたたかった。

ずつと一緒にくれると言ったともだちがいた、わたしには勿体ないぐらい素敵なのともだち。

ともだち。

いつまでもそのままできて欲しい、でもそれじゃダメなんだよね。

(わたしはもつと自分を好きになるよ。きつとそれがはじまり)

人も心も変化していくんだ、だから。

今日はずっと楽しくなる、そうだよね？ 蛍ちゃん。

「ねえ、蛍ちゃん？ このままじゃわたし食べられないんだけど……」

「じゃあ、わたしが食べさせてあげるね。燐、あくんして」

「あくん」

「なでしこがやってどうするんだよ……」

「リンちゃん、私にも」

「ねえよ」

「あははは、ねえ。これからどうしようか——」

